

# 楠 見 遺 跡

—都市計画道路西脇山口線改良工事に伴う発掘調査報告書—

2006年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

## 序

和歌山市所在の楠見遺跡は、和歌山県北部を西流する紀ノ川と和泉山脈の間に位置しています。

過去に実施された調査では古墳時代の初期須恵器が多く出土し、すぐ北側にある大谷古墳の存在などもあわせて朝鮮半島との関係が強い地域として注目されてきました。

財団法人和歌山県文化財センターでは、都市計画道路西脇山口線改良工事に伴い平成10, 11, 13年度の3ヶ年にわたり、発掘調査を実施しました。その結果、掘立柱建物や井戸、土壙墓等、古代から中世を中心とした集落を発見し、楠見遺跡の新たな側面を明らかにすることができました。

平成16年度から平成17年度にかけて整理作業を進めて参りましたが、ようやくその成果をまとめることができましたので、このたび発掘調査報告書として刊行する次第でございます。本書が県民の皆様のみならず、広く一般の方々に活用していただける歴史資料となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の作成にあたりご指導・ご協力を賜りました関係各位、地元の皆様に対し厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

財団法人 和歌山県文化財センター  
理 事 長 木 村 良 樹

## 例　　言

- 1 本書は和歌山市大谷に所在する楠見遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は都市計画道路西脇山口線改良工事に先立つもので、平成10・11・13年度に楠見遺跡の第1次から第3次発掘調査を行い、平成16・17年度に出土遺物整理業務を実施した。
- 3 発掘調査及び出土遺物整理業務は和歌山県の委託を受けた財団法人和歌山県文化財センターが、和歌山県教育委員会の指導の下に実施した。
- 4 現地調査及び報告書作成に際し、和歌山市教育委員会をはじめ、関係機関および大谷自治会、西大谷自治会、和歌山市立楠見小学校など地元の方々から助言・協力を得た。
- 5 本書は、整理事業担当者である黒石・佐々木が、調査担当者である土井・村田との協議の元に執筆編集した。
- 6 図版編遺構写真は、各次調査担当者が撮影し、それ以外のものは佐々木が撮影した。
- 7 発掘調査及び出土遺物等の関連資料調査、報告書作成にあたっては、次の諸氏から多大な御指導・御教示を賜った。記して感謝申し上げる。

安部みき子（大阪市立大学）、北野隆亮・井場好英（財団法人和歌山市文化体育振興事業団）、前田敬彦（和歌山市立博物館）、立岡和人（紀の川市教育委員会）、日置智（海南市教育委員会）、富加見泰彦（和歌山県立紀伊風土記の丘）
- 8 航空写真撮影及び航空写真図化は和歌山航測株式会社に委託した。
- 9 土壌分析調査は、株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 10 調査・整理作業で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料は財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各自保管している。
- 11 発掘調査・整理業務の調査組織は次項に示すとおりである。

## 調査組織

### 事務局

(専務理事兼務) 岩橋 駿 (平成13・16年度)

事務局長 中谷博昭 (平成10～11年度)

熊崎訓自 (平成17年度)

事務局次長 菅原正明 (平成10～11年度)

吉田宣夫 (平成11年度)

畠中照雄 (平成13年度)

松田正昭 (平成13～16年度)

管理課長 西本悦子 (平成13・16・17年度)

埋蔵文化財課長 松田正昭 (平成10～11年度)

松下 彰 (平成13年度)

渋谷高秀 (平成16～17年度)

### 調査業務担当

埋蔵文化財課主任 土井孝之 第1・2次発掘調査 (平成10～11年度)

埋蔵文化財課主任 村田 弘 第3次発掘調査 (平成13年度)

埋蔵文化財課専門調査員 立岡和人 第2次発掘調査 (平成11年度)

埋蔵文化財課専門調査員 佐伯信行 //

### 整理業務担当

埋蔵文化財課副主査 黒石哲夫 第1次整理業務 (平成16年度)

埋蔵文化財課副主査 佐々木宏治 第2次整理業務 (平成17年度)

## 凡　例

1　遺構実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系第VI系（日本測地系）に基づき、図示した北は座標北を示す。

2　遺構実測図の基準高は、東京湾標準潮位（T. P.）である。

3　発掘調査で使用した調査コードは、以下のとおりである。

楠見遺跡第1次調査（1998年度）—————98-01・070

楠見遺跡第2次調査（1999年度）—————99-01・070

楠見遺跡第3次調査（2001年度）—————01-01・070

4　地区割の詳細については、第Ⅲ章第1節に記述する。

5　遺構番号と遺物番号は、調査区別に1番からの通し番号とした。遺構は調査区、番号の順に表し必要に応じて最後に種類を付した。

例　C1002溝

また、複数の遺構で構成される遺構については、調査区別に種類、調査区、アルファベットの順で表した。

例　掘立柱建物C-a

6　遺物番号は、本文・実測図・写真図版において一致する。

7　遺物実測図の縮尺は、土器類は1/4、石製品は1/2を基本としている。

遺物写真の縮尺は、特に統一はしていない。

8　土器及び調査時の土層の色調は、日本色研事業株式会社発行小山正忠・竹原秀雄編著

『新版標準土色帖16版』（1995年後期版）を使用した。

本 文 目 次	ページ
第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過 .....	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 .....	2
第1節 地理的環境 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	3
第3節 既往の調査 .....	4
第Ⅲ章 調査の方法と成果 .....	6
第1節 調査の方法 .....	6
第2節 基本層序 .....	8
第3節 調査の成果 .....	10
1. A, B区（1次調査） .....	10
(1)調査の概要 .....	10
(2)遺構と遺物 .....	17
2. C区（2次調査） .....	37
(1)調査の概要 .....	37
(2)遺構と遺物 .....	37
3. D区（2次調査） .....	58
(1)調査の概要 .....	58
(2)遺構と遺物 .....	59
4. F区（3次調査） .....	60
(1)調査の概要 .....	60
(2)遺構と遺物 .....	60
5. G区（2次調査） .....	62
(1)調査の概要 .....	62
(2)遺構と遺物 .....	62
第Ⅳ章 土壌分析の成果 .....	65
第1節 はじめに .....	65
第2節 分析資料 .....	65
第3節 花粉分析 .....	65
第4節 珪藻分析 .....	67
第Ⅴ章 総括 .....	70

## 挿図目次

- 図II-1 遺跡位置図  
 図II-2 遺跡周辺地形図(S=1/200,000)  
 図II-3 周辺遺跡図(S=1/25,000)  
 図II-4 既往の調査土層図  
 図III-1 調査区位置図(S=1/2,500)  
 図III-2 調査地区割図(S=1,000)  
 図III-3 土層柱状図  
 図III-4 遺構面概念図  
 図III-5 A, B区第1遺構面平面図(S=1/300)  
 図III-6 A, B区第2遺構面平面図(S=1/300)  
 図III-7 A, B区第3遺構面平面図(S=1/300)  
 図III-8 B区第6遺構面平面図(S=1/300)  
 図III-9 A区南壁 土層断面図(S=1/80)  
 図III-10 B区南壁 土層断面図(S=1/80)  
 図III-11 B区東壁 土層断面図(S=1/80)  
 図III-12 B14井戸 平面図・断面図(S=1/40)  
 図III-13 A1, A7流路 土層断面図(S=1/40)  
 図III-14 B334溜柵 平面図・断面図(S=1/40)  
 図III-15 A66土坑 平面図・立面図(S=1/40)  
 図III-16 B25焼土坑 平面図・断面図(S=1/40)  
 図III-17 B26土坑 平面図・断面図(S=1/40)  
 図III-18 B19土坑 平面図・立面図(S=1/40)  
 図III-19 A39土壙墓 平面図・立面図(S=1/20)  
 図III-20 A218土壙墓 平面図・立面図(S=1/20)  
 図III-21 B348土壙墓 平面図・立面図(S=1/20)  
 図III-22 B201柱穴 平面図・断面図(S=1/20)  
 図III-23 B687ピット 平面図・断面図(S=1/10)  
 図III-24 B346, B355溝 土層断面図(S=1/40)  
 図III-25 A195土坑 平面図・立面図(S=1/40)  
 図III-26 B751土坑 平面図(S=1/40)  
 図III-27~32 A, B区出土遺物実測図  
 図III-33 C区第1遺構面平面図(S=1/300)  
 図III-34 C区第3-1遺構面平面図(S=1/300)  
 図III-35 C区第3-2遺構面平面図(S=1/300)  
 図III-36 C区第3-3遺構面平面図(S=1/300)  
 図III-37 C区第4, 6, 7遺構面平面図(S=1/300)  
 図III-38 C1区南壁 土層断面図(S=1/80)  
 図III-39 C2区東壁 土層断面図(S=1/80)  
 図III-40 C2区南壁 土層断面図(S=1/80)  
 図III-41 C192溝 瓦器碗出土状況(S=1/20)  
 図III-42 C217, 218溝 土層断面図(S=1/40)  
 図III-43 C215集石 平面図・立面図(S=1/20)  
 図III-44 C134, 135土坑 平面図・断面図(S=1/40)  
 図III-45 C182柱穴 平面図・立面図(S=1/20)  
 図III-46 C260柱穴 平面図・立面図(S=1/20)  
 図III-47 C220落ち込み 土層断面図(S=1/40)  
 図III-48 C1014溝 土層断面図(S=1/40)  
 図III-49 C53水溜 平面図・断面図(S=1/40)  
 図III-50 C1004水溜 平面図・断面図(S=1/40)  
 図III-51 C247井戸 平面図・断面図(S=1/40)  
 図III-52 C251, 237土坑 平面図・断面図(S=1/40)  
 図III-53 C1010土坑 平面図・立面図(S=1/20)  
 図III-54 C238土坑 平面図・断面図(S=1/40)  
 図III-55 C1002溝 平面図(S=1/20)・土層断面図(S=1/40)  
 図III-56~60 C区出土遺物実測図  
 図III-61 D区各遺構面平面図(S=1/300)  
 図III-62 D区南壁 土層断面図(S=1/80)  
 図III-63 D5土坑 平面図・断面図(S=1/40)  
 図III-64 遺物実測図(S=1/4)  
 図III-65 F区第F2遺構面平面図(S=1/300)  
 図III-66 F区第F3遺構面平面図(S=1/300)  
 図III-67 F区第F4遺構面平面図(S=1/300)  
 図III-68 遺物実測図(S=1/4)  
 図III-69 G区各遺構面平面図(S=1/300)  
 図III-70 G11水溜 平面図・断面図(S=1/40)  
 図III-71 G区南壁東半 土層断面図(S=1/80)  
 図III-72 G区出土遺物実測図(S=1/4)  
 図V-1~2 出土須恵器実測図(S=1/4)  
 図V-3 初期須恵器出土位置  
 図V-4 楠見遺跡変遷図

## 表目次

- 表I-1 発掘調査工程表  
 表IV-1 分析資料一覧表  
 表IV-2 花粉化石産出一覧表  
 表IV-3 楠見遺跡堆積物中の珪藻化石産出表  
 表V-1 「て」の字状口縁土師器皿出土比率  
 付表1 遺構検出状況一覧表  
 付表2 出土遺物観察表

## 図版目次

- 図版1 調査地遠景(東から), 調査地遠景(南から)  
 図版2 調査地遠景(西から), 調査地遠景(北から)  
 図版3 A区南壁土層, B区東壁土層, C1区南壁土層, C2区南壁土層, C2区東壁土層, D区南壁土層, F区南壁土層, G区西壁土層  
 図版4 B区第2遺構面全景(東から), B14井戸(西から)/(南から), B334溜柵(西から)/(南から)  
 図版5 B19土坑(北から), B25焼土坑(北から), B21区画溝(南から), B368土坑(北から), A28落ち込み(西から), A66土坑(南東から), A26溝(東から), A1, A7流路(北から)  
 図版6 A区第3遺構面全景(西から), B区第3遺構面全景(東から)  
 図版7 A39土壙墓(南東から), A218土壙墓(南東から)  
 図版8 A39, A218土坑墓(北西から), A39土壙墓(北東から), A218土壙墓(北東から), B687ピット(東から)  
 図版9 B348土壙墓(西から)/(北から)/(東から), B201柱穴(西から), B427柱穴(北から)  
 図版10 B744柱穴(西から), B380落ち込み遺物出土状況(北東から), A67, 68土坑(北東から), B346, 355溝(東から), A195土坑(西から)/(東から), B346, 355土層断面(西から), B355溝土層断面(南東から)  
 図版11 B346, 355溝(北から), B751土坑(西から), B区第6遺構面(西から), B区第10層下礫群(東から)  
 図版12 C1区第1遺構面全景(東から)  
 C1区第3-1遺構面全景(東から), C2区第3-1遺構面全景(西から)  
 図版13 C134・135土坑(東から), C135土坑(東から), C215集石(東から), C190土坑(北から), C192溝(東から), C181ピット(西から), C182柱穴(北から)  
 C260柱穴(北から)  
 国版14 C1区第3-3遺構面全景(東から), C2区第3-3遺構面全景(西から)  
 国版15 C220落ち込み(東から), C251土坑(西から), C237ピット(北から), C64・1014溝(西から), C53水溜(北から), C1004水溜(北から), C247井戸(西から)  
 国版16 C279溝(東から), C238土坑(北から), C1002自然流路(東から), C1002遺物出土状況(北から)  
 C1002土壤サンプル採取状況,  
 C1010土坑(西から), C1021自然流路(西から),  
 C2区南半第8b層面全景(西から)  
 国版17 D区第3-3遺構面全景(西から), D区第4遺構面全景(東から), D5土坑(西から), F区第F2遺構面全景(東から), F区第F3遺構面全景(東から), F区第F4遺構面全景(西から), F93・94溝(東から), F59ピット弥生土器出土状況(北から)  
 国版18 G区西半第G10層土師器碗出土状況, G区西半第G2遺構面全景(東から), G区西半G11水溜土層断面(東から), G区西半G11水溜(東から), G区東半第G2遺構面全景(西から), G区東半第G3遺構面全景(西から), G区東半第G5遺構面全景(西から), G区南壁土壤サンプル採取状況  
 国版19~35 各地区出土遺物

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

和歌山市紀ノ川北岸を東西に走る県道粉河加太線の慢性的な交通渋滞緩和、岩出町方面への連携強化のため西脇地区から山口地区に至る都市計画道路西脇山口線の建設が和歌山県によって計画された。またこの道路は、将来的に阪南市へ延びる第2阪和国道和歌山北バイパスに大谷地区でアクセスする計画となっている。

このうち、大谷地区では周知の埋蔵文化財包蔵地である楠見遺跡の範囲内に含まれていたため、県教育庁文化財課（現文化遺産課）が平成8、9年度に試掘確認調査を実施した。その結果、中世の柱穴や溝などが検出され、顕著な遺物包含層が存在することが明らかになり、協議の結果、建設工事範囲内を全面発掘調査することとなった。

発掘調査は、平成10年度から平成13年度にかけて計13ヶ月間で約2,180m<sup>2</sup>実施した。

1次調査として楠見遺跡西部のA・B地区1,342m<sup>2</sup>を平成10年11月～平成11年3月まで実施し、2次調査として中央部から東部のC・D・G地区にわたる3地区480m<sup>2</sup>を平成11年11月～平成12年3月にかけて実施した。3次調査は東部F地区の358m<sup>2</sup>を平成13年9月～平成13年11月にかけて実施した。

出土遺物等整理は、現地調査期間中に図面・現場写真の整理および遺物洗浄の一部を実施し、平成17年1月から3月に1次整理作業として残りの洗浄、注記、遺物登録台帳の作成、接合作業および遺物実測、遺物・遺構実測図のトレースの一部を実施した。平成17年9月～平成18年3月に2次整理作業として遺物復元作業、残りの遺物実測、遺物・遺構実測図トレースおよび、遺物写真撮影などの報告書作成作業を実施し、本書を刊行した。

表I-1 発掘調査工程表

		平成10年度				平成11年度				平成12年度				平成13年度				平成14年度				平成15年度				平成16年度				平成17年度			
		4	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1	4	7	10	1
1次調査	A地区				■																												
	B地区				■																												
2次調査	C地区							■																									
	D地区							■																									
	G地区							■																									
3次調査	F地区																■																
1次出土遺物等整理																										■							
2次出土遺物等整理																											■						

\*試掘確認調査は平成8、9年度に実施

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

楠見遺跡は、紀ノ川の河口から 5 km ほど遡った右岸に位置する。地形的には、和泉山脈から張り出した背見山山塊の谷筋から小河川により押し流されてきた土砂により形成された狭い扇状地にあたっている。このため全般的に南側に向かって緩やかに傾斜する。紀ノ川の流路が現在の位置に移った時代は江戸時代前半頃で、それまでは大きく流路を変えながら網目状に流れしており、楠見遺跡のすぐ南には本流または明瞭な支流があったと推定されている。楠見遺跡より南は紀ノ川の河川堆積により陸地化した地域で、たびたび河川の氾濫に遭う不安定な土地であったものと思われる。この南側の沖積地と北側の扇状地の境界付近は旧紀ノ川の流れによって削り取られた現状地形で約1.5mの段差が認められる。



図 II-1 遺跡位置図

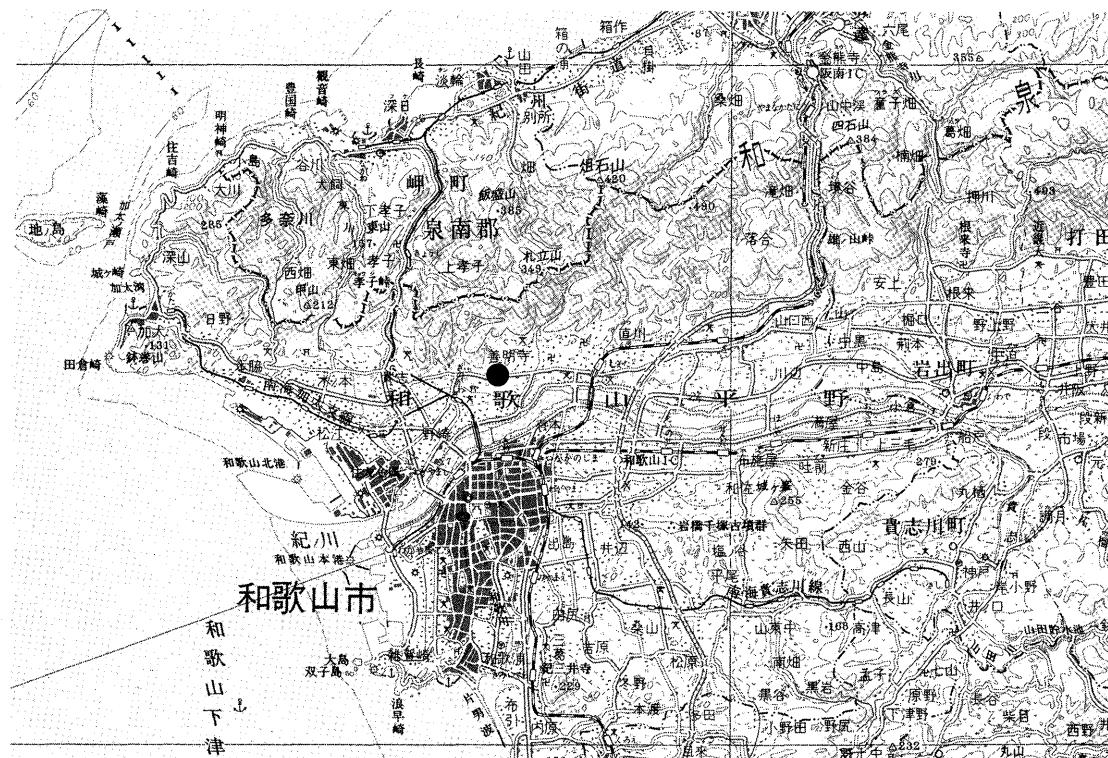


図 II-2 遺跡周辺地形図(S=1/200,000)

## 第2節 歴史的環境

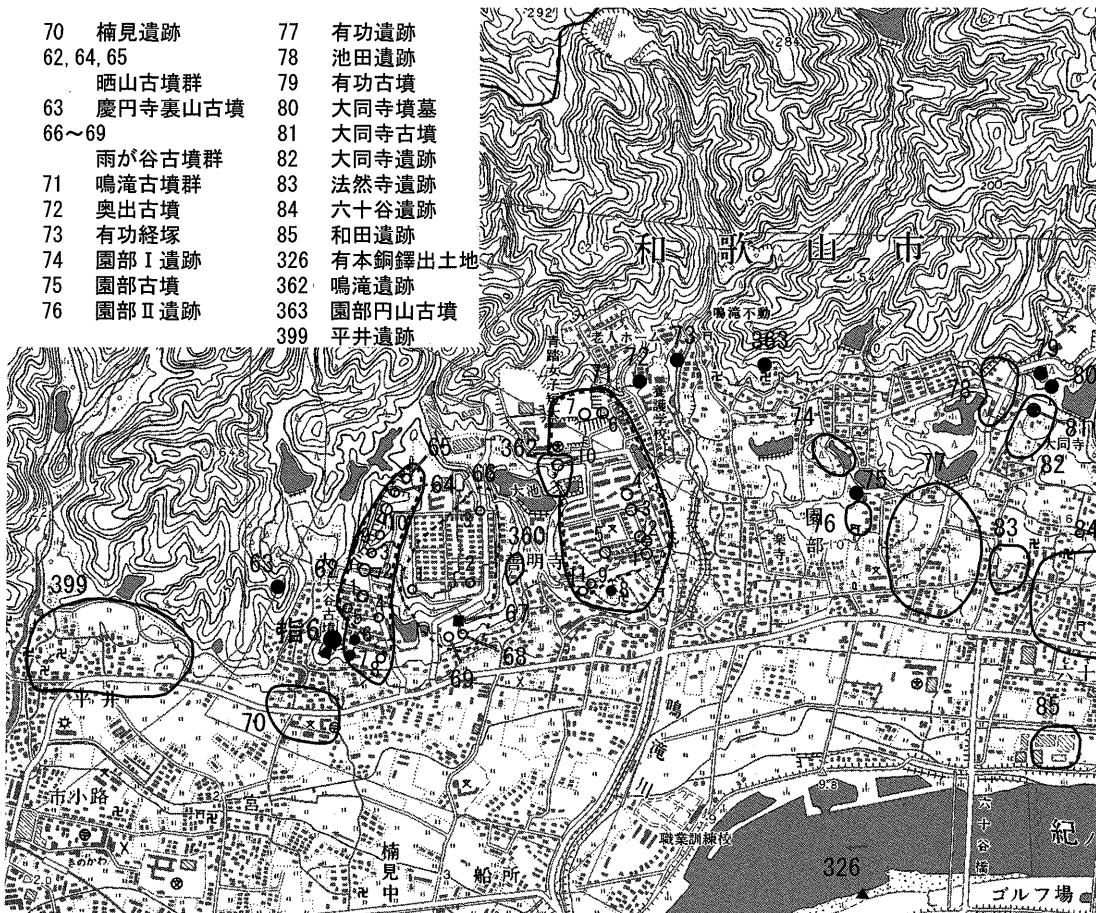
地理的の環境で述べたように、楠見遺跡周辺は和泉山脈から延びる丘陵、この間を南流する小河川によって形成された狭い扇状地、それ以南の旧紀ノ川による沖積地に分けて考えることができる。遺跡は和泉山脈から延びる丘陵部に古墳群や経塚が、扇状地上に集落が分布し、沖積地ではほとんど遺跡は見つかっていない。

旧石器時代の遺跡は、鳴滝遺跡からナイフ形石器と多数の剥片が出土しているほかは楠見遺跡の東約2kmの位置にある園部からナイフ形石器が出土したとの記録があるのみである。

縄文時代の遺跡は、東約4kmにある直川の明光寺付近で中期前半と後期前半の土器が採集されている。また、今回の調査で縄文後晩期の土器や土坑、スクレイパー等が出土した他、東約3kmにある六十谷遺跡でも晩期の土器片が出土している。旧石器時代、縄文時代とも採集された遺物は少量のため、遺跡の全体像は明らかでない。

弥生時代に入ると扇状地上で生活が営まれるようになる。西方約1kmに位置する平井遺跡や六十谷遺跡でも多くの弥生土器が採集されている。特に六十谷遺跡は遺物から見て弥生時代の前期末に成立し弥生時代の全期間を通して集落が営まれたと考えられる。今回の調査で、楠見遺跡でも前期末頃の土坑や縄文時代晩期～弥生時代前期の可能性がある溝を検出したが、以前

70	楠見遺跡
62, 64, 65	
	晒山古墳群
63	慶円寺裏山古墳
66～69	
	雨が谷古墳群
71	鳴滝古墳群
72	奥出古墳
73	有功経塚
74	園部I遺跡
75	園部古墳
76	園部II遺跡
77	有功遺跡
78	池田遺跡
79	有功古墳
80	大同寺墳墓
81	大同寺古墳
82	大同寺遺跡
83	法然寺遺跡
84	六十谷遺跡
85	和田遺跡
326	有本銅鐸出土地
362	鳴滝遺跡
363	園部円山古墳
399	平井遺跡



図II-3 周辺遺跡図(S=1/25,000)

にも前期の壺が出土している。この他沖積地でも南約1kmの国有本遺跡で紀ノ川河床から弥生時代～古墳時代の遺物が、この東方では有本銅鐸が出土している。現在のところ沖積地ではこれ以外遺跡は発見されていないが、近世までこの付近は紀ノ川による堆積作用が大きかったためかなり低いレベルに遺跡が存在する可能性はある。

古墳時代前期の遺跡は周辺に見られないが、5世紀前半になると和泉山脈の南へ延びた尾根上に晒山古墳群と六十谷古墳群が造られる。晒山古墳群ではこのあと6世紀前葉まで造り続けられる。5世紀後半には大谷古墳が晒山古墳群の丘陵先端（楠見遺跡の北300m）に造営される。大谷古墳は和歌山市木ノ本にある車駕之古址古墳に続く首長墓と考えられ、朝鮮半島との関わりを示す馬甲、馬冑や九州産の石材を用いた組み合わせ式石棺が出土したこと有名な古墳である。この他5世紀後半には引き続き晒山古墳群が造られる一方、この東側の尾根では雨が谷古墳群、北東約800mの鳴滝丘陵上では鳴滝古墳群の造営が始まる。6世紀中葉以降になると晒山、雨が谷古墳群ではほとんど見られず、鳴滝古墳群での造営が活発になるが、7世紀代の鳴滝10号墳を最後にこの周辺での古墳の造営は終焉する。

この他古墳時代では鳴滝遺跡、楠見遺跡があるが、後者については既往の調査の項で述べる。鳴滝遺跡は、鳴滝古墳群の範囲内にある丘陵上平坦面に造られた掘立柱建物群である。西側に5棟、東側に2棟が方向を揃えて並び、すべての建物に棟持ち柱がある。梁間4間、桁行4間で最大の建物は $10.1 \times 8$ mを測る。西北端の建物の柱抜き取り穴からは、大量の初期須恵器<sup>注1</sup>が打ち碎かれ投げ込まれたような状態で出土している。これらの土器は楠見遺跡出土品と類似する特異な須恵器であった。

古代以降は平井遺跡で奈良時代の遺物が採集されている以外は中世の経塚が雨が谷遺跡、有功経塚で見つかっているのみであり、今回の楠見遺跡での古代～中世にかけての集落の発見は重要な資料となった。

### 第3節 既往の調査

これまでに関西大学考古学研究室、(財)和歌山市文化体育振興事業団によってそれぞれ調査が行われている(図III-1 参照)。

関西大学考古学研究室による調査は、1969(昭和44)年に和歌山市立楠見小学校中庭を対象に行われており、今回の調査区の南隣にあたる。調査のきっかけとなったのは鉄筋校舎増築の際に2箇所の異なる地点（東側が落ち込み状、西側が円形ピット）から初期須恵器が出土したためである。調査は、土器が出土した鉄筋校舎の東隣に南北16m、東西6mの調査区を設定(A～Hトレンチ 2m四方を1つのトレンチとする)、遺跡範囲確認のため調査区北方に $2 \times 2$ mの方形調査区(N1, N2)を設定して進められた。

調査の結果、N1, N2では少量の瓦器、土師器、須恵器片が出土したのみで、遺構は検出されていない。A～Hトレンチの土層は、表土、床土の下は瓦器、須恵器、土師器を含む層が3層

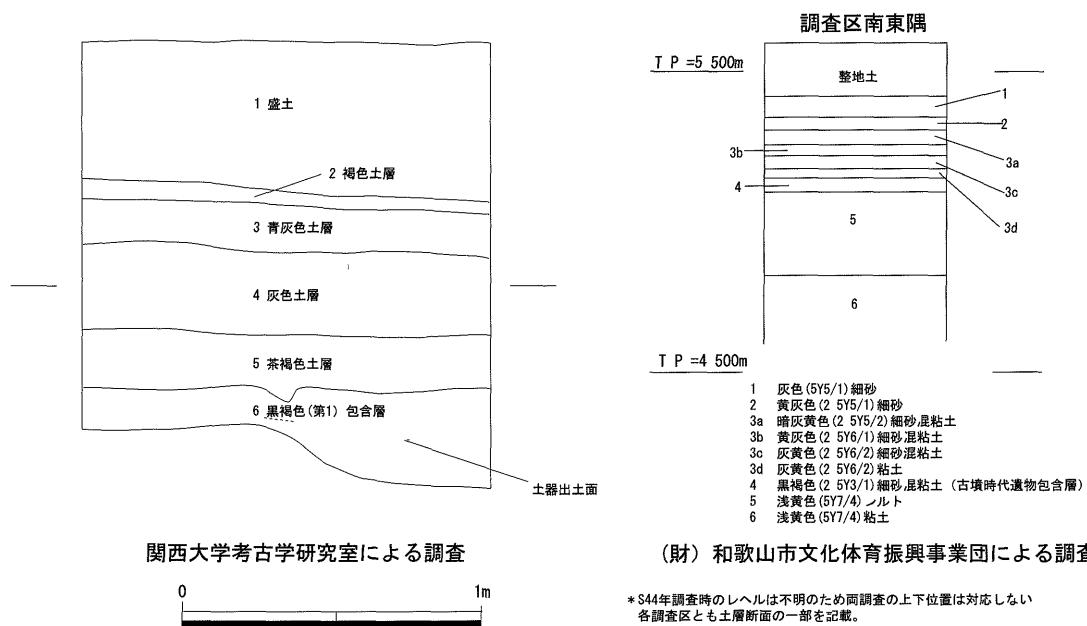
堆積しており、その下に初期須恵器、土師器を含む厚さ15cm～30cmの黒色土層がある。この下がベースの黄色粘土層となる。遺物はこの黒色土層中でも特定のレベルに集中して検出されている。この遺物が出土した浅い落ち込み状の部分は、工事中に発見された東側の落ち込みにつながるものと考えられており、平面的には東西南北10mの範囲に限られるようである。また、この黒色土層の下に東西に走る溝2条が検出されている。溝の埋土である4層の黒色土からは遺物の出土がなく時期ははつきりしないが、初期須恵器は明らかにこの溝が埋没してからのもと述べられている。

出土した初期須恵器は甕41点、器台8点、高杯9点、杯8点、ハソウ10点、台付異形鉢1点で、所属不明品を含めると破片数は2960点に及ぶ。この他土師器壺21点、高杯11点、椀2点、瓶1点、把手3点や、須恵器模倣土師器9点、土錐等も出土している。

(財)和歌山市文化体育振興事業団の調査は今回の調査区から北100mほどに位置し、個人住宅建設に伴い35m<sup>2</sup>が調査された。江戸時代の耕作土層下が、古墳時代の遺物包含層となり、古代～中世の遺物包含層は存在しない。遺構は古墳時代の溝1条、ピット3基で、初期須恵器が溝、遺物包含層から出土している。

今回の調査区を含めた3地点の調査結果は地形的にそれほどの差があるとは思えないにもかかわらず、大きく異なる様相を示している。特に昭和44年の調査地点は特異な性格を有する可能性があり、今後の調査や地形、土層の対応関係等の検討により総合的な評価が必要である。

注1 楠見遺跡出土須恵器については、これまで初期須恵器と陶質土器両方の名称が使われてきているが、出土量や鳴瀬遺跡出土の類似品に焼け歪みおよび窯体の融着が見られることを重要視して本書では初期須恵器と呼ぶこととする。



図II-4 既往の調査土層図

## 第Ⅲ章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

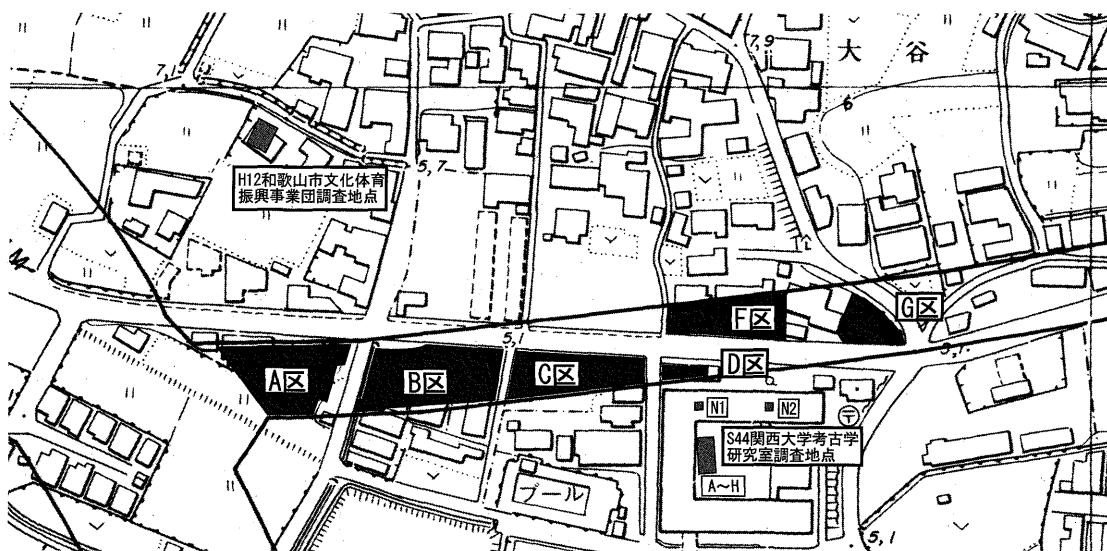
**調査区の設定** 西から順にA区、B区（以上1次調査）、C1、C2区、D区、G2区（以上2次調査）、D区北をF区（3次調査）と設定し調査を実施した。本書ではC1、C2区をまとめてC区、G2区をG区として報告する。なお、E、G1区は欠番である。

**調査地の地区割** 調査地の地区割りは、調査区北東に位置する直角平面座標第VI系のX=-193 000km、Y=-75 500kmを基点とし、4m毎に割り付けた。地区名は、東西方向については東から西方向に向かってアラビア数字（1, 2, 3, …）を、南北方向については北から南方向に向かってローマ字（A, B, …Y, 2A, 2B…2Y, 3A, 3B…）を使用し、これを組み合わせて呼称した。遺物の取り上げは特別な場合を除き、この区画単位で行った。なお、座標系は日本測地系を採用している。

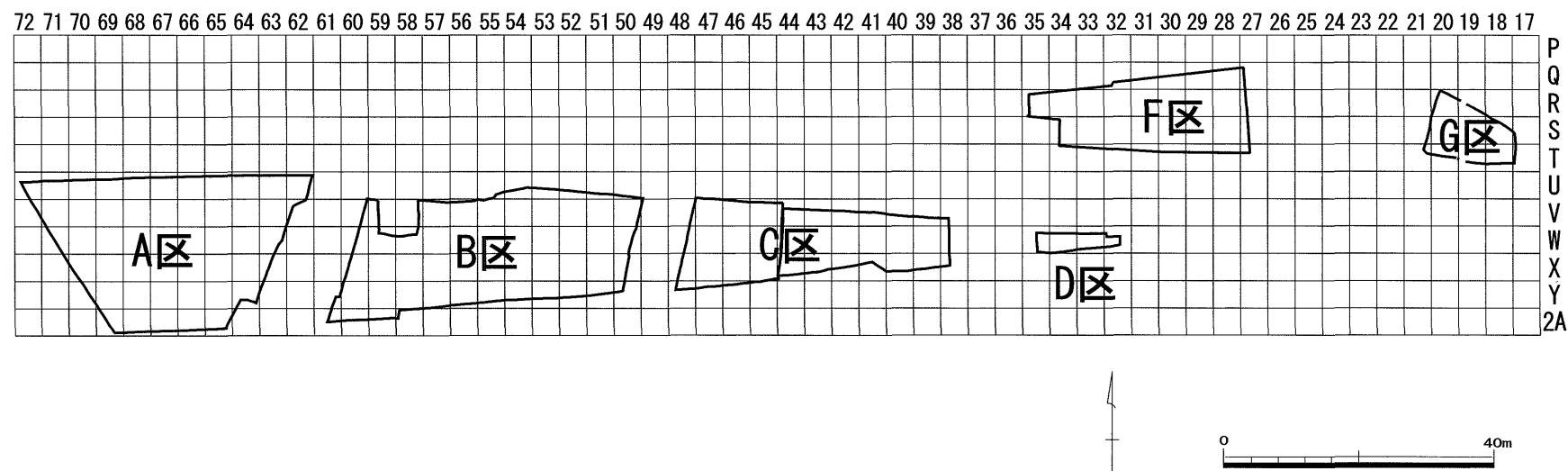
**調査方法** A, B区は第5層上面（第1遺構面）直上まで機械で、これ以下を人力により掘削した。C区は東側から掘削を開始し、近世の第1遺構面を調査対象外として第6層上面（第2遺構面）直上まで機械で掘削したが、遺物の出土量が多かったため西半は第5層上面までにとどめ、以下を人力により掘削した。D区、G区はそれぞれ第6層上面、第G7層上面までを機械、それ以下を人力掘削した。F区については、近世の第F1遺構面を調査対象外とし、第F2遺構面直上まで機械、それ以下を人力掘削とした。

発掘調査によって出土した遺物は、土器を中心に遺物収集箱（コンテナ）約106箱に及ぶ。調査と並行して応急整理を行っていたがこのたび本格的な整理作業を実施した。出土遺物は本書作成後和歌山県教育委員会に移管した。

なお、調査件名は、1次調査が「98-01・070」、2次調査が「99-01・070」、3次調査が「01-01・070」であり、これを用いて記録類および出土遺物を管理している。



図III-1 調査区位置図 (S=1/2,500)



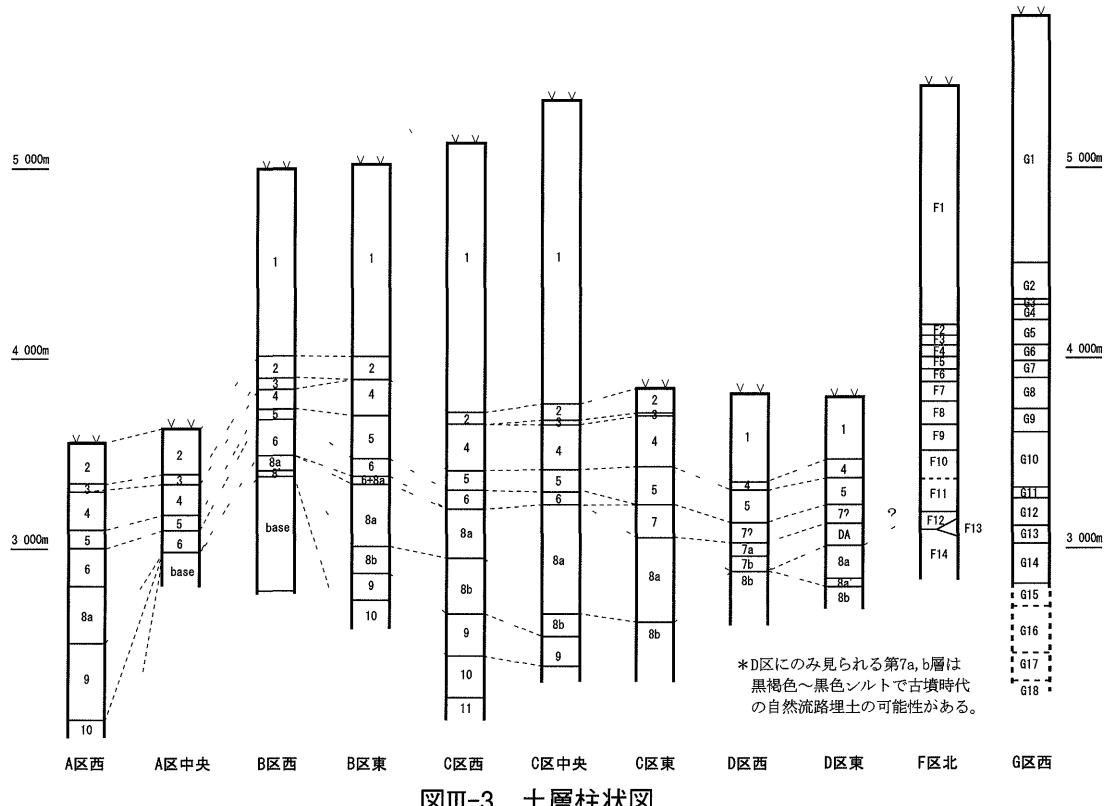
図III-2 調査地区割図(S=1/1,000)

## 第2節 基本層序

調査区は東西約230m、南北約40mに広がっており、C区付近から東に向かい徐々に旧地形（平安時代まで）は落ち込み始め、東端のG区では谷状地形となる。このためA～D区とFおよびG区の堆積土層を共通の層序で認識することはできなかった。よって以下ではA～D区とF, G区を分けて記述する。

A～D区では、第1層が盛土、第2層がa, bあるいは2, 2'に細分される耕作土、第3層が床土で、いずれも現代の人為的土層である。第4層は灰色系のシルトで近世の耕作土である。多いところでa, b, cの3面確認できる。第5層は黄灰色系のシルトで室町時代の耕作土だが、平安時代後半～鎌倉時代の瓦器等の細片も多く含む。地区により最大4面確認できる。第6層は黒褐色粘質シルトで鎌倉時代後半～室町時代前半を下限とする遺物包含層であるが、平安時代後期～鎌倉時代前期の遺物も多く含む。C区中央以東では第6層の堆積は見られない。第7層は褐灰色～黒褐色シルトで古墳時代～平安時代の遺物包含層である。基本的にはC区中央以東の第6層が見られない地点に堆積している。第8a層～第12層は縄文時代の遺物を微量含む。第8a層は黄褐色粒を含む灰白色系粘質シルトで縄文時代後期～晩期の堆積と思われ、G区（谷状地形のため平安時代の層まで確認）を除くほぼ全地区に見られる。第8b層は黄褐色粒を含む灰色系粘質土、第9層は灰色系粘質シルト、第10層は青灰色系シルト、第11層は黒色シルト、第12層はオリーブ褐色粗砂礫で、第11層までは縄文時代後期の遺物を少量含む。

また、A区では第6層下、B区では第8a層下でベース面と考えられる粗砂礫層を確認してい



図III-3 土層柱状図

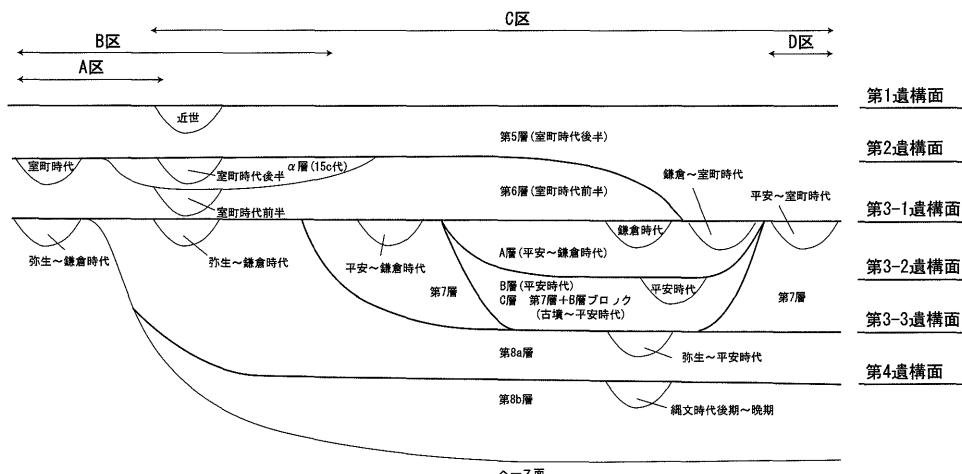
る。

F区は第F1層～第F4層が近現代の盛土・耕作土で、第F5層～第F11層までが中世の遺物を含む包含層である。第F12層は土色、検出遺構の時期から判断してA～D区の第8a層に対応する可能性が高い。

G区は第G1層が盛土、第G2層～第G7層が室町～現代までの耕作土層である。第G8層は灰黄褐色シルトで室町時代、第G9層は灰黄褐色砂礫で鎌倉～室町時代、第G10層は褐灰色シルトで平安時代末～鎌倉時代の堆積層である。第G11層～第G16層は平安時代の堆積土である。第G8層は耕作土の可能性があるが、G9層以下は自然堆積で、特にG9～G14層までは粗砂礫が多く複雑な堆積を示すことから流水に関わる堆積と見られる。一方第G15層以下は粘質のシルト層が多く層表面の起伏が滑らかであることからある程度時間をかけた湿地堆積土と考えられる。

なお、各地区における土層の詳細については、第3節で述べることとする。

A～D区の遺構面については下に概念図を示す。第1遺構面は第5層上面であり、全地区に存在する。遺構の時期は近世に属する。第2遺構面は第6層上面でありA,B区で検出した。C区にも第6層は存在するが明確な遺構は検出できなかった。遺構の時期は室町時代である。第3遺構面は基本的には第6層除去面であるが、各地区によって様相が異なる。A,B地区では、第6層除去面である第8a層上面の他、一部露出しているベース面で弥生～鎌倉時代の遺構が検出される。C区では第8a層が露出する部分では弥生～鎌倉時代の遺構が、第7層の上面では平安～鎌倉時代の遺構が検出される。また落ち込み部では堆積したA層、B,C層上面でそれぞれ鎌倉時代と平安時代の遺構が、第8a層上面では弥生～平安時代の遺構が検出される。C区の一部とD区で第6層が存在せず第7層が露出する部位では平安～室町時代の遺構が同一面で検出される。第4遺構面は第8b層上面で縄文時代後晩期の遺構が検出される。第5, 6, 7遺構面はそれぞれ第9層上面、第10層上面、第12層上面に対応するが、自然流路や落ち込み等を検出しているのみで明確な遺構は確認できていない。



図III-4 遺構面概念図

### 第3節 調査の成果

縄文時代から江戸時代までの幅広い時期の遺構・遺物を検出した。近世以降は耕作地となつていたため素掘り溝以外に目立った遺構は存在しない。中世では室町時代の区画溝、井戸、溜柵、焼土坑、掘立柱建物、ピット群や鎌倉時代の溝、土坑墓、掘立柱建物、土釜埋納？遺構、ピット群等多数検出した。古代では平安時代の井戸、水溜、土坑、溝を検出した。この他少數ではあるが古墳時代の土坑、自然流路、弥生時代の土坑、溝、縄文時代の土坑を検出した。以下では土層堆積状況、遺構検出面が異なるため、各地区ごとに記載していく。

各遺構の帰属面については、各遺物包含層が薄く部分的に存在しないところもあることから単純に検出時の面に帰属させることはできない。このため遺構全体図は遺構検出面の他、遺構埋土、出土遺物から判断して帰属する遺構面を推定し作成している。なお、これらの資料で判断できない遺構については可能性のあるすべての面に重複して記載している。主要遺構についての検出面、埋土、出土遺物などを付表1に示す。

#### 1 A,B区（1次調査）

##### (1)調査の概要

第1次調査は、全調査区の西端に位置する。A,B調査区の中央を南北に市道が横切っており、西側の地区をA区、東側の地区をB区とした。実質調査面積はA区669m<sup>2</sup>、B区673m<sup>2</sup>である。

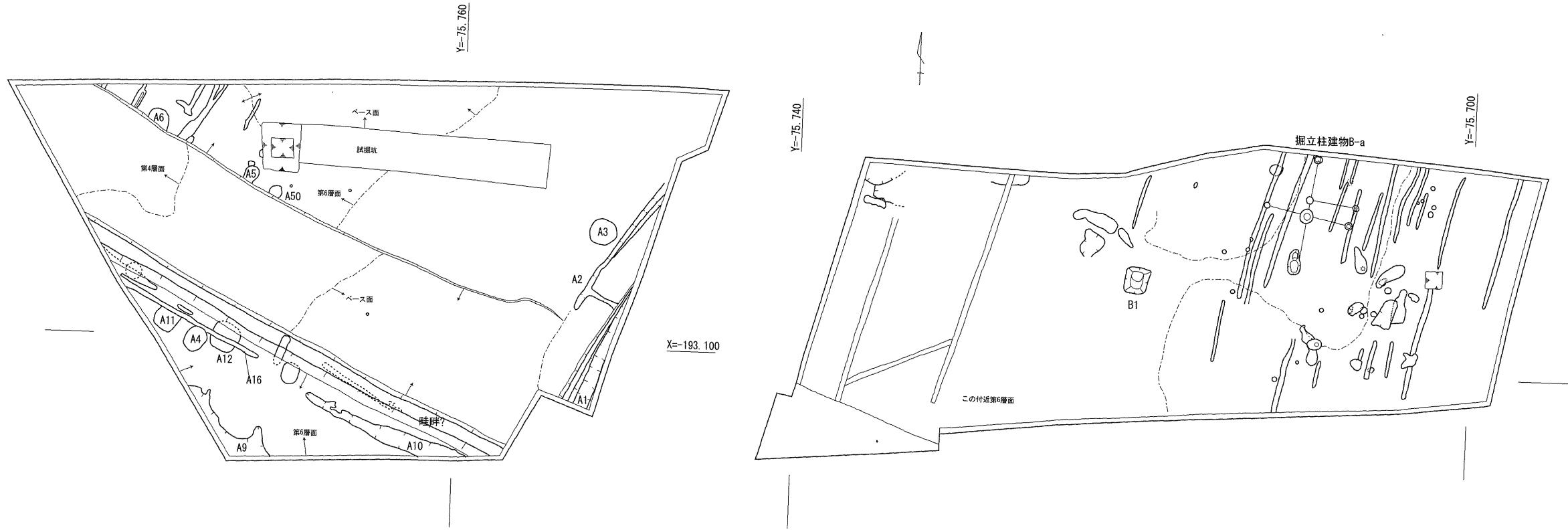
旧地形（弥生時代～室町時代の面）で見ると、B区西半が全調査区中最もレベルが高く、これより東方に向かい徐々に落ち込んでいく。西方へは市道を挟んで40cm程の高低差で落ちた後、緩い傾斜で下がっていく。南北方向にはわずかに南へ傾斜するが距離が短いこともありほとんど高低差はない。

土層は基本層序で示したとおりA区では第2～6, 8a, 9, 10層、B区では第1～6, 8a, 8b, 9, 10層が堆積するが、A区の大部分では第6層下で、B区西では第8a層下でベース面を確認することができる。また、A区北東隅とB区中央北では第6層上面からの落ち込みにα層と呼ぶ室町時代の遺物包含層が堆積している。

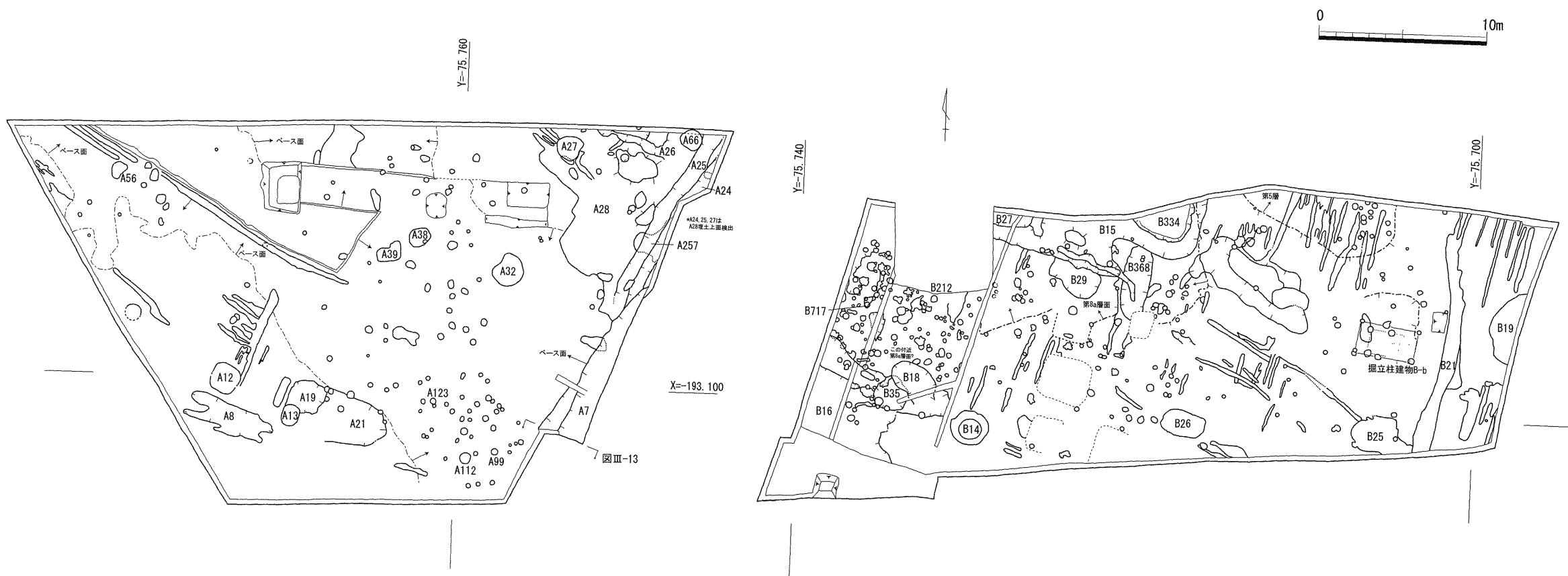
遺構面は、A区では3面（第1～第3遺構面）、B区では7面（第1遺構面～第7遺構面）確認した。第4～第7遺構面についてはB区東1/4程度について面的に掘り下げ遺構検出をおこなった。ただし、第7遺構面を形成する第11層まで遺物の出土はあるものの、第5～第7遺構面は自然流路、落ち込みなどを検出したのみで明確な遺構は確認できていない。

主な遺構は、室町時代の区画溝1条、井戸1基、溜柵1基、焼土坑1基、掘立柱建物1棟、ピット多數、鎌倉時代の土坑墓3基（うち1基は木棺墓の可能性あり）、掘立柱建物2棟、土釜埋納？遺構1基、縄文時代晚期～弥生時代前期の溝1条以上、土坑1基、縄文時代後期～晚期の土坑1基などである。

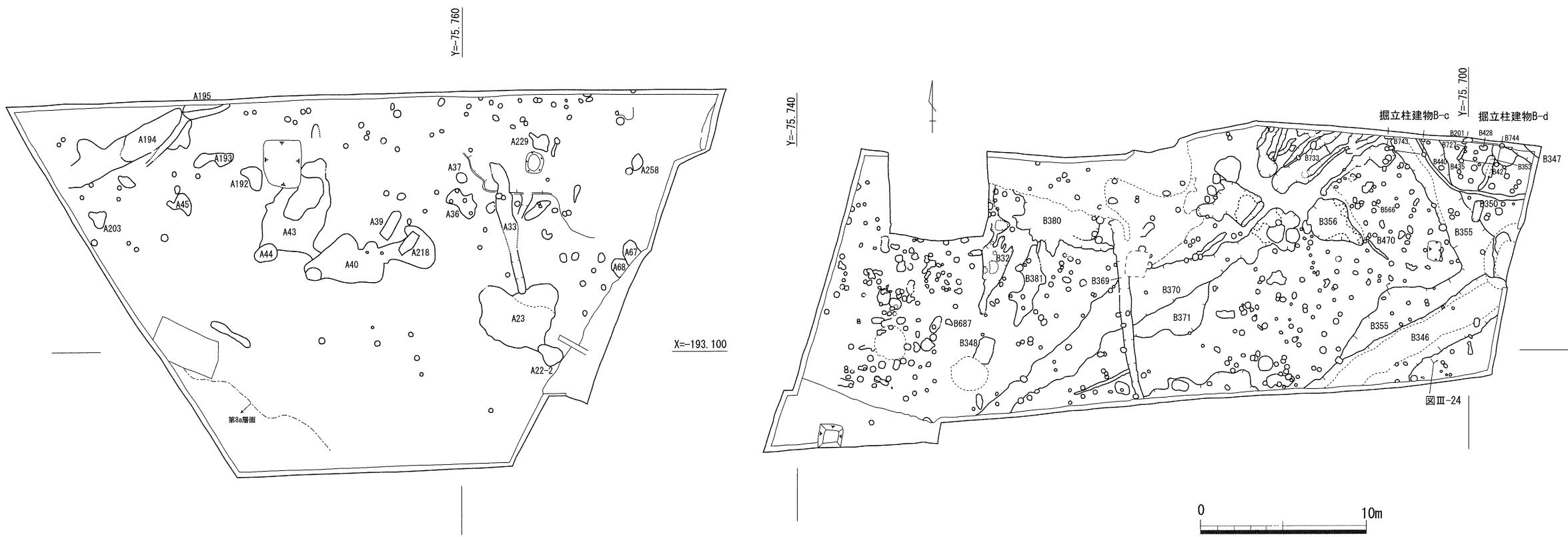
出土遺物の総数はコンテナに収納してA区18箱、B区62箱で縄文から近世までの遺物を含む



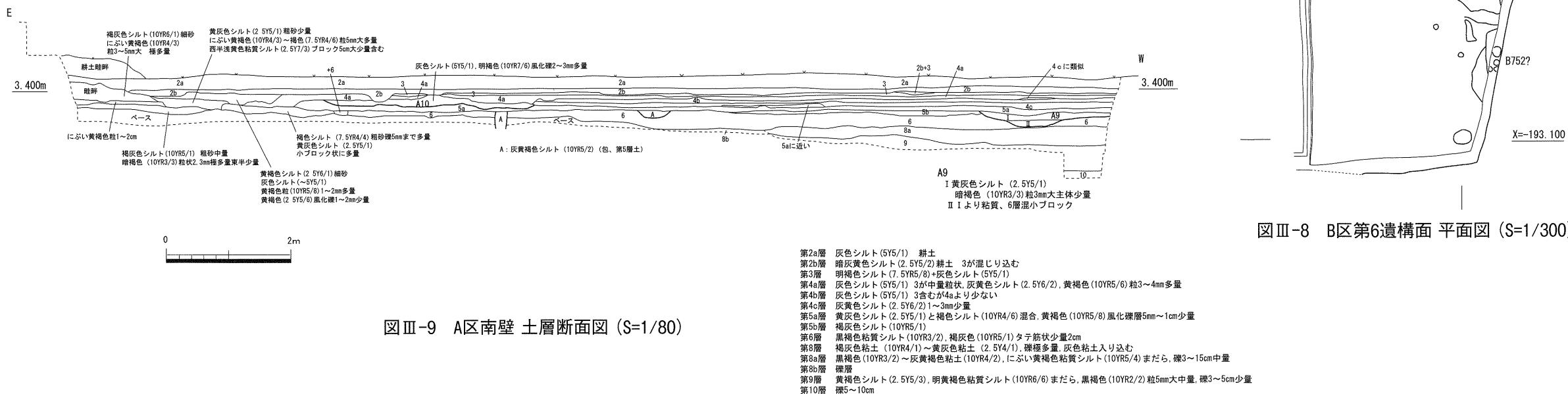
図III-5 A,B区第1遺構面 平面図 (S=1/300)



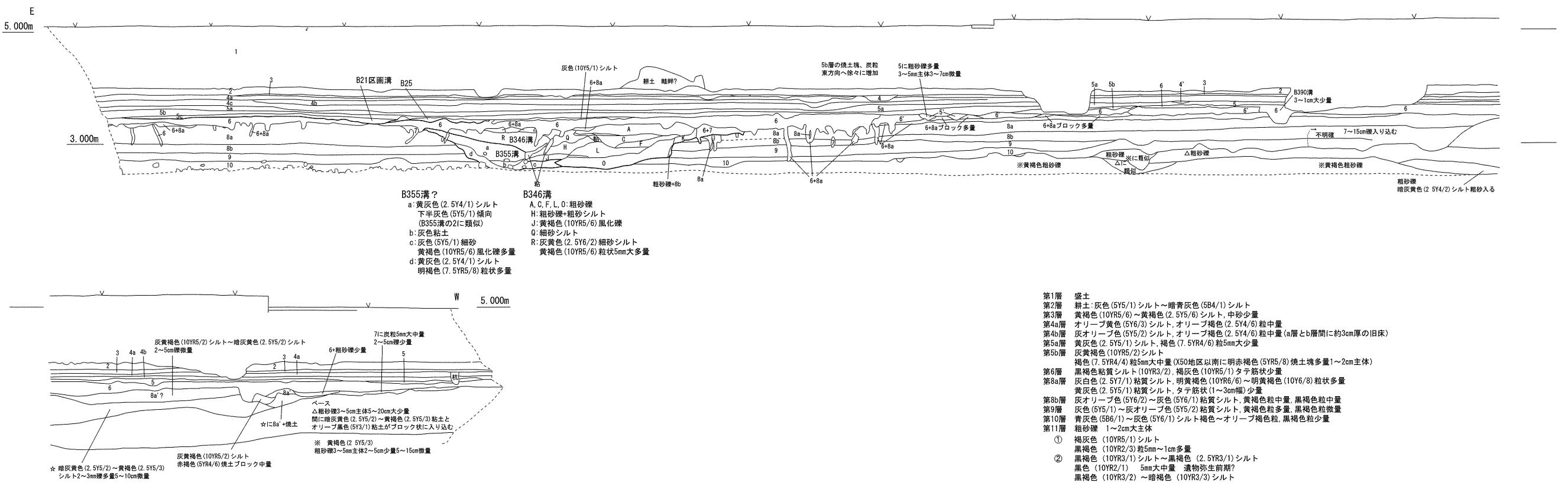
図III-6 A,B区第2遺構面 平面図 (S=1/300)



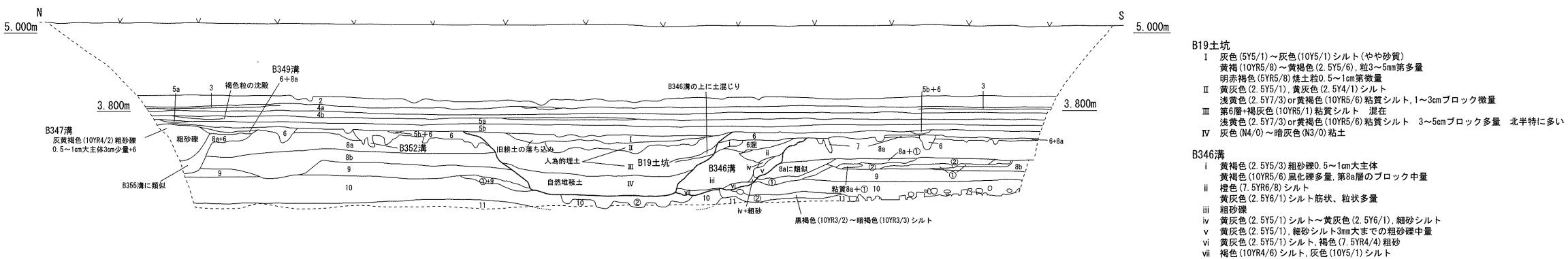
図III-7 A,B区第3遺構面 平面図 (S=1/300)



図III-9 A区南壁 土層断面図 (S=1/80)



図III-10 B区南壁 土層断面図 (S=1/80)



図III-11 B区東壁 土層断面図 (S=1/80)

が、平安時代末から室町時代の遺物が大部分を占める。

## (2) 遺構と遺物

### 遺物包含層出土の遺物

**第5層（図III-27, 図版19, 25）** 弥生土器、古墳時代の須恵器など平安時代以前の遺物も少量含むが平安時代末から室町時代の遺物が主体である。平安時代末～鎌倉時代では、瓦器碗、瓦器皿、土師器皿、土師器釜、常滑焼甕、東播系須恵器片口鉢(15)、山茶碗片のほか、白磁(5, 6, 7, 8)や青磁片が出土している。14世紀代の遺物は希薄である。室町時代では、土師器皿、土師器鍋(1)、備前焼擂鉢(2, 14)、瓦質土器羽釜・擂鉢(4)・甕、播磨系土師器釜(3)、丸瓦、平瓦、中国製染付片、青磁(11, 12, 13)、瀬戸美濃の皿等が出土している。

丸瓦は外面を丁寧に磨き、内側に棒状のタタキ痕が残る。4は瓦質擂鉢で口縁が丸みを帯び外面は板状工具によるナデ仕上げである。器壁は厚く、胎土、焼成は瓦と区別がつかないほど類似している。14は口縁を薄板作りにし断面「く」の字状に屈曲させる。口縁端内側のやや下がった位置に稜線を持つが、外面の凹線はそれほど発達していない。中世6期（参考文献3）に含まれるとと思われる。このほか瀬戸美濃の皿が出土していることと、国産染付の出土がないことから16世紀代の堆積層と考えられる。

**第6層（図III-27, 28, 図版19, 20, 25）** 平安時代末～鎌倉時代の遺物を主体とするが古墳時代～平安時代の土師器、須恵器(16)も少量含む。中世前半では土師器(26～31, 33～43)、瓦器碗・皿(32)、常滑焼甕(20)、東播系須恵器片口鉢、土師器釜(17, 44, 45)、青磁(18)、白磁(19, 21～24)、備前焼擂鉢(25)などが出土している。25は小片のため判断が難しいが精良な胎土と堅い焼きあがりから室町時代まで下る可能性があり混入と考えるべきかも知れない。

常滑焼、白磁、東播系須恵器片口鉢などとともに、瓦器碗も高台がしっかりとした平安時代末～鎌倉時代初頭に入るような特徴を示すものが多く見られるが、高台が紐状に退化した形態も一定量含まれる。また14世紀代に入ると考えられるような高台のない瓦器碗は小片のため断言はできないが、可能性のある破片を少量確認している。このほか確実に15世紀以降と考えられる遺物は確認できていないことと、上層の第5層には第6層から出土しない14-15世紀代と考えられる青磁(11～13)、土師器鍋(1)、瓦質土器羽釜が一定量入ることから第6層の堆積時期は14世紀代と考えられる。

**第8a, b層（図III-28, 図版20）** 土器片(51)および叩石(49)が出土している。51は外面に横方向の筋状の凹みを何条かもつが、押当てたものか搔き取ったものか判断できない。

**第9層** サヌカイト片が出土したのみで時期は不明である。

**第10層（図III-28, 図版20）** 平底の底部片(52)、サヌカイト製スクレイパー(50)、サヌカイト片が出土している。52は器壁が薄く、底部以外の可能性もある。

## 第1遺構面検出（近世）の遺構と遺物（図III-5）

第5層上面での検出であるが、A区では全体図に示すように半分程度はすでに第6層やベース面が露出している。B区でも南西部は第6層が露出していた。

遺構はA、B区間に流れる水路、素掘り溝以外は用途不明の土坑やピットが少量分布するのみである。

**素掘り溝** A区では座標北から東へ25°前後、B区では東へ15°前後振った方向で、現在の道路にほぼ平行する。削平によるためかA区東半とB区西半には全く見られない。

**掘立柱建物B-a?** B区中央やや北東よりに位置する。直線的にピットが並ぶが建物を復元するには至らなかった。ピット内にはすべて焼土が含まれており、2ヶ所で石が据えられていた。素掘り溝を切って掘り込まれているためさらに上位の層からの掘り込みの可能性もある。

**B1方形土坑（図III-28）** B区中央付近、第5層上面で検出した方形土坑で、検出面での平面規模約1.3×1.5m、残存深さ約60cmを測る。埋土中から瀬戸美濃皿(54)が出土している。

**A1流路（図III-28、図版20）** 昭和まで機能していた水路で、A、B区間の道路に沿って流れている。室町時代のA7流路（後述）から繰り返し掘りなおされている水路である。

**A11土坑（図III-29、図版21）** 平面が隅円方形の土坑。検出面での規模1辺約1.5m、深さ約0.1mである。粗砂礫を埋土とする遺構で、A16素掘り溝に切られる。18世紀前後と見られる唐津焼大皿(79)や玉縁状口縁を有する鉢が出土している。

## 第2遺構面検出（室町時代）の遺構と遺物（図III-6、図版4）

A区では西側と北東の一部に第6層が残り、北東隅には落ち込み部に $\alpha$ 層が堆積している。それ以外はベース面が露出している。B区では南西隅と中央北の一部で8a層が露出、その上に $\alpha$ 層が堆積する状態での検出である。

A区では西半に素掘り溝、東半に多数のピット群が分布する。第6層より新しい $\alpha$ 層が堆積する部分には土坑や溝が少数ながら存在する。B区では西端にピットが非常に密に分布する地点があり、その南東側には井戸が造られている。中央付近にも東端ほどではないがピット群、素掘り溝が見られる。東端のB21区画溝以東にはピットは見られない。また、若干時期は下るが第5b層上面から掘り込まれる溜柵がB区中央北に造られている。

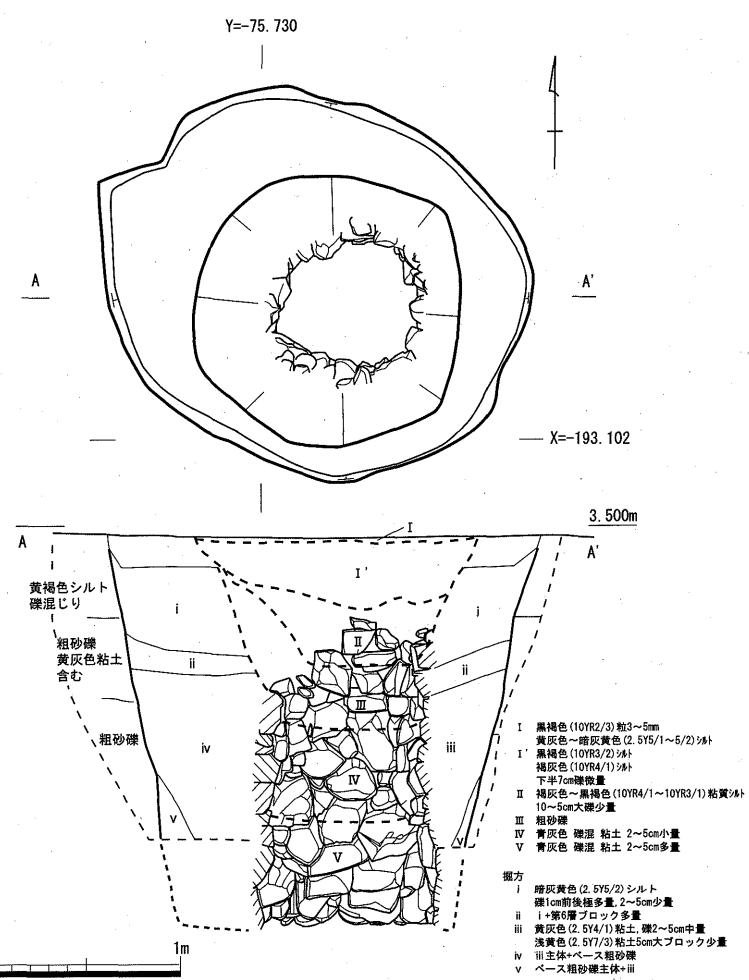
**A28落ち込み（図III-29、図版5, 21, 25）** A区北東隅に位置する第6層上面からの落ち込みで、15世紀代を下限とする遺物を含む $\alpha$ 層が堆積している。 $\alpha$ 層上面ではA24, 25溝、A27土坑等を検出した。 $\alpha$ 層を除去するとベース面が現れるが、この上面でもA26溝、A66土坑等を検出している。

遺物は $\alpha$ 層中に瓦器など鎌倉時代以前の遺物も多く含まれているが、瓦質土器甕(70)、備前焼擂鉢(71)、青磁碗(72, 73)、平瓦（凸面離れ砂付着）など概ね15世紀代に収まる遺物が下限であり、上層の第5層の堆積時期からも室町時代の埋没と考えて矛盾はない。

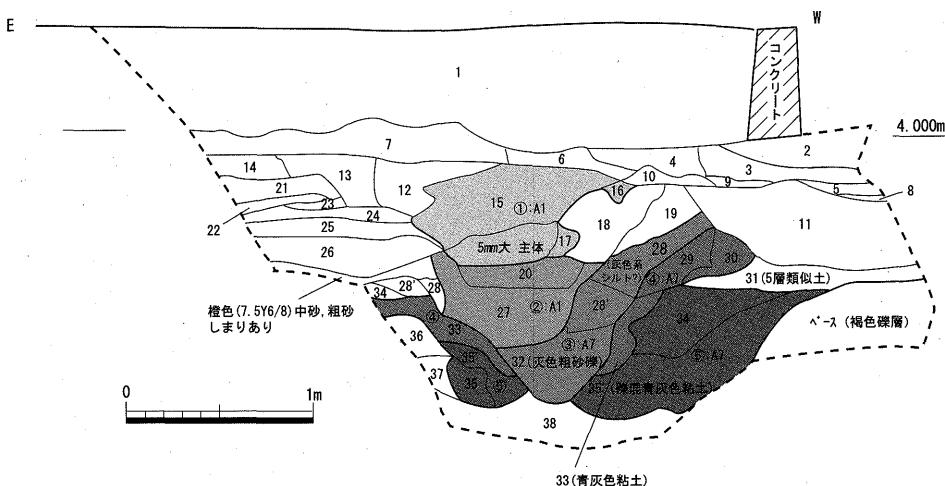
A26溝 (図III-29, 図版5, 21, 25)

A28落ち込み内にある東西方向に走る小溝で、埋土はA28同様 $\alpha$ 層である。15世紀代の常滑焼甕(81)、青磁稜花皿(80)のほか、状態が悪く実測はできなかったが漆器皿が出土した。80は小片のため復元径にある程度の誤差を含む。

B21区画溝 (図III-29, 図版5, 21) B区東端を南北方向にはしる第6層上面検出の溝で、西に掘立柱建物およびピット群が広がるのに対し東にはB19土坑1基と素掘り溝以外の遺構が見られないことから、屋敷地を区画する溝と考られる。検出面での幅70~80cm、深さ15cmの浅い溝であり、瓦器椀、土師器皿など鎌倉時代



図III-12 B14井戸 平面図・断面図 (S=1/40)



図III-13 A1, A7流路 土層断面図 (S=1/40)

の混入と考えられる遺物のみで遺構に伴う遺物はなかった。なお、W51地区の溝内から8割程度残存する瓦器碗(85)が出土しているが、南壁断面で見ても第6層上からの掘り込みであることから下層遺構（例えばB440ピット この付近は後述するように柱抜き取り後に瓦器碗など遺物を据えるピットが多い）の遺物が混入した可能性もある。

**A7(A1)流路** (図III-13, 28, 図版5, 20) A区東端で検出した南流する小河川であるが、平面プランが不明確であったため断割って断面観察後遺構掘削を行った。A1旧水路を含めて繰り返し掘りなおされている。当初の流路は褐色礫層をベースとしているが、このベース土からは15世紀代の瓦質羽釜(69)が出土しており、室町時代以降にできた河川であることがわかる。河川最下層の礫混じり青灰色粘土層、5層類似土、青灰色粘土層から69とほぼ同時期の土師器皿(68)、備前焼擂鉢(67)、瓦質羽釜(65)、茶臼(66)等が出土しており、出土遺物から判断するとベース土の堆積と河川堆積にそれほど間隔がなく、礫層という土質を考慮すればベース自体も直前の河川埋土である可能性がある。

この後再び流路となり、その最下層である灰色粗砂礫層から16世紀末～17世紀代の肥前系陶器碗(62)が、その上層かと思われる灰色系シルト層からは17～18世紀前後と考えられる唐津焼(59, 60)が出土している。さらにその後の流路埋土には18世紀前後と考えられる丹波系の擂鉢(56)、染付(57)等の遺物が含まれる。近隣の方の話によると、その後も現代に至るまで流路であり続けていたようである。

**B14井戸** (図III-12, 29, 図版4, 21) 主に20～30cm大の礫を使用した石組みの井戸である。石組部内径は上端で60～70cm、下端で90cm、深さ2mで、検出面での掘方は長軸約2.4m、短軸約2.1mである。埋土は5層に分層できるが各層で出土遺物の時期差は認められず、瓦質羽釜(83, 84)、播磨系土師器皿(82)など15世紀代の遺物を下限とする。室町時代の井戸と考えてよいと思われる。

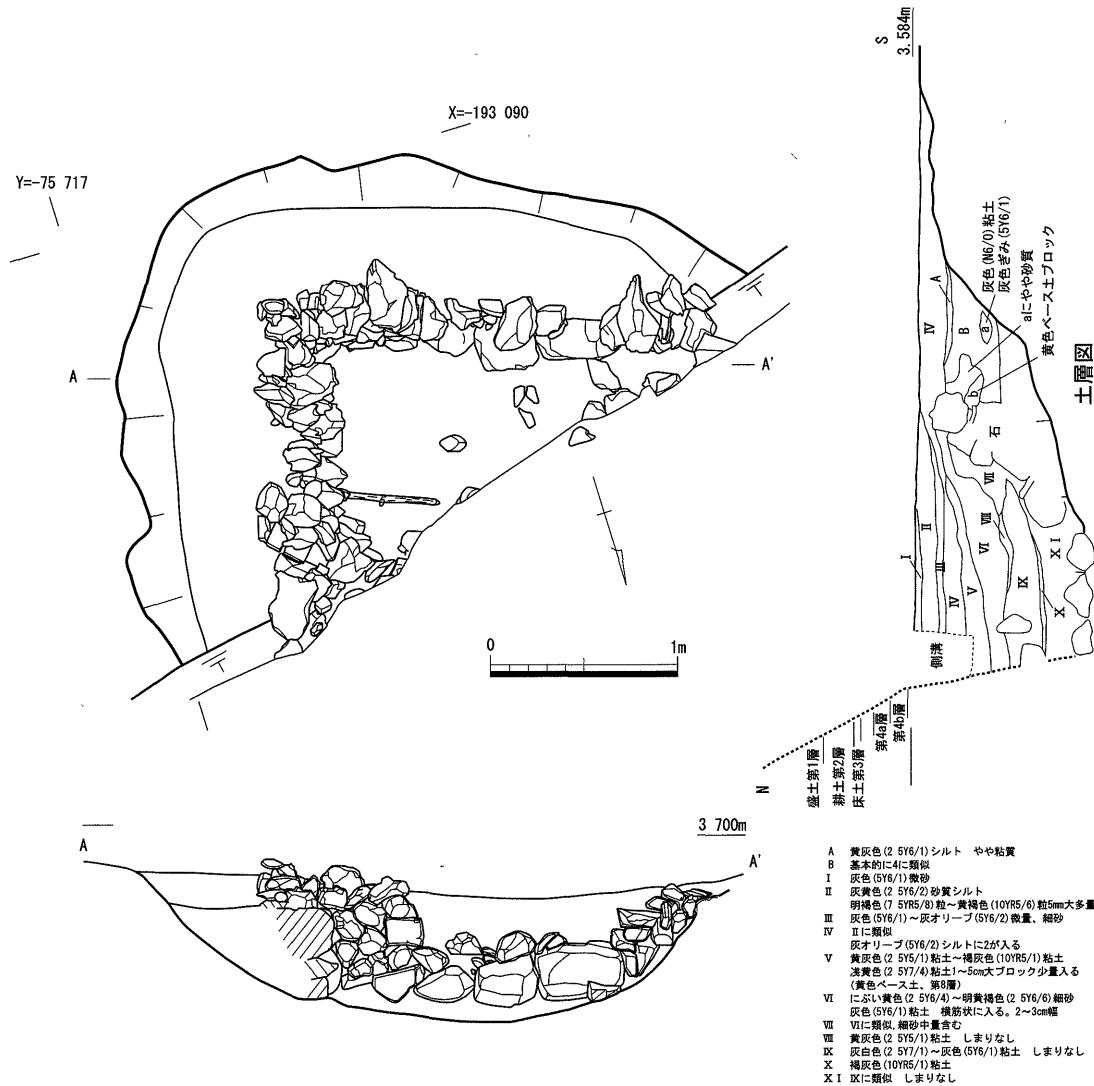
**B334溜柾** (図III-14, 29, 図版4, 21) B区中央北壁に接する場所で一部検出した。10cm～40cm大の礫でつくられた石組み遺構で残存長1.1×1.9mである。調査区外に伸びるため全体像は不明だがその構造から溜柾と考えられる。埋土中から木杭と平瓦(86)が出土している。時期は細かく比定できないが、中世の瓦と考えられる。遺構の時期は、北壁土層図から第5b層上面遺構であることが確認できるため、他の第6層上面検出遺構より若干下る可能性はあるが室町時代に収まる溜柾である。

**A66土坑** (図III-15, 30, 図版5, 22, 25) A28落ち込みの堆積土である $\alpha$ 層を除去後ベース面で検出した土坑で、埋土も $\alpha$ 層を主体とする。埋土から30cm大の礫1個とともに茶臼の下臼(88)や青磁碗(87)など鎌倉～室町時代と考えられる遺物が出土している。

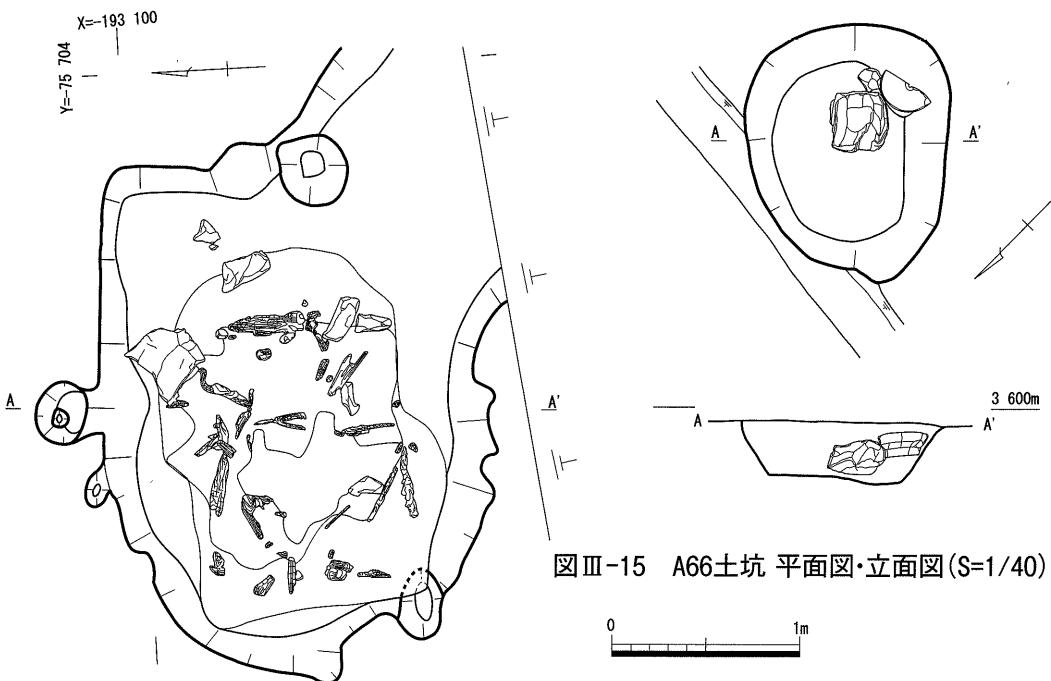
**B25焼土坑** (図III-16, 図版5) B区南東に位置しB21区画溝に切られる焼土坑で、第6層上面で検出した。検出面での平面規模一辺約2×3mの不整形土坑で一部調査区外南に伸びている。底

面はなだらかな傾斜を有し平坦面を形成しない。土坑内約1.2×1.5mの範囲に焼壁、炭化材が多量に遺存していた。炭化材は最下層に、焼壁は上層に多く含まれており、中層には両者ともほとんど含まれていない。底面は火を受けていないため、廃棄土坑の可能性もある。周囲に深さ5~10cm程度のピットが3基土坑を囲むように分布しているが、この土坑に付随するものかどうかは明らかでない。遺物は混入と見られる瓦器、土師器片のみで遺構の時期を示す遺物の出土はなかった。

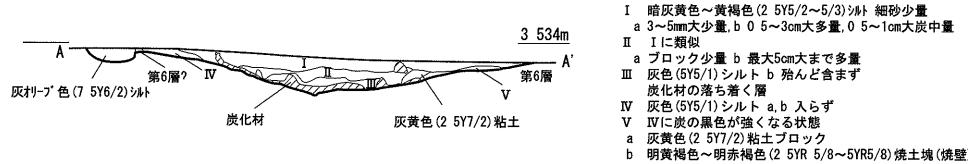
**B368土坑** (図III-30, 図版5, 22) B区中央付近で一部B15落ち込みに切られる長軸約4.5m短軸約1.5mの長楕円形土坑である。第8a層露出部分で検出し、埋土は第5, 6層を主体とする。埋土上位から土師器皿(90, 91)、陶器(89)、下位から瓦質こね(擂)鉢(92)、甌(94)、土師器皿(93, 95, 96)など室町時代の遺物が出土している。なお、上位出土の89は上層遺物の混入の可能性がある。



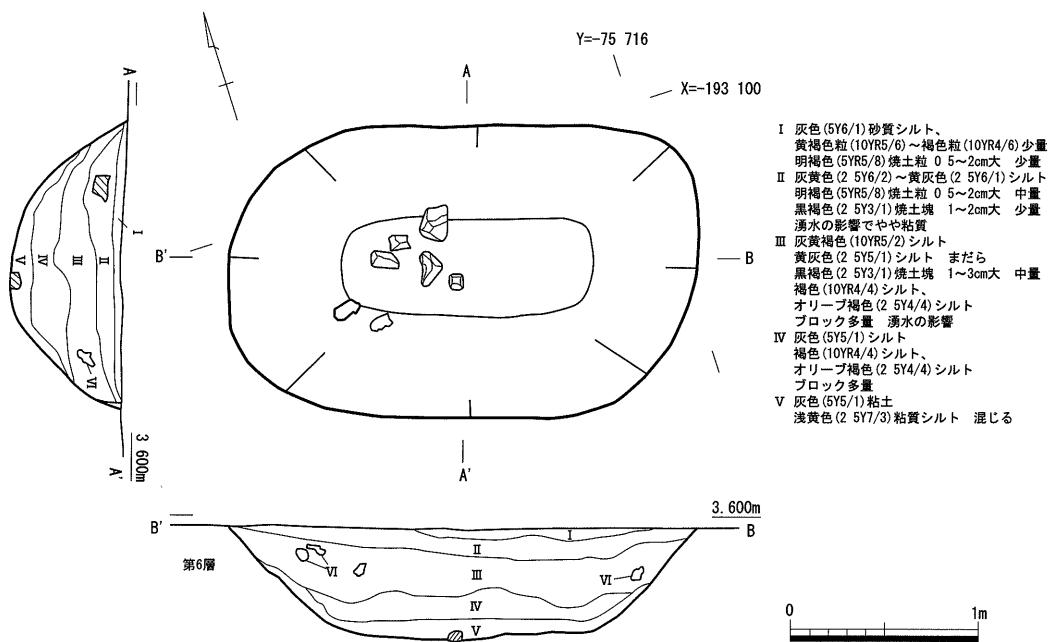
図III-14 B334溜枡 平面図・断面図(S=1/40)



図III-15 A66土坑 平面図・立面図 (S=1/40)



図III-16 B25焼土坑 平面図・断面図 (S=1/40)



図III-17 B26土坑 平面図・断面図 (S=1/40)

**B19土坑** (図III-18, 図版5) B区東端に位置し、一部調査区外に伸びるため全体像ははつきりしないが残存部の最大長4.3m、深さ1.5mを測る土坑で、第8層上面から掘り込まれている。土坑は2段掘りになっており、底から約90cm上で桶底板と側板が出土した。遺構の時期比定をできるような遺物の出土はなかったが、検出面から室町時代の土坑と考えられる。

**B26土坑** (図III-17) 調査区南中央付近第6層上面で検出した長辺2.5m、短辺1.5m、残存深さ60cmの隅丸方形土坑である。瓦器、焼土塊、礫などが出土したが、検出面から室町時代の遺構と考えられる。

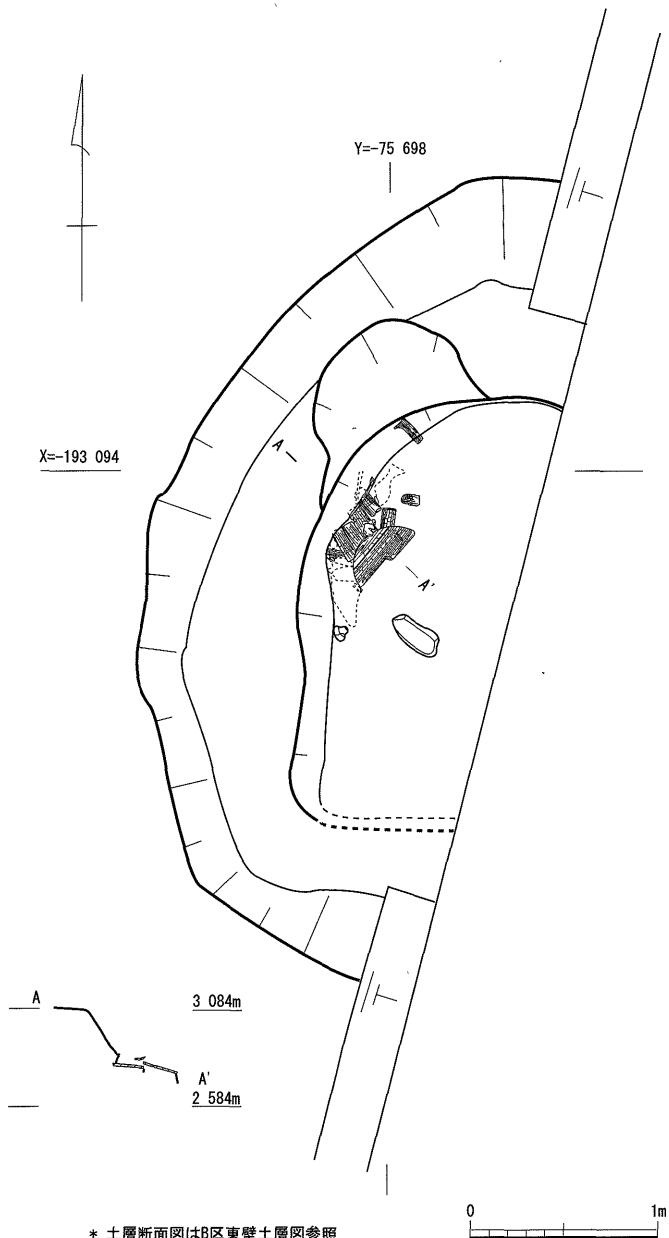
**掘立柱建物B-b** B21区画溝の西側、東西方向1間×2間の建物である。柱穴埋土はすべて第5層に類似するが、平面図上の復元であり、深さや大きさにばらつきがあるため可能性を示すにとどめる。この建物の内側にもう1棟建っていた可能性があるが第5層上面の遺構に一部を切られはつきりしない。

### 第3遺構面検出（鎌倉時代）の遺構と遺物（図III-7, 図版6）

A区では南西隅に第8a層が一部のっている以外はベース面が露出している。B区ではすべて第8a層上面での遺構検出である。

A区では中央付近に2基の土壙墓のほか北半にピットを多く検出している。B区では南西部で土壙墓（木棺墓の可能性あり）を検出した。これ以外は全面にピットがかなり密な状態で分布しており、北東部ではピット内に瓦器椀等鎌倉時代前半の遺物が据え置かれたものが目立つ。

**B380落ち込み** (図III-30, 図版22) 第8a層上面から落ち込み、

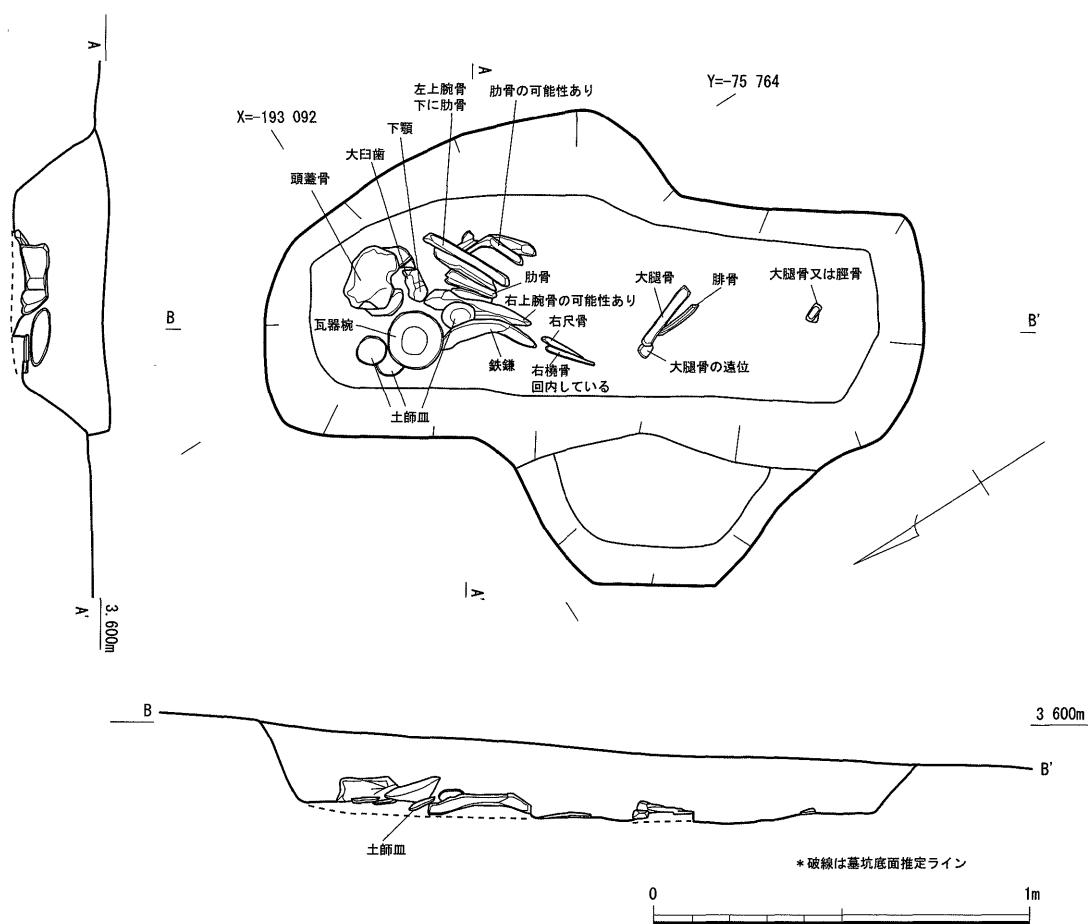


図III-18 B19土坑 平面図・立面図(S=1/40)

第6層を主体とする埋土が堆積する。遺物は土釜(101～103)、土師器皿(104, 105)などが出土している。101は口縁端部を上下に拡張し面を作るが、102, 103は口縁端部を上方にのみ拡張する。少なくとも3点とも残存部に鍔の痕跡は見られない。104, 105の土師器皿は小皿としてはやや大きめの径である。遺物は新しい特徴を持つため、第6層堆積直前の14c代に属する遺構と思われる。

**A39土壙墓** (図III-19, 31, 図版7, 8, 23) A区中央付近、北東一南西方向に作られた土壙墓である。ベース面で検出した。この付近は第6層が薄かったためかあるいはなかったため第2遺構面検出時にほぼ形状が明らかになった。平面形態は長方形で、検出面での規模は0.6×1.7m、残存深さ約15cmを測る。長辺の両側に突出する部分は、底面レベルが土坑と異なることから別遺構の切り込みと考えられる。

土壙内には人骨、副葬品が遺存していた。人骨は頭蓋骨、下頬、大臼歯、上腕骨、肋骨、前腕骨、腓骨などを比較的残りの良い状態で検出した。骨の遺存状況や副葬品の配置から頭位は北東方向で体を北西に向け膝を曲げた状態で埋葬されたと思われる。副葬品は瓦器碗1点(106)、土師器皿4点(107～110)、鉄鎌1点(111)が頭部から胸部の前面にかけて置かれていた。

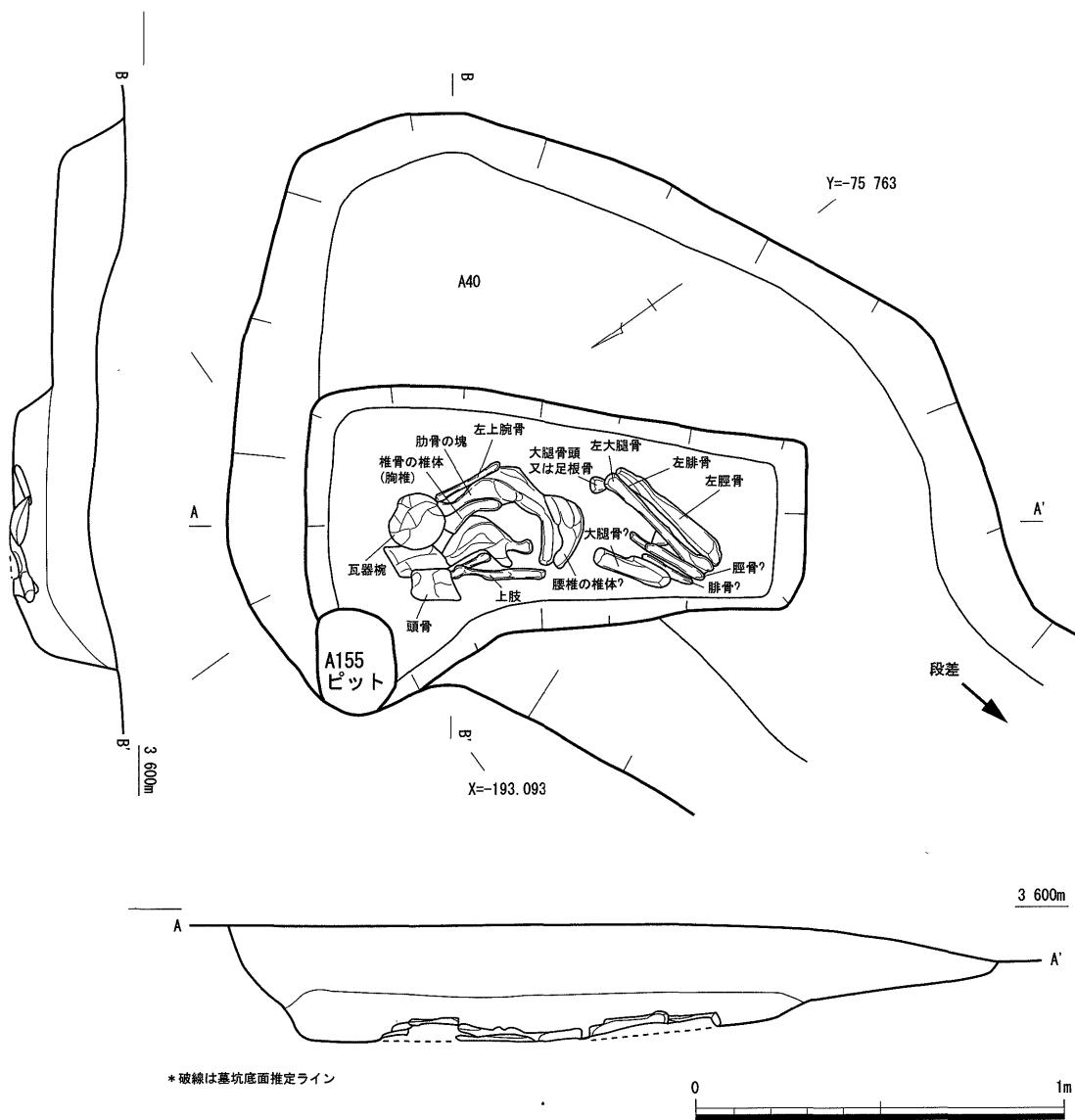


図III-19 A39土壙墓 平面図・立面図 (S=1/20)

当時のものか調査時点で付いたものかはつきりしないが、後述のA218も含め瓦器椀、土師器皿内部に粘性のある付着物があった。これ以外の遺物は埋土中から出土した遺物で混入の可能性が高いが、埋葬時点の時期を示す参考資料として記載した。

**A218土壙墓** (図III-20, 31, 図版7, 8, 23) A39土壙墓から南東に約1m間隔をあけて造られた土壙墓である。検出面、帰属遺構面はA39と同様である。A40土坑との関係ははつきりしないが遺物の出土状況から見て関連があるかもしれない。A40は西へ大きく伸びる不整形土坑であるが、西へ向かい底面レベルを上げ墓坑から西へ約1m弱で段差をもち再び深くなることからこの線を境に別遺構と考えたほうがよいかもしない。遺体の埋葬されている墓坑は北東端の短辺が約0.75m、南西端の短辺が約0.45m、長辺が1.35mとやや台形に近い四角形を呈する。

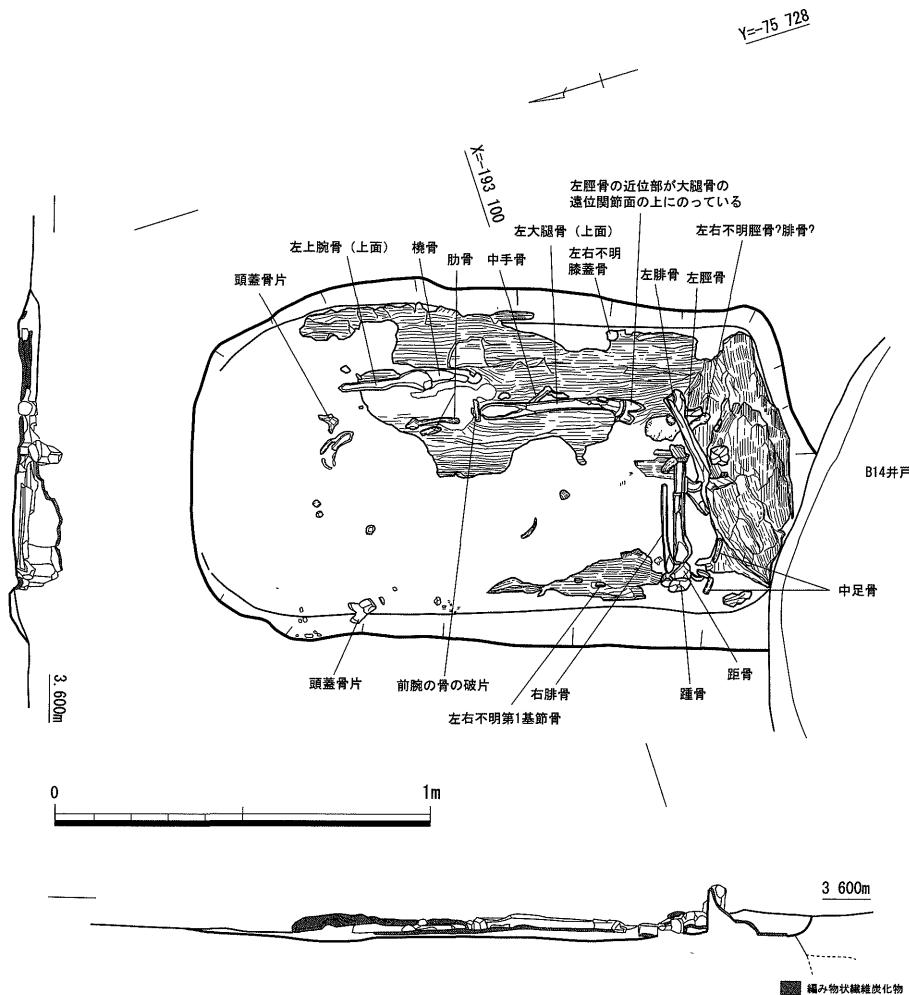
土壙内には人骨、副葬品が遺存していた。人骨は頭蓋骨、上腕骨、椎骨、肋骨、大腿骨、腓



図III-20 A218土壙墓 平面図・立面図 (S=1/20)

骨、脛骨などが比較的残りの良い状態で出土した。A39と同様、骨の配置から頭位は北東で体を北西に向け膝を曲げた状態で埋葬されたと思われる。副葬品は瓦器碗1点(122)が頭部背後に置かれていた。また、北隅のA155ピットは第5層を主体とする埋土で第2遺構面に帰属する遺構であるが、掘削時に掘りすぎたため、A218の遺構埋土まで達してしまった。残りの良い土師器皿が数点(135～137)出土しており、出土時の状況からこの土壙墓に副葬された遺物である可能性が高い。また、これとは別に瓦器碗(122)から15cm上で完形の瓦器皿(123)が出土しており、A40土坑を一連のものと見れば、埋葬後の埋土上に供献された遺物であるかもしれない。これ以外の遺物は埋土中から出土した遺物で混入の可能性が高いが、埋葬時点の時期を示す参考資料として記載した。

**B348墓 (図III-21, 31, 図版9)** B区南西付近、北北東～南南西方向に作られた土壙墓あるいは木棺墓である。当初現地説明会、年報などで木棺墓と報告していた墳墓であるが、検討の結果確証が得られなかったため土壙墓の可能性も含めて報告する。第6層下第8a層上面で検出した。平面形態は隅丸長方形で、検出面での規模は長辺約1.60m、短辺約0.9m、残存深さ約5cmを



図III-21 B348土壙墓 平面図・立面図(S=1/20)

測り大きく削平されていた。一部をB14井戸に切られる。

土壌内には人骨、粗い編み物状の纖維質が遺存していた。人骨は頭蓋骨片、上腕骨、肋骨、前腕骨、中手骨、大腿骨、腓骨、脛骨、踵骨などを検出した。骨の出土状況から頭位は北北東で体を東南東に向け、膝下を直角に折った状態で埋葬されたと思われる。遺物は土師器皿片(141)、瓦器皿片(142)が出土した。細片のため埋土に含まれていた可能性が高く、副葬品として扱うことはできないが、時期については、第6層が上に堆積することこれらの遺物を含むことから鎌倉時代と考えられる。

また、編み物が土壌底面に敷かれており炭化した状態で検出した。南半に集中して遺存しているが、本来は全面に分布していたと思われる。北半は人骨の残りも悪く原位置もとどめていることから編み物についても削平などの理由で遺存しなかった可能性が高い。この墓の特徴は立面図からもわかるように、ベース土が脛骨の南でいったん垂直に近い角度で立ち上がった後また南に向けて傾斜を持ちながらレベルをさげており、墓坑内で区画されたような空間を持つ。編み物も人骨が遺存している部分では南北方向の纖維の流れを示すが、この空間では東西方向の流れを示し、一連のものではなく別に敷かれていたと考えられる。土壌墓、木棺墓両方の可能性があるがそれぞれの解釈に問題点があり現状では判断が難しい。

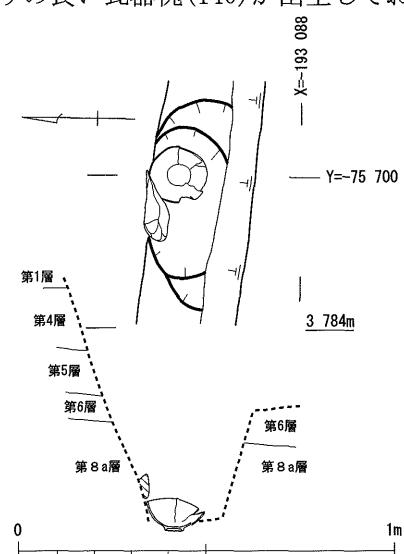
**A67土坑** (図III-32, 図版10, 24) A66土坑と同様A28落ち込みの $\alpha$ 層を除去したベース面で検出した土坑である。埋土はA66と異なり第6層を主体とする。埋土中から瓦器、東播系須恵器片口鉢、土師器のほか元豊通宝<1078年初鑄>(144)が出土しているが、遺構に伴う遺物かどうかははつきりしない。

**B350土坑** (図III-31, 図版23) 掘立柱建物B-dの南で検出した長方形土坑で、検出面での平面規模は $0.5 \times 1.2m$ である。出土状況ははつきりしないが残りの良い瓦器碗(140)が出土しており、土壌墓の可能性も考えられる。

**掘立柱建物B-c** (図III-32) 南北方向 $1 \times 1$ 間以上の建物で、B743柱穴などで構成される。B743からは白磁碗(154)が出土している。

**掘立柱建物B-d** 南北方向 $1 \times 1$ 間以上の建物で、B201, 427, 744柱穴などで構成される。柱穴出土遺物から平安時代末～鎌倉時代初頭の建物と考えられる。

**B201柱穴** (図III-22, 32, 図版9, 24) B区北東の側溝で検出した柱穴である。第6層下、第8a層上面から掘り込まれている。掘方の径約55cmで柱根に相当する部分が径40cmである。柱根部底に瓦器碗1点(145)が据えられていたほか、土師器皿(146)も出土しているが位



図III-22 B201柱穴 平面図・断面図  
(S=1/20)

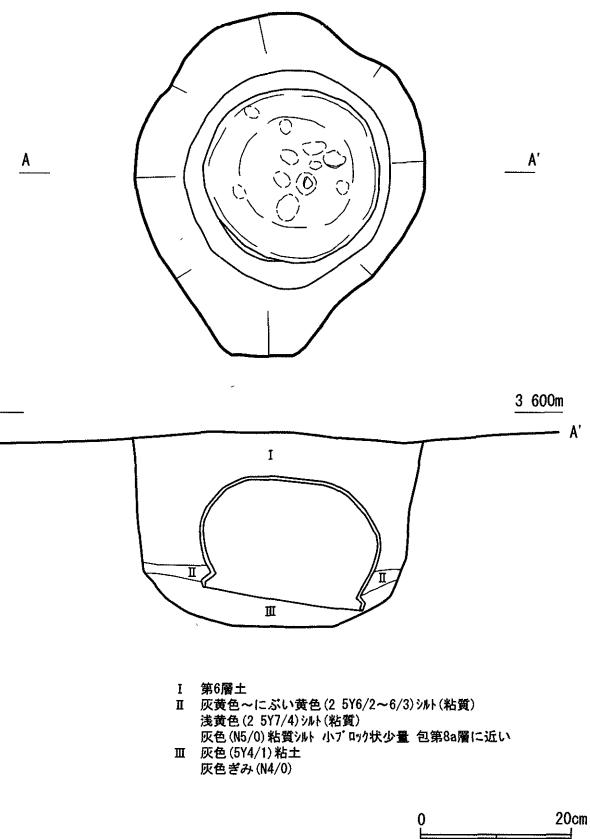
置ははっきりしない。中世段階の他例から見ても柱抜き取り後に据えたものと考えられる。

#### B427柱穴 (図III-32, 図版9, 24)

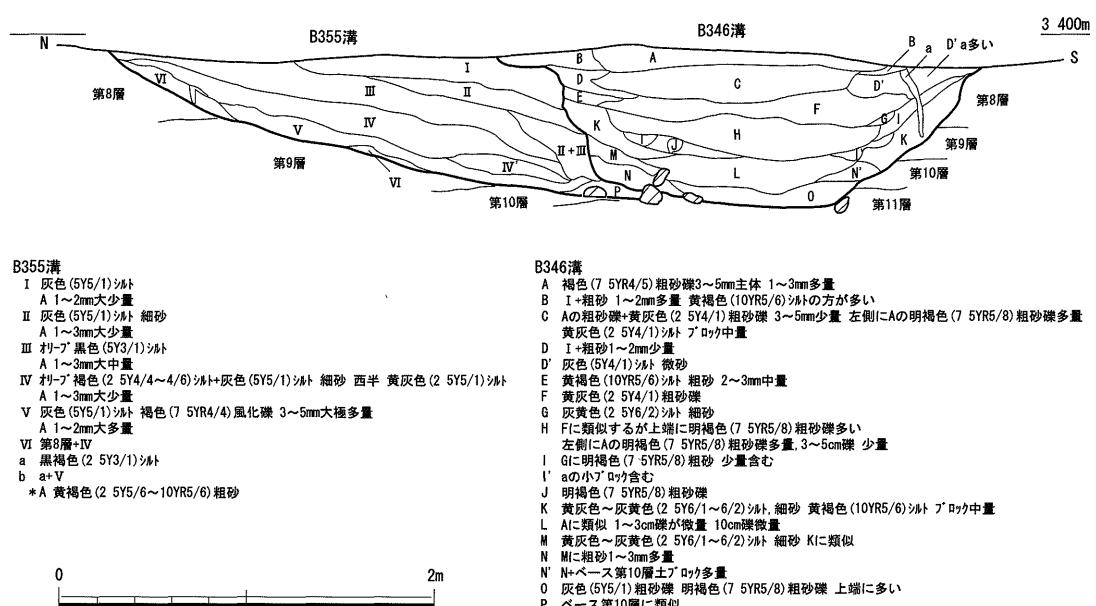
B201の南東に位置する柱穴である。底面に瓦器碗(147, 148)が据え置かれた状態で出土しておりB201同様柱抜き取り後に置かれたものと考えられる。このほか埋土中から瓦器碗、土師器皿片が出土している。

**B744柱穴 (図III-32, 図版10, 23)** B201の東2mに位置する柱穴である。B201, 427同様底面に瓦器小皿(149)、回転糸切りの土師器皿(150)が各1点置かれた状態で出土しており、上記同様柱抜き取り後に据えられたものと考えられる。

**B428, 435, 727, 353柱穴 (図III-32, 図版24)** 掘立柱建物B-d付近に位置する柱穴で、出土状況ははっきりしないが土師



図III-23 B687ピット 平面図・断面図(S=1/10)



図III-24 B346, B355溝 土層断面図(S=1/40)

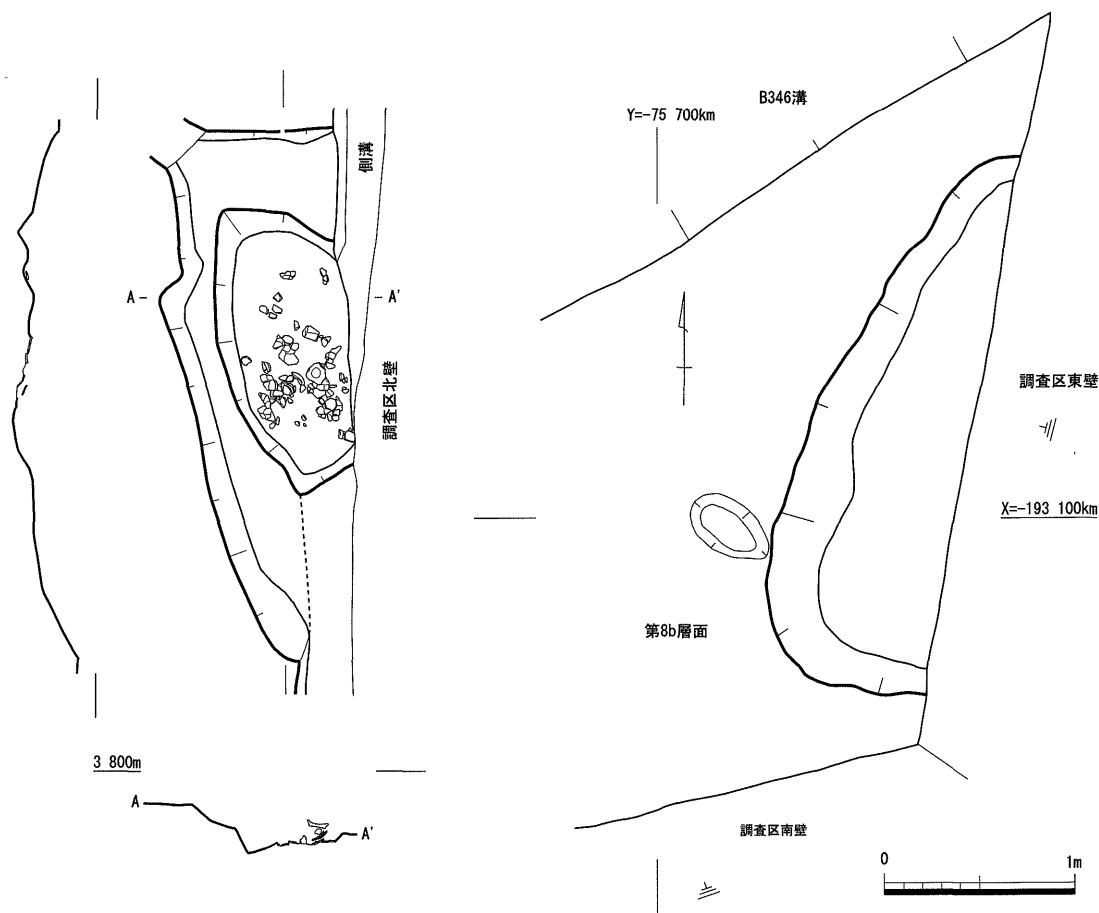
器小皿(159)、瓦器小皿(151～153)、瓦器碗が出土している。瓦器碗は高台がしっかりとしておりやや古い特徴を示す。

**B687ピット** (図III-23, 30, 図版22) B区南西第8a層上面で検出した。検出面での長径45cm、短径38cm、残存深さ25cmの不正円形土坑で埋土上層は第6層土である。わずかに底面から浮いた位置に完形の土師器釜(100)が伏せた状態で底に据えられていた。100は鍔がなく、口径に対し器高が低いやや扁平な体部を持つ。体部の形態や調整に新しい要素が見られるが、検出面、埋土から下っても14世紀代の遺構である。

### 第3遺構面検出（縄文時代晩期～弥生時代前期）の遺構と遺物（図III-7, 図版6）

A地区ではベース面で土坑1基（A195）、B地区では第8a層上面で東北東から西南西とこれに直交する方向の溝数条(B346, B355, B370, B347, B349)を検出した。土坑以外遺物の出土量が極端に少ないので断定はできないが、胎土、遺構埋土や第8a層以下の出土遺物等から判断すると縄文時代晩期～弥生時代前期の可能性が強い。

**B346溝** (図III-24, 32, 図版10, 11, 24) B区南東部で東北東から西南西に向けて流れる溝でB355溝を切る。検出面での幅約2.5m、残存深さ約80cmで断面は角に丸みを持つ逆台形である。



図III-25 A195土坑 平面図・立面図 ( $S=1/40$ )

図III-26 B区751土坑 平面図 ( $S=1/40$ )

埋土は粗砂礫で、ベース土の崩落土と交互に堆積した状況が観察でき、流水のある期間とない期間を繰り返しながら埋没したと考えられる。埋土から縄文時代晚期と考えられる尖底土器(167)の他、縄文または弥生時代と思われる胎土の粗い土器片、サヌカイト片が出土している。上面から-30cmまでは一部瓦器片が含まれるが別ピットなどの遺物の混入と考えられる。出土遺物が少ないため時期判断が難しいが、土器の胎土等から判断すると縄文時代晚期～弥生時代前期の範囲に機能した溝の可能性がある。

**B355溝** (図III-24, 図版10, 11) B区東で南南東に向かって流れたあと東壁付近で直角に折れ曲がりB346溝と同方向に流れる。B346溝によって切られる。場所によって異なるが検出面での幅約2.5m前後、残存深さ40～70cmで断面はなだらかなV字形である。埋土は灰色系のシルト質であることから流水はなく、ある程度の湿潤状態にあったと思われる。遺物はサヌカイト剥片と弥生または縄文時代の土器小片が出土している。第8a層が縄文時代晚期以降の堆積層とすると、B346との切り合いから縄文時代晚期～弥生時代前期の溝である可能性がある。

**A195土坑** (図III-25, 32, 図版10, 24, 25) A区北壁にかかる検出した土坑である。調査区外に伸びるため全体像は不明であるが残存部最大長2.8m、深さ30cmを測る。底面付近からは弥生時代前期末頃の壺(161, 162, 164)、甕(165, 166)などが出土した。全遺物とも風化が激しいため調整ははっきりしなかったが、166は紀伊型甕でヨコケズリの痕跡がわずかに観察できる。162は長頸の広口壺で頸部にかすかに直線文らしき痕跡が残るが、ヘラか櫛か原体は判別できない。163は、A195と同位置の側溝中第6, 8層間で出土した遺物であることからこの土坑に伴う遺物である可能性が極めて高い。

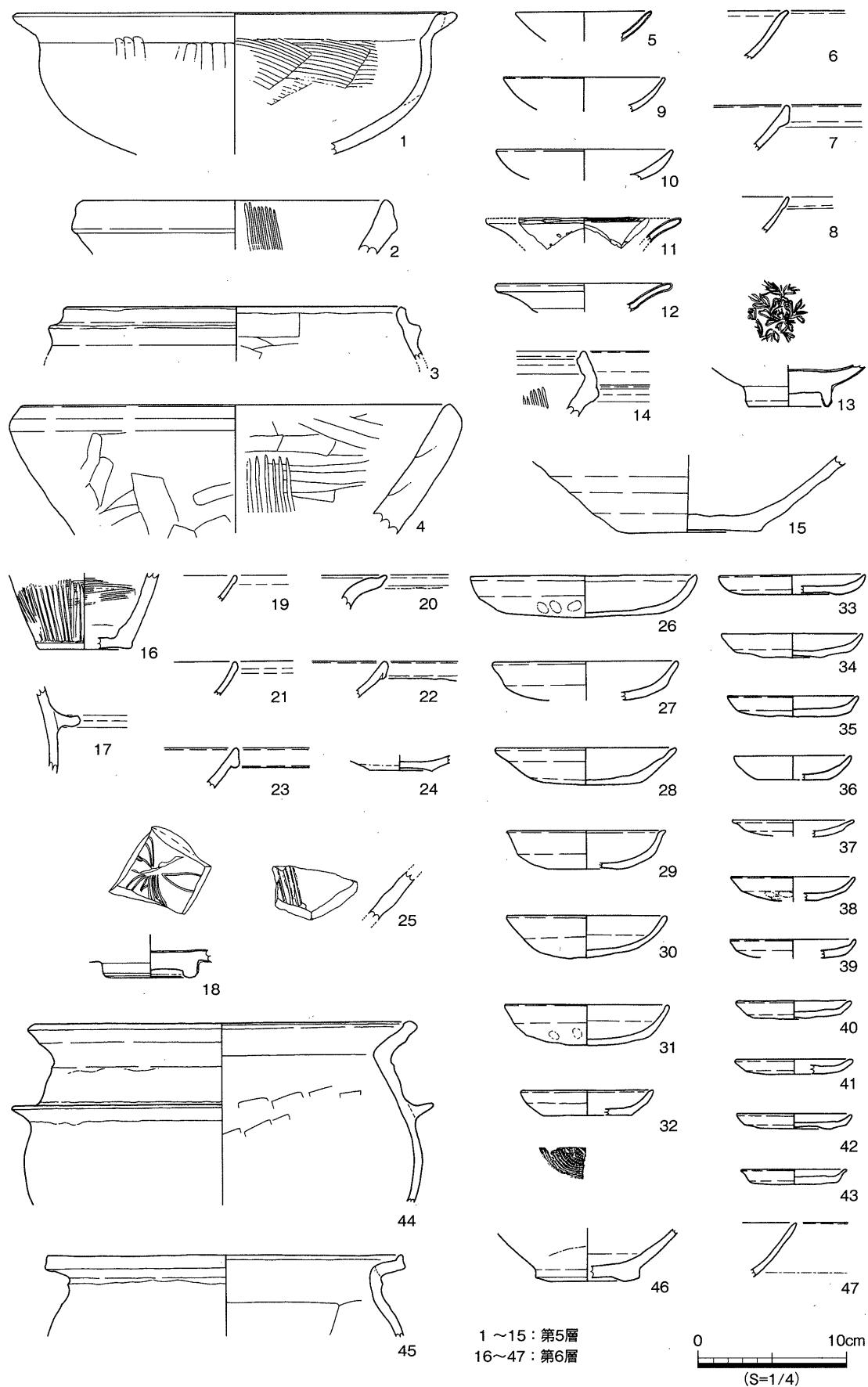
#### 第4遺構面検出（縄文時代後期～晚期？）の遺構と遺物

B区東側1/4ほどについて掘り下げた結果、8b層上面で土坑1基を検出した。

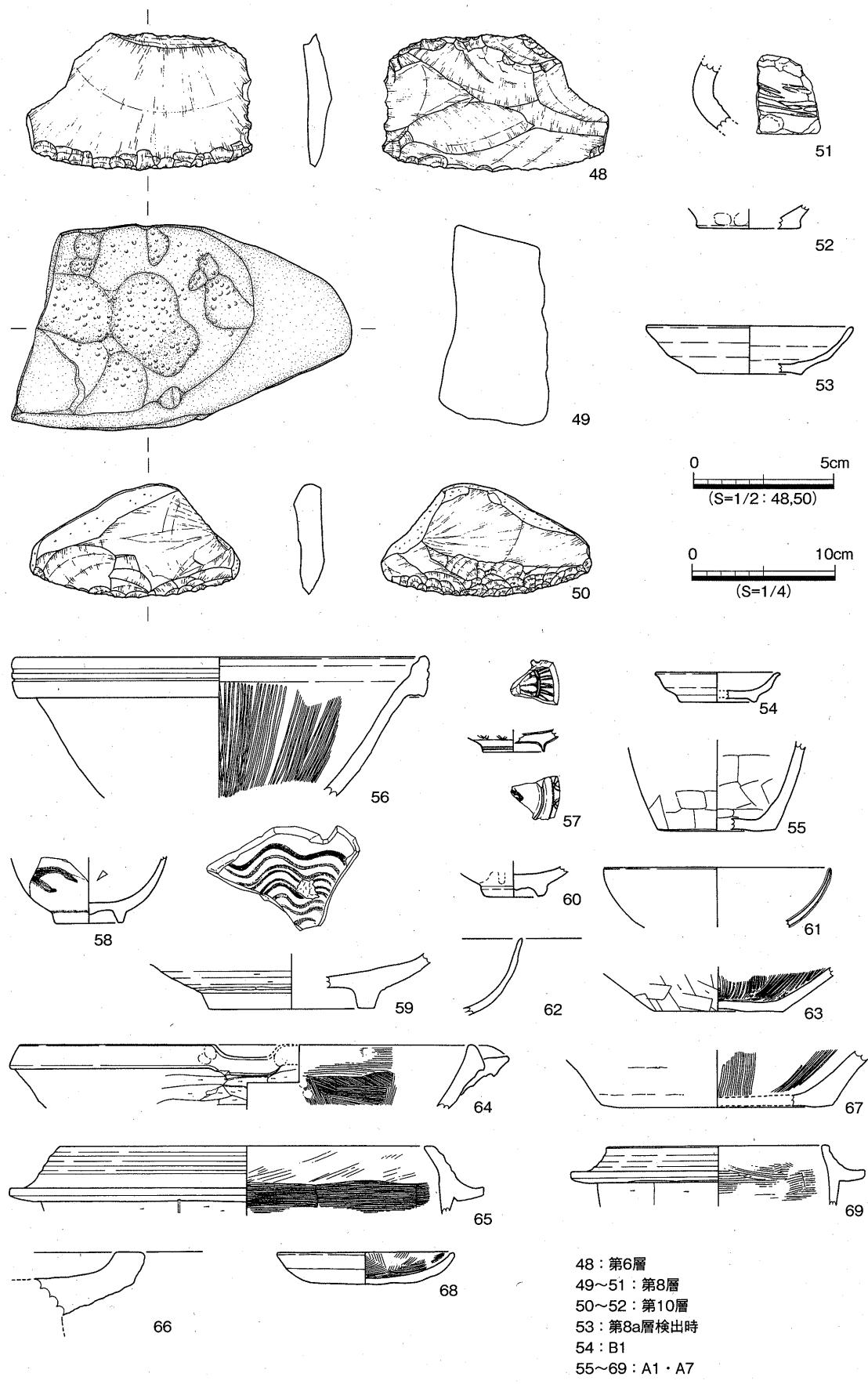
**B751土坑** (図III-26, 図版11) B区東壁にかかる検出した土坑である。調査区外に伸びるため全体像は不明であるが残存部最大長2.8m、深さ6cmを測る。縄文時代と考えられる土器片が出土している。

#### 第6遺構面検出（縄文時代後期～晚期？）の遺構と遺物

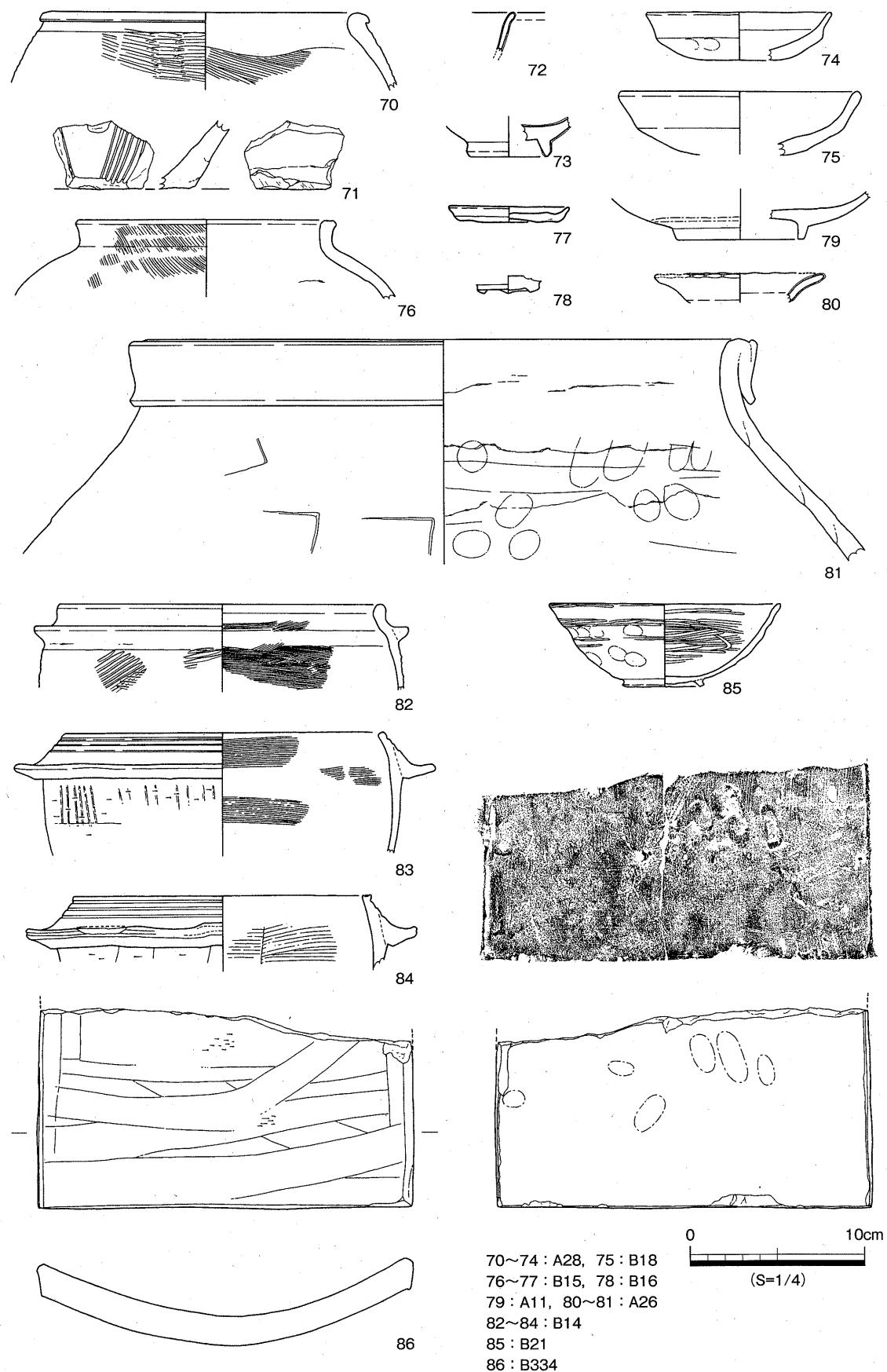
**B752土坑？** (図III-8, 32, 図版22) 東側側溝で検出した。遺構か自然地形の窪みかは判断できない。埋土から縄文土器深鉢片(168)が出土した。



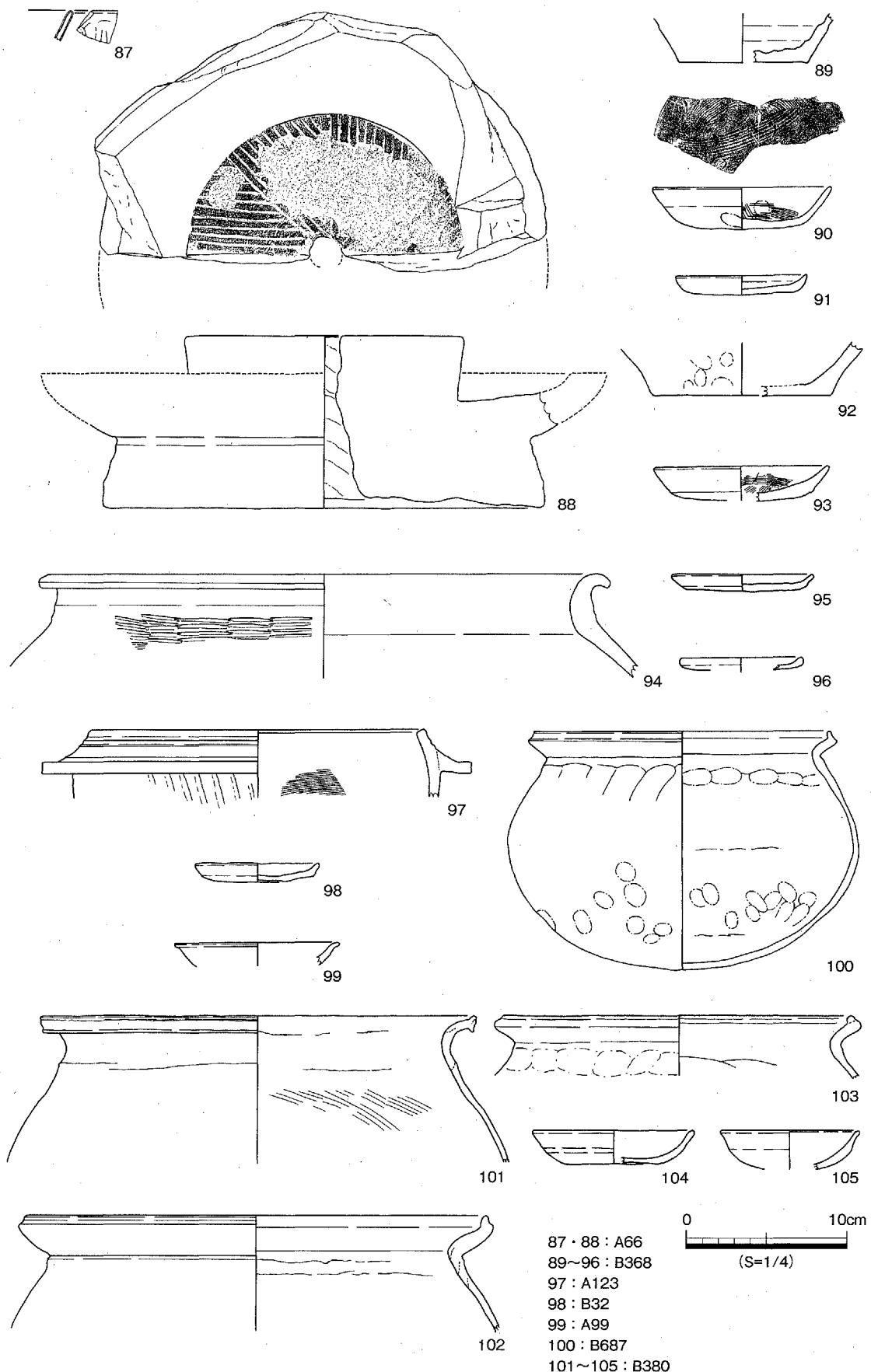
図III-27 A・B区遺物包含層出土遺物実測図



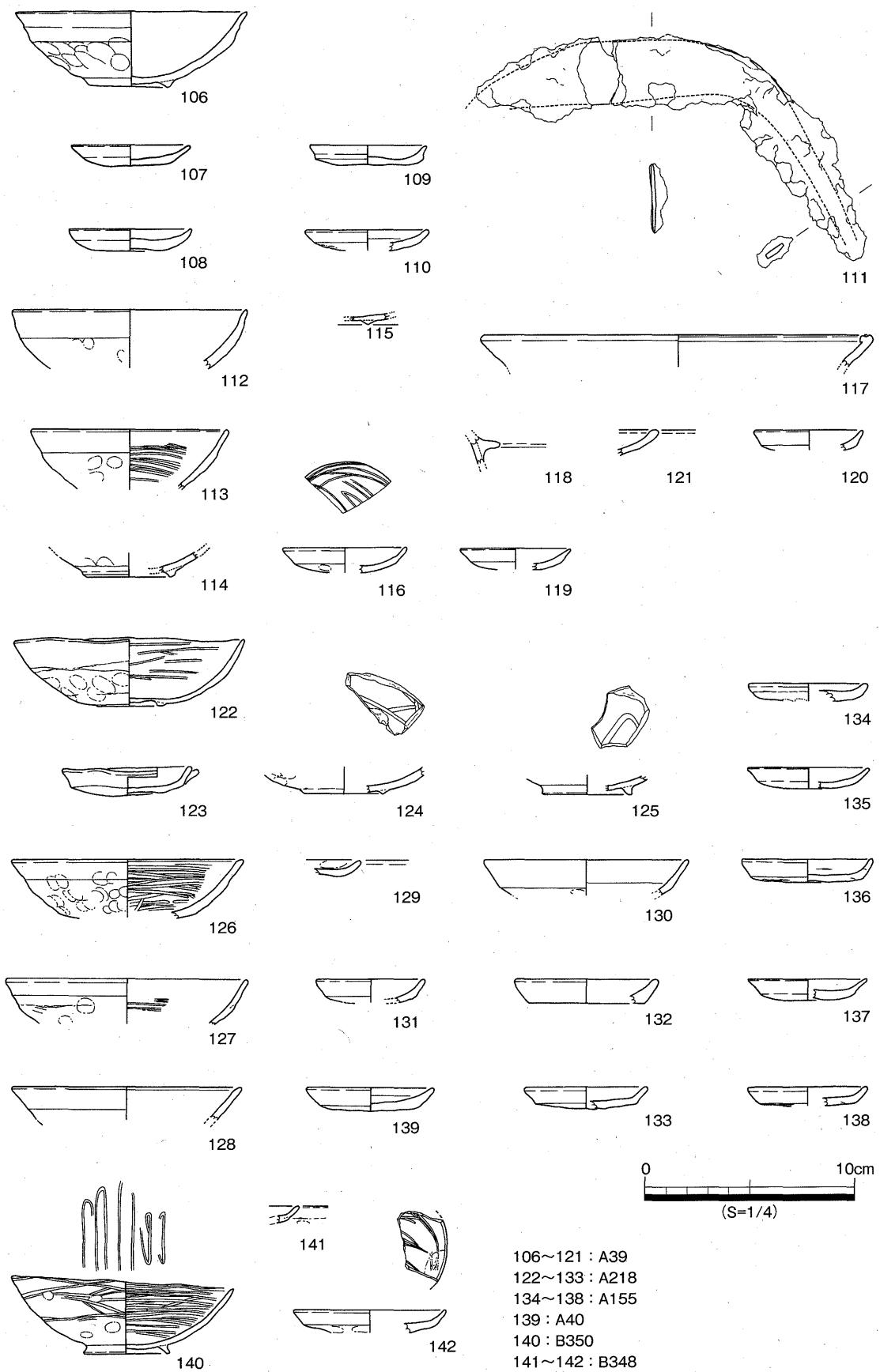
図III-28 A・B区遺物包含層、遺構出土遺物実測図



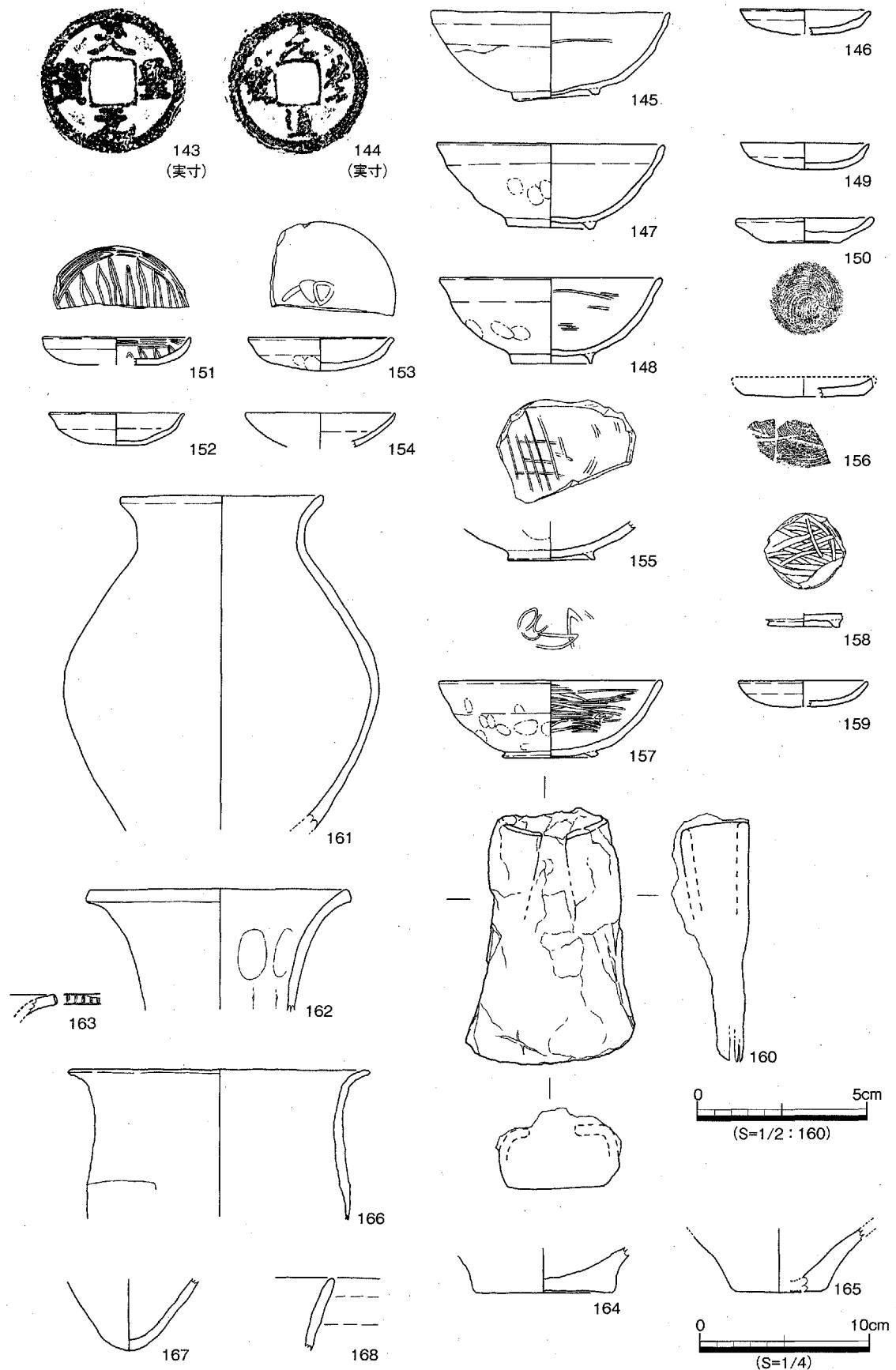
図III-29 A・B区遺構出土遺物実測図



図III-30 A・B区遺構出土遺物実測図



図III-31 A·B区遺構出土遺物実測図



143 : B717, 144 : A67, 145~146 : B201, 147~148 : B427, 149~150 : B744, 151 : B435, 152 : B353, 153 : B428  
154 : B743, 155~156 : B566, 157 : B470, 158 : B733, 159 : B727, 160 : B542, 161~166 : A195, 167 : B346, 168 : B752?

図III-32 A・B区遺構出土遺物実測図

## 2 C区（2次調査）

### (1) 調査の概要

C区は1次調査区の東隣に位置する。調査時はC区を2分して西側をC1区、東側をC2区と呼称している。実質調査面積は371m<sup>2</sup>である。

旧地形で見ると弥生時代から室町時代まではA, B区ほどではないが東方に向かい徐々にレベルを下げる。近世に入ると耕作地として利用されるためB区からは一段レベルが下がるが、C区内ではほぼ水平レベルを保つ。

土層は基本層序で示したとおり南側では第1～6, 8a, 8b, 9, 10, 11層が堆積するが、北半および東端では第2～5, 7, 8a, 8b…層で第6層に代わり第7層が見られる。第8a層は東端部でレベルを落とすほか調査区北側でも落ち込みが見られる。この落ち込み部に古墳～平安時代の遺物を含むC層（大部分を第7層が占めるがB層ブロックを中量含む）、平安時代の遺物を含むB層、平安時代末～鎌倉時代初頭の遺物を含むA層が堆積し、各層上面で遺構を検出することができる。A, B層はC1区の落ち込みに堆積するが、C2区の落ち込み部の埋土との対応ははつきりしなかった。遺構面は、5面（第1, 3, 4, 6, 7遺構面）確認した。なお、第2遺構面については検出を試みたが確実にこの遺構面に属する遺構は検出することができなかつた。第4, 6, 7遺構面については調査区南半を部分的に掘り下げて遺構検出をおこなつた。ただし、第7遺構面を形成する第11層まで少量の遺物の出土はあるものの、第4, 6, 7遺構面は自然流路、落ち込みなどを検出したのみで明確な遺構は確認できていない。

主な遺構は、平安時代末から鎌倉時代の多数の溝、土坑、ピット、掘立柱建物4棟、集石遺構1基、平安時代の多数の溝・土坑と井戸1基、水溜2基、古墳時代の自然流路1条以上と土坑2基などである。

出土遺物の総数はコンテナ19箱で縄文時代から中世の遺物を含むが、A, B区に比べ平安時代後期の遺物が多く出土している。

### (2) 遺構と遺物

#### 遺物包含層出土の遺物

**第5層（図III-56, 図版26）** a, b層に細分して遺物を取り上げているが、A, B区に比べ遺物総数が少ないこともあり、a, b層の各時期を推定することはできなかつた。古墳時代の須恵器・土師器など平安時代以前の遺物も少量含むが平安時代末から室町時代の遺物が主体である。平安時代末～鎌倉時代では、瓦器椀、瓦器皿、土師器皿、東播系須恵器片口鉢、山茶碗片のほか、白磁碗(171, 173)・皿(172)が出土している。室町時代では、土師器皿、東播系須恵器片口鉢(170)、瓦、酸化焰焼成の備前焼片等が出土している。いずれも室町時代までに収まる遺物であり、A, B区で述べた16世紀代の堆積という推定に齟齬はない。この他に包含層の時期を示す資料ではないが圭頭又は方頭形の鐵鎌(179)と考えられる遺物が出土している。

**第6層** 出土遺物は極少量で時期を推定できる遺物はなかった。

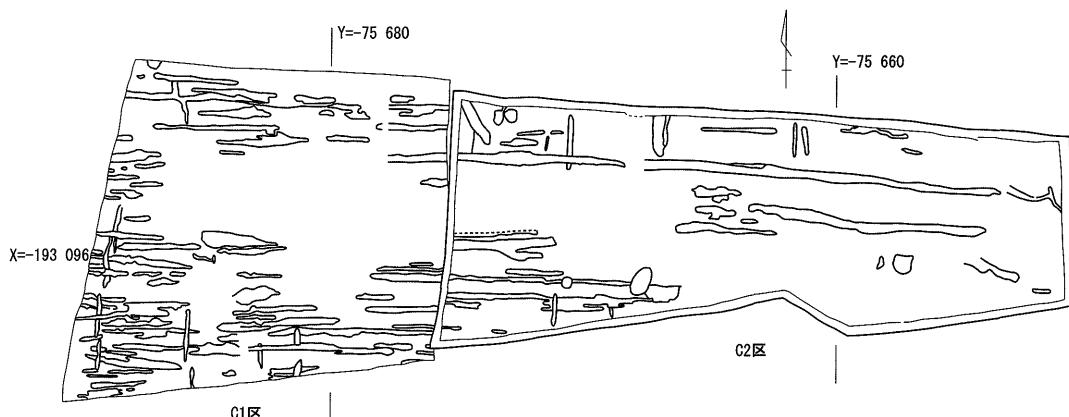
**第7層** 時期を決定できる遺物は出土していない。C220落ち込みに堆積していたC層（第7層に上層の平安時代の遺物を含むB層がブロック状に混じる）出土遺物を参考にすると、大部分が古墳時代以前と考えられる須恵器、土師器であるが、奈良時代～平安時代の土師器杯底部片、黒色土器片の2点のほか古代以降の可能性がある244が含まれる。このことから第7層は古墳時代の遺物包含層である可能性が高いが古墳時代～平安時代に堆積した層としておく。

**第8a層**（図III-56, 図版26） 縄文土器口縁部片(175)が出土しているほかは小片のため時期を特定できない。第8a層下の砂礫層からは底部片(174)が出土している。

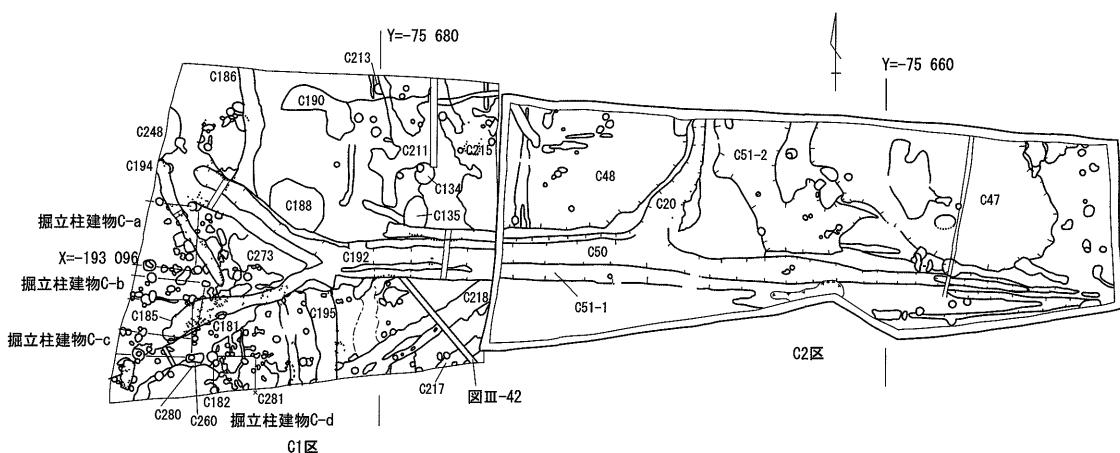
**第9層**（図III-56, 図版26） 叩石(185)、サヌカイト製石鏃(182)、サヌカイト片(183)が出土しているが時期は特定できない。

**第10層**（図III-56, 図版26） サヌカイト片(184)が出土しているのみである。第10層下からは縄文土器体部片(176)が出土している。

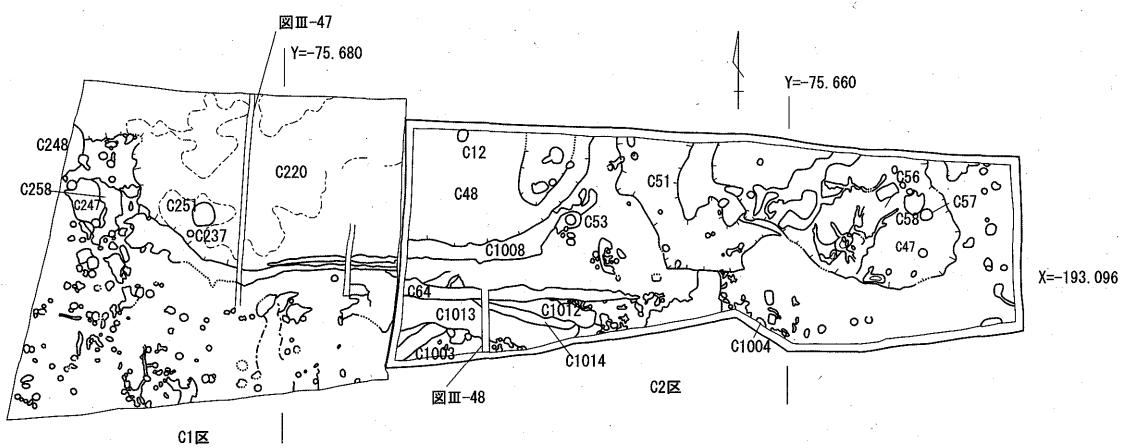
**第11層**（図III-56, 図版26） 凹底の縄文土器底部片(177)が出土している。



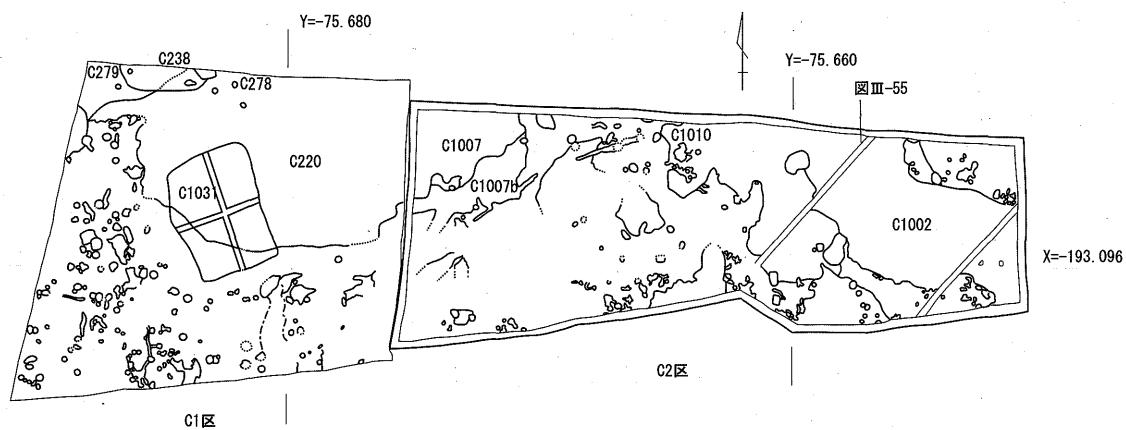
図III-33 C区第1遺構面平面図(S=1/300)



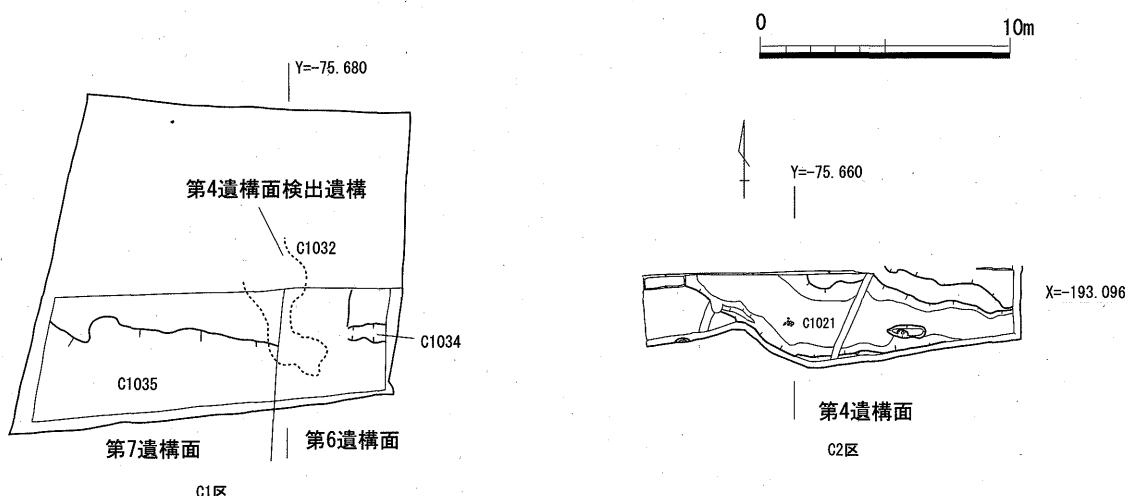
図III-34 C区第3-1遺構面平面図(S=1/300)



図III-35 C区第3-2遺構面 平面図(S=1/300)



図III-36 C区第3-3遺構面 平面図(S=1/300)



図III-37 C区第4,6,7遺構面 平面図(S=1/300)

### 第1遺構面検出（近世）の遺構と遺物（図III-33, 図版11）

調査区西側のC1区では、第5a層上面で遺構検出を行ったが、東側のC2区については第5層を機械で掘削して第2遺構面から検出を行った。なお第1遺構面平面図は、C1, 2区とも第2遺構面で検出した遺構のうち第4層を主体とする埋土を持つものを記載している。

遺構は東西方向の素掘り溝を全面で検出したのみである。

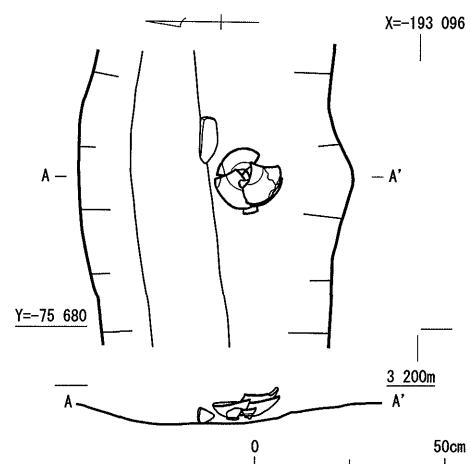
### 第3-1遺構面検出（平安時代末～鎌倉時代）の遺構と遺物（図III-34, 図版12）

C1区北側の落ち込み部ではA層上面、C2区北側の落ち込み部では第7層上面、それ以外では第8a層上面で検出した遺構である。A層上面では平安時代末～鎌倉時代の遺構のみが分布するが、第7層上面では平安～鎌倉時代、第8a層上面では弥生～鎌倉時代の遺構が同一面で検出されるため、埋土や出土遺物で時期分類して報告する。

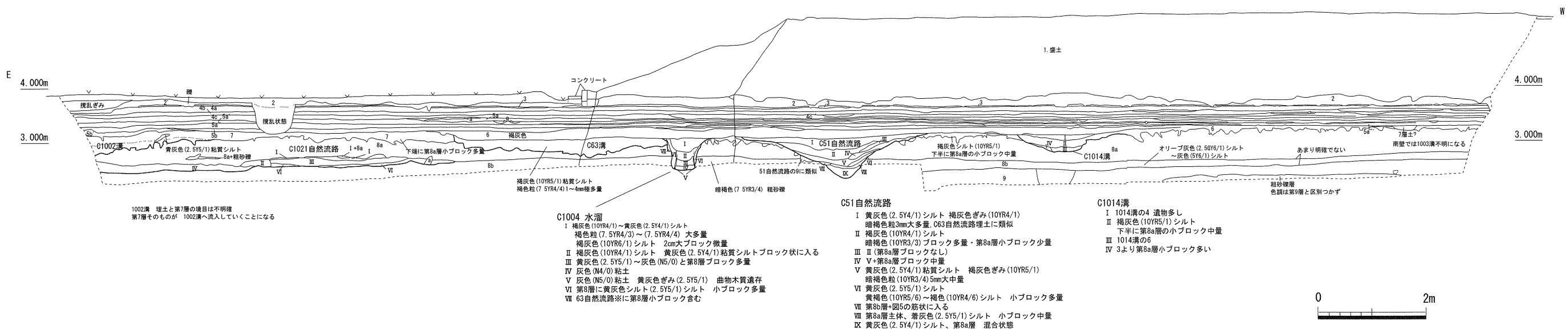
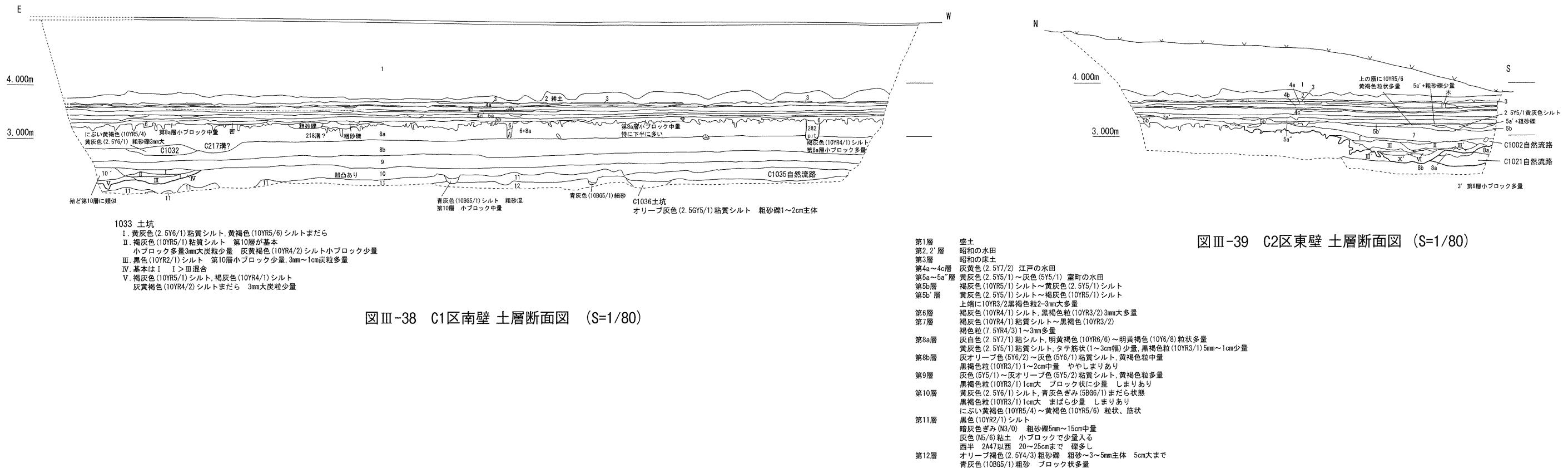
主な遺構は、東西方向に流れる溝およびそこから分岐または合流するように流れる溝多数、掘立柱建物4棟、土坑などである。溝以外の遺構は西側のC1区に多く分布する。

**C211落ち込み（図III-56, 図版27）** C1区北に位置し、A層上面から落ち込む。出土遺物はほぼA層と同様で平安時代後半の「て」の字状口縁皿、黒色土器碗、土師器碗などを多く含むが12世紀までに収まるような瓦器碗も含む。鎌倉時代前半までには埋没したものと思われる。なお、この落ち込みの直下でA'層を埋土とするC261として検出した溝があるが、C211落ち込みの一部と考えられる。ここからは平安時代以前の遺物に加え瓦器碗(191)、凹石(190)などが出土している。

**C20溝, C50溝, C185溝, C192溝（図III-41, 56, 図版13, 26）** 調査区を西から東へ流れる溝(C192, C50)およびそこに接続する溝(C20, C185:流れの方向不明)である。東西を2分割して調査したため遺構番号が異なるがC50とC192は連続する。遺構検出時の図面によれば南側が第6層上面、北西側がA層上面、北東側が第7層上面での検出であるが、C192溝底から完形に近い瓦器碗(188, 189)が出土している。この遺物は、調査時点ではC192を切るC216ピット出土の可能性も考えられたが、いずれにしても溝埋土下位に瓦器、土師器釜(186)を含むことか平安時代末を上限とし、188, 189の良好な遺存状況から鎌倉時代初頭を下るとはないと思われ、A層上面で検出できる遺構と考えられる。北東側はA層の堆積がないため矛盾はないが、南側は室町時代以降の面（第6層上面）での検出となっている。しかし第6層はC区では部分的で非常に薄い堆積であるため下部の遺構がすでに見えていた可能性があり、出土遺物についても各溝から室



図III-41 C192溝 瓦器碗出土状況  
(S=1/20)



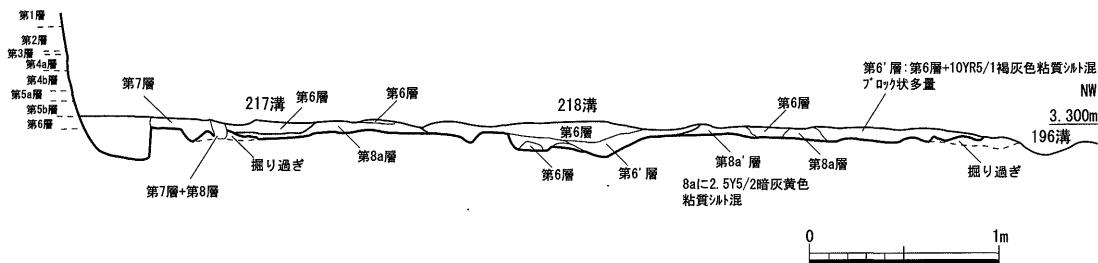
町時代のものは確認できないことからA層上面検出相当の溝とするのが妥当である。

**C51-1溝** (図III-56, 図版27, 28) C2区南を東西方向にC50溝に沿うように流れC50に切られる。検出面ははつきりしないが、埋土には土師器碗、甕、「て」の字状口縁皿等平安時代後期を中心とした遺物を含むものの、少量の外ミガキを施した瓦器片(193)や鎌倉時代初頭までに収まる土師器釜(194)も混じることから平安時代末～鎌倉時代初頭に最終的に埋没した溝と考えられる。ただし平安時代の遺物量が多いことから平安時代から機能していた可能性もある。

**C186, 195溝** 調査区西側を南北方向に流れる溝で、それぞれC192溝とC185溝を越えて反対方向に連続していないことや、交わる部分で溝幅が広がることから各溝に接続するものと考えられる。検出面はC186がA層上面、C195が第6層上面であるが、C185, 192と同様の理由でA層上面相当の溝と考えられる。遺物は、瓦器、土師器釜等に混じり平安時代の土師器甕、「て」の字状口縁皿等が出土している。

**C217溝、C218溝** (図III-42, 57) 調査区中央南で北東～南西方向の並行する2本の溝を第8a層上面で検出した。流れの方向は不明である。C217はC1003につながると考えられていたが、C1003は瓦器を含まず、平安時代のC1013溝に切られる。これに対し、C217, 218は埋土を鎌倉時代の遺物包含層第6層としており、別の溝と考えるべきである。遺物はC218からは瓦器片が1点の他須恵器片や古墳時代と思われる高杯3点(223～225)、土師器把手(226)が出土している。これら古墳時代の遺物は同一地点から出土していることから別遺構の遺物の可能性もある。C217からの遺物の出土はなかった。平安時代以前の遺物を主体とするが、瓦器片が混じること、第6層を主体とする埋土であることから鎌倉時代に埋没した溝と考えられる。

**C134, 135土坑** (図III-44, 56, 図版13, 26, 29) C1区東よりに南北に並ぶ楕円形土坑でA層上面で検出した。それぞれ長軸0.8m×短軸0.7m、長軸1.6m×短軸0.8mを測る。深さは約3cmと浅く、底一面に多量の炭が敷き詰められたような状態で検出されており壁面は焼けていた。出土遺物はC134から土師器皿(195)、土師器碗、「て」の字状口縁皿などが、C135からは鉄製品(196～198)、瓦器片、土錐や平安時代の遺物が少量出土しているのみである。195は平底で内面と外面の一部が黒化しているが2次的なものか焼成時のものか判断できない。この地点は第6層の堆積があったかどうか不明のため、層位的には平安時代末から第5層の堆積時期である



図III-42 C217, 218溝 土層断面図(S=1/40)

室町時代までの長い期間の可能性があるが、周辺の状況と出土遺物から考えると平安時代末から鎌倉時代の可能性が高い。

**C190土坑** C1区北部にある最大長約3mを測る不整形土坑で、A層上面で検出した。出土遺物は、埋土中から瓦器、土師器、瓦、須恵器片などが出土しているが、遺構に伴う出土状況ではない。この土坑は一部第6層が上に堆積していることから平安時代末～鎌倉時代の遺構である。

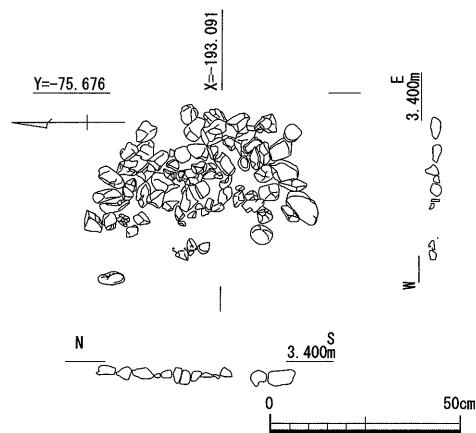
**C215集石** (図III-43, 図版13) C1区北東端で~20cm大の礫が0.8m×1.0mの範囲にかたまって出土した。A層上面の検出である。出土遺物はないが、検出面から平安時代末～鎌倉時代の遺構である。

**掘立柱建物C-a** C1区西隅で検出した東西方向1間×1間以上の建物である。

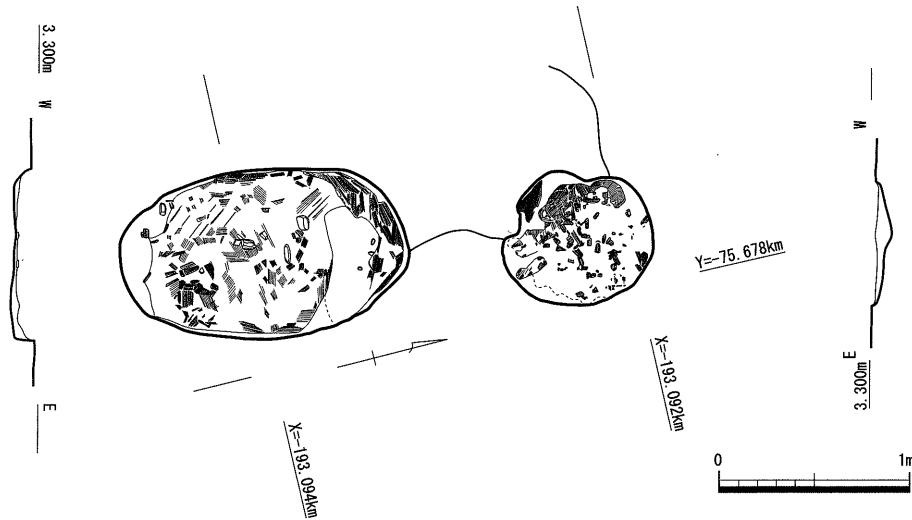
**掘立柱建物C-b** 上記C-aの南で検出した東西方向1間×1間以上の建物である。

**掘立柱建物C-c** 上記C-2に重複して検出した東西方向1間×1間以上の建物でありC260柱穴などで構成される。

**C260柱穴** (図III-46, 57, 図版13, 27) C1区南西部に位置し、第8a層上面で検出したピットである。3段掘りになっており、上段は長軸70cm、短軸35cmの楕円形で残存深さ4cm、中段は長軸40cm、短軸20cmの楕円形で深さ12cm、下段は直径20cmの円形で深さ15cmである。ピット底付近からは土師器釜(199, 200)、土師器皿(203)、瓦器碗(201)、石器(202)などの遺物



図III-43 C215集石  
平面図・立面図 (S=1/20)



図III-44 C134, 135土坑 平面図・断面図 (S=1/40)

が比較的残りの良い状態で出土した。数が多いことや土器片も大きく磨耗も少ないとから埋没時の流れ込みとは考えにくく、遺構に伴う遺物と考えるほうが適当である。埋土の状況がはつきりしないので即断できないが、形状から考えて柱穴の可能性があり、柱抜き取り後に土器が据え置かれたと思われる。

199, 200はしっかりした鍔をもち、口縁端部は丸みを残す面を形成する。203は回転糸切りの皿で、201は密に外ミガキを施す。202は用途不明だが表面全面に朱と思われる付着物が見られる。これらの遺物は202を除き概ね12世紀代に収まる時期であり、柱が建っていた時期もほぼ同時期と考えてよいであろう。

**掘立柱建物C-d** C1区南西隅で検出した南北方向1間×1間以上の建物でありC182, C281柱穴などで構成される。

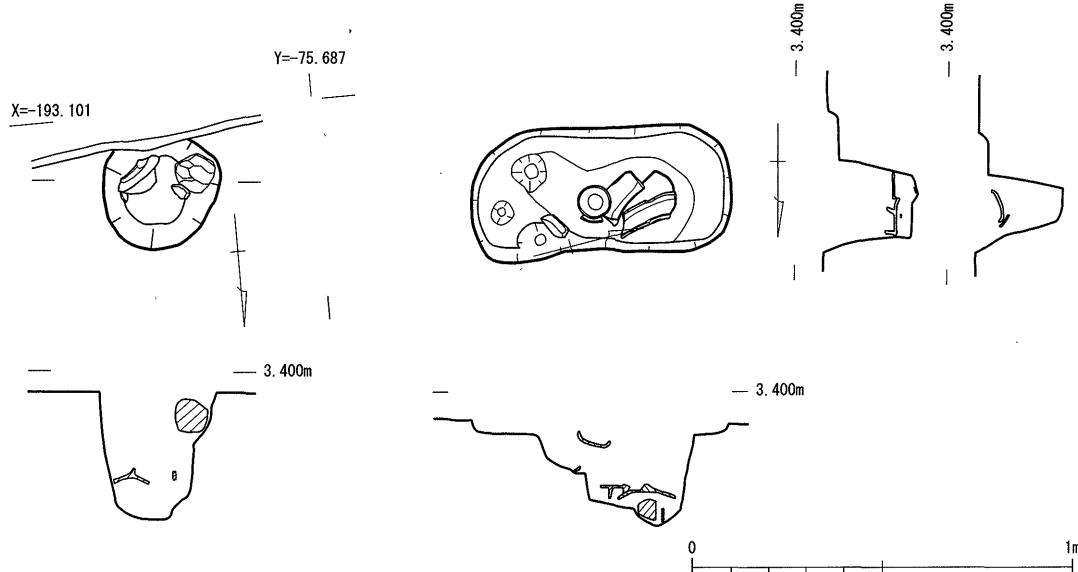
**C182柱穴** (図III-45, 57, 図版13, 27) 土師器釜(204)が埋土中から出土した。12世紀代に収まる遺物と考えられる。

**C281柱穴** (図III-57) 11-12世紀代に収まる瓦器椀(207)が埋土中から出土した。

### 第3-2遺構面検出（平安時代後期）の遺構（図III-35, 図版14）

C1区北側の落ち込み部ではB層またはC層上面、C2区北側および東側の落ち込み部では第7層上面、それ以外では第8a層上面で検出した遺構であり、多数の溝と井戸1基、土坑、ピット等が分布する。北半はC1, C2区とも落ち込みが多く見られる。

**C47, C51-2, C48落ち込み** (図III-57, 図版28) C2区北東から北西にかけて順に並び、いずれも第7層上面から落ち込む。C48上層には古手の瓦器片をごく少量含むが、それ以外からは



図III-45 C182柱穴  
平面図・立面図 (S=1/20)

図III-46 C260柱穴 平面図・立面図 (S=1/20)

平安時代後期の土師器皿(209～213, 217, 219)・椀(208)、黒色土器椀(218)や須恵器(214)、土錐(215, 216)が出土し瓦器を含まない。C48はC220落ち込みと連続すると思われるが、土層の対応ははっきりしない。C51-2落ち込みは調査当時C51-1溝につながると考えていたが、出土遺物の時期も異なるため別遺構として取り扱っている。検出面や出土遺物から平安時代後期にほぼ埋没したが、一部鎌倉時代前期まで窪みとして残っていたと考えられる。

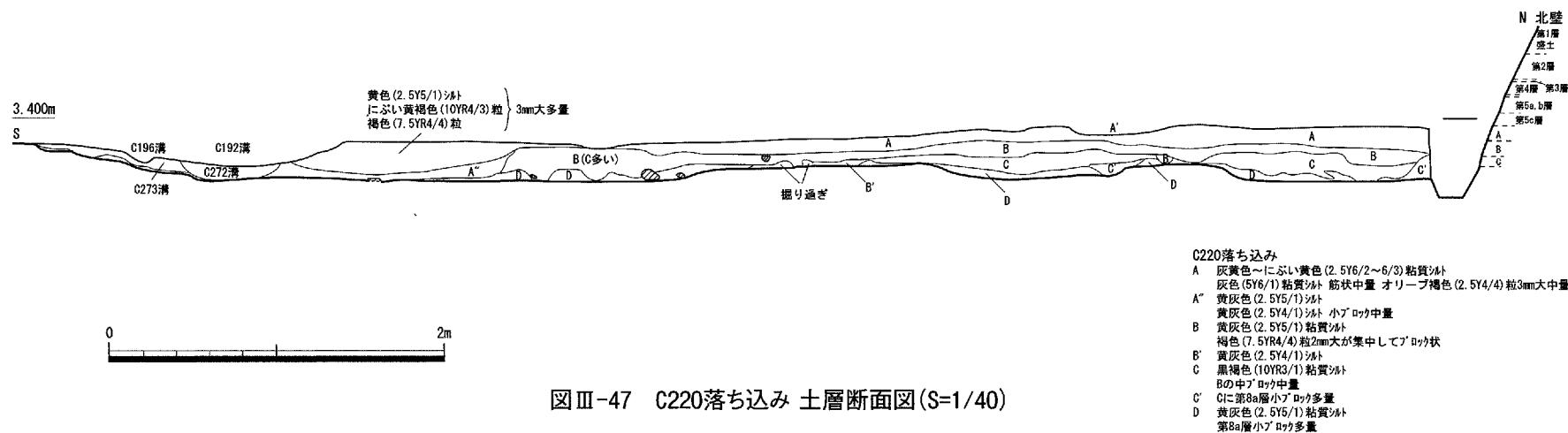
**C220落ち込み** (図III-47, 58, 図版15, 27～29) C1区北側にあり、A層を除去後第8a層上面で検出した。上からB層、C層、D層の順に堆積しており、最上層には部分的な窪みにA層の堆積が残っていた。A層には鎌倉時代初頭までの瓦器片が少量含まれるが、土師器皿(228～234)、甕(227)等平安時代の遺物を主体とする。B層からは平安時代後期の土師器皿(235, 241～243)・椀(236, 238)、黒色土器椀(237)、須恵器が出土し、瓦器は含まれていなかった。土師器皿は「て」の字状口縁(230～232, 241, 242)、口縁部が直線的または内湾気味に立ち上がり回転ナデを施すタイプ(228, 229, 234)、口縁が大きくひらきながら外反するタイプ(235)、口縁が短く立ち上がり底面が平坦でヘラ切りするタイプ(233, 243)に分かれる。この他B層からは不明土師器(240)が出土している。形状から造り付け竈の付属品の可能性もあるが他例に比べてやや薄い。

C層は第7層にB層ブロックが含まれる。奈良時代から平安時代の土師器杯、黒色土器のほか土師器壺(244)、磨石(246)や古墳時代の須恵器(245)・土師器が出土しているが大部分が古墳時代の遺物である。D層から遺物は出土しなかった。以上からA層：平安時代末～鎌倉時代初頭、B層：平安時代後期、C層：古墳時代～平安時代の堆積と考えられる。

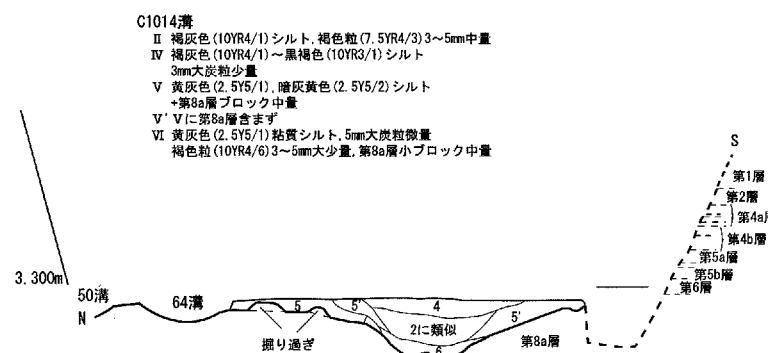
**C64溝** (図III-57, 図版15) C50, 51溝に沿って東西方向に流れる溝で、第8a層上面の検出である。出土遺物は、黒色土器椀(220)、土師器椀(221, 222)などで瓦器等中世の遺物は含まないことから平安時代末までに埋没した溝と思われる。

**C1003溝** (図III-58, 図版28, 29) 当初C217溝につながる溝で鎌倉時代の第6層を主体とする埋土と考えていたが、後述の平安時代のC1012, 1013, 1014溝に切られること、出土遺物は平安時代以前の土師器甕(250, 251)・鉢？(249)、黒色土器椀(247)等のほかに瓦器など中世遺物を含まないことから平安時代末までには埋没した溝と考えられる。C217溝はC218と平行して流れ、第6層を主体とする埋土であることから鎌倉時代としたが出土遺物はなかった。このためC1003に連続する溝で平安時代まで遡る可能性もある。

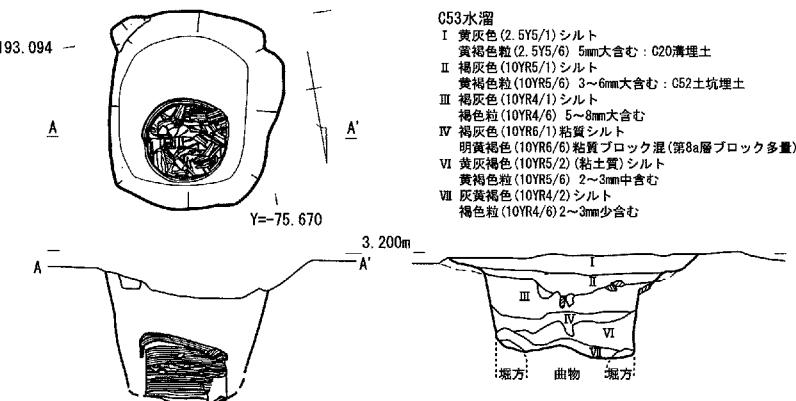
**C1012溝、C1013溝、C1014溝** (図III-48, 58, 59, 図版15, 29, 31) 第8a層上面の検出である。調査時点では別の溝として掘削したが、堆積状況から1条の溝の可能性が高い。出土遺物は、土師器皿(257～259, 265, 269～273)・椀(254, 255, 264, 267)・甕(256)、土錐(260～263, 275～287)、黒色土器椀(252, 253, 266, 268)など平安時代後期を下限とする。このうち259, 270～273は「て」の字状口縁、257, 269は大きく外反気味にひらく口縁、258は回転糸切りまたはヘラ切



図III-47 C220落ち込み 土層断面図 (S=1/40)



図III-48 C1014溝 土層断面図 (S=1/40)



図III-49 C53水溜 平面図・断面図 (S=1/40)

りで直線的に短くひらく口縁をもつ。このほか時期を特定できなかったが白磁小片が1点出土している。

**C247井戸** (図III-51, 59, 図版15, 29, 31) 調査区西端第8a層上面で検出した方形木組井戸である。残存部上端幅約1.2m、下端幅0.9m、残存深さ約2mを測る。埋土は9層に分層でき、上層（I層）、中層（II～IV層）、下層（V・VI層）、最下層（VII層）にわけて遺物の取り上げを行っている。上層からは土師器皿(288～292)・甕(293) {注:291, 292, 293は上層出土の可能性が高いが断定はできない}、中層からは土師器皿(297)・椀(294～296, 298)、平瓦(300)、土錐(299)、下層からは縄文土器片、最下層からは土師器片が出土している。これら遺物の特徴は鎌倉時代に多く見られる格子タタキの平瓦があるにもかかわらず瓦器等中世遺物の出土がないこと、そして「て」の字状口縁皿がないことである。なお、最下層の遺物は小片であったため、井戸の時期を直接推定することはできないが、構造や周辺も含めた出土遺物から見て平安時代の井戸と考えられる。

**C258土坑** (図III-60, 図版30) C247井戸との前後関係ははつきりしないが、一連のものかもしれない。出土遺物は平安時代の「て」の字状口縁土師器皿(302)・土師器甕(301)で、このほかは土師器片のみであった。301は頸部内面に明瞭な稜線をもつ点、体部外面を粗いハケ調整する点、胎土が粗い点においてC247出土の293とは異なる。

**C53水溜** (図III-49, 60, 図版15) C2区中央やや西寄りでC20溝に切られる形で検出した。掘り方は検出面で長辺約1m、短辺約0.8mの隅丸方形で残存深さは約70cmである。底には直径45cm程度の曲物が据えられていた。掘方には土師器椀(303)や黒色土器椀(304)など平安時代後期の遺物のみで瓦器等中世遺物を含まない。一方埋土からは平安時代以前の遺物もあるが瓦器片もごく少量含んでいる。鎌倉時代のC20溝に切られることから平安時代後期～鎌倉時代の間に収まる。出土遺物を積極的に時期決定の根拠とすれば平安時代に造られ鎌倉時代にかけて埋没した水溜と考えられるが、掘方の出土遺物量はそれほど多くないため平安時代後期～鎌倉時代の幅で捉えておく。

**C1004水溜** (図III-50, 図版15) C2区南壁側溝で検出した水溜で、C53と同様底に直径40cmの曲物が据えられていた。掘方は残存部最大長60cm、残存深さ約50cmを測り、平面形は円形又は橢円形になると思われる。遺物は土師器1片が出土したのみで時期を確定することはできなかった。第8a層上面（第6層除去面）で検出していることから弥生時代～鎌倉時代の範囲に絞られるが、C53水溜と類似した構造を持つことから、平安時代後期～鎌倉時代の水溜と考えられる。

**C251土坑** (図III-52, 60, 図版15, 29) C1区中央付近で検出した直径1m、残存深さ35cmの円形土坑である。検出面ははつきりしない。A層を主体とする埋土で、黒色土器や「て」の字状口縁土師器皿は含まれていなかったが、土師器皿(306, 307)・甕(305)等平安時代の遺物が出土し

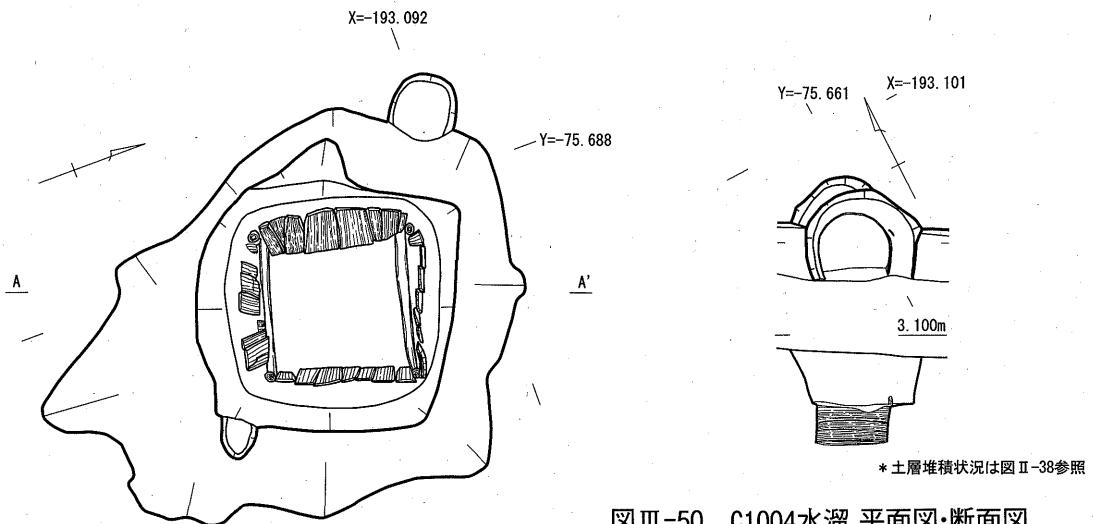


図 III-50 C1004 水溜 平面図・断面図  
(S=1/40)

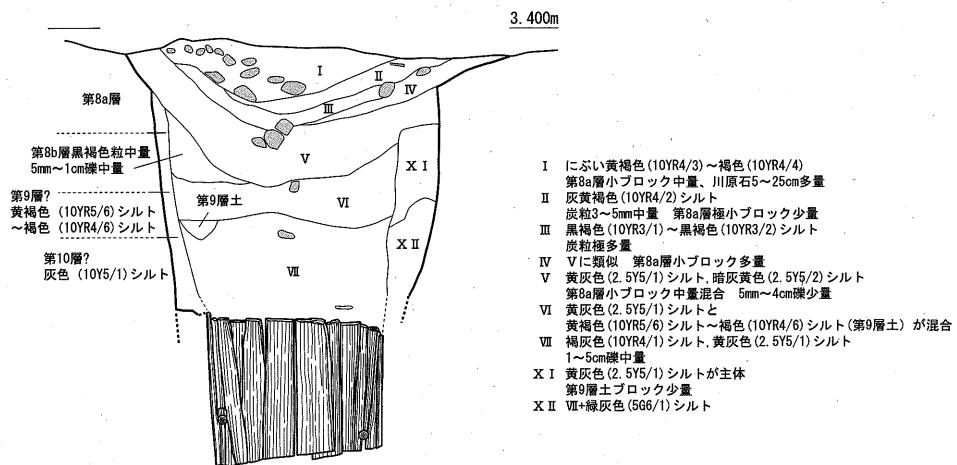


図 III-51 C247井戸 平面図・断面図 (S=1/40)

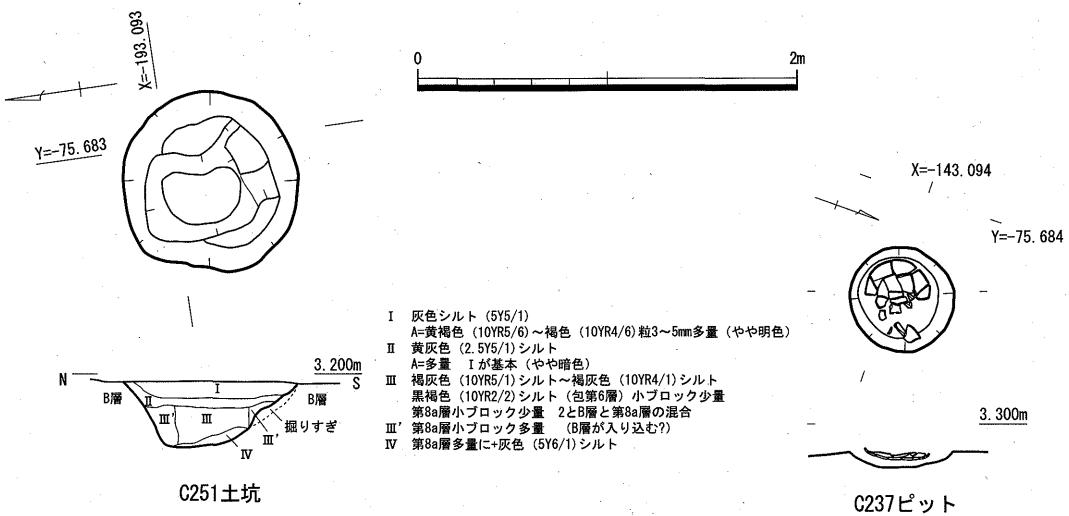


図 III-52 C251・237土坑 平面図・断面図 (S=1/40)

ている。瓦器等中世の遺物は含まれていなかった。埋土がA層主体であることから瓦器出現直前の土坑であると考えられる。

**C12ピット（図III-60）** C2区北西で検出したピットである。C48落ち込み埋土上面から掘り込まれているが、埋土中に瓦器はなく平安時代後期の土師器皿(310, 311)・椀(308)等が出土した。310は外反して大きくひらく皿、311は「て」の字状口縁皿で、308は口縁端部内面に明瞭な沈線状の窪みを持つ。瓦器片を含むと考えられるC48上層埋土堆積前の遺構と考えられる。

**C213ピット** C1区北西部で検出したピットである。第6層を除去した面で検出しているがどの面上なのかははっきりしなかった。しかし、平安時代の土師器椀や黒色土器片を含み瓦器等中世遺物を含まないことから考えてB層又はC層上面で検出できる遺構と思われる。

**C237ピット（図III-52, 60, 図版15, 30）** C251土坑の南西約1mに位置する直径約30cm、残存深さ5cmのピットでA層を埋土とし、土師器皿(312, 313)など平安時代後期の遺物を含む。

### 第3-3遺構面検出（弥生時代～平安時代）の遺構と遺物（図III-36, 図版14）

全面第8a層上面で検出した遺構で、調査区東に自然流路、土坑1基、北西端に溝1条、土坑1基がある。

**C279溝** C1区北西隅、第8a層上面で検出した溝でC238土坑に切られる。B346溝の延長で縄文時代晚期～弥生時代前期の溝の可能性がある。

**C1002溝（図III-55, 60, 図版16, 30）** C2区東の第8a層上面で検出した北西から南東に流れる自然流路である。遺物は上層（第I層）、中層（第II層）、下層（第III～V層）、最下層（第VI層）、最々下層（第X層）に分けて取り上げており、中層から土師器高杯(315, 316)、須恵器高杯(317)、下層から須恵器杯(318)、最下層・最々下層から土師器甕片(319)が出土している。下層の318杯は中層出土片と接合する。須恵器は初期須恵器で土師器についても同時期に含められることから古墳時代中期に埋没を始めた自然流路と位置づけることができる。

**C238土坑（図III-54, 60, 図版16, 30）** C1区北西隅で検出した土坑で北側調査区外へ延びており、残存部最大長3.7m、残存深さ約5cmを測る。検出面は第8a層か第7層かはっきりしなかつたが埋土からは5世紀代の須恵器杯身(320)・ハソウ(321)、土師器甕(322～325)が出土していることから古墳時代中期に属すると考えられる。竪穴住居跡の可能性も考えられたが柱穴等平面形状以外の要素は確認できていない。

**C1010土坑（図III-53, 図版16）** C2区北側中央付近で検出した不整形土坑で、検出面での最大長80cm、深さ3cmを測る。第8a層上面で検出した。この土坑内には～15cm大の礫が数個と須恵器甕片が置かれていた。調査時点では配石遺構と呼称していた遺構である。C1002につながるC1002b内に造られていることから古墳時代中期の遺構と考えられる。

**C1031土坑** C1区中央で検出した約3×6mの方形土坑である。遺物は出土しなかった。竪穴住居跡の可能性も考えられたが柱穴等は検出されていない。

C278ピット（図III-60, 図版30） C220落ち込み内の埋土（BかC層）を除去した第8a層上面で検出した遺構である。ピット内からは土師器杯(326)が出土している。

#### 第4遺構面検出（縄文時代）の遺構と遺物（図III-37, 図版16）

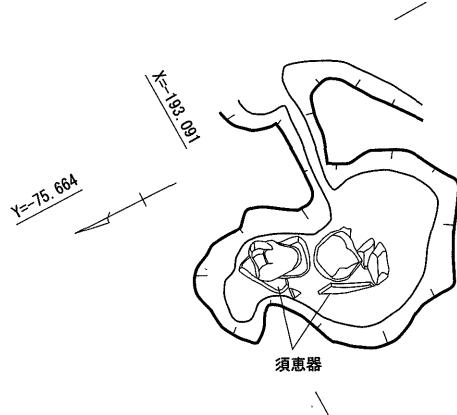
調査区南東部の一部のみを掘り下げて遺構検出を行い、自然流路1条を検出した。

#### C1021自然流路（図版16） 調査区

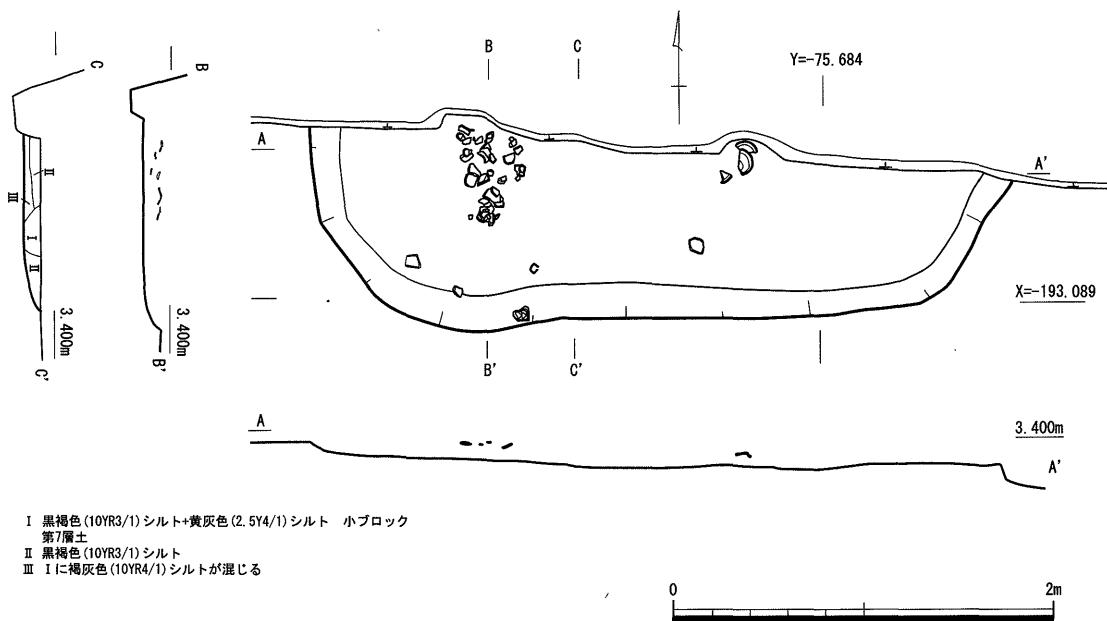
南東隅で西北西から東南東へ流れる自然流路である。検出面は第8b層上面である。縄文土器の可能性がある土器片が出土しているが、時期の否定は困難である。しかし、層位的に縄文時代後期～晩期に属すると考えられる。

#### 第6, 7遺構面検出（縄文時代）の遺構と遺物（図III-37）

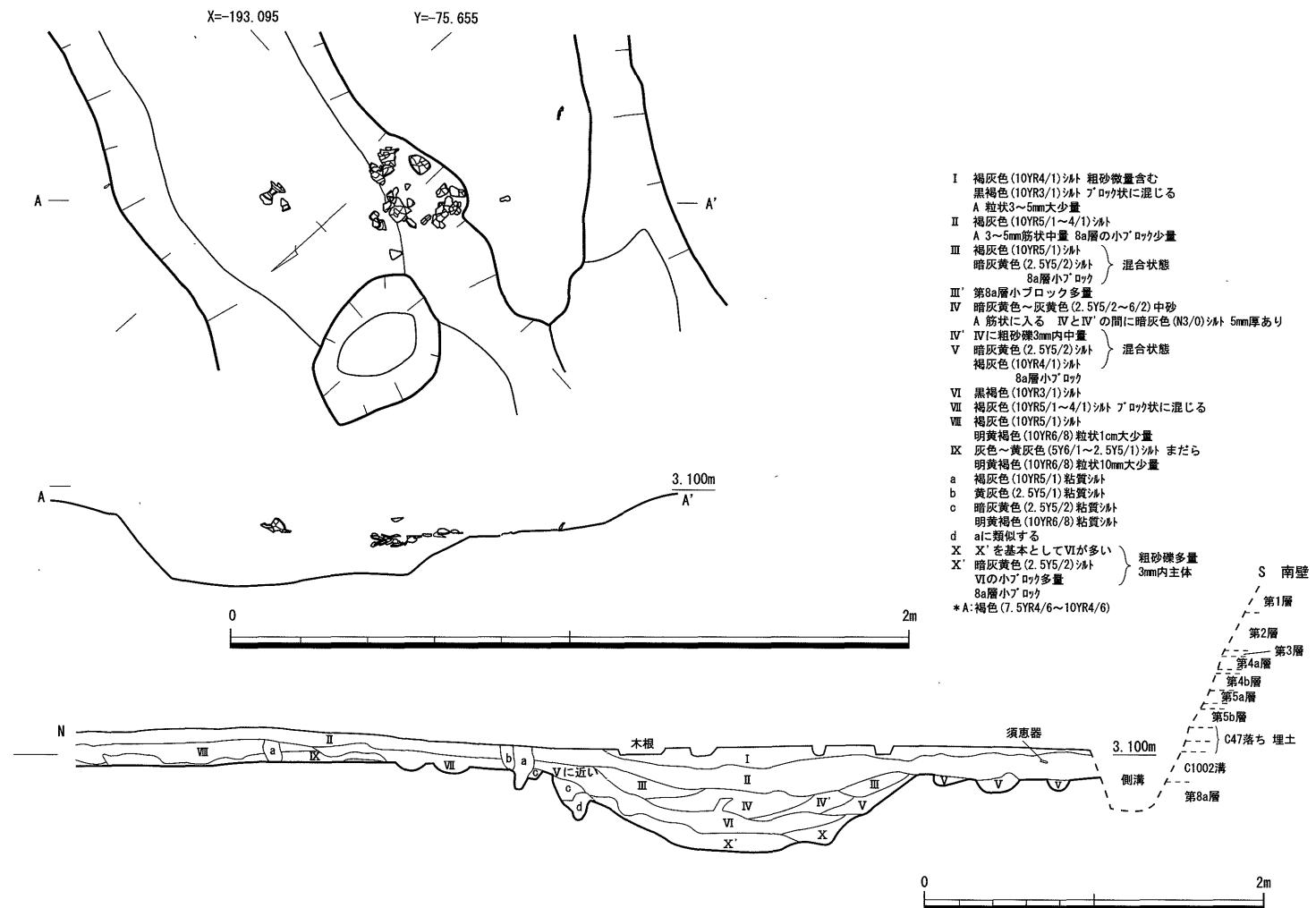
C1区南東部を第10層上面、南西部を第12層上面まで掘り下げて遺構検出を行った。両面とも東西方向に流れる自然流路を検出したのみである。



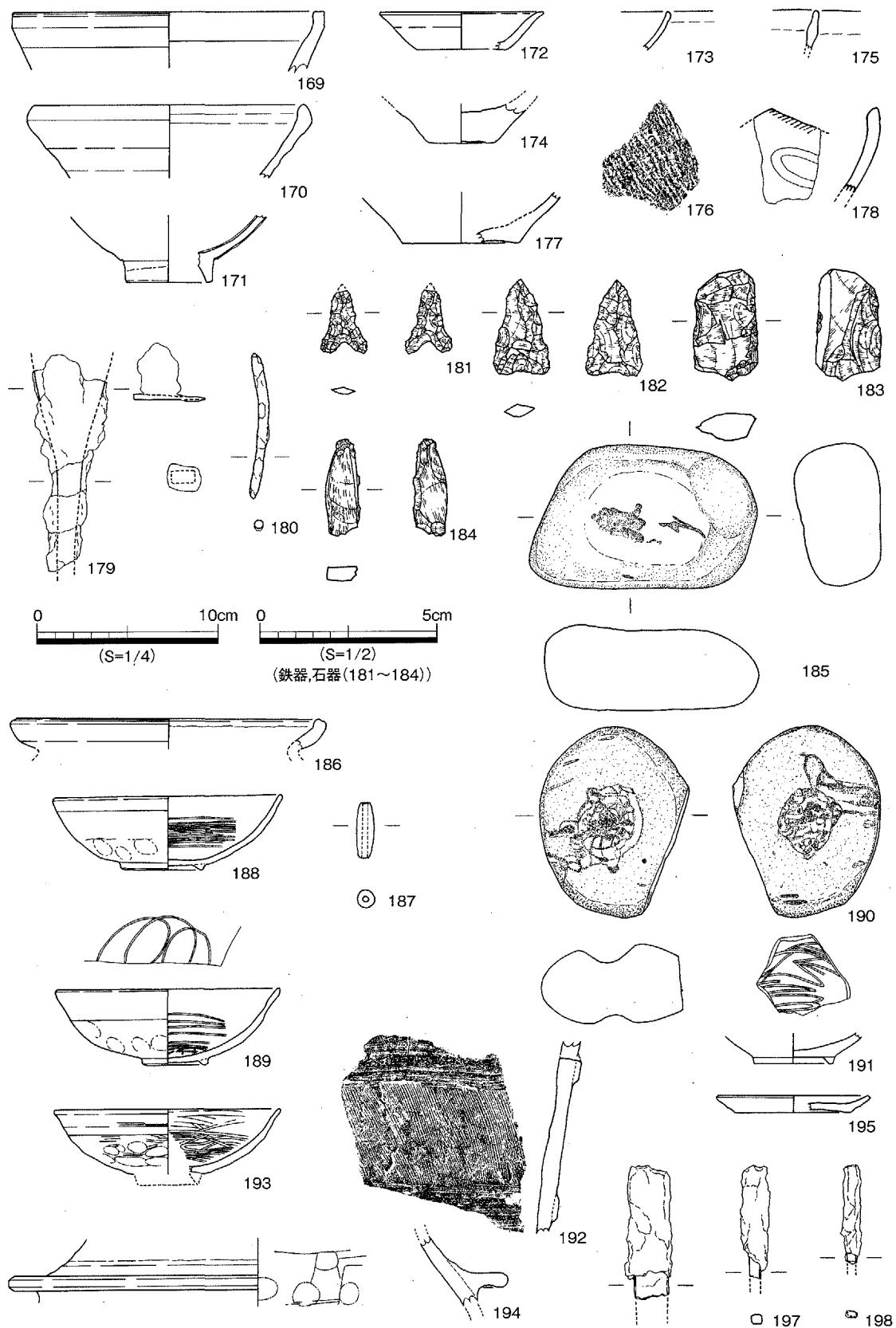
図III-53 C1010土坑 平面図・立面図(S=1/20)



図III-54 C238土坑 平面図・断面図(S=1/40)



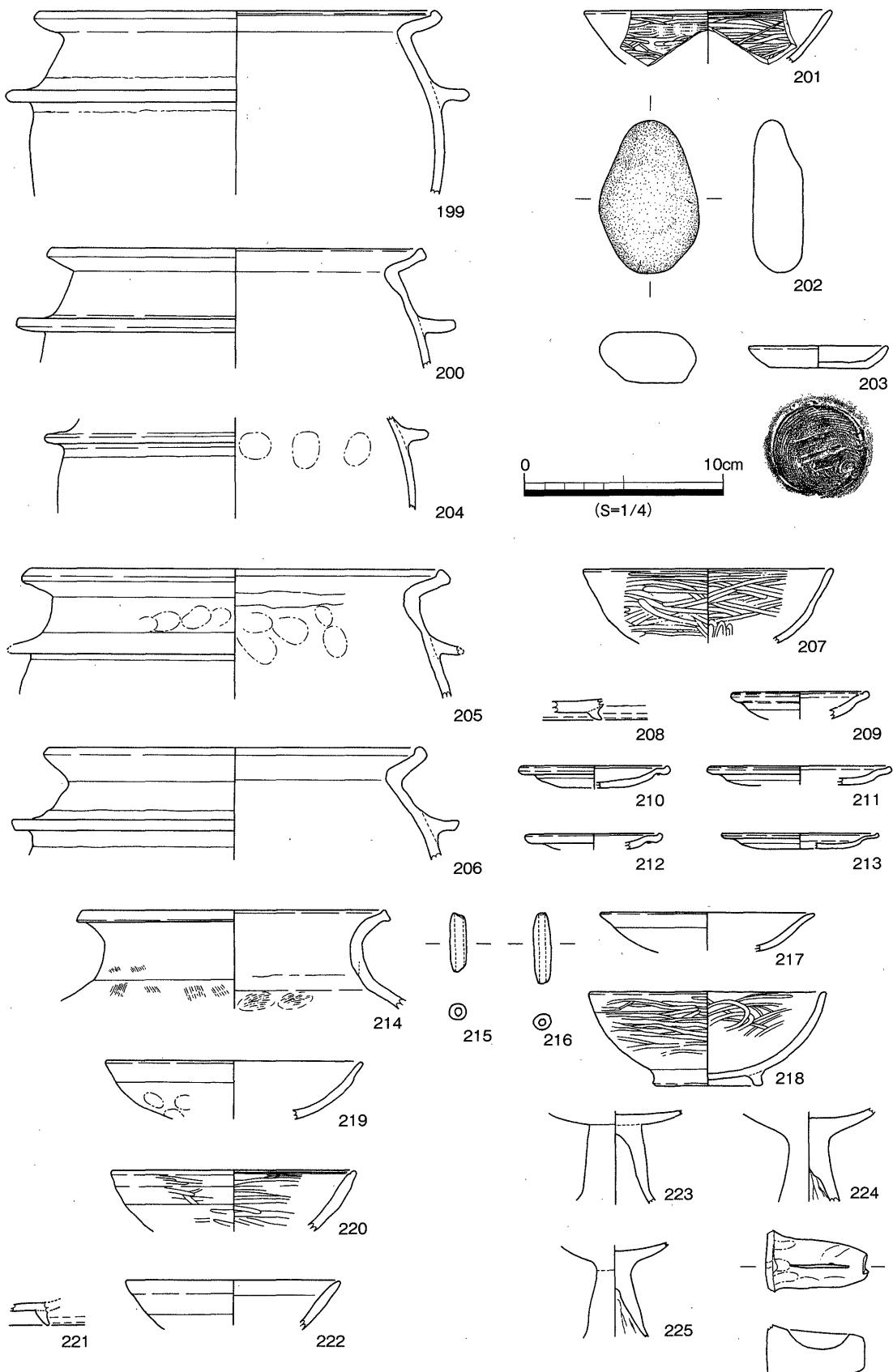
図III-55 C1002溝 平面図 (S=1/20)・土層断面図 (S=1/40)



169~173・179・181：第5層，174：第8a層下粗砂礫，  
175~177・182~185：第8a~11層，178：C247，186~189：C192，  
190~191：C261，192~194：C51-1，195：C134，196~198：C135

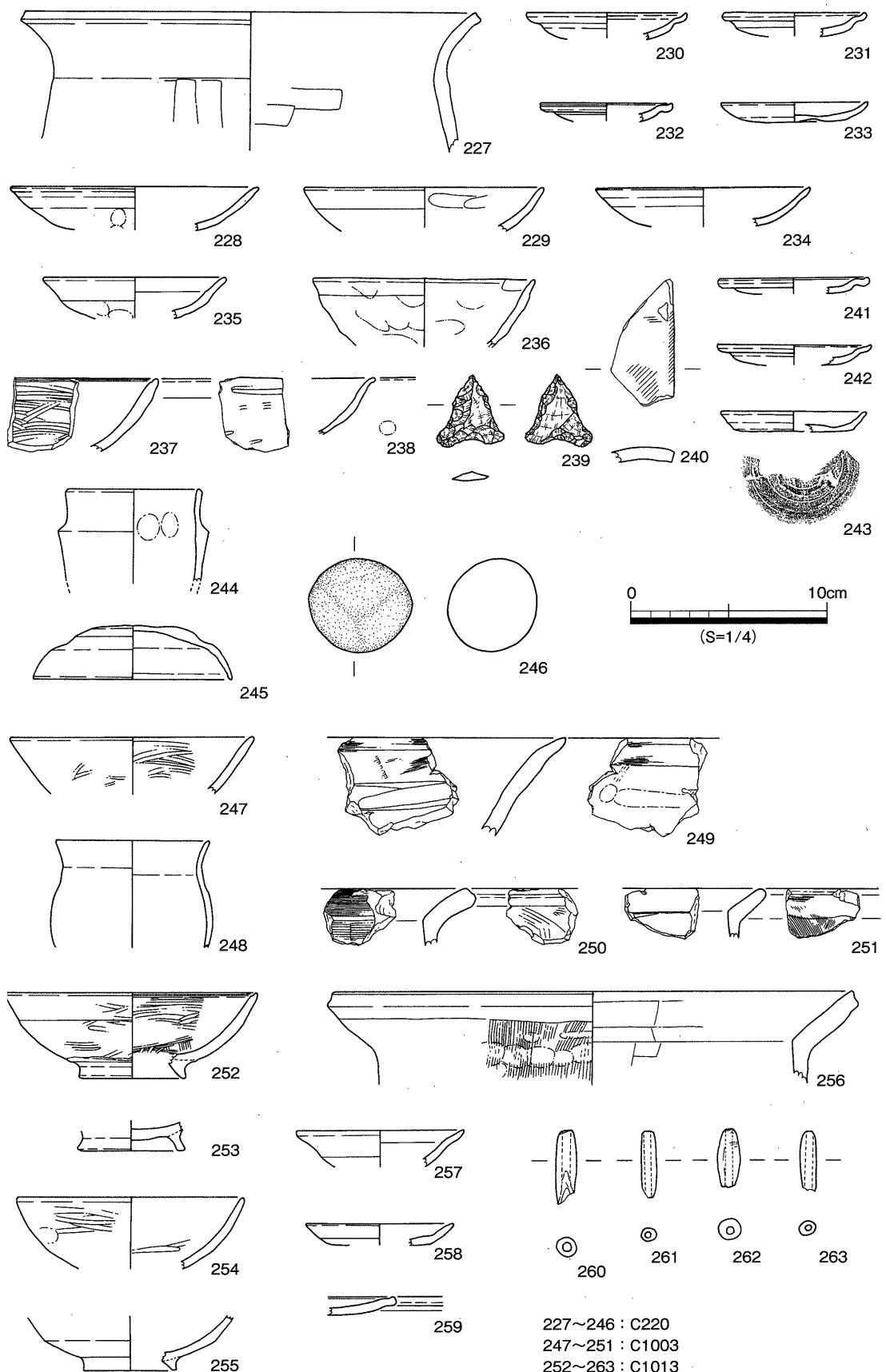
196

図III-56 C区遺物包含層,遺構出土遺物

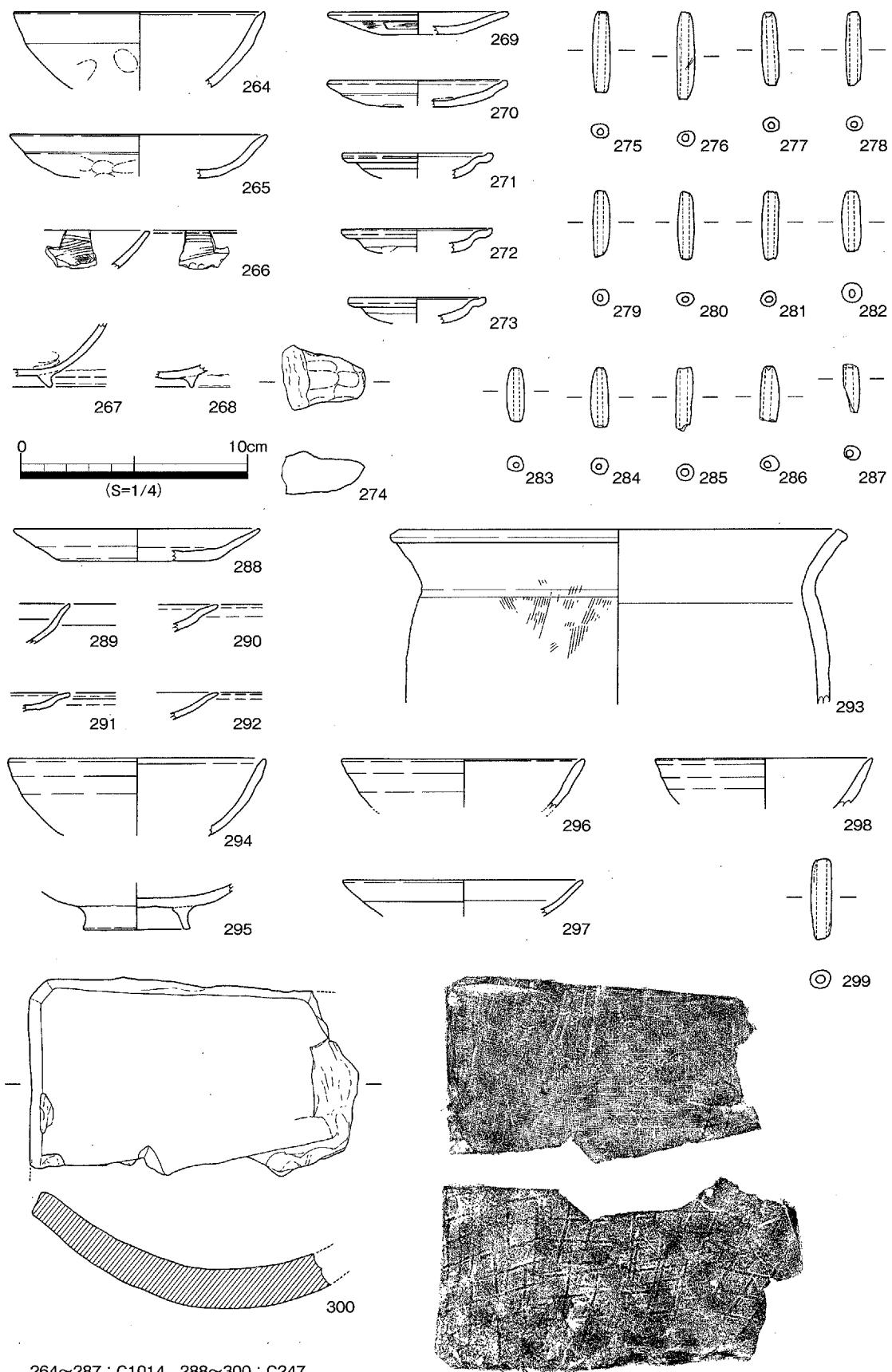


199~203 : C260, 204 : C182, 205 : C181, 206 : C280  
 207 : C281, 208~209 : C47, 210~218 : C51-2, 219 : C48  
 220~222 : C64, 223~226 : C218

図III-57 C区遺構出土遺物実測図

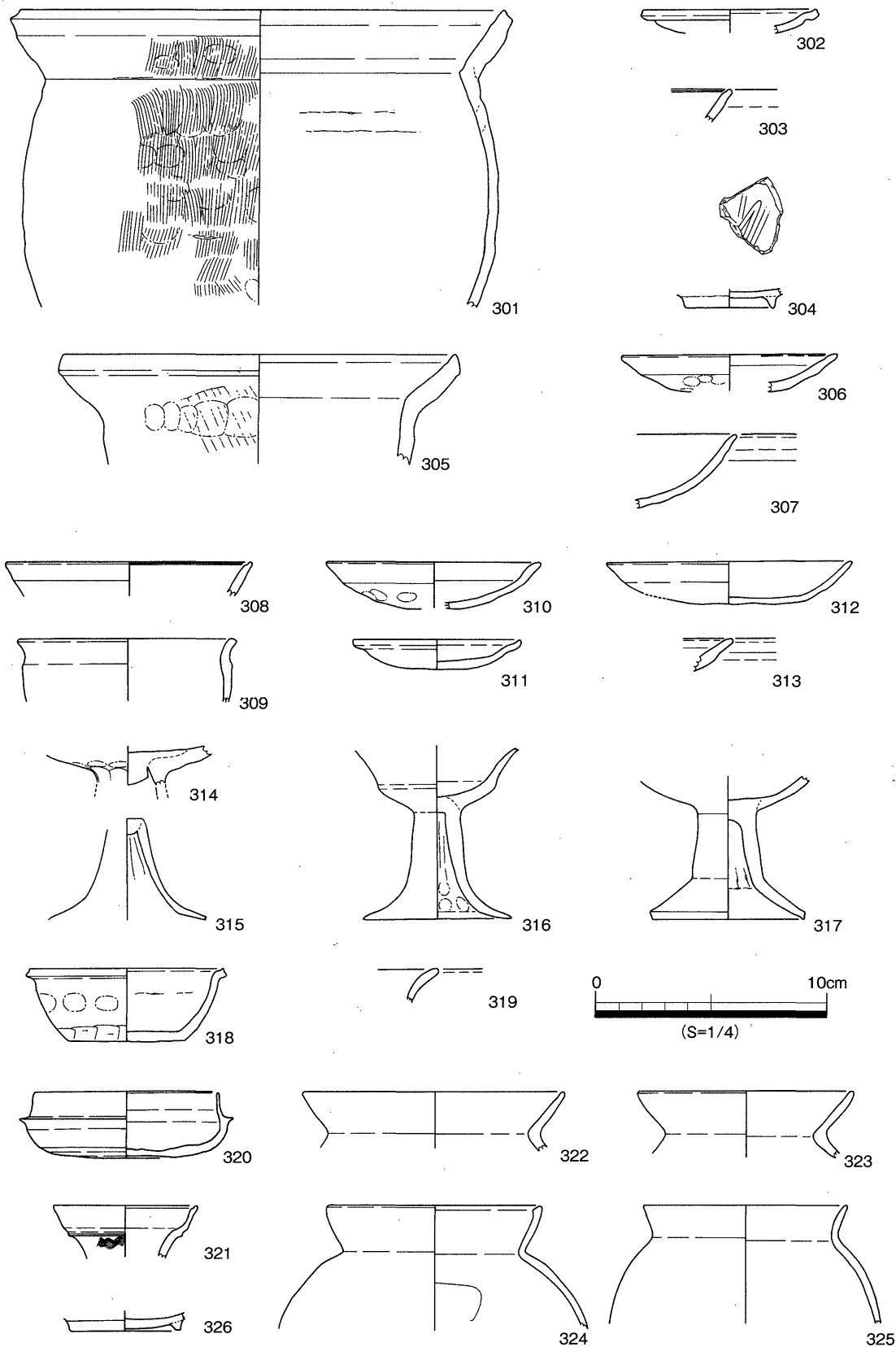


図III-58 C区遺構出土遺物実測図



264~287 : C1014, 288~300 : C247

図III-59 C区遺構出土遺物実測図



301~302 : C258, 303~304 : C53, 305~307 : C251  
 308~311 : C12, 312~313 : C237, 314~319 : C1002  
 320~325 : C238, 326 : C278

図III-60 C区遺構出土遺物実測図

#### 4. D区 (2次調査)

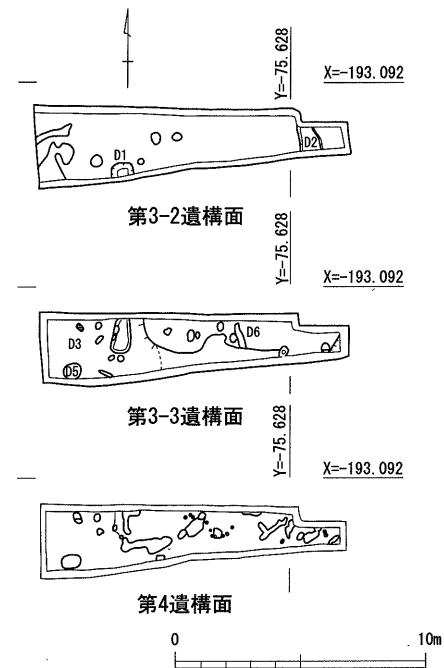
##### (1) 調査の概要

D区は、C区東端から道を一本隔て東へ約6m離れたところに位置する。実質調査面積は40m<sup>2</sup>と狭小な範囲である。

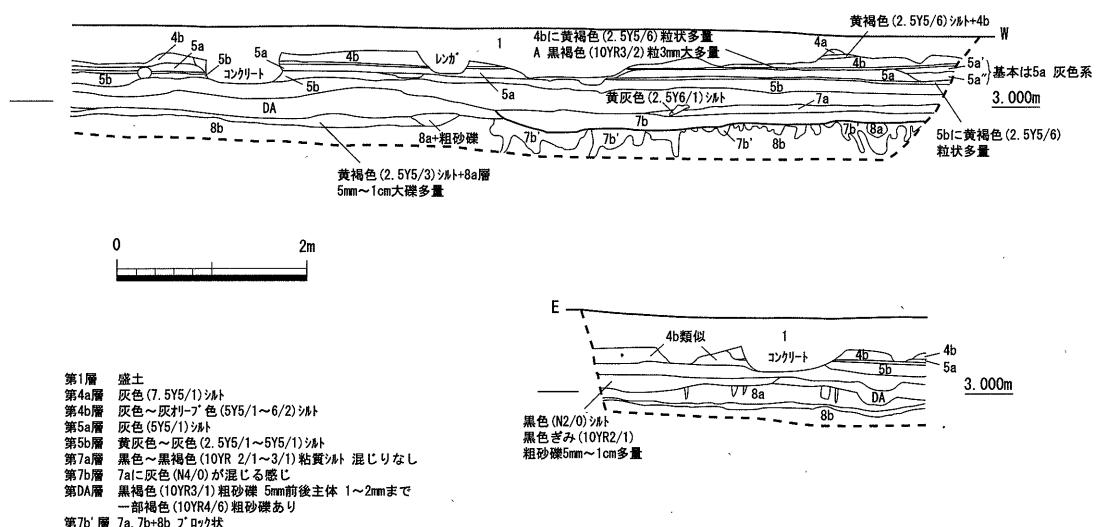
土層は基本層序で示したとおりで、C区東端と同様第6層ではなく第7層が堆積する。この下は、この地区特有の古墳時代と考えられる土層第7a, b層、DA層（DA層は調査時点ではA層としていたがC区におけるA層とは異なるため前にDを付す。）が堆積する。また、東端を除き第8a層の堆積は見られない。

旧地形は、第5, 7層上面とともにC区東端とほぼレベルを同じくするが、第8a層面は南西部で落ち込みが見られ、この部分には第7a, b層、第DA層が堆積する。なお、第7a, b層は、調査時点では昭和44年の調査において初期須恵器が大量に出土した層と同一と考えていた層である。その後の検討の結果、同一層としても全く問題ないがC2区で検出したC1002自然流路の左岸側肩部の埋土である可能性が高い。

遺構面は、調査時点では4面（第1, 3-2, 3-3, 4遺構面）確認しており、各面で落ち込み、土坑、ピットを検出した。時期を明確にする遺物の出土はなかつたが遺構面間に堆積する層は20cm程度あり、下面が露出するような状況ではないので各面での検出遺構



図III-61 D区各遺構面 平面図 (S=1/300)



図III-62 D区南壁 土層断面図 (S=1/80)

をそのまま記載する。なお近世の第1遺構面は機械で除去した。

出土遺物の総量はコンテナにして1箱足らずときわめて少ない状況であった。古墳時代から奈良時代にかけての須恵器も出土しているが、その量はきわめて少ない。大部分は中世、鎌倉時代の瓦器・土師器の碗・皿類である。

## (2) 遺構と遺物

### 第3-2遺構面検出（平安時代～室町時代）の遺構と遺物（図III-61）

第7層上面で検出を行ったが、方形土坑1基と東端部で東側へ傾斜を持つ落ち込みを確認したのみである。

### 第3-3遺構面検出（古墳時代～平安時代）の遺構と遺物（図III-61, 図版17）

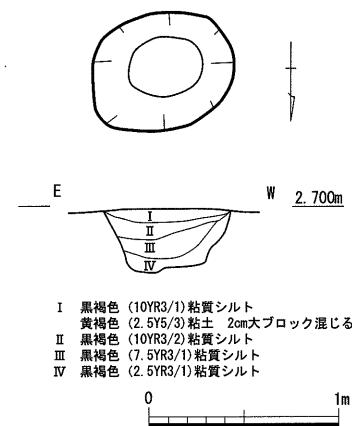
第8a層上面での検出であるが、第8a層が露出しているのは北東部分のみで南西側に地形が落ち込んでいる。この北東部分でピットや土坑を検出したほか南西落ち込み部埋土上面で多数の小ピットを検出した。

**D3落ち込み**（図III-64, 図版31） 南西方向への落ち込みで南側中央より東ではDA層（黒褐色粗砂礫層）が堆積した後、西半では第7a, b層（黒褐色粘質シルト）が堆積している。遺物はほとんどなく、土師質の須恵器杯身(327)が出土しているほかは土師器、埴輪片のみである。この落ち込みはC1002自然流路の延長部分と考えられる。C2区東端で検出したC1002自然流路の堆積土を見ると、流路中心部は深く緩いV字形断面を呈し何層もの土層が堆積するが、両肩付近は上層の第7層と区別のつきにくい黒褐色粘質シルト層が浅く広い範囲に堆積している。この落ち込みの堆積状況に類似しており、やや幅が広いのも流路の屈曲部と考えれば理解できる。

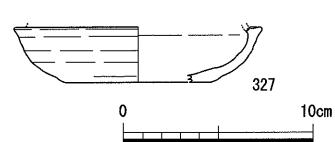
**D5円形土坑**（図III-63, 図版17） D3落ち込みの底面で検出した長径75cm、短径60cm、深さ約30cmの楕円形土坑であり、埋土は5層に分層できるがすべて黒褐色シルト質であった。遺物は土師器片が1点出土したのみで時期の比定はできなかった。

### 第4遺構面検出（縄文時代）の遺構と遺物（図III-61, 図版17）

第8b層上面で検出したピットや不整形土坑である。深いものでも10cm程度である。東側の遺構埋土は第8a層+粗砂礫、中央の遺構はやや黄味がかった黒褐色シルトに分かれ。2種類の埋土が存在するが範囲が明確に2分されることや形状から自然の窪みである可能性もある。遺物の出土はなかった。



図III-63 D5土坑 平面図・断面図  
(S=1/40)



図III-64 遺物実測図(S=1/4)

#### 4. F区（3次調査）

##### (1) 調査の概要

F区は、旧県道粉河加太線を挟んでD区の北隣に位置する。調査面積は358m<sup>2</sup>である。

旧地形（弥生時代～鎌倉時代の面）でD区と比較すると約30cmほど高いが、単純に均一な傾斜がついているとすると傾斜角度はわずか2度足らずでほぼ平坦面と言ってよい。

土層は基本層序で示したとおりA～D区の土層との対応関係をつかむことができなかつたため土層番号の前にFを付けて区別しているが、遺構や包含層に含まれる遺物や大まかな土層の特徴から考えると第F12層が第8a層に対応すると思われる。

盛土の下には造成直前まで使われていた水田の耕作土(第F1層)、さらにその下層には近世の水田跡と思われる層が二層(第F3・4層)存在している。第F5, 6層：灰オリーブ(5Y5/2)シルト、第F7層：オリーブ褐(2.5Y4/4)シルト、第F8層：黄灰(2.5Y4/1)シルト、第F9層：暗オリーブ褐(2.5Y3/3)シルト、第F10層：黒褐(2.5Y2/3)シルト、第F11層：黒褐(2.5Y1/3)シルトで以上は量的には多くないが中世以降の遺物包含層である。ただし各層とも縄文土器・須恵器など古い時期の遺物が混在している。とくに第F10・F11層は古い遺物が多く、当初、古墳時代以前の堆積かと考えていたものであるが、この中からも少量ながら鎌倉時代の瓦器の破片が出土している。第F12層以下は礫層と砂質土が複雑な堆積を見せており、遺構面としては確認できなかつた。なお、この層から出土する遺物は縄文あるいは弥生時代のものに限られている。

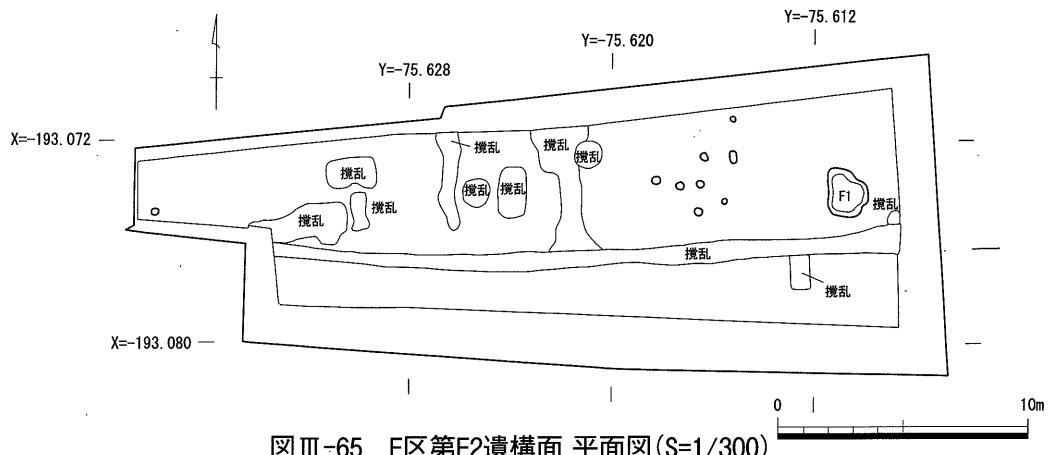
遺構面は、4面（第F1～第F4遺構面）確認した。第F1遺構面は近世のため機械で除去した。

出土遺物はコンテナ2箱であった。縄文時代～室町時代の遺物が少量出土している。

##### (2) 遺構と遺物

###### 第F2遺構面検出（鎌倉時代～室町時代）の遺構と遺物（図III-65, 図版17）

第F9層上面で検出した遺構である。この面では搅乱が多く、遺構として確認できたものは調査区東半部で検出した径20cmほどのピットと長辺約1.5mの不整形の土坑1基のみである。遺構からの出土遺物はほとんどなく、その所属時期を確定するのは困難であるが、包含層の状況



等から中世の可能性が高いものと考えられる。

#### 第F3遺構面検出（鎌倉時代）の遺構と遺物（図III-66, 図版17）

第F10層上面で検出した遺構である。この面も遺構密度は低く、径20～30cm前後のピット20余基を検出しているにすぎない。時期的には上面と同様に中世と考えられる。

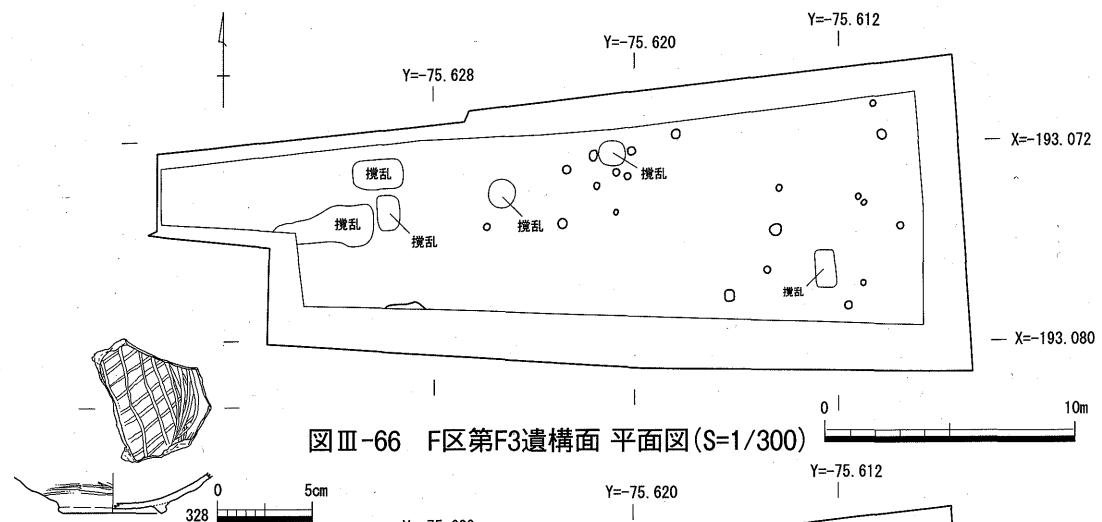
#### 第F4遺構面検出（弥生時代～鎌倉時代）の遺構と遺物（図III-67, 図版17）

第F12層上面で検出した遺構である。比較的遺構は多く、径10～30cmのピットが約50基、不整形土坑8基を調査区全面で検出した。

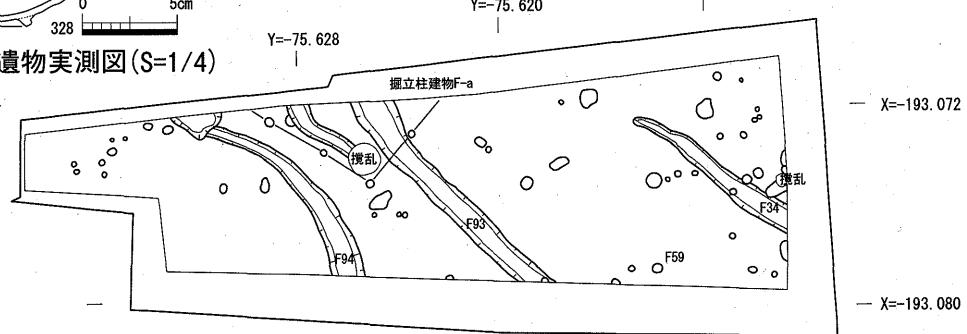
**掘立柱建物F-a**（図III-68, 図版31） 調査区中央の北側で唯一建物になると思われる並びが認められた。規模については調査区外に延びているため全容は不明である。この建物を構成する柱穴のひとつから平安時代末ないし鎌倉時代初めと思われる瓦器椀(328)が出土している。

**F59ピット**（図版17） 調査区東側南端で検出したピットである。弥生時代の壺・甕が出土している。

**F34, 93, 94溝**（図版17） 調査区を北西から南東に流れる幅50～70cmほどの溝を3条検出した。このうちF34溝は削平を受けたようで、北側で途切れる。埋土から縄文土器片が出土している。F93, 94は深さは30cmほどとしっかりとした溝である。出土遺物はなく時期については不明である。



図III-68 遺物実測図(S=1/4)



図III-67 F区第F4遺構面 平面図(S=1/300)

#### 4. G区（2次調査）

##### (1) 調査の概要

G区は、F区東端から約13m東へ離れた旧県道粉河加太線の北側に接する場所に位置する。東西2地区に分割して調査を実施した。調査時点ではG2区としていたが本書ではG区として報告する。実質調査面積は81m<sup>2</sup>である。

土層は基本層序で示したとおり、A～D区やF区の土層との対応関係をつかむことができなかつたため土層番号の前にGを付けて区別している。

盛土（第G1層）、現代水田耕作土（第G2層）の下には近世の耕作土と思われる層が二層（第G4, G5a層）存在している。第G7d層以上は室町時代以降の遺物を含み、第G8層～第G11層までは平安時代末から鎌倉時代の遺物を含む。第G12層～第G16層までは平安時代後期の遺物を含むことを確認したが、それ以下は安全面を考え掘削を断念した。

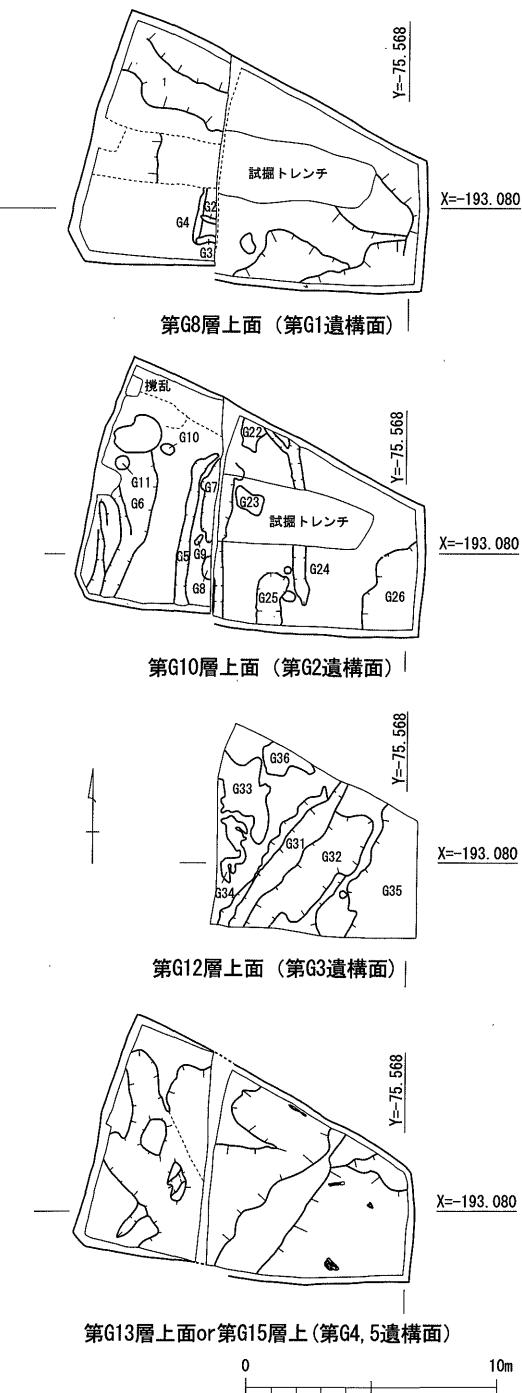
旧地形はT.P.=2.7m付近に堆積する第G15層まで平安時代の遺物を含むことから少なくとも平安時代までは西の調査区に比べかなり落ち込んでおり、また鎌倉時代以降も軟弱な堆積層であることから住居を構えるような安定した地盤ではなかったと思われる。

遺構面は、調査時点で5面（第G1～第G5遺構面）確認しているが、第G2遺構面で検出した水溜以外は溝や落ち込みなどで明確な遺構は検出できなかった。

##### (2) 遺構と遺物

###### 遺物包含層出土遺物（図III-72, 図版31, 32）

第G8層 土師器皿(333, 334)、瓦器椀(331)等が出土している。瓦器椀の形態から鎌倉時代後半の埋没と考えられる。また、第G8, 9層間の土層からも同時期の瓦器椀(336)や土師



図III-69 G区各遺構面 平面図(S=1/300)

器釜口縁(335)が出土しており、ほぼ同時期の堆積と考えられる。

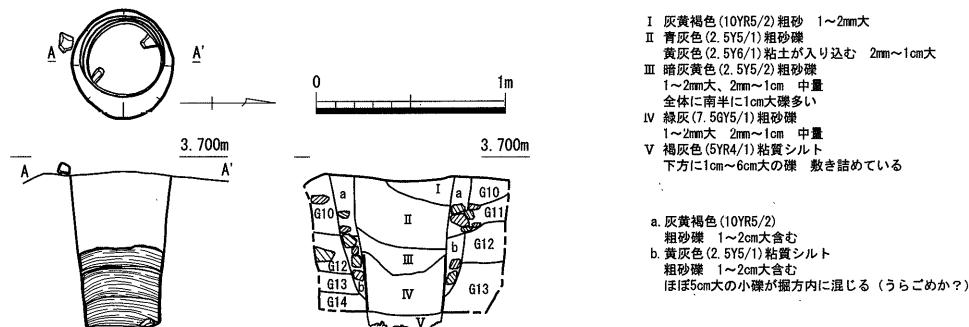
**第G9～G11層** 瓦器椀(339, 340, 344, 345, 348, 349, 352)、土師器椀(341, 346)、「て」の字状口縁皿(350, 351)、黒色土器椀(343)、玉縁状口縁白磁碗(347)が出土している。瓦器椀はしっかりした高台で外ミガキを施す平安時代末までに収まる形態を持つ。黒色土器や「て」の字状口縁皿は小片であるが、土師器椀(341)は80%程度遺存しており共伴すると考えたほうがよいかもしれない。いずれにしても平安時代末～鎌倉時代初頭にかけて堆積した土層である。

**第G12層** 「て」の字状口縁皿(356)、黒色土器椀(355)、土師器甕(354)などが出土し、瓦器等中世の遺物は含まれない。平安時代後期の堆積と考えられる。

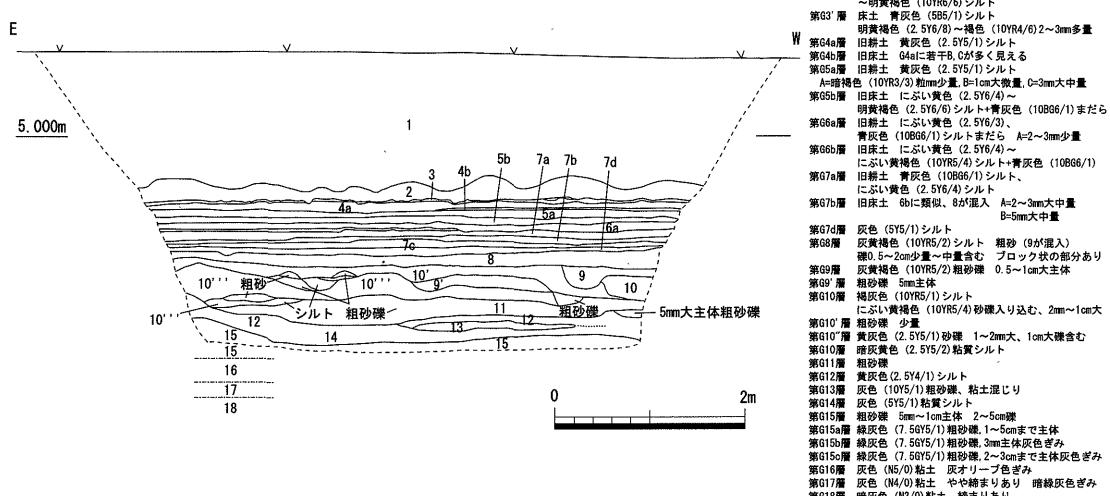
**第G14～16層** 「て」の字状口縁皿(358)、黒色土器椀(360)、灰釉陶器？壺(357, 359)が出土しており平安時代後期の堆積と考えられる。

#### 第G2遺構面検出（平安時代末～鎌倉時代初頭）の遺構（図III-69, 図版18）

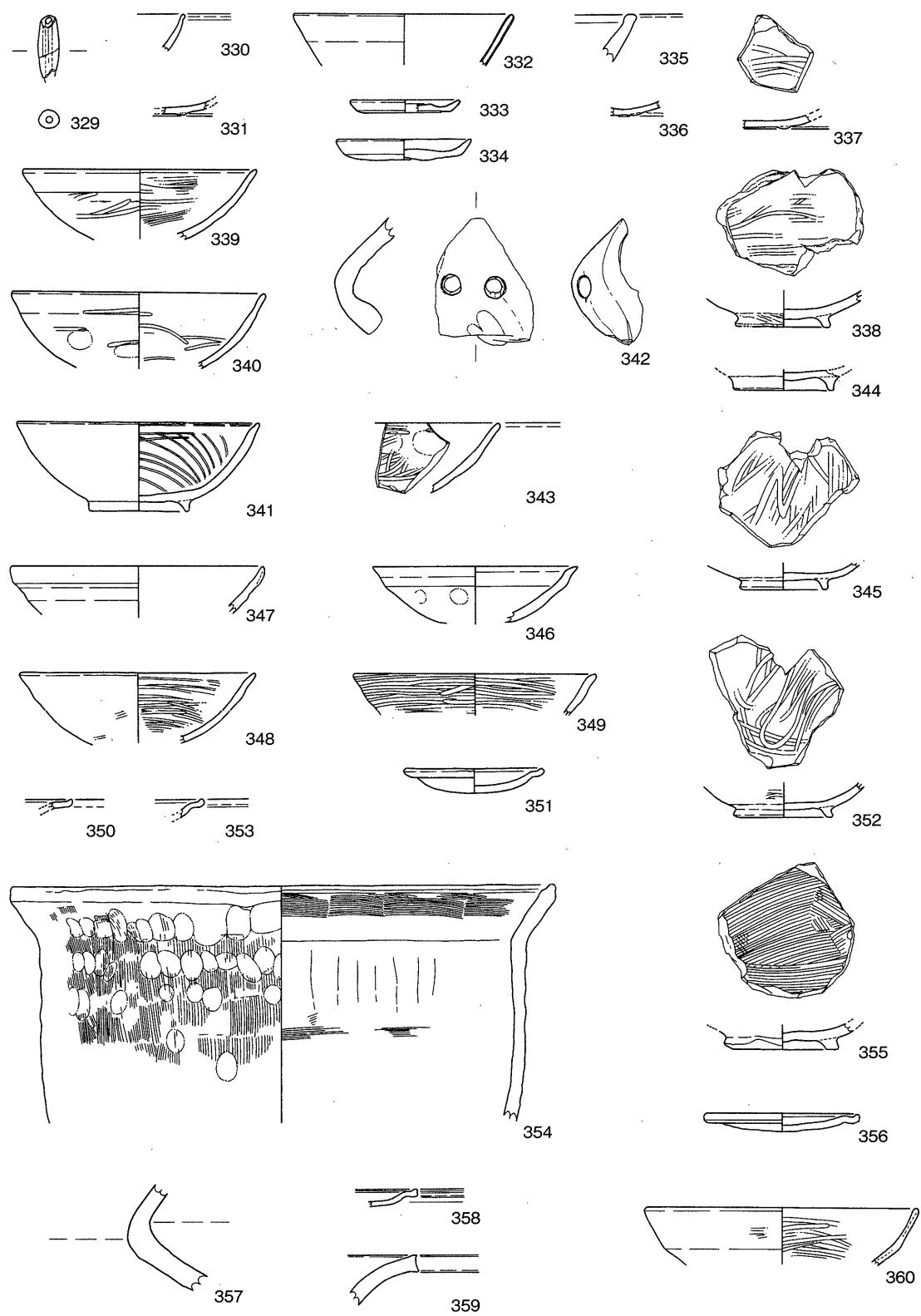
**G11水溜**（図III-70, 図版18） 調査区西側で検出した曲物を利用した水溜である。遺構の時期を示すと思われる遺物の出土はないが上下の包含層堆積時期から考えて平安時代末～鎌倉時代初頭と思われる。



図III-70 G11水溜 平面図・断面図 (S=1/40)



図III-71 G区南壁東半 土層断面図 (S=1/80)



329: 第G7b層, 330~334: 第G8層, 335~336: 第G8・9層間  
 337: G24, 338: G6, 339~345: 第G10層, 346: G5  
 347~352: 第G11層, 353: G31, 354~356: 第G12層  
 357~358: 第G14層, 359: 第G14~15層, 360: 第G16層

0 10cm  
 (S=1/4)

図III-72 G区遺物包含層、遺構出土遺物実測図

## 第IV章 土壤分析の成果

### 第1節 はじめに

今回の調査で遺構・遺物が確認できた古墳時代、平安時代～室町時代について花粉、珪藻分析を実施した。遺跡周辺全体の古環境を復元することを目的とし個別遺構の埋没状況などは今回の分析の対象外とした。分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。

### 第2節 分析資料

分析は、1. 時期が確定している資料、2. 極力湿潤状態で酸化による分解が少ないと思われる資料、3. 上下層からの混入（ベース土の崩落、人為的埋土）がない資料、4. 洪水などで一時に埋没していない資料を選択して実施した。

表IV-1 分析資料一覧表

地区	遺構	種類	分析No.	土質	花粉	珪藻	時期
G	南壁	第7b層	4	にぶい黄～黄褐シルト、青灰色シルト	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	室町時代～近世
		第10層	5	褐灰シルト	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	平安時代末～鎌倉時代初頭
		第12層	6	暗灰黄粘質シルト	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	平安時代
		第14層	7	灰色粘質シルト	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
		第16層	8	灰色粘土	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
C	C1002	I層	9	褐灰シルト、黒褐シルト	<input type="checkbox"/>		古墳時代中期
		II層	10	褐灰シルト	<input type="checkbox"/>		
		IV層	11	砂礫	<input type="checkbox"/>		
		VI層	12	黒褐シルト	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
B	B334	10層	1	褐灰粘土	<input type="checkbox"/>		室町時代
		11層	2	灰粘土	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
	B19	IV層	3	青灰色粘土	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	

以下分析方法、結果・考察は株式会社パレオ・ラボの調査報告を抜粋して掲載した。なお、層名、遺構名等一部について本書と一致させるため記述を改めている。

### 第3節 花粉分析

#### (1) 分析方法

花粉化石の抽出は、試料約2～4gを10%水酸化カリウム処理(湯煎約15分)による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理(約30分)による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理(冰酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分)の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離(臭化亜鉛を比重2.1に調整)による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、バラ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

表IV-2 花粉化石産出一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
樹木													
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
モミ属	<i>Abies</i>	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	-	-	-	-	1	-	3	-	-	-	-
マツ属複維管東亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyion</i>	7	14	14	-	-	9	2	27	-	-	-	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	8	8	2	2	-	5	7	28	-	-	-	-
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	2	2	4	1	-	1	1	10	-	-	-	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T. - C.	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	1	-	2	-	-	-	3	-	-	-	1	-
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	4	4	3	-	-	-	6	-	-	-	-	1
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	1	2	-	-	-	6	3	44	1	-	-	2
クリ属	<i>Castanea</i>	2	-	-	-	-	1	2	8	-	-	-	-
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	-	-	1	1	-	28	7	75	-	-	1	1
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	3	1	15	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis</i> - <i>Aphananthe</i>	3	2	7	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	<i>Mallotus</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ムクロジ属	<i>Sapindus</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
マタタビ属	<i>Actinidia</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ツツジ科	<i>Ericaceae</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ハイノキ属	<i>Symplocos</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本													
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
イネ科	<i>Gramineae</i>	51	50	69	9	-	1	2	70	-	1	-	2
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	2	1	1	1	-	1	2	45	-	-	-	-
イボクサ属	<i>Anemone</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
クワ科	<i>Moraceae</i>	4	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ギンギン属	<i>Rumex</i>	-	1	11	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミチヤナギ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Avicularia</i>	3	1	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i> - <i>Echinocaulon</i>	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
他のタデ属	other <i>Polygonum</i>	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	3	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	<i>Chenopodiaceae</i> - <i>Amaranthaceae</i>	9	10	6	-	-	1	4	2	-	-	-	-
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	2	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
他のキンポウゲ科	other <i>Ranunculaceae</i>	3	6	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	19	14	8	-	-	-	-	1	-	-	-	-
バラ科	<i>Rosaceae</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	<i>Leguminosae</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	6	4	1	-	-	-	1	5	-	-	-	-
シソ科	<i>Labiatae</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
オオバコ属	<i>Plantago</i>	2	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	2	1	9	-	-	10	3	68	-	1	2	1
他のキク亜科	other <i>Tubuliflorae</i>	2	2	3	-	-	-	-	4	-	-	-	3
タンポポ亜科	<i>Liguliflorae</i>	1	5	7	-	-	-	-	-	-	-	-	3
シダ植物													
単条型胞子	<i>Monolete spore</i>	2	1	5	-	1	16	1	12	1	-	1	2
三条型胞子	<i>Trilete spore</i>	11	12	21	1	1	26	2	19	-	1	-	3
樹木花粉	<i>Arboreal pollen</i>	36	38	52	5	0	51	23	218	1	0	1	5
草本花粉	<i>Nonarboreal pollen</i>	110	98	134	10	0	15	13	208	0	2	2	6
シダ植物胞子	<i>Spores</i>	13	13	26	1	2	42	3	31	1	1	1	5
花粉・胞子絶数	Total Pollen & Spores	159	149	212	16	2	108	39	457	2	3	4	16
不明花粉	Unknown pollen	4	6	11	3	1	17	6	12	3	2	3	4

T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceae を示す

## (2) 分析結果と考察

[古墳時代中期試料(C1002(流路)-I, II, IV, VI層)の古植生および古環境]

産出した花粉化石は非常に少なく、古植生の推定はできなかった。樹木では、落葉広葉樹のクマシデ属-アサダ属、コナラ亜属、常緑広葉樹のアカガシ亜属、シイノキ属、草本ではイネ科、ヨモギ属、タンポポ亜科が当時の植物相であったと言うに止めざるを得ない。なお、花粉化石は水成堆積物であれば良好に保存されるが、土壤のような酸化条件下では、化学的風化により、分解・消失し、更にバクテリアによる蝕害も受ける。検討した試料は、花粉化石が保存されていないことから、少なくとも安定したC1002は、當時水が溜まっているような流路では

なく、乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境が示唆される。

[平安時代～鎌倉時代試料(G区壁一第G10, 12, 14, 16層)の古植生および古環境]

16層の花粉組成から、シイノキ属、アカガシ亜属を主体にヤマモモ属などが混じる照葉樹林が優勢であったと推定される。また、針葉樹としては、マツ属複維管束亜属をはじめ、スギ属が主要素であり、一部二次林化が進行していたのであろう。16層の堆積期は、イネ科、カヤツリグサ科を主体に、抽水植物のオモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属などが混じる水位の低い湿地ないし水溜りが存在していたと推定される。これら抽水植物はいわゆる水田雑草であり、水田が存在していた可能性もあるが、それにしてはイネ科の出現率がやや低いように思われる。栽培状況については、12層からソバ属が産出しており、ソバの栽培地の存在が予想される。なお、16層以外の土層は、花粉化石の保存状況が良好ではなく、少なくとも安定した滞水環境で堆積したものではないだろう。

[室町時代試料(B334(溜柵)10, 11層およびB19-IV層)の古植生および古環境]

室町時代試料の樹木花粉数は豊富とは言えないので、組成が幾分歪んでいる可能性がある。しかし、マツ属複維管束亜属が多産する傾向があり、平安時代～室町時代のG2区～16層で多産していたシイノキ属、アカガシ亜属が極めて少ないという特徴が見られる。このことから、照葉樹林が大幅に縮小し、マツ属複維管束亜属から成る二次林が更に進行した可能性が考えられる。主要素は、スギ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属であり、アカメガシワ属、蔓性のブドウ属、マタタビ属なども二次林や林縁の要素として混じっていたであろう。B334やB19の周囲には、ギシギシ属、ミチヤナギ節、アザケ科-ヒユ科、オオバコ属、ヨモギ属、タンポポ亜科などが繁茂する路傍ないし畠地のような環境が存在していたと推定される。多産するイネ科は、属まで絞り込むことは困難であるが、明らかな水湿地性草本は産出せず、乾き気味の場所に生育する分類群が目立つことから、ススキ・シバなどの草地優占種を含む可能性が多分に考えられる。栽培状況については、ソバ属の産出から(B334-10層)ソバの栽培地の存在が推定され、有用植物を多く含むアブラナ科もナタネなどが栽培されていた可能性がある。

#### 第4節 珪藻分析

##### (1) 分析方法

- 1 試料を湿潤重量で約1g程度取り出し、秤量した後にトールビーカーに移し、30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。
- 2 反応終了後、水を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てた。この作業は上澄み液が透明になるまで7回以上繰り返し行った。
- 3 ビーカーに残った残渣は遠心管に回収した。
- 4 マイクロピペットを用い、遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下し、乾燥し

表IV-3 楠見遺跡堆積物中の珪藻化石産出表(種群は安藤(1990)に基づく)

分類群	種群	G2区 西壁						C2区 SD1002			B1区 B334			井戸? IV層	G2区 西壁						C2区 SD1002			B1区 B334			井戸? IV層			
		第7b層	第10層	第12層	第14層	第16層	第6層	第11層	第IV層	第14層	第16層	第6層	第11層	第IV層	第7b層	第10層	第12層	第14層	第16層	第6層	第11層	第IV層	第7b層	第10層	第12層	第14層	第16層	第6層	第11層	第IV層
<i>Achnanthes hungarica</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	10																				
<i>Amphora montana</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	1																				
<i>A. ovalis</i> var. <i>libyca</i>	WW	-	-	-	-	4	-	1	-																					
<i>Bacillaria paradox</i>	WW	-	-	-	-	1	-	1	-																					
<i>Caloneis bacillum</i>	WW	-	-	-	-	3	-	9	-																					
<i>C. silicula</i>	WW	-	-	-	-	11	-	1	-																					
<i>C. tenuis</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	1																				
<i>C. spp.</i>	?	-	-	-	-	5	-	7	1																					
<i>Coccconeis placentula</i>	W	-	-	-	-	2	-	-	-																					
<i>Cymbella aspera</i>	O	-	-	-	-	1	-	-	-																					
<i>C. minuta</i>	WW	-	-	-	-	1	-	1	1																					
<i>C. naviculiformis</i>	O	-	-	-	-	2	-	-	-																					
<i>C. tumida</i>	WW	-	-	-	-	1	-	1	-																					
<i>C. spp.</i>	?	-	-	-	-	1	-	-	-																					
<i>Diploneis finnica</i>	W	-	-	-	-	2	-	-	-																					
<i>D. ovalis</i>	WW	-	-	-	-	4	-	-	-																					
<i>D. yatukaensis</i>	W	-	-	-	-	3	-	-	-																					
<i>D. spp.</i>	?	-	-	-	-	3	-	-	-																					
<i>Epithemia turgida</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	1																				
<i>E. spp.</i>	?	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-																			
<i>Eunotia pectinalis</i>	O	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-																			
<i>E. spp.</i>	?	-	-	-	-	2	-	-	-																					
<i>Frustulia vulgaris</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-																			
<i>Gomphonema acuminatum</i>	O	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-																			
<i>G. augur</i>	W	-	-	-	-	1	-	1	-																					
<i>G. clevei</i>	WW	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1																			
<i>G. gracile</i>	O	-	-	-	-	1	-	16	19																					
<i>G. parvulum</i>	W	-	-	-	-	6	-	-	-	1																				
<i>G. pseudoaugur</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	6																				
<i>G. spp.</i>	?	-	-	-	-	9	-	4	10																					
<i>Gyrosigma spp.</i>	?	-	-	-	-	20	-	-	-	3																				
<i>Hantzschia amphioxys</i>	Q	-	-	-	-	4	-	81	18																					
<i>Melosira ambigua</i>	NN	-	-	-	-	2	-	-	-																					
<i>Navicula confervacea</i>	W	-	-	-	-	-	-	-	-	5																				
<i>N. cryptocephala</i>	W	-	-	-	-	3	-	6	4																					
<i>N. cuspidata</i>	W	-	-	-	-	3	-	5	4																					
<i>N. elginensis</i>	O	-	-	-	-	6	-	-	-																					
<i>N. mutica</i>	Q	-	-	-	-	-	-	-	-	2	5																			
珪藻 般 数																														
1 0 2 0 207 5 218 208																														
湖沼沼澤湿地 (N)																														
沼澤湿地付着生 (O)																														
陸域 (Q)																														
広布種 (W)																														
不明 (?)																														
1 2 79 3 31 27																														

た。乾燥後にマウントメディア（封入剤）で封入し、プレパラートを作成した。

- 5 各プレパラートを光学顕微鏡下400～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数を行った。なお、珪藻化石が少ない試料に関してはプレパラート全面について精査した。

## (2) 分析結果と考察

楠見遺跡より採取した堆積物試料を用いて珪藻分析を行った結果について考察する。

G2区西壁からは珪藻化石が非常に希薄で、第G16層をのぞいては珪藻化石を検出することがほとんどできなかった。第G16層における堆積環境は、湿地もしくは沼沢地環境と推定された。それ以降では珪藻化石を十分には検出できなかった。珪藻は水生植物であるため、水分のない所には生育できない。第14層より上位で珪藻化石が検出されなかつた理由として、乾燥した陸域環境であったことが考えられる。また同試料を用いておこなった花粉分析においても第16層以外では花粉の保存状態が悪いことが確認されている。花粉は水分のある環境下では良好に保存されるものの、乾燥した環境下では保存されにくい。このことを考慮すると第14層以降は乾燥した陸域環境であったと考えられる。

C2区のSD1002からも珪藻化石はあまり検出されなかつた。同じ試料を用いて行われた花粉分析においても花粉化石はほとんど検出されず、水の存在する環境下ではなかつたと考えられる。SD1002は自然流路と考えられているが、今回の分析から水は流れていなかつたと考えられる。

B区のB334溜柵11層の堆積環境はジメジメとした陸域環境と推定され、常時水に浸っている環境下ではないと考えられる。

B区のB19井戸内IV層の堆積環境は湿地もしくは沼沢地環境と推定された。また、本試料からは好酸性種が高い割合で検出されている。地下水は一般的にやや酸性であることから矛盾はない。

## 第V章 総括

### 中世墓（屋敷墓）について

鎌倉時代の土坑墓A39, 218, B348の3基を検出した。埋葬姿勢についてみると、いずれも膝を折り曲げた状態で出土しており、副葬品についてはB348は遺存状況が悪かったためはつきりしないが、A39は瓦器碗1点、土師器皿4点、鉄鎌1点、A218も瓦器碗1点が頭部付近に副葬されていた。また、立地についても単独又は2基程度で群集はせず、掘立柱建物は復元できなかつたもののピット群の分布状況から居住地に隣接して造られていると思われる。

このような埋葬状況は、県内に見られる中世前期の屋敷墓と概ね同じ範疇でとらえることができるが、B348の埋葬方法は編み物状の敷物、南端部に別空間を有する点で特異である。調査担当者は埋葬方法について、人骨は火を被けていないこと、編み物は焼失しているとの観察結果から、繊維質の編み物を土坑底面に敷いた後、編み物をいったん土壤内で焼き、その後遺体を埋葬した土壤墓と考えている。

現地での観察状況は以上のとおりであるが、南端部の別空間をどのように考えるかが問題となってくる。ここで仮に木棺墓と考えた場合、南端部の土の盛り上がり部を木棺の小口部分、南端部の編み物を木棺上に置かれたものと見ることができるが、この場合は南端部の盛り上がった土を盛土とし、編み物を焼失ではなく経年による炭化と見なければならない。また、編み物に対し木質が全く残っていないことにも疑問点が残る。いずれにしても類例等を参考にしながら編み物や南端部の空間等特異な事象を明らかにした上で判断しなければならない。

### 「て」の字状口縁土師器皿について

今回の調査で出土遺物に見られる特徴の1つは「て」の字状口縁土師器皿の出土が目立つ点である。土師器皿の数量を比較する場合、各個体で時期判別することは難しいため、遺構出土遺物を対象にして口縁部破片数をカウントした。なお、登録番号ごとに同一個体の破片は1点としてカウントしたが明らかな場合を除き別登録番号遺物との同一個体認識はしていない。遺構は平安時代後期を対象としているが、微量の瓦器を含むC220落ち込みA層も対象とした。

表V-1 「て」の字状口縁土師器皿出土比率(平安時代後期の遺構)

	「て」の字状口縁 径10cm前後	その他口縁				全資料数	「て」の字状口縁数 *100/全量(%)	「て」の字状口縁数 *100/(全量-大皿) (%)
		大(径14cm 以上)	小(径10~ 11cm前後)	不明	糸切り, ヘラ切り底			
C220(A層) (B層)	9 5	3 1	0 1	4 3	1	17 10	53 50	64 56
C64				1		1	0	0
C1003				1		1	0	0
C1013,1014	10	2	3	3	1	19	53	59
C47	1			2		3	33	33
C51-2	6	4	1	7		18	33	43
C48	1	1				2	50	100
C247		3	3	5		11	0	0
C258	1					1	100	100
C251		3	1			4	0	0
C12	3	1	2	1		7	43	50
C237	1	1	1			3	33	50
合計	37	19	12	27	2	97	38	47

表V-1に示すように出土数10点以上のC220落ち込みA, B層, C1013, 1014溝を見ると、全皿数に占める割合はいずれも50%以上を、径の異なる大皿を除いた場合の割合は60%近くを占める。C51-2落ち込みではやや割合が下がるがそれでも30~40%前後を占めている。全体で見てもそれぞれ約40%、50%と非常に高い比率を示す。C247井戸については全く含まれていないが、端部を内側に丸めないものの外反部は類似した形状をなすものは存在する。なお、「て」の字状口縁の場合、形狀的に強度が高く口縁部が残りやすい可能性と今回細片のカウントが多い点は注意して取り扱う必要がある。

次にこれら資料の時期についてであるが、全遺構とも「多段ナデ技法」が省略化されつつある時期付近に位置づけることができるが、少し細かく見ると、C1013, C1014溝では省略化が進み口縁部付近をナデるのみの資料が目立つ。C220落ち込みでは口縁部付近をナデるものも見られるが明瞭な2段ナデの資料も多く存在する。C51-2落ち込みは資料が少ないが、218の黒色土器A類を見ると明瞭な稜線は持たないものの外面2段ナデで内外面とも比較的密に磨く。C247は上層で確認できる資料はないが、中層には2段ナデの明瞭なものが多数を占める。一括資料でないので即断はできないがC1013, 1014に比べC51-2, C247は若干古い遺物を含むようである。

この時期の遺物が出土する県内の遺跡はそれほど多くないが、出土量の多い和歌山市鳴神地区遺跡、秋月遺跡、有田川町野田地区遺跡、田辺市稻成遺跡の報告書を見る限り「て」の字状口縁皿はなく、その他でも散発的な出土がほとんどである。ただし、まとまった出土量ではないが紀の川市粉河寺遺跡では一定量含まれているようである。一方瓦器の出現直後の資料を見ると、和歌山市西田井遺跡、海南市岡村遺跡等から出土している。岡村遺跡での出土比率は不明だが西田井遺跡では非常に高い比率で「て」の字状口縁皿が出土する。当遺跡出土品に比べると同様の形態も存在するがやや屈曲が緩く退行した印象を受けるものが目立つ。西田井遺跡では瓦器出現前の資料には「て」の字皿は含まれていないが、当遺跡よりやや古い様相を示すようである。今回対象としたC区出土遺物はこれより後、瓦器出現直前に位置づけることができる。

このように同時期の資料である鳴神、秋月、野田地区、稻成遺跡資料と比べれば特異な様相を示すと言えるが、西田井、粉河寺遺跡と比べれば同様の状況を示す可能性は十分あり、わずかな時期差によるものか遺跡あるいは地域差によるものか資料の増加を待って判断しなければならない。特に地域差については、紀中・紀南地域の資料を比較材料としてよいかの検討をする。出土量が少ない中での結論であることは十分考慮しなければならないが、C区の他遺構やG区の出土状況を併せて見ると、少なくとも楠見遺跡では瓦器出現直前から「て」の字皿の使用が始まっていたと思われる。ただし、「て」の字皿の使用開始は、C247やC51-2の少量のデータや西田井遺跡の平安時代後期資料をもとに考えれば瓦器出現前とはいえそれほど遡らない可能性がある。

この時期頃からこの辺りに平井津が存在したことが文献で確認でき、京都系の土師器ともいえる「て」の字状口縁皿が多く出土する現象はのことと無関係ではないかも知れない。

#### 昭和44年調査結果との関係（図V-3参照）

C, D区の古墳時代に関連する遺構や流路を再度確認しておくと、C1区北西隅のC238土坑とC2区の南東方向に流れる自然流路そしてD区南西の落ち込みのみである。なお、D区の落ち込みは第III章でC1002の左岸肩部の可能性を考えた。このうち昭和44年調査地点に関係があるものはC1002自然流路である。そのまま延長すればN1トレーニチ付近を流れると推定される。

上記の推定をもとに土層について見ると、A～Hトレーニチはベースとされる黄色土層の上に初期須恵器を大量に含む黒色土が堆積している。C2区南壁・D区南壁土層との対応関係を見ると、黄色土層=黄色粘質シルト（第8a層）、黒色土=黒褐色粘質シルト（C1002埋土上層）又は第7層と考えられる。

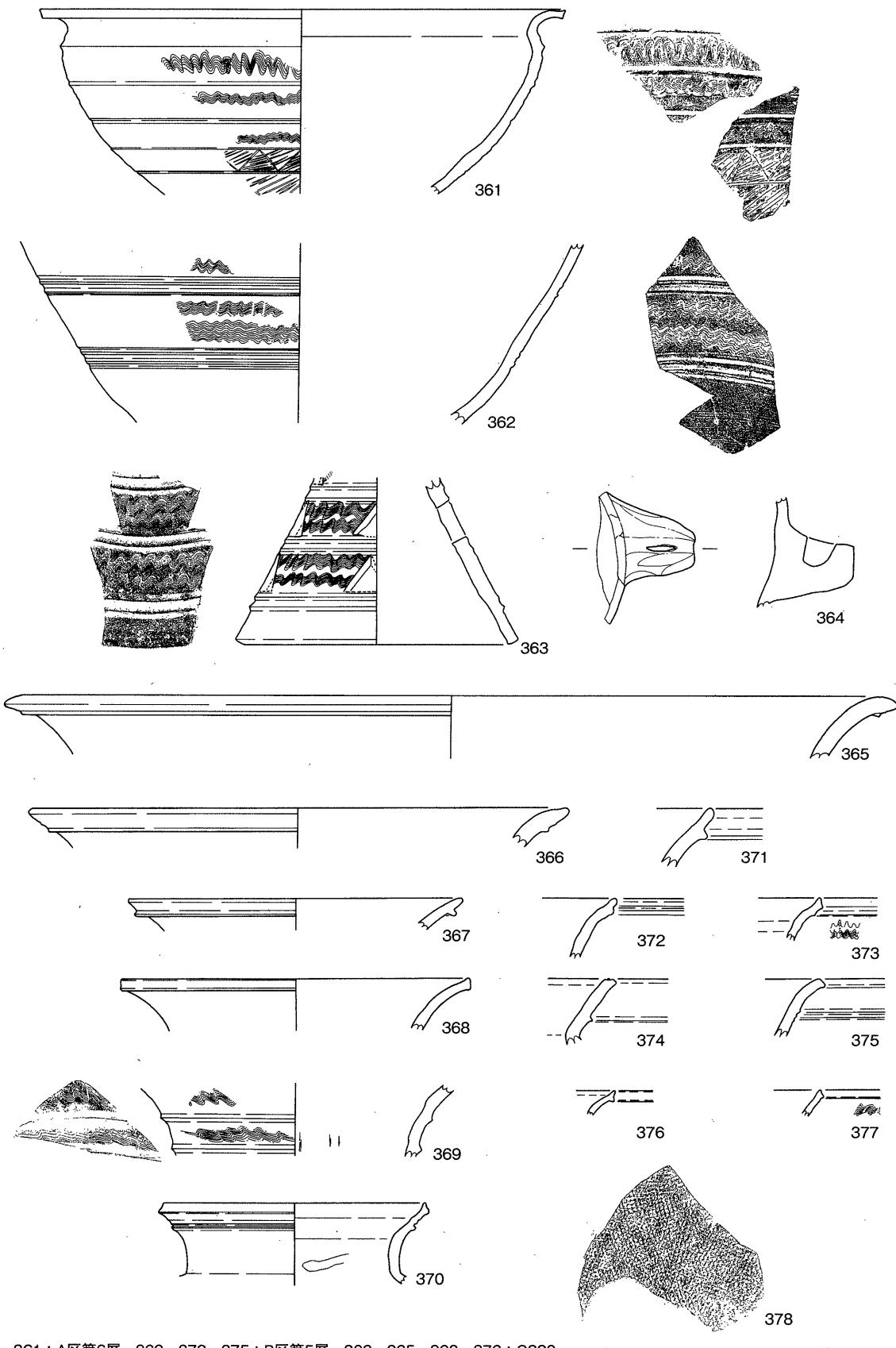
N2トレーニチは明黄灰色粘土層の上に灰色礫混じり層、黒色礫混じり層、黒褐色粘質土層が堆積し、これより上は中世以降の遺物包含層となる。D区南壁土層と比較すると明黄灰色粘土層=第8aor8b層、黒色礫混じり層=DA層、黒褐色粘質土層=第7or7a, b層に対応すると思われる。灰色礫混じり層については、東へ徐々に落ち込みがきつくなりはじめる地点のため固有の堆積土、あるいはC2区第8b層上面で検出したC1021自然流路の堆積土である可能性も十分考えられる。

このようにA～Hトレーニチ、N2トレーニチは、推測の域をでないものの概ね今回の調査地点と土層を関連付けることができるのに対し、N1トレーニチは灰色角礫層の上に黒色粘土、灰色粘土、褐色土混じり灰色粘土、灰色小礫、黄色粘土、黄色混じり灰色粘土、灰色粘土、黄灰色粘土が堆積しており、A～H, N2トレーニチ、C, D区いずれの土層とも異なる状況を示している。第7層の堆積が確認できないのは理解しづらいが、他区に比べ堆積層が多く各層とも薄い堆積を示すことから河川堆積土の可能性が考えられる。別流路等他の要因も当然考えられるが、配置から見てC1002の自然流路内とする方が自然である。

以上と今回の調査結果を合わせて考えると、C1002自然流路を境に南西側ではS44調査区やC220落ち込みなどで多くの初期須恵器が出土するのに対し北東側では極端に遺物量が少なく生活の痕跡はほとんど見られない状況が想像される。

#### 初期須恵器について（図V-1, 2, 図版32～35）

今回の調査では遺構の時期を示す位置から出土した古墳時代の須恵器はC238土坑とC1002自然流路のみであったが、古代・中世の遺物包含層や遺構から少量の初期須恵器が出土したためここでまとめて報告する。なお、残り10%程度の小片から径を復元している場合も多く、実測図にはある程度の誤差を含んでいると思われる。残存率については遺物観察表や写真図版で確認できる。



361 : A区第6層, 362・372・375 : B区第5層, 363・365・368・376 : C220  
 364 : C273, 366 : C48, 367 : C1031 ?, 369 : B15, 370 : C区第5層  
 371 : A7, 373 : C区第6層, 374 : B区第6層, 377 : C183, C192, C196

0 10cm  
 $S=1/4$

図V-1 出土須恵器実測図

361～363は器台である。361は大きく外反する口縁と端部にシャープな面を持つ点が特徴的で、杯部下半にはヘラ描きの鋸歯文を施す。やや雑な印象を受ける。残存部最下段のヘラ描きは鋸歯文と断定できないが、鋸歯文としてもその上とはピッチが異なる。文様帯の区画は最上段は突線であるが、下に下がるにつれ凹線状となり、最下段はヘラ描き沈線である。362の杯部はやや浅めになるかもしれない。文様帯の区画は一部低い突線によるがほとんどが凹線である。杯部下半にはカキ目を施す。363は直線的にひろがる脚部で三角形透かし穴を3段以上6列（残存部から推定）配置する。裾部の形状から筒形器台の可能性もある。399は小片であるが傾きや形状から蓋または筒形器台の裾から筒部への屈曲部に相当する可能性がある。ただし、蓋とするとやや径が大きすぎるようである。屈曲部には鋭い突帶2条以上が、ほぼ平坦な面には簾状文が施される。外面には淡緑灰色の釉がかかる。

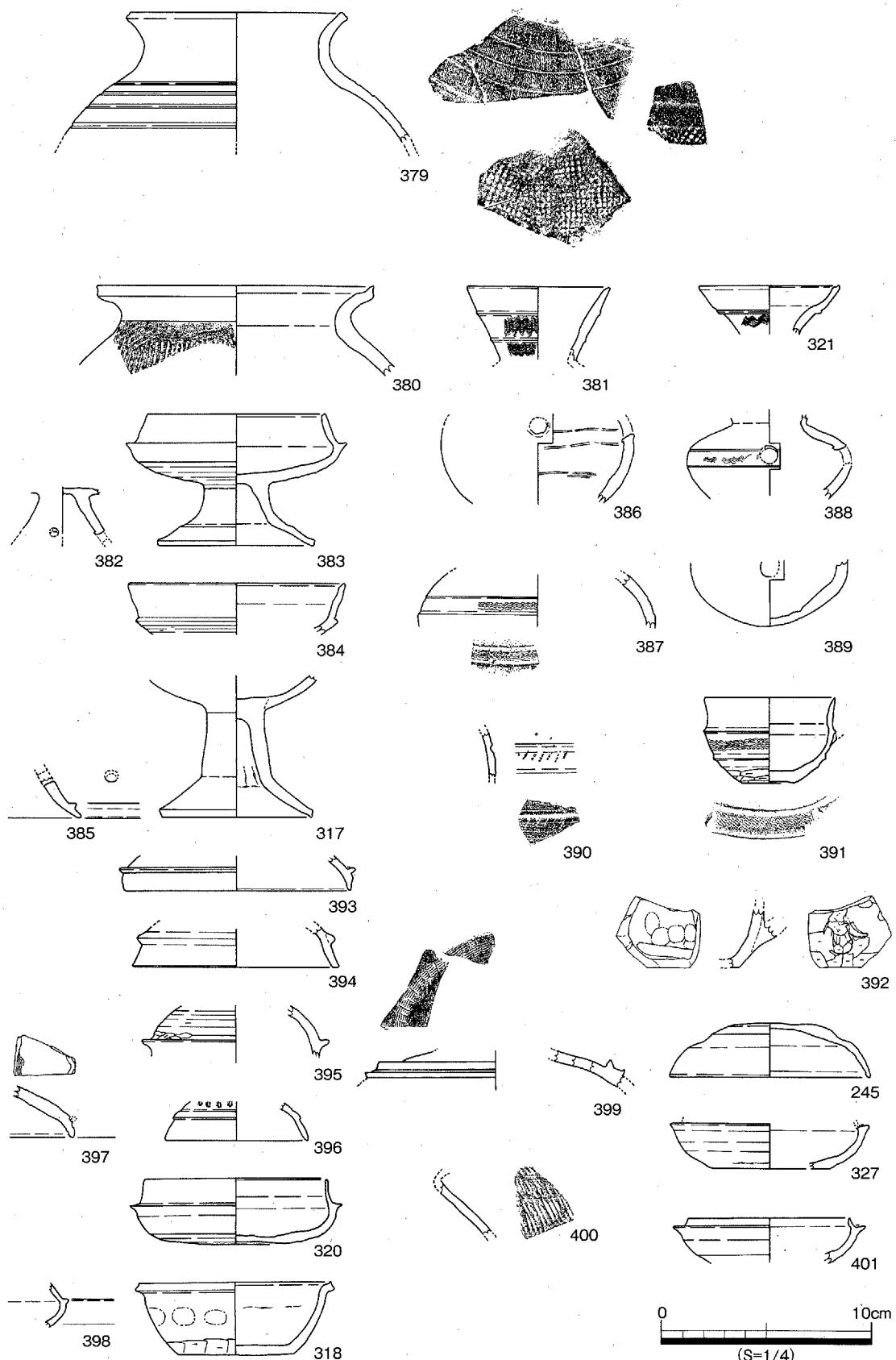
365～380, 400は甕又は壺である。端部を丸く收め、端部外面やや下に突帶を持つタイプ、端部に面を作り外面に低い突帶を持つタイプ、端部に面を作るが突帶のないタイプがある。368については平安時代まで下るかもしれない。379は体部下半を接合することができなかつたが、体部上半に細かい繩蓆、下半に格子タタキ痕がつけられ、繩蓆文の上から螺旋状？に磨り消している。380は体部上半に粗い繩蓆タタキが施されている。400は褐色で薄いつくりの体部上半片であるが、縦方向の平行タタキを螺旋状？に磨り消す。378は格子タタキのある甕の体部であるが焼け歪み、須恵器の融着が見られる。

317, 382～385は高杯である。383は短脚であるが裾部に低い突帶（段に近い）が付き、317は脚柱部と裾部の境界が明瞭で稜をなし部分的に段が付く。384は無蓋の高杯としたが蓋になる可能性もある。382, 385は円形透かしがある。

386～389はハソウである。386, 389は体部下半に砂粒の動きが見えるが静止ヘラケズリにしては単位がはっきりしない。388は当たりが浅くはっきりしないが波状文を2段つける。390は小片のためはっきりしないがハソウ体部の一部となる可能性がある。391, 392はコップである。両者とも底部を静止ヘラケズリするが、392の方が直線的に立ち上がる。391は長く直線的に立ち上がる口縁、丸みを帯びた体部で口縁径に比べ底部径が小さい。

393～397は蓋である。393, 395は細く大きく突出した明瞭な突帶をもつ。395は突帶より上を幅4～5mm程の狭い単位でナデ、稜線が明瞭である。部分的に静止ヘラケズリが見られる。396は小形で突帶は低く傾斜も緩い。突帶上方に刺突文を施す。397は突帶を欠損するが天井部近くに波状文が施されている。調整は回転ヨコナデと思われるが単位は1～2mm幅と細かい。

320, 398は杯身で立ち上がりは長く、受け部はシャープで水平に伸びる。体部は受け部より外へ膨らむことはない。318は口縁を短く外反させ端部にシャープな面をつくる杯である。体部外面下半は静止ヘラケズリ、中央付近はユビオサエで凹凸が激しい。それ以外は回転ヨコナデ調整で仕上げる。体部に火檻のような痕がつく。



379 : C219・269, 380 : C44, 381・394・399 : A区包含層, 382・384・385・390・395 : B区第6層, 383 : C272  
 386・389・397 : C220, 387 : B区第5層, 388 : D区第6層, 391 : B583, 392 : C183, 393 : C区包含層, 396 : C区側溝  
 398 : C47, 400 : F区包含層, 401 : C183

図V-2 出土須恵器実測図

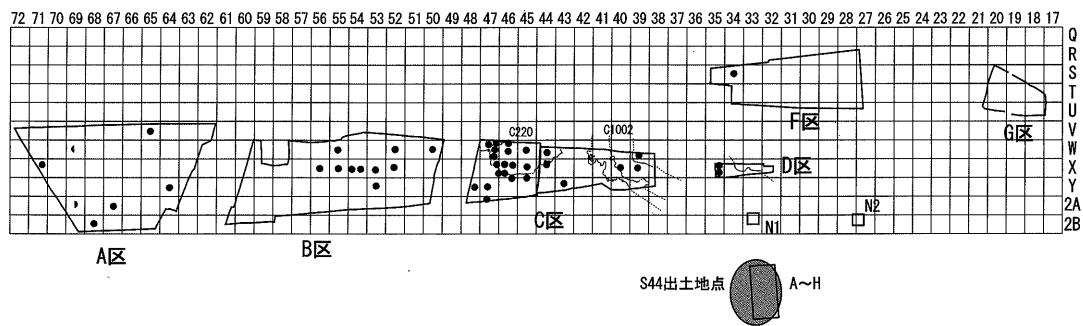
時期については一括遺物でないことと初期須恵器であるため個々について比定することは困難であるが陶邑出土遺物を参考（参考文献23）にすれば、245, 327, 401を除いて概ねI-3段階までに収まる資料といえる。ただしこの範囲内においてもかなりばらつきがあるような印象がある。壺、甕については小片が多いが、端部を丸くおさめる口縁の甕はI-1～2段階である。繩蓆タタキ+螺旋状磨り消しの379は日本には類例が少なく時期を推定することは難しい。高杯については長脚で透かし穴のない317はON231窯に類例がありI-1段階に収まると思われる。383は短脚で新しい要素を示すが裾部に低い突帯を持つ。コップは392に比べ391は丸みを持ち口縁が長い点で新しくI-3段階くらいであろうか。蓋の393, 395は突帯が明瞭な点に古い要素をもちI-1段階に属する。396については突帯は低く滑らかであるが刺突文様が、397には波状文が施されている。蓋についてはすべてI-1段階におさまる資料である。杯身は320, 398とも新しくI-3段階前後である。318は珍しい器形で判断に迷うが、径は異なるものの大庭寺遺跡から器形に加え底部ヘラケズリや指頭痕跡などの調整も類似した須恵器が出土している。I-1段階に属する可能性が高い。

次に胎土、焼成について見ると、数種類に分けることができる。

- ①胎土粗く1mm程度の長石目立つ〔焼成：断面赤灰色で硬質(371, 397)、断面青灰気味で硬質(373, 380, 386, 392)、灰白色でやや軟質(362, 365～367, 393, 399)〕
- ②胎土比較的密、黒色粒多く含む〔焼成：断面青灰気味で硬質(383, 385)、断面青灰気味・表面黒色で硬質(374, 384)、灰色でやや軟質(317, 364, 379, 381)〕
- ③胎土密〔焼成：断面赤灰色で硬質(369, 378, 387, 396)、断面薄赤灰又は外灰・内赤灰のサンドイッチ構造で硬質(320, 382, 388, 390, 391)、断面青灰気味で硬質(377, 394, 395)、断面青灰～極薄赤灰・表面黒色で硬質(361, 363, 372, 375)、灰色でやや軟質(318)〕

胎土、焼成と時期・器種については特に関連は見当たらない。あえて言えば胎土の粗いものに大形品が多い傾向にあるかもしれない。少なくとも多様な焼き具合、胎土の須恵器が混在している状況が確認できる。

次に出土地点について見ると、ほとんど遺構からの出土ではないので意味は半減するが、C1002自然流路左岸が3点、流路内あるいは上で4点、右岸C220落ち込みを中心とする地点に21



図V-3 初期須恵器出土位置

点、B区中央付近に9点、B区北東端に1点、A区全体に散在して7点出土している。上層出土遺物も含むが特徴的な分布を示している。第1はC1002左岸（東側）からはほとんど出土がなく右岸（西側）に集中する点、第2は流路内あるいは流路上にはほとんどなくC220付近、B地区中央付近に分布の中心がある点である。なお、以上は掲載遺物についてのみの分析であり、甕体部片など他にも実測不能な破片は存在するが、全量実見した印象では上記の傾向から大きくは外れない。

第1点については左岸側はすぐに落ち込むため古墳時代にはほとんど利用されていなかつたことが推測される。第2点については流路の機能時に敢えてC220付近に集中して集められていた（廃棄も含めた）可能性がある。仮に流路埋没後の自然堆積時に紛れ込んだのであれば流路上にもあった落ち込み部にC220と同等の分布があってもおかしくない。B地区中央付近についても当時の遺物集中を示す可能性はあるがはっきりしない。C238土坑(C220内)出土土器と接合する遺物が存在する。C220周辺と昭和44年調査時とは出土量に大きな差があるが類似した出土状況といえるかもしれない。C220については北側調査区外へ伸びるためより多くの初期須恵器が集中していた可能性は十分ある。

このほか須恵器窯体片と思われるものが4点出土している。スサが入り、表面に濃緑色、黄緑色の釉が付着するものがある。釉は1面だけでなく何箇所にも付着するものが1点あり、窯体から落下したかあるいは焼台等として使われていたものかもしれない。ただし、少量ながら245, 401など古墳時代後期以降の須恵器の出土もあるためこれらの窯体片が初期須恵器に関係するものかどうかは断定できない。しかし、378の焼け歪や近隣の鳴滝遺跡での焼け歪のある甕の状況から当地付近での初期須恵器生産の可能性が考えられる。

### 土壤分析結果について

ここで今回実施した土壤分析について簡単にまとめておきたい。

古墳時代中期についてはC1002自然流路の埋土を花粉分析4点、珪藻分析1点を実施したが花粉、珪藻化石ともに非常に少なく、乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境で常時滞水状態ではなかったとされている。発掘調査におけるC1002の検出状況を見てみると、平面形態では大きく蛇行し断面形もなだらかで自然流路と考えるのが妥当である。土層堆積状況については、最下層X'層が粗砂礫を含む暗灰黄色シルト、その上にVI層：黒褐色シルト、IV層：暗灰黄～灰黄色中砂、II層：褐灰色シルト、I層：褐灰・黒褐色シルトの自然堆積で中砂や3mm以内の砂礫を含む層が介在することから緩やかな流水の時期があり、その間にシルト質の堆積が示すような流水のない時期があったと考えられる。このシルトは黒灰色系で完全な還元状態ではないが十分な酸化もされていないある程度水分を含んだ状態での堆積と観察できる。

これらの分析結果と調査結果両者を考えた場合、砂層では流水があったが花粉・珪藻化石とも流出し、シルト層では予想以上に乾燥した時期がったため酸化分解した可能性がある。砂層

でも花粉化石については残存する可能性があるため分析対象としたが、いずれにしても周辺環境の復元に有効な結果を得ることができなかつた。

平安時代～室町時代を対象にしたG区壁資料についても、第G16層（平安時代）を除いて花粉・珪藻化石ともほとんど検出されなかつた。灰色系のシルトを対象としたが上記と同様予想以上に乾燥していたため残存しなかつた可能性がある。

平安時代と室町時代についてはやや距離は離れるがG区壁第G16層（平安時代）とB334溜枠、B19土坑（室町時代）で良好な結果を得ることができた。平安時代はシイノキ属、アカガシ亜属を主体とする照葉樹林が優勢であったのに対し、室町時代になると草木が増加し、樹木では少量の検出であるが照葉樹林よりマツ属複維管束亜属など針葉樹からなる二次林の比率が高くなる。B区とG区の距離の影響を考慮しなければならないが、このことは平安時代末から鎌倉時代に開発に伴い照葉樹からなる森林植生が急激に破壊され平坦地に草木が増加した可能性を示している。

#### 遺跡の変遷について

第2章では各地区ごとに各時代の遺構について記述したが、最後に調査区全体で各時期の遺構変遷を概観してみたい。

縄文時代についてはB, C区で土坑、ピット、落ち込み、自然流路を検出したが確実に人為的に掘削された遺構は確認できなかつた。

縄文時代晩期～弥生時代になると標高の高く地盤の安定しているA区とF区に土坑やピットが造られB区には自然流路が流れる。またC区には竪穴住居跡の可能性もあるC1031方形土坑が造られるが確証はない。A, B, F区では遺構面の直上が鎌倉時代末の堆積層であることから削平により遺構が消失した可能性はあるが遺物の出土量から考えてもそれほど密度は高くなかったと考えられる。時期については前期までの資料のみでそれ以降の遺物は確認できていない。

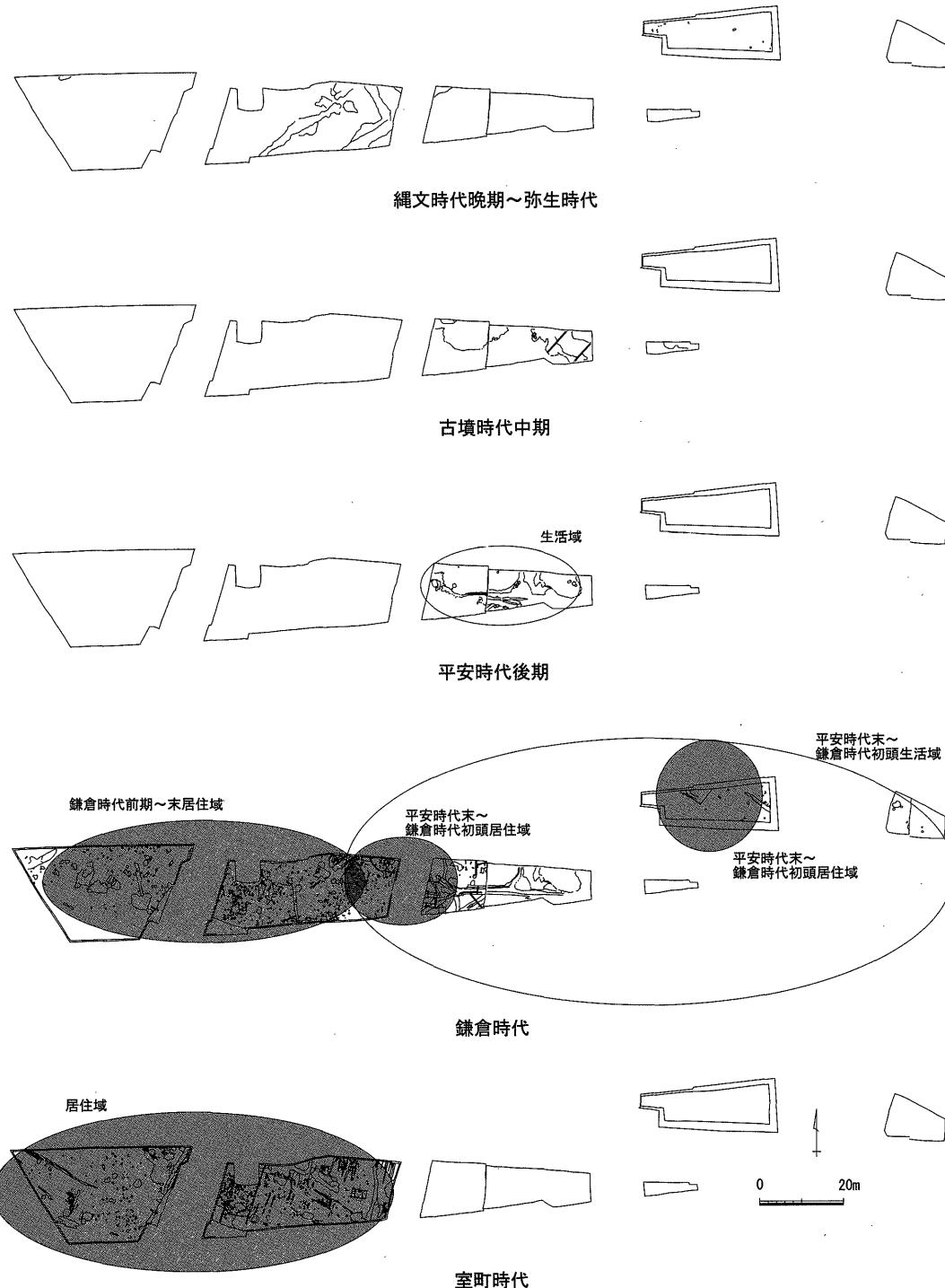
古墳時代になっても前期に属する遺構、遺物は見られない。古墳時代中期になるとC～D区にかけて自然流路と土坑があり一定量の初期須恵器が出土するが弥生時代と同様密な分布ではなさそうで、生活の痕跡ははっきりしない。また縄文から古墳時代までは少なくともG区付近で急激に落ち込み谷状地形になっていたと考えられる。

このあと平安時代まで遺構・遺物とも検出されない空白期間となる。平安時代後期になるとC区に多数の自然流路ができ井戸、水溜、土坑などが造られ遺物量も多くなる。しかし古墳時代を含めてややレベルが低く自然河川が流れるようなC区に遺構・遺物が多く、地盤の安定しているA, B区には確認できない。この時期になるとG区付近の谷部も急速に堆積が進みC区付近と同レベルとなる。

平安時代末～鎌倉時代になるとC区西からA, B区にかけて掘立柱建物、屋敷墓（土壙墓）、土坑などが造られ急激に遺構密度が高まり、居住域として利用されるようになる。C区は西端を

除き前時代と変わらず流路が形成されるような低地で水溜や土坑以外は検出されない。

遺構・遺物の分布から細かく見ると、平安時代末～鎌倉時代初頭頃にC区西端からB区東端部にかけてとF区が居住域となり、その後鎌倉時代前期以降にはA, B区に居住域の中心を移す。この時期の特徴として柱抜き取り後に瓦器椀や土師器皿が据えられた柱穴をあげることができるが、B687の土釜を除けばC区西からB区東に分布する平安時代末～古墳時代初頭の柱穴に限られ



図V-4 楠見遺跡変遷図

るようである。

室町時代に入つてもA,B区は変わらず居住域として利用されている。この時期になると井戸や水溜は前時代までのC区やG区のような流路近くではなく建物付近のB区に造られている。

以上のような平安時代～室町時代への変遷は、平安時代以降照葉樹林が減少し草木が増加するという土壌分析結果を開発に伴う森林破壊とする解釈に一致する。また、平安時代から鎌倉時代にかけて少なくともC区では連続して遺構が造られることから隣接するA,B区で大規模な削平により遺構が失われた可能性は少なく、平安時代末になってC区西端から西へ向かいA区まで順に開発が行われたと考えるほうが自然である。この後、江戸時代になると耕作地として利用されるようになる。

このように今回の調査では、当初予想していた古墳時代中期の遺構・遺物はほとんど発見されなかつたが、中世集落の存在を確認できたことは大きな成果であった。

#### 参考文献

1. 菅田香融他1971「楠見遺跡の調査」『和歌山市における古墳文化－晒山、縊綱寺谷古墳群・楠見遺跡調査報告－』和歌山市教育委員会
2. 藤藪勝則2002「楠見遺跡発掘調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報』和歌山市教育委員会
3. 乗岡実2000「備前焼擂鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会
4. 中世土器研究会編1995『概説中世の土器・陶磁器』
5. 鋤柄俊夫1995「大阪府南部の瓦質土器生産(1)」『日置荘遺跡』大阪府教育委員会
6. 川口修実2002「和歌山県における中世前期の墳墓」『紀伊考古学研究第5号』紀伊考古学研究会
7. 北野隆亮2005「和歌山平野における瓦器の分類と変遷－紀伊型瓦器碗の認識とその評価－」『紀伊考古学研究第8号』紀伊考古学研究会
8. 全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年」実行委員会編2005『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年発表要旨集・資料集』
9. 森田勉1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No. 2』日本貿易陶磁研究会
10. 上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No. 2』日本貿易陶磁研究会
11. 武内雅人1986「和歌山県における9～11世紀の土器－紀伊にみられる律令的土器様式の終焉と中世的土器様式の成立－」『中近世土器の基礎研究II』日本中世土器研究会
12. 九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』
13. 武内雅人他1984『鳴神地区遺跡発掘調査報告書 一般国道24号バイパス関連遺跡発掘調査』和歌山県教育委員会
14. 渋谷高秀他1985『野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書 海南湯浅道路建設に伴う関連遺跡発掘調査』和歌山県教育委員会
15. 永光寛1990『稻成遺跡－一般国道42号（田辺バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』財団法人和歌山県

文化財センター

16. 仲原知之2002「粉河寺防災事業に係る発掘調査」『重要文化財粉河寺大門修理工事報告書』和歌山県、粉河寺
17. 土井孝之1991『西田井遺跡発掘調査報告書－一般国道24号（和歌山バイパス）建設に伴う発掘調査－』財団法人  
和歌山県文化財センター
18. 植田法彦1994『和歌山県海南市 海南市内遺跡発掘調査概報－平成5年度－』海南市教育委員会
19. 西口陽一編1994『野々井西遺跡・ON231号窯跡近畿自動車道松原すさみ線建設工事に伴う発掘調査報告書』((財)  
大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第86輯) 大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会
20. 富加見泰彦・山上雅弘編1990『須恵・大庭寺遺跡II』((財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第50輯) 大阪府教  
育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会
21. 藤田憲司他1995『須恵・大庭寺遺跡IV』((財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第90輯) 大阪府教育委員会・財  
団法人大阪府埋蔵文化財協会
22. 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
23. 中村浩2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
24. 和歌山市史編纂委員会1991『和歌山市史』和歌山市

付表1 遺構検出状況一覧表

遺構名	調査区名	地区名	層位	遺物	遺構埋土	調査時検出面	遺構上面を覆う土層	切り合い	遺構時期	本来の検出面	備考
遺物包含層	A区	—	5	瓦質擂鉢(16c)、染付、瓦質羽釜(15c)、瓦質壺、擂磨系土師器釜、備前焼擂鉢、青磁、平瓦、土師器片、瓦器碗(～14c)、瓦器皿、土師器皿、東播片口(12c末～13初)、陶器片、土師器碗、弥生or縄文底部、鉄片、サヌカイト片	—	—	—	—	—	—	16c代の堆積か?
遺物包含層	A区	—	6	備前焼擂鉢、瓦器碗(～14c)、瓦器皿、土師器皿、土師器鍋、土鍤、常滑燒窯、東播系須恵器片口(12c末～13c初)、糸切り土師器碗、土師器碗、陶器、白磁、須恵器、土師器高杯、土師器直口壺、弥生壺底部、鉄片	—	—	—	—	—	—	14c代の堆積か?
A区素掘り溝	A区	埋土中	染付、瓦器、土師器、土鍤、須恵器	第4層	第5層上面	第4層?		近世	第1遺構面 (第5層上面)		
A1流路①	A区	Y63, 2A63 粗砂礫 Y63, 2A64 下部粗砂 砾 堤	瓦、陶器、須恵器、備前?擂鉢	固有埋土	第5層より上	?		近現代	—		
A1流路②	A区	Y63, 2A63 -64 側溝、第5層面検出時	丸瓦(外面丁寧な磨き)、平瓦、陶器、土師器、染付、焼焼擂鉢?瓦器(13c)、白磁		第5層より上	?		近現代	—		
A7流路	A区	2A64南壁 埋土中	擂鉢、瓦器、土師器	固有埋土	第5層より上	?		近世	第1遺構面		
		2A63, 2A64 灰色粗砂 砾	平瓦、陶器、砾焼?擂鉢、瓦質土器、土師器								
		Y64 淡青灰色 砂質シルト	瓦質土器甕								
		2A64 青灰色粘土	焼焼?擂鉢、瓦質羽釜、陶器、青磁、土師器皿、土師器								
		X63, Y63, 2A64 青灰色粘土	瓦器1、陶器、瓦、平瓦(外面継磨き)、備前焼								
		2A64 青灰色粘土一部下 部 灰色粗砂礫	瓦質?擂鉢、備前焼擂鉢、土師器甕?瓦、土師器、須恵器								
		7A64, Y63 5類似土	瓦器、備前甕、炮焼?瓦質羽釜、土師器		第5層類似土 上面	?		室町～近世	第1遺構面		
		X63, Y63 疊混 青 灰色粘土	瓦器、土師器、須恵器、備前焼、瓦質羽釜		第5層類似土 上面	第5層類似土		室町時代	第2遺構面		
		2A64 青灰色 疊 混合粘土	瓦器2、備前、土師器								
		Y63 褐色疊	土師器、土師器甕?口縁								
		Y63 砂質シルト 疊青灰色 赤褐色	備前甕?	固有埋土	?	?		室町～近世	?	図面との対応できず	
		2A64 灰色疊層	土師器、須恵器								
		Y63, 2A64 灰色砂質土	磁器、備前焼、土師器								
		Y64 灰褐色シルト	土師器、須恵器								
A11土坑	A区	Y70 粗砂礫	唐津焼大皿、瓦器、土師器	?	第6層上面	?	A16に切られる	近世	第1遺構面 (第5層上面)		
A26溝	A区	V63 上	瓦器、土師器、常滑窯(15c前後)、炭化材、漆器皿、須恵器	第α層	ベース上面	第α層		室町時代	第2遺構面 (第6層上面)		
		V63 下	瓦器、土師器、青磁、鉄片	?							
A28落ち込み	A区	V62-63- 64, W64 埋土中	瓦器、土師器、須恵器	第α層	第6層上面	第5層		室町時代	第2遺構面 (第6層上面)		
		V62-63- 64, W63, X 63, 64 上	瓦質土器甕、瓦器、青磁、備前焼擂鉢、平瓦、土師器、土師器鍋、陶器、須恵器(格子付)、石								
		V63 下	須恵器								
A39土壤墓	A区	X67 底面	瓦器碗1、土師器皿4、鉄錆1、人骨	固有埋土	ベース上面	第5層		鎌倉時代	第3遺構面 (ベース上面)	副葬遺物	
		X67 埋土中	瓦器、土師器、土鍋								
A66土坑	A区	V62 埋土中	陶器、青磁、石臼	第α層	ベース上面	第α層		室町時代	第2遺構面 (第6層上面)		
A67土坑	A区	X63 埋土中	元豊通宝1078年、瓦器、土師器皿、土師器碗、陶器、東播系須恵器片口、須恵器	?	ベース上面	第α層		鎌倉～室町時代初頭	第3遺構面 (ベース上面)	元豊通宝1078年	
A195土坑	A区	V69 底面	砥石、石、弥生土器	固有埋土	ベース上面	第6層	A196(6層) に切られる	弥生時代前期	第3遺構面 (ベース上面)		
		V69 埋土中	瓦器、土師器皿							混入	
A218土壤墓	A区	X66 底面	瓦器碗1、人骨	固有埋土	ベース上面	第5層	A40(6層) に切られる	鎌倉時代	第1遺構面 (第5層上面)		
		X66 埋土中	瓦器碗、瓦器皿、土師器皿								

遺構名	調査区名	地区名	層位	遺物	遺構埋土	調査時検出面	遺構上面を覆う土層	切り合い	遺構時期	本来の検出面	備考
包含層	B区	—	第5層	染付、瓦質土器、平瓦(丁寧なヘラ磨き)、青磁、白磁、備前焼擂鉢、土師器釜、東播系須恵器片口、瓦器碗(~14c)、土師器皿、土錘、土師器椀、須恵器、粘土塊	—	—	—	—	—	—	14c代の堆積か?
包含層	B区	—	第6層	瓦器(~14c)、瓦器皿、土師器皿、東播系須恵器片口、土師器釜、青磁、白磁、須恵器、鉄片	—	—	—	—	—	—	14c代の堆積か?
包含層	B区	—	第7層	土師器	—	—	—	—	—	—	—
包含層	B区	—	第8a層	繩文土器?、サヌカイト、石	—	—	—	—	—	—	—
包含層	B区	—	第9b層	繩文土器?	—	—	—	—	—	—	—
包含層	B区	—	第9層	繩文土器?サヌカイト	—	—	—	—	—	—	—
包含層	B区	—	第10層	繩文土器?石器?	—	—	—	—	—	—	—
包含層	B区	—	第11層	繩文土器?	—	—	—	—	—	—	—
B区素掘り溝	B区	—	埋土中	土師器、瓦器、土錘、白磁、須恵器、瓦、土釜	第4層	第5層上面	第4層?		近世	第1遺構面(第5層上面)	
B1方形土坑	B区	X55	埋土中	潮戸美濃皿	燒土	第5層上面	?		近世	第1遺構面(第5層上面)	
掘立柱B-a (B2~B7, 17柱穴)	B区	V53, W52 ~54, X53~54	埋土中	瓦器、土師器、焼土塊	4層、燒土	第5層上面	?	素掘り溝を切る	近世	第1遺構面(第5層上面)	
B14井戸	B区	2A58	井側内 ~40cm	瓦器、擂磨系土師器鍋、土師器、須恵器、石	固有埋土	第6層上面	第5層		室町時代	第2遺構面(第6層上面)	
		2A58	井側内 ~40cm~	瓦質羽釜、瓦器、土師器鍋、土師器、須恵器、石							
		2A58	灰色礫混 粘質土 ~40~ 100cm	瓦器 1							
		2A58	II層に礫 混石組内 ~70~ 100cm	瓦器、土師器							
		2A58	青灰色粘 土礫混 ~150~ 190cm	土師器、石							
		2A58	堀方 ~40cm	瓦器、土師器皿、東播系須恵器片口							
B19土坑	B区	X50	土坑内 40~80 cm	瓦器、酸化焰備前焼、土師器、木器、石	固有埋土	第6層上面	第5層		室町時代	第2遺構面(第6層上面)	
		X50	土坑内 灰白色粘土 ~80cm以下	瓦器、土師器、繩文?							
		X50	堀方 0~ ~20cm	瓦器、焼土塊							
		X50	堀方~20 ~40cm	瓦器、土師器、炭							
B21区画溝	B区	W51, 56, 5 7, Y51	埋土中	瓦器碗、土師器皿、須恵器、焼土塊、土錘、石	第5層	第6層上面	第5層		室町時代	第2遺構面(第6層上面)	東西ベルト
		W51, X51, Y51, 2A51	上	瓦器、土師器、焼土塊(壁?)、須恵器							
		W51, X51	下	瓦器、土師器、粘土塊、須恵器(ハソウ?)							
B25焼土坑	B区	2A52	埋土中	土師器、炭化材	第5層、燒土	6層上面?	第5層		室町時代	第2遺構面(第6層上面)	炭化材、完掘掃除
		2A52	上	瓦器、土師器、須恵器、焼土塊(壁?)							
B26土坑	B区	2A55	埋土中	瓦器、備前焼?、土師器、粘土塊、石	第5層	第5層	第5層		室町時代	第2遺構面(第6層上面)	
B201柱穴(B-d)	B区	V51	下部	瓦器 1、土師器皿 1	第6層	側溝	第6層		平安時代末 ~鎌倉時代	第3遺構面(第8a層上面)	
B334溜枡	B区	W55	石組内	平瓦、瓦器	固有埋土	第6層上面	第5a層		室町時代	第12間遺構面(第5b層上面)	石組内乱れてい る
		W55	上	粘土塊							
		W55	-30~60 cm	平瓦、瓦質土器、瓦器、土師器、須恵器、石							
		W55	裏込め	粘土塊							
B346溝	B区	Y50, 2A52 51, 2A52	シルト 細砂	瓦器、繩文or弥生 1	粗砂礫	第8a層上面	第6層		繩文時代晩 期~弥生時代前期	第3遺構面(第8a層上面)	瓦器は別ビット出土
		Y50, 51, 2A52	粗砂礫	瓦器、土師器片?、繩文土器							
B348土坑墓 (木棺墓?)	B区	2A58	底面	人骨	固有埋土	第8a層上面	第6層	B14(5層)に 切られる	鎌倉時代	第3遺構面(第8a層上面)	
		2A58	埋土中	瓦器、土師器、須恵器							
B350土坑	B区	W50	埋土中	瓦器、土師器	?	第8a層上面	第6層	B355(6, 8 層)を切る	平安時代末 ~鎌倉時代	第3遺構面(第8a層上面)	
B353土坑	B区	W50	埋土中	瓦器 2	第6層	第8a層上面	第6層		平安時代末 ~鎌倉時代	第3遺構面(第8a層上面)	

遺構名	調査区名	地区名	層位	遺物	遺構埋土	調査時検出面	遺構上面を覆う土層	切り合い	遺構時期	本来の検出面	備考
B355溝	B区	X50, Y51, 52	埋土中	縄文or弥生土器、擂鉢	固有埋土	第8a層上面	第6層	B346(粗砂礫)、6層埋土遺構に切られる	縄文時代晚期～弥生時代前期	第3遺構面(第8a層上面)	擂鉢は上面ピット
B368土坑	B区	W55	埋土中	土師器1	?	第8a層上面	第5層	B1(4層?)に切られる	室町時代	第2遺構面(第6層上面)	東西ベルト
		W55・56 X55・56	上 0～20cm	陶器、瓦器、土師器皿、土師器鍋、須恵器、須恵器(三角すかし)							
		W55・56 X55・56	下 ～20～40cm	瓦質土器擂鉢・甕、陶器、瓦器1、土師器、粘土塊、須恵器							
		W55・W56	I, II層	瓦質土器、瓦器、土師器皿							
		W55・W56	III層	瓦器、土師器、須恵器							
		W55・W56	V, VII層	瓦器、土師器							
B380落ち込み	B区	W57, X56, 57	埋土中	瓦器、土師器皿、土師器鍋、土師器、平瓦(離れ砂面、コビキ)、須恵器、粘土塊、サヌカイト片	第6層	第8a層上面	第5層	5, 6層埋土遺構に切られる	鎌倉～室町時代初頭	第3遺構面(第8a層上面)	
B427柱穴(掘B-d)	B区	W50	底面	瓦器焼、土師器皿	第6層	第8a層上面	第6層		平安時代末～鎌倉時代	第3遺構面(第8a層上面)	
			埋土中	瓦器2、土師器1							
B428ピット	B区	W50	埋土中	瓦器焼、瓦器皿、土師器	第6, 8層混在土	8層上面	第6層		平安時代末～鎌倉時代	第3遺構面(第8a層上面)	
B435柱穴(掘B-d)	B区	W51	埋土中	瓦器皿	第6層	第8a層上面	第6層		平安時代末～鎌倉時代	第3遺構面(第8a層上面)	
B687ピット	B区	Y58	底面近く	土師器釜	第6層	第8a層上面	第6層		鎌倉～室町時代初頭	第3遺構面(第8a層上面)	
B727ピット	B区	W51	埋土中	瓦器1、土師器皿2	第6層	第8a層上面	第6層	B728(6, 8層)を切る	平安時代末～鎌倉時代	第3遺構面(第8a層上面)	
B743柱穴(掘B-o)	B区	W51	埋土中	白磁	第6層	第8a層上面	第6層		平安時代末～鎌倉時代	第3遺構面(第8a層上面)	
B744柱穴(掘B-d)	B区	W50	底面近く	瓦器1、瓦器皿、土師器皿	第6層	第8a層上面	第6層		平安時代末～鎌倉時代	第3遺構面(第8a層上面)	
B751土坑	B区	Y50-2A50	埋土中	縄文？6	固有埋土	第8b層上面	第8a層		縄文時代	第4遺構面(第8b層上面)	
包含層	C区		第5層	瓦器、土師器、須恵器、瓦(凸面ヘラ磨き)、土釜、白磁、青磁、東播系須恵器片口、陶器、土錐	-	-	-	-	-	-	
包含層	C区	-	第6層	瓦器、土師器、須恵器、黑色土器、土師器壺	-	-	-	-	-	-	
包含層	C区	-	第8a, b層	縄文土器？	-	-	-	-	-	-	
包含層	C区	-	第9層	縄文土器、石族、サヌカイト	-	-	-	-	-	-	
包含層	C区	-	第10層	縄文土器、サヌカイト	-	-	-	-	-	-	
包含層	C区	-	第11層	縄文土器、サヌカイト	-	-	-	-	-	-	
C区兼掘り溝	C区	-	埋土中	瓦器、土師器、須恵器、土釜、石器	第4層	第5層上面	第4層？		近世	第1遺構面(第5層上面)	
C12pit	C2区	W44	埋土中	土師器、ての字皿、土師器鉢？土師器碗2	固有埋土	C48落ち埋土上面？	第5層		平安時代後期	第3-2遺構面(第7層上面)	
C20溝	C2区	W・X42	上	瓦器(12c)、土師器、白磁片	?	第7層上面	第5層		平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(A層上面)	
			X43	瓦器、土師器片							
C47落ち	C2区	W41	下	土師器、ての字皿、土師器鉢、須恵器、須恵器(格子タタキ)	固有埋土	第7層上面	第5層		平安時代	第3-2遺構面(第7層上面)	
		W39, X39, X40	埋土中	土師器片、須恵器片							
C48落ち	C2区	W43-44, X44	埋土中	土師器片	固有埋土	第7層上面	第5層		平安時代～鎌倉時代	第3-2遺構面(第7層上面)	
		X-Y42-43, X44	上	瓦器片(外ミガキ)、土師器、ての字皿、須恵器壺							
		W43	下	土師器皿、須恵器片							
C50溝	C2区	X41-Y41	埋土中	土師器、土師器高台	?	第7層上面	第5層		平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(A層上面)	
		X44-Y44	上	土師器片							
		X41-43-44, Y41-43-44	下	瓦器(外ミガキ)、土師器、土師器壺							
C51-2	C2区	W42, X41-42	埋土中	黒色土器、土師器皿、土錐、ての字皿、土師器碗、須恵器壺、須恵器、石	?	第7層上面	第5層		平安時代後期	第3-2遺構面(第7層上面)	
C51-1	C2区	Y41-42	埋土中	瓦器、土師器釜、土師器皿、土師器碗、須恵器片？ての字皿、土師器壺片、埴輪、石	?	第7層上面	第5層		平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(A層上面)	
C53水溜	C2区	X43	埋土中	瓦器、土師器片、石	固有埋土	第8a層上面	C20溝埋土		平安時代後期	第3-2遺構面(第7層上面)	埋没は鎌倉時代
		上 0～40cm	瓦器、土師器、須恵器								
		X42	下	瓦器小片、土師器片、石							
		X43	最下	土師器片1							
		X43	掘方	土師器碗、土師器、ての字皿、黒色土器片、炭？鉄片							

遺構名	調査区名	地区名	層位	遺物	遺構埋土	調査時検出面	遺構上面を覆う土層	切り合い	遺構時期	本来の検出面	備考
C64溝	C 2 区	X42, Y44	埋土中	土師器、土師器碗、黒色土器	?	第8a層上面?	第6層?		平安時代後期	第3-2遺構面(第7層上面)	
C134土坑	C 1 区	X45	埋土中	土師器皿、ての字皿、土師器碗	固有埋土	第A層上面	第5層?		平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(第A層上面)	
C135土坑	C 1 区	X45	埋土中	瓦器、土師器片、ての字皿、土錘、須恵器、鉄、炭、石(砥石?棒状)	固有埋土	第A層上面	第5層?	178, 179(6層埋土)を切る、切られる。	平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(第A層上面)	
C182柱穴	C 1 区	Z447	埋土中	瓦器、土師器、土師器鍋、石	固有埋土	第8a層上面	第6層		平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(第8a層上面)	
C281柱穴	C 1 区	Z447	埋土中	瓦器、土師器	固有埋土	第8a層上面	第6層		平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(第8a層上面)	
C185溝	C 1 区	Y46-47	埋土中	瓦器(外ミガキ)、土師器、糸引き土師器皿、須恵器片	?	第6層上面	第5層	180に切られる	平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(第A層上面)	第6層薄く下部遺構が見えていた可能性大
C186溝	C 1 区	W46-47・X47	埋土中	瓦器、土師器釜、土師器片、糸引き土師器皿、ての字皿	?	第A層上面	第5層?	184に切られる	平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(第A層上面)	
C190土坑	C 1 区	W46	埋土中	瓦器、土師器、瓦、須恵器片須恵器片、石	?	第A層上面	第6層		平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(第A層上面)	
C192溝	C 1 区	X45-46・47	埋土中	瓦器、土師器、土錘、土釜、須恵器、須恵塊?	?	第6層上面	第5層		平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(第A層上面)	第6層薄く下部遺構が見えていた可能性大
C192溝内(216pit?)	C 1 区	X45	溝底面	瓦器	?	?	C192埋土		平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(第A層上面)	
C195溝	C 1 区	Y46	埋土中	瓦器、土師器、土鍋、糸引き土師器片	?	第6層上面	第5層	192に切られる	平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(第A層上面)	第6層薄く下部遺構が見えていた可能性大
C211落ち	C 1 区	X45	埋土中	把手、ての字皿、黒色土器、土師器碗、土錘、土師器蓋	A'層	第A層上面	第6層	134, 135に切られる	平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(第A層上面)	
		W45 上		土師器、土師器碗?石							
C213ピット	C 1 区	W46	A層	土師器片、黒色土器片、土師器壺	A'層	?	第6層	211に切られる	平安時代後期?	第3-2遺構面(第6層上面)	
		W45	?	土師器(古い)、須恵器杯身(集石下c層)	第7層	第A層上面	第6層		平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(第A層上面)	集石と杯身関係ない?
C217溝?	C 1 区		第6層	なし	第6層	第8a層上面	第6層		平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(第8a層上面)	
C218a溝	C 1 区	Y45-46	第6層	土師器片(二重口縁)、須恵器	第6層	第8a層上面	第6層		平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(第8a層上面)	
C218b溝	C 1 区	Y46	第6層	土師器片	第6層	第8a層上面	第6層		平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(第8a層上面)	
C218溝	C 1 区	Y45	第6層	瓦器、土師器、土師器碗、土師器高杯、把手、須恵器	第6層	第8a層上面	第6層		平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(第8a層上面)	
C220落ち	C 1 区	W45-46-47, X45-46-47	A層	瓦器、土師器片、黒色土器、ての字皿、土師器碗、土師器壺、須恵器	第A層	第8a層上面	第6層		平安時代後期	第3-2遺構面(第8a層上面)	
		W45-46-47, X46	B層	土師器、土師器碗、土師器壺、黒色土器、ての字皿、土師器高杯、須恵器、石器							
		W45-46, X46	C層	土師器、黒色土器、土師器壺、須恵器片							
C237pit	C 1 区	X46	A層	土師器皿、土師器片	A'層	第8a層上面	A'層		平安時代後期	第3-2遺構面(第B層上面)	第3-2遺構面の可能性あり。
C238土坑	C 1 区	W47	埋土中	土師器片、土師器碗、須恵器、土師器壺4	A'層	第8a層上面	C層	C279を切る	平安時代後期	第3-3遺構面(第8a層上面)	
C247土坑	C 1 区	Y48	埋土中	土師器片、土師器皿、土師器壺	固有埋土	第8a層上面	A'層?		平安時代後期	第3-2遺構面(第8a層上面)	
		X47	上 0~20cm	土師器皿、ての字皿、土師器片							
		X47	中 20~50cm	土師器碗、土師器、瓦、土錘、須恵器							
		X46	下 50~100cm	縄文土器							
		X47	最下 100~130cm	土師器片							
C251土坑	C 1 区	X46	B層本来はA層?	土師器片、土師器碗、皿、土師器鉢?、土師器壺、須恵器	A'層?	B層上面	A'層		平安時代	第3-2遺構面(第8a層上面)	
C258土坑	C 1 区	X47	埋土中	土師器、ての字皿、土師器壺、	固有埋土	第8a層上面	A'層?		平安時代後期	第3-2遺構面(第8a層上面)	
C260柱穴(掘C-o)	C 1 区	Y47	埋土中	瓦器(外ミガキ)、土師器釜、土師器、糸切り土師器皿、白磁片、朱付石	?	第8a層上面	第6層		平安時代末～鎌倉時代	第3-1遺構面(第8a層上面)	
C279溝	C 1 区	Y45	埋土中	縄文～弥生土器片?	固有埋土	第8a層上面	C層?	C238に切られる	縄文時代晚期～弥生時代前期?	第3-3遺構面(第8a層上面)	
C1002b落ち	C 2 区	W40, 41, X41	埋土中	土師器、高杯片、縫口縁、須恵器片	?	第8a層上面	第7層?		古墳時代	第3-3遺構面(第8a層上面)	

遺構名	調査区名	地区名	層位	遺物	遺構埋土	調査時検出面	選擇上面を覆う土層	切り合い	遺構時期	本来の検出面	備考
C1002溝	C <sup>2</sup> 区	W40, X39-40	埋土中	土師器片、土師器壺or脚、高杯、須恵器	固有埋土	第8a層上面	第7層		古墳時代	第3-3遺構面 (第8a層上面)	
		W40-41, X39-40, Y39-40	上	土師器片、須恵器片							
		X38-39-40, Y39	中	土師器、土師器高杯、壺、須恵器片、須恵器高杯、石							
		X38-39-40	下	土師器片、須恵器片、須恵器杯、炭							
		X39-40	最下	土師器壺底部?土師器壺口縁							
C1003溝	C <sup>2</sup> 区	Y44	第6層?	土師器片、土師器壺、黒色土器	第6層?	第8a層上面	第6層		平安時代後期	第3-2遺構面 (第8a層上面)	
C1004水溜	C <sup>2</sup> 区	Y41	中	土師器片1	固有埋土	第8a層上面	第6層		平安時代後期	第3-2遺構面 (第8a層上面)	
C1010土坑 (C1002bP内)	C <sup>2</sup> 区	W42	埋土中	土師器、須恵器、石	?	第8a層上面	第7層		古墳時代	第3-3遺構面 (第8a層上面)	
C1012溝	C <sup>2</sup> 区		埋土中	なし	固有埋土	第8a層上面	第6層	C64に切られる	平安時代後期	第3-2遺構面 (第8a層上面)	C1013, 1014と同
C1013溝	C <sup>2</sup> 区	Y43-44	埋土中	土師器、土師器壺、土師器壺、白磁、土鉢、ての字皿、黒色土器	固有埋土	第8a層上面	第6層	C64に切られる	平安時代後期	第3-2遺構面 (第8a層上面)	C1003との関係?
C1014溝	C <sup>2</sup> 区	Y43, 44	埋土中	土師器、ての字皿、土師器壺、土鉢、黒色土器?ての字皿?土師器壺、骨	固有埋土	第8a層上面	第6層	C64に切られる	平安時代後期	第3-2遺構面 (第8a層上面)	
		Y44	下	土師器、把手							
		Y44	底部	骨、土師器、高杯脚、須恵器							
C1021流路	C <sup>2</sup> 区	Y39-40	粗砂礫	繩文土器片?	固有埋土	第8b層上面	第8a層		縄文時代後・晚期?	第4遺構面 (第8b層上面)	
C1031土坑	C <sup>1</sup> 区	X46	?	土師器、須恵器	固有埋土	第8a層上面	C層	C220に切られる	古墳?	第3-3遺構面 (第8a層上面)	
包含層	D区	—	第6層	土師器、須恵器	—	—	—	—	—	—	
D3落ち込み (C1002流路)	D区	X34-35	第7a, b層	土師器、須恵器杯身(生焼け)、埴輪	第7a, b層	第8a層上面	第7層		古墳時代	第3-3遺構面 (第8a層上面)	
D5円形土坑	D区	X35	埋土中	土師器	固有埋土	第8a層上面	第7a, b層		古墳時代	第3-3遺構面 (第8a層上面)	
包含層	F区	—	第F8層	土師器、土釜、瓦、鉄片	—	—	—	—	—	—	
包含層	F区	—	第F9層	土師器	—	—	—	—	—	—	
包含層	F区	—	第F10, 11層	土師器	—	—	—	—	—	—	
包含層	F区	—	第F13層	弥生or縄文?	—	—	—	—	—	—	
掘立柱F-1	F区	柱穴埋土中	瓦器椀	固有埋土	第8a層上面	第6層?			鎌倉時代	第F4遺構面 (第F12層上面)	
F34溝	F区	T28, S29	埋土中	縄文土器?	固有埋土	第8a層上面	第6層?			弥生時代～鎌倉時代	第F4遺構面 (第F12層上面)
F59土坑	F区	T29	埋土中	弥生土器	固有埋土	第8a層上面	第6層?		弥生時代	第F4遺構面 (第F12層上面)	
F93溝	F区	S31	埋土中	弥生土器?	固有埋土	第8a層上面	第6層?			弥生時代～鎌倉時代	第F4遺構面 (第F12層上面)
F94溝	F区		埋土中	なし	固有埋土	第8a層上面	第6層?			弥生時代～鎌倉時代	第F4遺構面 (第F12層上面)
包含層	G区	—	第G7層	瓦器、土師器、陶器、土鉢	—	—	—	—	—	—	
包含層	G区	—	第G8層	瓦器、土師器、青磁、土釜、須恵器	—	—	—	—	—	—	
包含層	G区	—	第G9層	瓦器、土師器	—	—	—	—	—	—	
包含層	G区	—	第G10層	瓦器、土師器、黒色土器、埴輪、骨、灰、軽石	—	—	—	—	—	—	
包含層	G区	—	第G11層	土師器、白磁、黒色土器、ての字皿、須恵器、埴輪	—	—	—	—	—	—	
包含層	G区	—	第G12層	土師器、ての字皿、黒色土器、木	—	—	—	—	—	—	
包含層	G区	—	第G13層	土師器、須恵器、軽石	—	—	—	—	—	—	
包含層	G区	—	第G14層	土師器、須恵器、ての字皿、埴輪、木	—	—	—	—	—	—	
包含層	G区	—	第G16層	土師器、黒色土器?陶器?	—	—	—	—	—	—	
包含層	G区	—	第G17層	土師器、須恵器、木	—	—	—	—	—	—	
G11水溜	G区	T21	埋土中	なし	固有埋土	第G9層上面	第8層		鎌倉時代	第G2遺構面 (第G9層上面)	

付表2 出土遺物観察表

単位: cm ( )内は復元値

遺物番号	挿図番号/図版番号	遺構名 土層名	地区調査区	種類 器種	口径/底径/ 器高	形態・成形等の特徴	残存率	色調(内外/断面) (釉/露胎/断面)	備考
1 図III-27/ 図版19	包含層 第5層	X58 B区	土師器 鍋	(29.2) //		口縁はくの字に屈曲し、端部内面に受け部を形成する。底部外表面には~1mmの大粒が多量に付着する。底部内面、口縁外面に煤付着する。	20%	橙(5YR6/8)/橙(5YR6/8)/にぶい橙 (5YR7/4)	焼成良、胎土やや密。石英、長石、赤色・黒色粒、チャート含む。
2 図III-27/	包含層 第5層	X63 A区	備前焼 擂鉢	//		卸目は8本單位としている。ヨコナデにより口縁端部が窪むが拡張はほとんど見られない。小片のため復元径に誤差を持つ。還元焰焼成。	口縁10%	褐灰(10YR5/1)/灰(N6/0)、灰黄褐 (10YR6/2)/灰白(N7/0)	焼成良、胎土やや密。中世3~4期(15c前半)
3 図III-27/ 図版19	包含層 第5層	Y65 A区	土師器 土釜	(22.6) //		擂磨系。内面板状工具によるヨコナデ。外面全面に煤付着。	口縁10%	橙(2.5YR6/6)/橙(7.5YR7/6) /橙(2.5YR6/6)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、チャート、黒色・赤色粒中量含む。
4 図III-27/ 図版19	包含層 第5層	W63 A区	瓦質土器 擂鉢	(28.8) //		口縁端部は丸く面を形成しない。内面は板状工具によるヨコナデ。外面はランダムな方向の雜なナデである。卸目は7本以上施されている。	口縁20%	灰(N4/0)/灰(N4/0)/灰白(N8/0)	焼成やや軟、胎土やや粗。瓦と同質の胎土、焼成。
5 図III-27/ 図版25	包含層 第5層	W51 B区	白磁 碗	(9.2) //		口縁外反気味。小片のため復元径に誤差含む。	口縁10%	灰白(10Y7/1)//灰白(N8/0)	焼成良、胎土やや密。白磁碗V類
6 図III-27/ 図版25	包含層 第5層	X50 B区	白磁 碗	//		口縁端部短く外反する。	小片	灰白(5Y7/2)//灰白(N8/0)	焼成良、胎土普通。白磁碗V類
7 図III-27/ 図版25	包含層 第5層	X50 B区	白磁 碗	(16.4) //		玉縁口縁。	口縁15%	灰白(7.5Y7/1)//灰白(N8/0)	焼成良、胎土やや密。白磁碗IV類
8 図III-27/ 図版25	包含層 第5層	2A55 B区	白磁 碗	//		直線的にひらく玉縁口縁	小片	灰白(5Y7/2)//灰白(5Y8/1)	焼成良、胎土普通。白磁碗II類
9 図III-27/	包含層 第5層	V54 B区	土師器 皿	(11.8) //		器壁薄く内湾しながら立ち上がる。	口縁20%	灰白(10YR8/2)~橙(5YR7/8)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、黒色・赤色粒含む。
10 図III-27/	包含層 第5層	V54 B区	土師器 皿	(12.0) //		器壁厚い。丁寧なナデ仕上げ。	口縁20%	浅黄橙(7.5YR8/6)/橙(7.5YR7/6)/ 橙(5YR6/6)	焼成良、胎土密。赤色粒中量含む。
11 国III-27/ 図版25	包含層 第5層	2A68 A区	青磁 皿	(13.1) //		腰折れ花皿。	口縁15%	オリーブ灰(10YR5/2)//灰白(N7/0)	焼成良、胎土密。15世紀代
12 国III-27/ 図版25	包含層 第5層	2A54 B区	青磁 皿	(11.7) //		腰折れ皿。青灰色を呈す。	口縁10%	青灰(5BB6/1)//灰(N5/0)	焼成良。胎土普通。15世紀代
13 国III-27/ 図版19	包含層 第5層	W63 A区	青磁 碗	/5.4/		高台下部外面の面取り大きい。釉は高台内面途中までかかる。見込みに花文+バスク文字?。	高台完形	綠灰色/褐灰(10YR6/1)/灰色(N7/0)	焼成良、胎土密。14世紀代
14 国III-27/	包含層 第5層	Y58 B区	備前焼 擂鉢	//		口縁帯薄板作りで断面「く」の字となる。口縁端部は強いナデを施しや下がった内面に接觸をもつ。口縁外面の凹線はそれほどはつきりしない。還元焰焼成	小片	灰黄褐(10YR6/2)/灰白(N7/0)/灰白 (N7/0)	焼成良、胎土や密。中世6期(16c前半~中頃)
15 国III-27/	包含層 第5層	X57 B区	須恵器 こね鉢	/9.7/		底部から一旦上方に立ち上がったあと外にひらく。東播系須恵器	底部80%	灰(N6/0)/灰(N6/0)/灰(N6/0)/	焼成やや軟、胎土やや粗。長石多く含む。
16 国III-27/ 図版19	包含層 第6層	W68 A区	須恵器 壺?	/ (6.4) /		内外面ヨコハケ後、外面のみ縦方向のミガキに近いハケメで仕上げる。	底部25%	灰白(N7/0)/灰白(N7/0)/灰白 (N7/0)	焼成良、胎土やや粗。
17 国III-27/	包含層 第6層	Y52 B区	土師器? 釜	//		鶴部分のみ残存。色調焼きとも土師器、瓦質土器と異なる。	小片	にぶい橙(2.5YR6/3)/赤灰 (2.5YR5/1)/灰(5Y6/1)	焼成良(硬質)、胎土やや粗。石英、長石含む。
18 国III-27/ 図版25	包含層 第6層	Y52 B区	青磁 碗	/ (6.4) /		釉は高台外面まで豊付にはかからない。	底部40%	灰オリーブ(7.5Y5/2)/灰白 (5Y7/1)/灰白(5Y7/1)	焼成良、胎土密。13世紀代
19 国III-27/ 図版25	包含層 第6層	Y52 B区	白磁 碗	//		玉縁口縁。	小片	灰白(5Y7/2)//灰白(5Y8/1)	焼成良、胎土普通。白磁碗II類
20 国III-27/	包含層 第6層	W68 A区	常滑燒 壺	//		口縁内面に緑色釉かかる。	小片	リーフ灰(10Y5/2)/にぶい赤褐 (5YR5/3)/灰白(5Y7/1)	焼成良、胎土密。
21 国III-27/ 図版25	包含層 第6層	V65 A区	白磁 碗	(13.0) //		内湾気味に立ち上がる玉縁口縁。	口縁10%	灰白(5Y7/2)//灰白(N7/0)	焼成良、胎土密。白磁碗II類
22 国III-27/ 図版25	包含層 第6層	X52 B区	白磁 碗	(15.4) //		玉縁部やや雰なつくり。	口縁10%	灰白(7.5Y7/1)//灰白(N7/0)	焼成良、胎土密。白磁碗IV類
23 国III-27/ 図版25	包含層 第6層	X51 B区	白磁 碗	(16.0) //		玉縁口縁外面ナデ凹む。	口縁10%	灰白(7.5Y7/1)//灰白(N8/0)	焼成良、胎土やや密。白磁碗IV類
24 国III-27/ 図版25	包含層 第6層	X51 B区	白磁 碗	(4.2) //		釉は底部やや上までかかる。	底部20%	淺黃(2.5Y7/3)/灰白(2.5Y7/1)/灰白 (2.5Y7/1)	焼成良、胎土密。白磁碗V類?
25 国III-27/ 図版25	包含層 第6層	2B69 A区	備前焼 擂鉢	//		卸目3本以上、間隔粗い。酸化焰焼成	小片	灰赤(10R5/2)/赤灰(10YR5/1)/灰赤 (10R4/2)	焼成良、胎土密。
26 国III-27/ 図版19	包含層 第6層	W50 B区	土師器 皿	15.3/ 11.0/2.8	オサエによる凹凸あり。	底部から口縁部にかけて滑らかにつながる。外底面ユビ	80%	灰白(10YR8/2)/灰白(10YR8/2)/灰 白(N5/0)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、チャート黑色粒微量含む。
27 国III-27/ 図版19	包含層 第6層	V64 A区	土師器 皿	(12.4) //		口縁外面強いヨコナデにより窪む。内面丁寧なナデ仕上げ。	15%	橙(7.5YR7/6)/橙(7.5YR7/6)/灰 白(N6/0)	焼成良、胎土密。赤色・黒色粒中量含む。
28 国III-27/ 図版19	包含層 第6層	2A56 B区	土師器 皿	12.2/7.7/ 2.5	口縁内外面ヨコナデ、見込み板状工具によるナデ。見込 み部に煤付着。灯明皿。	内外断面とも 浅黄橙(10YR8/2)	40%	焼成良、胎土密。赤色粒ほとんど含まず。	
29 国III-27/ 図版19	包含層 第6層	W65 A区	土師器 皿	(10.6) // 2.1		口縁外部ヨコナデ調整で外反する。	15%	橙(7.5YR7/6)/浅黄橙(7.5YR8/3)/ 灰(N6/0)	焼成良、胎土密。赤色・黒色粒少量含む。
30 国III-27/ 図版19	包含層 第6層	X53 B区	土師器 皿	10.8// 2.9		底部から口縁部にかけて滑らかにつながる。	70%	内外断面とも 明赤褐(2.5YR5/6)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、黒色・赤色粒中量含む。
31 国III-27/ 図版19	包含層 第6層	W54 B区	土師器 皿	11.0/7.3	底部から口縁部にかけて滑らかにつながる。外底面ユビ	90%	灰白(10YR8/2)/灰白(10YR8/2)~橙 (7.5YR7/6)/橙(7.5YR7/6)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、微量の赤色粒含む。	
32 国III-27/	包含層 第6層	2B68 A区	瓦器 皿	(8.8) / (6.0) /1.7	底部からの立ち上がり部を強くナデ凹む。底部回転糸切 り。丁寧なくつくり。	20%	灰(N5/0)/灰(N5/0)/灰(N6/0)	焼成良、胎土やや密。	
33 国III-27/	包含層 第6層	W54 B区	土師器 皿	(10.0) / (6.6) /1.3	底部から口縁部にかけて滑らかにつながる。外底面もナ デるが凹凸のこ。	25%	橙(5YR7/6)/橙(5YR7/6)/灰(N6/0)	焼成良、胎土密。赤色粒中量含む。	
34 国III-27/ 図版20	包含層 第6層	X52 B区	土師器 皿	(9.6) / (3.8) /1.6	内面および口縁外面を丁寧にナデする。底部はユビオサエ による凹凸あり。	30%	橙(2.5YR6/6)~灰(N5/0)/にぶい橙 (7.5YR7/4)/橙(7.5YR6/6)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、微量の赤色粒含む。	
35 国III-27/	包含層 第6層	X51 B区	土師器 皿	(8.8) // 1.4	口縁部ヨコナデにより底部と口縁部境界稜形成する。	15%	内外断面とも にぶい黄橙(10YR7/3)	焼成良、胎土密。赤色粒多く含む。	
36 国III-27/	包含層 第6層	V65 A区	土師器 皿	(8.0) / (4.8) /1.6	底部から口縁にかけてなめらかにつながる。底部外面も 丁寧にナデ仕上げる。	25%	内外断面とも 橙(5YR7/6)~灰白(10YR8/2)	焼成良、胎土密。赤色粒少量含む。	

遺物番号	攝図番号/図版番号	遺構名/土層名	地区調査区	種類器種	口径/底径/器高	形態・成形等の特徴	残存率	色調(内/外/断面)(釉/露胎/断面)	備考
37 図III-27/	包含層第6層	W65 A区	土師器皿	(8.2) // 1.1	わずかに外反しながら大きく外にひらく。丁寧なつくり。		20%	橙(7.5Y7/6)/橙(7.5Y7/6)/橙(7.5Y7/6)	焼成良、胎土密。赤色粒ほんんどなし。
38 図III-27/	包含層第6層	2B67 A区	土師器皿	(8.6) // 1.6	口縁外面ヨコナデで仕上げるが窪みなく底部と滑らかにつながる。底部外面もナデルが凹凸残る。		30%	橙(7.5YR7/6)/橙(7.5YR7/6)/橙(7.5YR7/6)	焼成良、胎土やや密。赤色粒少量含む。
39 図III-27/	包含層第6層	W52 B区	土師器皿	(8.6) // 1.2	口縁内湾気味に立ち上がる。外底面もナデるが凹凸のこ。		25%	内外断面とも浅黄橙(7.5YR8/6)	焼成良、胎土密。赤色粒微量含む。
40 図III-27/ 図版20	包含層第6層	2A59 B区	土師器皿	7.0~7.6/6.4/1.2	口縁、底部を含めて筒円形を呈する。底部外面はユビオサエによる凹凸あり。		90%	にぶい黄橙(10YR7/4)/灰白(2.5Y8/2)/にぶい黄橙(10YR7/4)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、黒色・赤色粒少量含む。
41 図III-27/	包含層第6層	W52 B区	土師器皿	(7.8) // (4.0)/1.0	底部から口縁部にかけて滑らかにつながる。外底面も含め丁寧にナデ仕上げる。歪大きく復元径に誤差含む。		15%	橙(5YR7/6)/橙(5YR7/6)/灰(N5/0)	焼成良、胎土密。赤色粒中量含む。
42 図III-27/	包含層第6層	X57 B区	土師器皿	(7.8) // (4.6)/1.0	口縁短くひらく。外底面はユビオサエ。		50%	内外断面とも浅黄橙(7.5YR8/3)	焼成良、胎土密。赤色粒中量含む。
43 図III-27/	包含層第6層	Y52 B区	土師器皿	(7.2) // (5.8)/1.0	底部平坦面をなす。口縁外面ヨコナデにより窪み内外底面ともナデ仕上げ。		25%	内外断面とも橙(5YR7/6)	焼成良、胎土密。赤色粒ほんんどなし。
44 図III-27/ 図版19	包含層第6層	X51 B区	土師器皿	(25.2) //	口縁端部は面を形成しない。比較的大き目の鋸。	口縁25%	浅黄橙(10YR8/3)/にぶい黄橙(10YR7/3)/浅黄橙(10YR8/3)	焼成良、胎土粗。石英、長石、チャート、微量の赤色粒含む。	
45 図III-27/ 図版19	包含層第6層	X54 B区	土師器皿	(24.0) //	頭部ヨコナデ。口縁端部上方に拡張し面を形成する。	口縁25%	内外断面ともにぶい黄橙(10YR7/3)	焼成良、胎土粗。石英、長石、微量の片岩、黒色・赤色粒含む。	
46 図III-27/ 図版25	包含層第6a層検出	W66 A区	白磁碗	// (7.0)	見込みに緩い段あり。高台は低く幅広。	底部25%	灰白(7.5Y7/1)/灰白(N8/0)/灰白(N8/0)	焼成良、胎土密。白磁碗IV類	
47 図III-27/ 図版25	包含層第6-8層	2B68 A区	白磁碗	//	口縁わずかに内湾気味。端部丸い。	口縁10%	灰白(7.5Y7/1)/灰黄(2.5Y7/2)/灰白(N8/0)	焼成良、胎土普通。白磁碗V類	
48 図III-27/ 図版20	包含層第6層	X69 A区	石器スクリバー	//	両面とも調整。	完形	-	サヌカイト。	
49 図III-28/ 図版20	包含層第8a層	Y51 B区	石器叩石・四石	残存長23.0	上下面とも敲打痕あり。	?	-	砂岩	
50 国III-28/ 国版20	包含層第10層	2A50 B区	石器スクリバー	//	両面とも調整。	完形	-	サヌカイト。	
51 国III-28/ 国版20	包含層第8a,b層	X52 B区	繩文土器?	//	時期、器種とも不明。屈曲部外面に圧痕または削痕あり。	小片	灰(N4/0)/にぶい橙(7.5YR7/3~7/4)/灰(N4/0)	焼成良、胎土やや粗。	
52 国III-28/ 国版20	包含層第9b層	Y50 B区	弥生or繩文土器?壺	// (7.0)	底部として作団したが、やや薄い感あり。	底部20%	灰白(10YR8/2)/橙(2.5YR6/6)にぶい赤褐(2.5YR5/3)/褐灰(10YR4/1)	焼成良、胎土粗。	
53 国III-28/ 第8層検出	Y64	土師器杯	(14.0) // (7.0)/3.6	体部2段ナデにより凹凸明瞭。底部回転糸切り。	15%	灰白(10YR8/2)/灰白(10YR8/2)/暗灰(N3/0)	焼成良、胎土密。		
54 国III-28/ 埋土中	B1 X55	瀬戸美濃	(8.4) // (5.1)/2.0	底部に別個体融着。緑色釉かかる。	30%	オリーブ灰(10Y5/2)/灰白(2.5Y7/1)	焼成良、胎土やや粗。		
55 国III-28/ A1 水路より上	2A64 A区	瓦質土器?	(8.0) //	外面部付近横方向のケズリ、内面は板状工具による強いナデ。	底部30%	灰(N6/0)/灰(N5/0)~灰(N6/0)~灰白(N8/0)/灰白(N7/0)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、黒色粒少量含む。		
56 国III-28/ A1 粗砂礫	Y63 A区	丹波系擂鉢	(27.6) //	全面に放射状の節目、口縁内面に丸みを持った段あり。口縁端部外面に凹線2条施す。外面口縁以下に重ね焼き痕跡	口縁10%	褐灰(7.5YR4/1)/灰白(N8/0)/灰白(N8/0)	焼成良、胎土やや粗。黒色粒多く含む。		
57 国III-28/ A1 粗砂礫	Y63 A区	染付碗	(4.1) //	銘款:福名か?	底部20%	灰白(N8/0)	焼成良、胎土密。IV期		
58 国III-28/ 下部粗砂礫	A1 2A64 A区	染付碗	(4.5) //	しっかりした高い高台。高台内面途中まで施釉する。	底部25%	青白灰(5B7/1)/灰白(N8/0)	焼成良、胎土密。II-2期		
59 国III-28/ A7 灰褐色シルト	Y64 A区	肥前陶器鉢	(9.8) //	内面には白化粧のけめ装飾。高台から横方向に大きいくらいした後直立気味に立ち上がる屈曲部で破損している。	底部20%	灰白(5Y8/1)/にぶい赤褐(2.5YR5/4)/にぶい赤褐(2.5YR5/4)	焼成良、胎土密。III~IV期		
60 国III-28/ A7 灰褐色シルト	Y64 A区	肥前陶器鉢or皿	(4.1) //	内外面に灰釉をかける。	底部50%	灰オリーブ(7.5Y5/3)/にぶい褐色(7.5YR6/3)/にぶい褐色(7.5YR6/3)	焼成良、胎土普通。II期		
61 国III-28/ A7 灰褐色シルト	Y64 A区	青磁碗	15.3 //	やや内湾気味に立ち上がる口縁	口縁20%	綠灰色(5G6/1)/灰色N6/0)	焼成良、胎土やや密。鎌倉時代?		
62 国III-28/ A7 灰色粗砂礫	2A63, 64 A区	肥前陶器碗	//	口縁部外面ナデ凹む。	口縁小片	灰オリーブ(5Y3/2)~オリーブ黒(5Y3/1)/灰(5Y6/1)	焼成良、胎土やや密。II期		
63 国III-28/ A7 灰色粗砂礫	2A63, 64 A区	瓦質土器擂鉢	(8.8) //	底部外面はヨコケズリ、内面にはわずかなスリ目間にヨコハケを観察できる。荒い間隔の御目10本、細かい間隔の御目14本以上がセッタとなり8単位施される。	底部50%	暗灰(N3/0)/暗灰(N3/0)/灰白(N8/0)	焼成良、胎土やや密。石英、長石含む I~II~II-1期 (15c前後)		
64 国III-28/ A7 青灰色粘土	2A64 A区	瓦質土器擂鉢	(30.6) //	口縁下外面ヨコケズリ。口縁内面板状工具によるヨコナデ、この下部目がはいる部分からはヨコハケ。	口縁10%未満	灰(N4/0~5/0)にぶい橙(5YR6/3)/灰(N5/0)~灰白(N7/0)/灰白(N8/0)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、黒色粒微量含む。I-1期(14c後半)		
65 国III-28/ A7 青灰色粘土	2A64 A区	瓦質土器羽釜	25.3 //	端面を水平に成形し、鋸下はヨコケズリ、内面はヨコハケで仕上げる。	口縁80%	灰白(5Y7/1)/灰(N4/0~N5Y6/1)にぶい橙(5YR7/3)/灰白(N8/0~10YR6/1)	焼成やや軟、胎土やや密。石英、長石、チャート微量含む。C類IV期(15c頃~後半)		
66 国III-28/ A7 青灰色粘土	2A64 A区	石器茶臼	//	茶臼の下臼の一部である。材質は砂岩。	小片	-	風化激しい。		
67 国III-28/ A7 第5層類似土	Y63 A区	備前焼擂鉢	/15.6	御目9本単位、酸化焰焼成	底部15%	内外断面ともにぶい赤褐(2.5YR5/4)	焼成良、胎土やや粗。		
68 国III-28/ A7 磁混青灰色粘土	2A64 A区	土師器皿	12.0/6.6 /2.1	外面は口縁部付近のみヨコナデ以外は指押さえのみの調整。内面はランダムな方向の粗いハケ	完形	内外断面とも灰白(2.5Y8/2)	焼成良、胎土やや密。石英、長石微量含む。		
69 国III-28/ A7 褐色礫	Y63 A区	瓦質土器羽釜	(14.8) //	小形品。端面を水平に成形し、鋸下はヨコケズリ、内面はヨコハケで仕上げる。	口縁15%	灰(N5/0~4/0)/灰白(5Y7/1)/灰白(N7/0)	焼成良、胎土普通。石英、長石、チャート、黒色粒含む。C類IV期(15c頃~後半)		

遺物番号	種別番号 / 図版番号	遺構名 土層名	地区調査区	種類 器種	口径/底 径/器高	形態・成形等の特徴	残存率	色調(内/外/断面) (釉/露胎/断面)	備考
70 図III-29/ 図版21	A28 $\alpha$ 層	W63 A区	瓦質土器 壺	(20.4) //	肥高した口縁を一部折り曲げ端部を丸く收める。外面は粗いけず、内面はヨコケズ仕上げる。	口縁10%	暗灰(N3/0) / 灰(N4/0) ~ 暗灰 (N3/0) / 灰(N6/1)	焼成良、胎土粗。石英、長石多量、灰色粒含む。II-3期(15c中頃)	
71 図III-29/ 図版21	A28 $\alpha$ 層	V62 A区	備前焼 擂鉢	//	鉄目粗い。酸化焰焼成	底部小片	灰赤(10R4/2) / にぶい赤褐色 (2.5YR5/4) / にぶい赤褐色(2.5YR4/4)	焼成良、胎土密	
72 図III-29/ 図版25	A28 $\alpha$ 層	X64 A区	青磁 碗	//	口縁わずかに外反し丸く收める	口縁小片	丸アーチ灰(2.5GY6/1) / 灰白(N8/0)	焼成良、胎土やや粗。14世紀代	
73 図III-29/ 図版25	A28 $\alpha$ 層	X63 A区	青磁 碗	(5.4) //	箱は疊付を超えて高台内面途中までかかる。 箱片のためはっきりしないが高台から上方に立ち上がる。	底部30%	灰アーチ(7.5Y4/2) / 灰(10Y4/1) / 灰白(N7/0)	焼成良、胎土普通。15世紀代	
74 図III-29/ 図版29	A28 $\alpha$ 層	V64 A区	土師器 皿	(12.3) //	全面丁寧なつくり。	25%	橙(5YR7/6) / 橙(5YR7/6) / にぶい橙 (7.5YR7/3)、黄灰(2.5Y5/1)	焼成良、胎土密、赤色粒中量含む。	
75 図III-29/ 図版21	B18 炭混シ ルト	Y59 B区	土師器 皿	(16.0) //	厚いつくり。見込み部に一部煤付着。	20%	にぶい黄橙(10YR7/2) / 黄灰褐 (10YR6/2) / にぶい橙(7.5YR6/4)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、黒色、赤色粒中量含む。	
76 図III-29/ 図版21	B15 第5+ $\alpha$ 層	W57 B区	須恵器 壺	(17.2) //	短頸壺。口縁部までタキ痕あり。内面ヨコナデ。	口縁20%	内外断面とも灰白(N7/0)	焼成良、胎土やや粗。	
77 図III-29/ 図版29	B15 $\alpha$ 層	W57 B区	土師器 皿	(8.0) / (6.8) / 1.0	内面ハケ調整。	15%	内外断面とも灰白(10YR8/2)	焼成良、胎土普通。黒色粒含む。	
78 図III-29/ 図版25	B16 $\alpha$ 層	Y60 B区	白磁 碗	/ 4.2 /	割り高台。	底部完形	淡灰白 / 灰白(N8/0) / 灰白(N8/0)	焼成良、胎土やや粗。15世紀代	
79 図III-29/ 図版21	A11 粗砂様	Y70 A区	肥前陶器 皿		見込み部蛇の目剥刺ぎ。高台内脇より深く削りこまれる。 高台脇に鏽跡を施す。	底部25%	丸アーチ黄(5Y6/3)、暗赤褐色 (2.5Y3/2) / 灰白(2.5Y7/1)	焼成良、胎土密。Ⅲ期	
80 図III-29/ 図版25	A26 下層	V63 A区	青磁 皿	(11.2) //	腰折れ稜花皿。11よりピッヂ細かい。	口縁20%	丸アーチ灰(2.5GY5/1) / 灰(N6/0)	焼成良、胎土密。15世紀代	
81 図III-29/ 図版21	A26 上層	V63 A区	常滑焼	(40) //	体部上半に方形の押印あり。	口縁20%	灰褐(7.5YR4/2) / にぶい橙 (7.5YR6/4) / 赤灰(10R5/1) ~ 灰白 (7.5Y1/1) / 赤橙(10R6/6)	焼成良、胎土やや粗。長石、石英、チャート含む。	
82 図III-29/ 図版21	B14 0~ 40cm	Z458 B区	土師器 羽釜	21.8 //	擂磨系。外面粗い左下がりタタキ、内面ヨコハケ	口縁10%	灰褐(7.5YR6/2) ~ 黒褐(2.5Y3/1) / 黒(N1.5/0) ~ 灰褐(7.5YR5/2)	焼成良、胎土粗。石英、長石、チャート、赤色・黒色粒含む。	
83 図III-29/ 図版21	B14 -40cm~	Z458 B区	瓦質土器 羽釜	21.6 //	口縁端部は面を持つがシャープでなくやや丸みを残す。 鋸下のヨコケズリ部には工具が深く入った痕跡が繊筋状に残る。	口縁完形	灰(N6/0) / 暗灰(N3/0) /	焼成良、胎土やや密。石英、長石微量含む。C類Ⅲ期(15c前半)	
84 図III-29/ 図版29	B14 -40cm~	Z458 B区	瓦質土器 羽釜	(20.0) //	口縁、鋸端部ともシャープで端面はナデ窪む。	口縁20%	暗灰(N3/0) / 暗灰(N3/0) / 灰白 (N8/0) ~ 灰(N5/0)	焼成良、胎土やや密。石英、長石、微量の金雲母含む。C類IV期(15c後半)	
85 図III-29/ 図版21	B21	W51 B区	瓦器 椀	15.4 / 5.0 / 5.6	口縁端部強いヨコナデのため外反気味。外面は粗いミガキが施される。	80%	内外断面とも暗灰(N3/0) ~ 灰白 (N7/0)	焼成やや軟、胎土密。II-1~2期	
86 図III-29/ 図版21	B334 -30~ 60cm	W55 B区	瓦 平瓦	厚さ 2.0cm	凸端部に粘土バリが見られる。外面上とも離れ砂が付着するが、上から板状工具により粗くナデる。凸面に布目痕あり。	40%	凹面 : にぶい橙(7.5YR7/3) ~ 灰白 (10YR7/1) / 凸面 : 淡黄橙(10YR8/3) ~ 褐灰(10YR6/1) / 断面 : 灰白 (2.5Y7/1-8/1)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、黒色粒含む。	
87 図III-30/ 図版25	A66	V62 A区	青磁 碗	//	口縁部小片であるがかすかに錦蓮弁文らしき文様あり。	小片	丸アーチ灰(2.5GY5/1) // 灰白(N7/0)	焼成良、胎土やや粗。	
88 図III-30/ 図版22	A66	V62 A区	石器 茶臼	/ 30.0/ 11.9	茶臼の下臼。	40%	—	砂岩	
89 図III-30/ 図版22	B368 0~ 20cm	X55-56 B区	陶器 ?	(8.8) //	見込み部に自然軸付着する。内面はロクロ成形によるシャープな棱を形成。	底部30%	褐灰(7.5YR6/1)	焼成良、胎土密。	
90 図III-30/ 図版22	B368 0~ 20cm	X55-56 B区	土師器 皿	(12.2) / (5.4) / 2.9	外面は口縁部付近のみヨコナデ以外は指押さえのみの調整。内面はランダムな方向の粗いハケ	30%	内外断面とも淡黄(2.5Y8/3)	焼成良、胎土密。石英、長石、赤色・黒色粒微量含む。	
91 図III-30/ 図版22	B368 0~ 20cm	X55-56 B区	土師器 皿	(9.0) / (7.8) / 1.3	わざかに内済しながら短く立ち上がる口縁。内面および口縁外面はナデ調整、底部外面は指オサエのみ。	25%	内外断面とも浅黄橙(10YR8/3)	焼成良、胎土やや密。石英、長石、赤色・黒色粒微量含む。	
92 図III-30/ 図版22	B368 -20~ 40cm	X55-56 B区	瓦質土器 こね鉢	(12.2) //	底部付近内面はヨコナデ、外面はビオサエで仕上げる。残存部に節目は見られない。	底部15%	内外断面とも灰(N5/0) ~ 灰白 (N8/0)	焼成良、胎土普通。石英、長石、黒色粒少量含む。	
93 図III-30/ 図版22	B368 -20~ 40cm	X55-56 B区	土師器 皿	(12.0) // 2.3	歪大きく復元径に誤差含む。外面は口縁部付近のみヨコナデ以外は指押さえのみの調整。内面はランダムな方向の粗いハケ	40%	内外断面とも灰白(2.5YR8/2)	焼成良、胎土密。石英、長石、黒色粒少量含む。	
94 図III-30/ 図版22	B368 -20~ 40cm	X55-56 B区	瓦質土器 壺	(37.4) //	端部にわざかに面を残す。頭部には2段のヨコナデが、その下には平行タタキが見られる。	口縁15%	内外断面とも明褐灰(7.5YR7/1)	焼成良、胎土やや軟。石英、長石、チャート含む。I-3類(14c前半)	
95 図III-30/ 図版22	B368 -20~ 40cm	X55-56 B区	土師器 皿	(9.6) / (7.8) / 1.9	歪大きく復元径に誤差含む。内面ナデ、外面は口縁部ヨコナデ、底部ユビオサエ。	25%	にぶい黄橙(10YR7/3) / 灰白 (2.5Y7/1) /	焼成良、胎土普通。石英、長石含む。	
96 図III-30/ 図版22	B368 -20~ 40cm	X55-56 B区	土師器 皿	(8.3) // 0.8	浅い土師器皿。内面、口縁外側ヨコナデ。丁寧なつく	口縁15%	内外断面とも灰白(2.5Y8/2)	焼成良、胎土密。	
97 図III-30/ 図版22	A123 埋土中	Z466 A区	瓦質土器 羽釜	(22.6) //	口縁端面はやや内側に傾く。鋸下体部はヨコケズリで工具痕が繊筋上に残る。内面ヨコハケ。	口縁15%	黒(2.5YR2/1) / 黒(2.5YR2/1) / にぶい黄橙(10YR7/4) ~ 褐灰(10YR5/1)	焼成良、胎土粗。石英、長石、黒色粒含む。	
98 図III-30/ 図版22	B32 埋土中	X58 B区	土師器 皿	8.4 / 4.5/ 1.2	口縁部短く立ち上がり、底部はほぼ水平をなす。	90%	内外断面とも浅黄橙(7.5YR8/4)	焼成良、胎土密。赤色・黒色粒微量含む。	
99 図III-30/ 図版22	A99	Z465 A区	陶器 皿	(11.0) //	表面風化する。	口縁15%	灰白(10Y7/2) // 灰白(5Y7/1)	焼成良、胎土普通。	
100 図III-30/ 図版22	B687 下部	Y58 B区	土師器 土釜	20.0 // 16.4	口縁端部をつくり上方へ拡張する。	完形	橙(7.5YR7/6) ~ 褐灰(7.5YR4/2) / 橙(7.5YR7/6) ~ 褐灰(7.5YR4/2)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、片岩、黒色粒、赤色粒含む。	
101 図III-30/ 図版22	B380 埋土中	X57 B区	土師器 土釜	29.4 //	口縁端部を上下方向に拡張する。頭部外面は2段ヨコナデのため稜を形成する。	口縁90%	にぶい黄橙(10YR7/2) / 褐灰 (10YR6/1) /	焼成良、胎土粗。石英、長石、黒色粒、片岩含む。	
102 図III-30/ 図版22	B380 埋土中	X57 B区	土師器 土釜	(28.0) //	口縁端部を内側に折り返した後、ヨコナデで上方につまみ上げている。鋸が取付くかどうかは不明。部分的に煤付着。	口縁20%	橙(5YR6/6) / にぶい橙(5YR6/4) / 灰白 (10YR7/1)	粗い胎土。多量の石英、長石、黒色・赤色粒含む。	
103 図III-30/ 図版22	B380 埋土中	X57 B区	土師器 土釜	23.6 //	口縁端部を内側に折り返す。頭部はヨコナデ、それ以下はユビオサエのため凸凹が激しい。	口縁50%	内外断面ともにぶい黄橙(10YR6/3)	粗い胎土。多量の石英、長石、黒色粒含む。	
104 図III-30/ 図版22	B380 埋土中	X57 B区	土師器 皿	(10.8) / (5.6) / 2.3	外面底部のユビオサエ以外ナデ調整で仕上げる。見込みはランダムな方向に工具(軟質?)によるナデ。68のようなハケとは異なる。	25%	内外断面とも浅黄橙(10YR8/3)	焼成良、胎土やや密。石英、長石少量含む。	

遺物番号	挿図番号/ 図版番号	遺構名 土層名	地区調査区	種類 器種	口径/底 径/器高	形態・成形等の特徴	残存率	色調(内外/断面) (釉/露胎/断面)	備考
105 図III-30/図版23	B380 埋土中	X57 B区	土師器皿	(9.4) //	内外面ヨコナデ、口縁わずかに外反する。	口縁20%	内外断面とも橙(5YR7/6)	焼成良、胎土や密。石英、長石、赤色粒微量含む。	
106 図III-31/図版23	A39 頭部横	X67 A区	瓦器 梗	15.4/5.2 /4.9	外面ミガキなし。断面三角形の貼り付け高台。内面に粘性のある付着物あり。	△完形	内外断面とも灰(N4/0)～灰白(N7/0)	副葬遺物、焼成やや軟、胎土密。II-2期	
107 図III-31/図版23	A39 頭部横	X67 A区	土師器皿	8.0//1.4	口縁直線的にひらく。粘性のある付着物あり。	完形	内外面とも橙(5YR6/6)	副葬遺物。ややきめ細かい胎土。黒色・赤色粒中量含む。	
108 図III-31/図版23	A39 頭部横	X67 A区	土師器皿	8.2//1.5	口縁や内湾気味に立ち上がる。粘性のある付着物あり。	完形	内外面とも橙(5YR6/6)	副葬遺物。焼成良、胎土やや密。赤色粒中量含む。	
109 図III-31/図版23	A39 頭部横	X67 A区	土師器皿	7.8//1.3	口縁直線的に立ち上がる。底部との境界に段を形成する。	△完形	内外面とも橙(2.5YR6/8)	副葬遺物。焼成良、胎土やや密。赤色粒多く含む。	
110 図III-31/図版23	A39 頭部横	X67 A区	土師器皿	(8.1) //	108と類似した形状。破片多いが風化激しく接合しない。	20% 接合せず	内外断面とも橙(5YR6/6)	副葬遺物。焼成良、胎土やや密。赤色粒多く含む。調査時点では原位置・形状を保っていた。	
111 図III-31/図版23	A39 頭部横	X67 A区	鉄器 錘	//	先端部欠損。	90%	-	副葬遺物。遺存状態悪い。	
112 図III-31/図版23	A39 埋土中	X67 A区	瓦器 梗	(15.5) //	磨耗のため調整不明瞭。	口縁15%	灰白(10YR7/1)～明褐色(7.5YR7/2)/灰白(7.5YR8/1)～淡橙(5YR8/3)/褐灰(10YR6/1)	焼成軟、胎土密。灰白色～ピンク色。	
113 図III-31/図版23	A39 埋土中	X67 A区	瓦器 梗	(13.0) //	外面ミガキなし。小片のため復元径に誤差含む。	口縁10%	灰(N5/0)/灰(N5/0)/灰白(N7/0)	焼成良、胎土密。	
114 図III-31/図版23	A39 埋土中	X67 A区	瓦器 梗	(5.6) //	断面台形の比較的しっかりした高台。	底部20%	灰(N5/0)/灰(N5/0)/灰白(N7/0)	焼成良、胎土密。	
115 図III-31/図版23	A39 埋土中	X67 A区	瓦器 梗	//	断面三角形の低い高台。	小片	灰(N6/0)/灰(N6/0)/灰白(N7/0)	焼成やや軟、胎土やや密。II-2～III-1期	
116 図III-31/図版23	A39 埋土中	X67 A区	瓦器 皿	(8.2) //	底部から口縁部にかけて滑らかにつながり、明瞭な屈曲部ない。	25%	灰(N4/0)/灰(N4/0)/灰白(N8/0)	焼成やや軟、胎土密。	
117 図III-31/図版23	A39 埋土中	X67 A区	土師器皿	(25.8) //	口縁端部短く折り曲げる。小片のため復元径に誤差含む。	口縁10%	にぶい緑(7.5YR5/3)/にぶい緑(7.5YR6/3)	石英、長石、チャート、黒色粒、片岩含む。	
118 図III-31/図版23	A39 埋土中	X67 A区	土師器皿	//	錫小片。	小片	にぶい緑(7.5YR7/4)/にぶい緑(7.5YR7/4)/褐灰(10YR5/1)	石英、長石、チャート、赤色・黒色粒含む。	
119 図III-31/図版23	A39 埋土中	X67 A区	瓦器 皿	(7.4) //	口縁外側わずかにナテ窪み、端部は尖る。	15%	灰白(N7/1)/灰白(N8/1)/灰(5Y5/1)	焼成やや軟、胎土密。	
120 図III-31/図版23	A39 埋土中	X67 A区	土師器皿	(7.2) //	口縁直線的にひらく。小片のため復元径に誤差含む。	10%	内外断面ともにぶい黄橙(10YR7/3)	焼成良、胎土密。	
121 図III-31/図版23	A39 埋土中	X67 A区	土師器皿?	//	口縁端部を肥し丸く收める。小片のため全体像がつかめない。	小片	内外断面とも灰白(7.5YR8/2)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石含む。赤色粒ほとんどなし。	
122 図III-31/図版23	A218 頭部横	X66 A区	瓦器 梗	15.2//4.1 /4.4	鉢状に退化した高台。外面磨きなし。内面に粘性のある付着物あり。	△完形	内外断面とも灰(10Y4/1)	副葬遺物。焼成やや軟、胎土やや密。II-2～III-1期	
123 図III-31/図版23	A218 埋土中(供獻?)	X66 A区	瓦器 皿	8.5//7.1 /1.9	口縁端部1箇所大きく注口気味にひらく。口縁丁寧なヨコナデ。	完形	内外断面とも灰白(2.5YR7/1)	焼成良、胎土密。灰白色。副葬瓦器碗より15cm上で出土。墓に伴う遺物である可能性あり。	
124 図III-31/図版23	A218 北半埋土中	X66 A区	瓦器 梗	(5.3) //	断面三角形の低い高台。	底部20%	黄灰(2.5Y6/1)/黄灰(2.5Y6/1)/黄灰(2.5Y6/1)	焼成良、胎土やや粗。	
125 図III-31/図版23	A218 北半埋土中	X66 A区	瓦器 梗	(5.8) //	断面三角形のしっかりした高台。	底部25%	灰(N5/0)/灰白(N7/0)～灰(N4/0)/灰白(N8/0)	焼成良、胎土やや密。	
126 図III-31/図版23	A218 北半埋土中	X66 A区	瓦器 梗	(15.4) //	口縁端部内面に稜を持ち、やや丸みを持つが面を形成する。口縁外側強いヨコナデにより凹む。	口縁15%	灰(N5/0)/灰(N5/0)/灰白(N7/0)	焼成良、胎土密。	
127 図III-31/図版23	A218 南半埋土中	X66 A区	瓦器 梗	(16.0) //	口縁端部丸く收める。外ミガキわずかに観察できる。	口縁15%	灰(N5/0)/灰(N5/0)/灰白(N8/0)	焼成良、胎土やや密。	
128 図III-31/図版23	A218 埋土中	X66 A区	瓦器 梗	(15.3) //	口縁先端はわずかに外反気味内面に稜を持つ。	口縁10%	灰(N4/0)/灰(N4/0)/灰白(N8/0)	焼成良、胎土やや密。	
129 図III-31/図版23	A218 南半埋土中	X66 A区	土師器皿	//	内面ナデ、外面ユビオサエで凹凸あり。	口縁15%	にぶい緑(7.5YR7/4)/緑(5YR7/6)～浅黄橙(7.5YR8/3)/黄灰(2.5Y4/1)	焼成良、胎土やや密。赤色粒少量含む。	
130 図III-31/図版23	A218 埋土中	X66 A区	土師器皿	(13.4) //	口縁部内外とも丁寧なヨコナデ。	口縁10%	緑(5YR7/6)/緑(5YR7/6)/褐灰(10YR4/1)	焼成良、胎土密。赤色粒中量含む。	
131 図III-31/図版23	A218 北半埋土中	X66 A区	瓦器 皿	(7.0) //	口縁部丁寧なヨコナデ。	口縁20%	灰(N6/0)/灰(N5/0)/灰白(N8/0)	焼成良、胎土やや密。	
132 図III-31/図版23	A218 北半埋土中	X66 A区	土師器皿	(9.3)/(7.7)/1.6	底部は平坦で糸切りの可能性がある。小片のため復元径に誤差を含む。	口縁10%	にぶい緑(7.5YR7/3)/浅黄橙(7.5YR8/3)/浅黄橙(7.5YR8/3)	焼成良、胎土密。赤色粒多く含む。	
133 図III-31/図版23	A218 南半埋土中	X66 A区	土師器皿	(8.0)/(1.4)	口縁部の丁寧なヨコナデのため口縁・底部の境界明瞭。	20%	橙(5YR7/6)/橙(5YR7/6)/にぶい緑(5YR7/4)	焼成良、胎土やや密。赤色粒多く含む。	
134 図III-31/図版23	A155(A2 18?) 埋土中	X66 A区	土師器皿	(7.8) //	外面の調整ユビオサエ、ナデによるが粗く凹凸あり。	15%	橙(5YR7/6)/橙(5YR7/6)/灰白(7.5YR8/2)	焼成良。胎土密。赤色粒ほとんどなし。	
135 図III-31/図版23	A155(A2 18?) 埋土中	X66 A区	土師器皿	8.2//1.4	口縁と底部境界不明瞭な部分と段差生じる部分あり。	50%	橙(7.5YR7/6)/橙(7.5YR7/6)/橙(7.5YR7/6),暗灰(N3/0)	焼成良、胎土密。赤色・黒色粒中量含む。	
136 図III-31/図版23	A155(A2 18?) 埋土中	X66 A区	土師器皿	8.6//7.2 /1.6	口縁部は弱いヨコナデで直線的に立ち上がる。	80%	橙(5YR7/6)/橙(5YR7/6)/にぶい緑(7.5YR7/4)	焼成良、胎土密。赤色粒中量含む。	
137 図III-31/図版23	A155(A2 18?) 埋土中	X66 A区	土師器皿	(8.0)/1.4	口縁部は直線的にひらく。口縁と底部の境界部分的に段差あり。	40%	内外断面とも橙(5YR7/6)	焼成良、胎土やや密。赤色粒中量含む。	

遺物番号	種別番号 / 図版番号	遺構名	土層名	地区調査区	種類器種	口径/底径/器高	形態・成形等の特徴	残存率	色調(内/外/断面)(釉/露胎/断面)	備考
138	図III-31/A155(A2 18?)	X66	A区	土師器皿	(7.9)/(6.5)	底面平坦に成形、口縁は内湾気味に立ち上がる。	15%	橙(5YR6/6)/橙(5YR6/6)/黄灰(2.5Y4/1)	焼成良、胎土密。赤色粒多く含む。	
139	図III-31/A40 埋土中	X66	A区	土師器皿	(8.4)/(5.2)1.5	底部から口縁部へ滑らかにつながる。	30%	浅黄橙(7.5YR8/3)～橙(5YR6/6)/褐灰(7.5YR5/1)	焼成良、胎土密。赤色粒中量含む。	
140	図III-31/B350 図版23	W50	B区	瓦器碗	14.7/5.6 /4.8文	やや外にひろがる三角形高台。見込みには平行線状の暗文。内外面とも磨く。丁寧なつくり。	60%	暗灰(N3/0)/暗灰(N3/0)/白(N8/0)	焼成良、胎土密。II-1期	
141	図III-31/B348 埋土中	2A58	B区	土師器皿	//	口縁部ヨコナデ	小片	橙(5YR7/8)/橙(5YR6/8)/ /橙(5YR7/6)	焼成良、胎土。赤色粒ほとんどなし。	
142	図III-31/B348 埋土中	2A58	B区	瓦器皿	(10.0)//	口縁部丁寧なヨコナデ。	15%	灰(N6/0～4/0)/灰(N5/0) /灰白(N7//0)	焼成良、胎土密。	
143	図III-32/B717 図版24	X69	B区	古銭	//	拓本	完形	-	天聖元豐1023年	
144	図III-32/A67 図版24	X63	A区	古銭	//	拓本	完形	-	元豐通宝1078年	
145	図III-32/B201 図版24	V51	B区	瓦器碗	15.9/6.7 /5.8	断面台形の高台。外面調整風化のため不明。	90%	灰白(N8/0)/灰(N4/0) /白(N8/0)	焼成やや軟、胎土やや密。赤色粒含む。II-1期	
146	図III-32/B201 図版24	V51	B区	土師器皿	(8.6)1.6//	口縁部と底部境界不明瞭。口縁外面ヨコナデにより壅む。	40%	橙(5YR6/6)/橙(5YR6/6) /橙(5YR6/6)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒中量含む。	
147	図III-32/B427 図版24	W50	B区	瓦器碗	15.2/5.7 /5.1	断面台形の高台を持つ。外面にはわずかに外ミガキの痕跡あり。	90%	灰(N6/0)/灰(N6/0) /灰白(N8/0)	焼成やや軟、胎土密。II-1期	
148	図III-32/B427 図版24	W50	B区	瓦器碗	(14.8)/(5.2)5.7	口縁端部丸く仕上げ、外面はヨコナデによりナデ壅む。	50%	灰(N6/0)/灰(N6/0) /白(N7/0)	焼成やや軟、胎土密。	
149	図III-32/B744 図版23	W50	B区	瓦器皿	8.6//1.8	口縁外面弱いヨコナデ。	80%	暗灰(N3/0)/暗灰(N3/0) /白(N8/0)	焼成良、胎土やや密。	
150	図III-32/B744 図版23	W50	B区	土師器皿	9.0/5.1/ 1.6	底部回転糸引き痕。口縁部厚い。丸く収める。	完形	橙(5YR6/6)～にぶい橙 (7.5YR6/6)/橙(5YR6/6)～ にぶい橙(7.5YR6/6)/	焼成良、胎土粗。石英、長石、微量の赤色・黒色粒含む。	
151	図III-32/B435 図版24	W51	B区	瓦器皿	(10.0)1.8//	底部から口縁部へ滑らかにつながる。内面密に磨く。	40%	灰(N4/0)/灰(N4/0) /白(N8/0)	焼成良、胎土やや密。	
152	図III-32/B353 埋土中	W50	B区	瓦器皿	(9.0)2.2//	口縁部ヨコナデのためわざわざに外反する。	20%	暗灰(N3/0)/暗灰(N3/0) /白(N7/0)	焼成良、胎土やや粗。	
153	図III-32/B428 図版24	W50	B区	瓦器皿	(9.6)2.2//	口縁部丁寧なヨコナデ。	40%	灰(N5/0)/灰(N5/0)/灰(N6/0)	焼成良、胎土やや良。	
154	図III-32/B743 埋土中	V52	B区	白磁皿	(10.0)//	口縁内湾しながら立ち上がる。見込みに低い段あり。	口縁20%	灰白(Y5T2)～灰白(Y5Y8/1)	焼成良、胎土密。白磁皿V類？	
155	図III-32/B566 埋土中	W52	B区	瓦器皿	/5.8/	しっかりした高台。見込みには格子ミガキ。	底部10%	灰(N4/0)/灰(N4/0)/灰白(N8/0)	焼成良、胎土密。II-1期	
156	図III-32/B566 埋土中	W52	B区	土師器皿	//	底部回転糸引き。口縁端部欠損。	20%	内外断面とも橙(2.5YR7/6)	焼成良、胎土密。赤色粒多く含む。	
157	図III-32/B470 図版24	X52	B区	瓦器皿	(14.8)/(6.4)5.2	外へひらく断面台形の高台。	約50%	内外断面とも灰白(N8/0)～灰(N5/0)	焼成やや軟、胎土密。II-1期	
158	図III-32/B733 埋土中	V63	B区	瓦器皿	//(4.8)	断面台形のしっかりした高台。見込みにミガキ痕	底部10%	灰白(N8/0)/灰(N4/0)～灰白(N7/0) /白(N8/0)	焼成やや軟、胎土やや粗。II-1期	
159	図III-32/B727 埋土中	W51	B区	土師器皿	(8.6)(1.7)1.7//	口縁部外面ヨコナデのためわざわざに壅む。外面の一部2次的な熱受ける。	50%	橙(5YR7/6)/橙(5YR7/6) /橙(5YR7/6)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒中量含む。	
160	図III-32/B542 図版24	Y54	B区	鉄器斧	全長8.6 幅5.6	袋状鉄斧。先端部剥離のため本来の形状をとどめない。	△完形	-	時期不明	
161	図III-32/A195 図版25	V69	A区	弥生土器広口壺	(13.4)//	風化激しい。無紋壺。他に接合しない破片多いが底部片は含まれていない。	40%	灰白(10YR8/1)/白(10YR8/2) /白(10YR8/2)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、チャート多々、赤色粒少量含む。	
162	図III-32/A195 図版25	V69	A区	弥生土器広口壺	(17.0)//	風化のため調整不明。頭部に文様ある可能性あり。	口縁15%	にぶい橙(7.5YR5/3)/橙(5YR7/6) ～(2.5YR6/6)/褐灰(7.5YR6/1)	焼成やや悪、胎土やや粗。石英、長石、赤色・黒色粒、チャート含む。	
163	図III-32/側溝 6,8層	V69	A区	弥生土器広口壺	//	口縁端部のみ残存。端面には刻み目が施される。	小片	にぶい橙(7.5YR6/4)/にぶい橙(7.5YR7/4) ～(7.5YR7/4)/にぶい橙(7.5YR7/4)	A195? 石英、長石、赤色・黒色粒、片岩含む。	
164	図III-32/A195 図版24	V69	A区	弥生土器壺底部	/9.3/	底部外面2次的な熱を受け赤色化。	底部完形	にぶい橙(5YR7/4)～灰白 (5YR8/1)/にぶい橙(7.5YR6/6) ～(2.5YR6/8)/灰(N5/0)	焼成良、胎土粗。石英、長石、片岩多量に含む。	
165	図III-32/A195 図版25	V69	A区	弥生土器壺?	/5.7/	風化のため調整不明。小片のため復元径に誤差含む。	底部20%	橙(5YR6/6)/橙(5YR6/6)～ にぶい橙(2.5YR6/3)/橙(5YR6/6)	焼成やや悪、胎土粗。石英、長石、片岩含む。	
166	図III-32/A195 図版25	V69	A区	弥生土器壺	(19.5)1.5//	風化のため調整はつきりしないが、部体の傾斜変換点にケズリが施されていると思われる。小片のため復元径に誤差含む。	口縁10%	にぶい黄橙(10YR7/4)/ にぶい橙(7.5YR7/4)/ にぶい橙(5YR6/3)/ にぶい橙(5YR6/3)/ にぶい橙(5YR6/6)	焼成やや悪、胎土粗。石英、長石、片岩、チャート多量に含む。	
167	図III-32/B346 図版24	粗砂礫	2A52	繩文土器深鉢	//	尖底。風化激しい。	底部70%	にぶい黄橙(10YR7/4)/ にぶい橙(7.5YR7/4)/ にぶい橙(7.5YR7/4)/ にぶい黄橙(10YR7/3)	切り込み面から-40cm。焼成やや軟、胎土粗。石英、長石多く含む。	
168	図III-32/B752? 埋土中	X50	B区	繩文土器深鉢	//	風化激しいが、粗製土器と思われる。	小片	灰黄褐(10YR4/2)～黒褐(10YR3/1)/ 黄灰(2.5Y4/1)～黒褐(2.5Y3/1)～ 黒褐(10YR3/1)	焼成良、胎土粗。第10層面検出遺構	
169	図III-56/包含層 第5a,b層	X46	C区	土師器?	(20.4)1.5//	口縁内湾気味に立ち上がり、端部はほぼ水平な面を作る。口縁内面には強いナデにより稜が見られる。内面に煤付着する。	口縁10%	にぶい黄橙(10YR7/2)/ 灰白(10YR6/2)/ 灰白(10YR7/1)	焼成良、胎土粗。石英、長石、チャート含む。	
170	図III-56/包含層 第5a,b層	X46	C区	須恵器片口鉢	(17.8)1.5//	小型。口縁端部は丸みを持ち面を作らない	口縁15%	内外断面とも灰白(N7/0)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石含む。	
171	図III-56/包含層 第5a,b層	X45	C区	白磁碗	(5.8)1.5//	シャープで高い高台。高台外面途中まで釉かかる。体部下半は丸みを持つ。見込みに浅い沈線。	底部30%	灰オリーブ(7.5Y6/2)/ 灰白(N7/0)	焼成良、胎土密。白磁碗V類	
172	図III-56/包含層 第5b層	W43	C区	白磁皿	(10.8)1.5//	口禿げ皿。	20%	灰白(10Y7/1)/ 灰白(N8/0)/ 灰白(N8/0)	焼成良、胎土密。白磁皿IX類	
173	図III-56/包含層 第5a,b層	W47	C区	白磁碗	//	やや内湾気味に立ち上がる玉縁口縁。	小片	灰白(Y5Y8/1)/ 灰白(N8/0)	焼成良、胎土普通。白磁碗II類	

遺物番号	捲図番号/ 図版番号	遺構名 土層名	地区調査区	種類 器種	口径/底 径/器高	形態・成形等の特徴	残存率	色調(内/外/断面) (釉/露胎/断面)	備考
174	図III-56 図版26	包含層 砂礫層 (第8a層 下)	Y41 C区	繩文土器? 壺?	/4.3/	底部から立ち上がりなくそのまま外にひらく。風化激しい。底部わずかに窪む。	底部60%	橙(7.5YR6/6)~にぶい褐 (7.5YR5/3) / 橙(2.5YR6/6) / 内外面 と同色	焼成やや軟、胎土粗。
175	図III-56 図版26	包含層 第8a層 下	Y46 C区	繩文土器	//	口縁と思われる小片。風化のため詳細不明。	小片	褐灰(10YR4/1) / 黒褐(10YR3/1) / 黒 褐(10YR3/1)	焼成良、胎土粗。
176	図III-56 図版26	包含層 第10層 下	Y45 C区	繩文土器	//	粗い縄文。	小片	灰白(2.5Y7/1) / 灰黄褐(10YR6/2) / 褐灰(10YR6/1)	焼成良、胎土やや粗。中期末から 後期前半
177	図III-56 図版26	包含層 第11層	2A48 C区	繩文土器	(7.7)	凹底。	底部10%	灰白(2.5Y8/2) / 灰白(2.5Y8/2) ~ 橙 (5YR6/6) / 橙(5YR6/6)	焼成良、胎土やや粗。
178	図III-56 図版26	C247 下層	X46 C区	繩文土器 深鉢	//	波状口縁、口縁やや下に太い沈線、端部に縄文施す。	小片	褐灰(10YR4/1) / 灰黄(2.5Y6/2) / 灰 黄(2.5Y6/2)	焼成良、胎土粗。
179	図III-56 図版26	包含層 第5a, b 層	Y48 C区	鉄器 鉄錐	//	主頭又は方頭形?	?	-	先端部一部欠損の可能性あり。
180	図III-56 図版26	包含層 第10層	Y47 C区	鉄器 棒状	残存長 4.8	径3mmでやや湾曲する。	?	-	混入と思われる。
181	図III-56 図版26	包含層 第5b層	Y44 C区	石器 石錐	残存長 2.1	サヌカイト製	90%	-	
182	図III-56 図版26	包含層 第9層	Y47 C区	石器 石錐	全長3.2	サヌカイト製	完形	-	
183	図III-56 図版26	包含層 第9層	Y48 C区	石器	全長3.7	サヌカイト製	完形?	-	
184	図III-56 図版26	包含層 第10層	Y47 C区	石器	全長3.2	サヌカイト製	完形?	-	
185	図III-56 図版26	包含層 第9層	Y47 0区	石器 印石・凹 石?	全長15.1	わずかな敲打痕あり。	完形	-	砂岩。
186	図III-56	C192 埋土中	X45 C区	土師器 釜	(20.0) //	内湾気味の口縁で端部は面を作らず上方に小さく肥高す る。	口縁10%	にぶい橙(7.5YR7/4) ~ 褐灰(10YR 5/1) / 灰白(2.5Y7/1) ~ にぶい橙 (7.5YR7/4) / 浅黄橙(7.5YR8/4)	焼成良、胎土粗。石英、長石、片 岩含む。
187	図III-56	C192 埋土中	X47 0区	土師器 土錐	全長3.7 外径1.2	管状土錐。	完形	灰白(2.5Y8/1, 8/2) ~ 黄灰(2.5Y5/1) //	焼成良、胎土密。
188	図III-56 図版26	C192(C2 167) 底	X45 C区	瓦器 椀	15.0/5.1 /5.0	口縁外面のヨコナデ弱く、底部から口縁へ窪みなく滑ら かにつながる。新面三角形の高台。外面ミガキの有無不 明。	△完形	灰(N4/1) ~ 灰白(N7/1) /灰(N4/1) ~ 灰白(N7/1) /	焼成やや軟、胎土密。 II-1 ~ II-2期
189	図III-56 図版26	C192(C2 167) 底	X45 0区	瓦器 椀	15.2/5.4 /5.0	新面台形のやや退化気味高台。外面ミガキなし。外面下 半はユビオサエで凹凸多い。口縁歪多い。	50%	灰(N6/1 ~ N7/1) /灰(N6/1 ~ N7/1) /	焼成やや軟、胎土密。II-1期
190	図III-56 図版27	C211(C2 61満)下 部	X45 C区	石器 印石・凹石	全長12.8	表裏とも中央付近に敲打痕が残る。	80%	-	砂岩。
191	図III-56	C211(C2 61満)下 部	Y47 C区	瓦器 椀	(5.2) /	しっかりした新面三角形高台。見込みにはジグザグミガ キ痕。	底部25%	灰(N5/0) / にぶい橙(5YR7/4) ~ 灰白 (N7/0) / 灰(N4/0)	焼成やや軟、胎土密。II-1 ~ II-2 期
192	図III-56 図版28	C51-1 埋土中	Y41 C区	埴輪	//	タテハケ調整のみ。突帯断面低い台形。	小片	にぶい橙(7.5YR7/3) / にぶい橙 (5YR7/4) / 灰白(7.5Y8/1), 灰(N4/0)	焼成良、胎土やや粗。石英、長 石、チャート、赤色粒含む。
193	図III-56	C51-1 埋土中	Y42 C区	瓦器 椀	(14.9) /	外面わずかにミガキ痕あり。内面に煤付着する。	口縁10%	黒褐(2.5Y3/1) ~ 褐灰(7.5YR4/2) /灰(N5/0) ~ 灰白(N8/0) /灰白(N8/0)	焼成やや軟。胎土密。II-1期
194	図III-56 図版27	C51-1 埋土中	Y41 C区	土師器 釜	銚外径 (37.8)	しっかりした锷を持つ。	銚小片	褐灰(10YR6/1 ~ 5/1) / にぶい 黄橙(10YR6/3) ~ 褐灰(10YR5/1) /にぶい橙(7.5YR7/3 ~ 6/4)	焼成良、胎土粗。石英、長石、片 岩、黒色粒含む。赤色粒ほんど なし。
195	図III-56 図版29	C134 埋土中	X45 C区	土師器 皿	(9.9) / (7.6) /	口縁直線的に外へ大きくなり。底部は最終段階でユビ オサエにより平坦面を作るため粘土が外へはみ出しお口縁 との境界に部分的に段差が見られる。口縁内面と外側の 一部黒化。	30%	褐灰(10YR4/1) / 灰白(2.5Y8/2) /褐灰(10YR4/1)	焼成良、胎土やや密。金雲母目立 つ。
196	図III-56 図版26	C135 埋土中	X45 C区	鉄器	//	片面刃をつける。.	欠損	-	
197	図III-56 図版26	C135 埋土中	X45 C区	鉄器	//	釘か?	欠損	-	
198	図III-56 図版26	C135 埋土中	X45 C区	鉄器	//	釘か?	欠損	-	
199	図III-57 図版27	C260 下部	Y47 C区	土師器 釜	(25.8) //	200ほどでないが口縁部「く」の字に曲がる。端部は上 方に拡張するが丸みを持ちはっきりした面は形成しない。	口縁25%	にぶい黄橙(10YR6/4) / にぶい橙 (5YR7/4) / にぶい黄橙(10YR7/2)	焼成良、胎土粗。石英、長石、片 岩、チャート含む。
200	図III-57 図版27	C260 下部	Y47 C区	土師器 釜	(24.2) //	口縁部は「く」の字に曲がり、端部内面をナデ窪め上方 に拡張したように見える。端部は面を持つやや丸みを もつ。	口縁20%	内外面断面とも にぶい橙(7.5YR7/4)	焼成良、胎土やや粗。石英、長 石、片岩、微量の黒色・赤色粒含 む。
201	図III-57	C260 下部	Y47 C区	瓦器 椀	(16.0) //	外面にもかなり密なミガキ。丁寧なつくり。	口縁10%	灰(N4/0 ~ 6/0) / 灰(N4/0) ~ 灰白(7/0) / 灰白(N7/0)	焼成良(硬質)、胎土密。I期
202	図III-57 図版27	C260 下部	Y47 C区	石器 ?	長辺9.9 短辺6.3	用途不明の石器。朱らしき赤色物がほぼ全面につく。	完形?	-	砂岩。
203	図III-57 図版27	C260 下部	Y47 C区	土師器 皿	8.8/6.6/ 1.5	回転糸切り皿、底部に板目のような平行直線痕あり。	完形	橙(5YR7/6) ~ 灰白(10YR8/2) /橙(5YR7/6) ~ 灰白(10YR8/2)	焼成良、胎土密。赤色粒多く含 む。
204	図III-57 図版27	C182 埋土中	2A47 C区	土師器 釜	//	銚やや小さい。	銚20%	にぶい褐(7.5YR5/3) ~ 褐 褐(7.5YR4/2) / 灰白(2.5Y5/1) / 黄 灰(2.5Y5/1)	焼成良、胎土粗。石英、長石、少 量の片岩含む。
205	図III-57 図版28	C181 埋土中	Y47 C区	土師器 釜	(26.8) //	「く」の字に折れ曲がる口縁は端部で面を作る。銚はや や小さい。	口縁10%	灰黄褐(10YR6/2) / 灰黄褐 (10YR6/2) / 明褐(2.5YR5/6)	焼成良、胎土やや粗。石英、長 石、片岩少土含む。
206	図III-57 図版27	C280 埋土中	Y47 C区	土師器 釜	(24.2) //	口縁端部はやや丸みを持つ面を形成する。銚は端部に面 をもつ。	口縁20%	内外面断面とも橙(5YR6/6)	焼成良、胎土粗。石英、長石、 チャート、片岩含む。
207	図III-57 埋土中	C281 2A47	瓦器 椀	(16.2) //	外面まで密に磨く。	口縁20%	灰(N4/0) / 灰(N4/0) / 灰白(N8/0)	焼成良、胎土密。I期	
208	図III-57	C47 埋土中	W41 C区	土師器 椀	//	やや外へひろがる高台。	小片	明褐灰(7.5YR7/2) ~ にぶい橙 (5YR6/4) / 明褐灰(5YR7/2) /にぶい橙(7.5YR6/4)	焼成良、胎土密。赤色粒中量含 む。

遺物番号	挿図番号/ 図版番号	遺構名 土層名	地区調査区	種類 器種	口径/底 径/器高	形態・成形等の特徴	残存率	色調(内/外/断面) (釉/露胎/断面)	備考
209	図III-57 図版31	C47 埋土中	W41 C区	土師器皿	(8.6) //	ての字状口縁。内面に煤?付着する。歪大きく復元径に誤差含む。	口縁20%	褐灰(10YR4/1)~にぶい橙(7.5YR6/4)/黄灰(2.5Y6/1) /にぶい橙(7.5YR7/4)	焼成良、胎土密。赤色粒少量含む。
210	図III-57 図版31	C51-2 埋土中	W42 C区	土師器皿	(9.6) // 1.5	ての字状口縁。内面煤付着、灯明皿として使用か?	口縁20%	灰(5Y4/1)/橙(2.5YR6/6)~にぶい橙(7.5YR7/4)/にぶい橙(7.5YR7/4)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒少量含む。212, 213と同一個体の可能性あり。
211	図III-57 図版31	C51-2 埋土中	X42 C区	土師器皿	(11.6) //	ての字状口縁。内面板状工具によるナデ調整。外面煤付着。屈曲弱い。	口縁10%	にぶい橙(10YR6/4)~褐灰(10YR6/1)/灰(N4.0~5Y6/1) /灰白(10YR7/1)	焼成良、胎土密。赤色粒ほとんどなし。
212	図III-57 図版31	C51-2 埋土中	W42 C区	土師器皿	(8.4) //	ての字状口縁。内面に煤付着、灯明皿として使用か?歪大きく復元径に誤差含む。	口縁20%	褐灰(10YR5/1)~にぶい橙(7.5YR7/4)/にぶい黄橙(10YR6/4)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒中量含む。210, 213と同一個体の可能性あり。
213	図III-57 図版31	C51-2 埋土中	X41 C区	土師器皿	(10.2) // 1.1	ての字状口縁。内面に煤付着。灯明皿として使用か?	30%	にぶい橙(5YR6/4)~灰(5Y4/1)/灰黄(2.5Y7/2)/にぶい橙(5YR6/4)	焼成良、胎土密。赤色粒少量含む。210, 212と同一個体の可能性あり。
214	図III-57 図版28	C51-2 埋土中	X41 C区	須恵器壺	(19.6) //	口縁端部は面をつくりわざかに上下へ拡張する。全面ヨコナデで仕上げるが、かすかに体部外面は縱方向のタタキ痕、内面は当て具痕が残る。	口縁25%	灰(N7/0)/灰(N7/0)/灰(N7/0)	焼成良、胎土密。
215	図III-57	C51-2 埋土中	W42 C区	土師器土錐	全長4.6 外径1.1 ~1.2	管状土錐。やや還元気味の色調。	完形	灰白(2.5Y8/2)~黄灰(2.5Y6/1)//	焼成やや悪。胎土やや粗。金雲母小片自立つ。
216	図III-57	C51-2 埋土中	X42 C区	土師器土錐	全長3.8 外径1.1	管状土錐。一部欠けるがそのまま使用していた模様。	完形	にぶい橙(7.5YR7/3)//	焼成良、胎土やや粗。金雲母小片自立つ。
217	図III-57	C51-2 埋土中	W42 C区	土師器皿	(13.8) //	口縁は緩やかにひらきながら外反する。	口縁10%	にぶい橙(5YR7/4), 褐灰(5YR5/1), にぶい褐(7.5YR6/3)/浅黄橙(7.5YR8/3), 褐灰(7.5YR5/1), にぶい褐(5YR7/3)/にぶい橙(5YR7/3)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、赤色粒含む。
218	図III-57 図版28	C51-2 埋土中	W42, X42 C区	黒色土器椀	15.7/7.3 /6.1	断面四角形のしっかりした高台。黒色土器A類であるが、部分的に外面も黒化している。	50%	黒(7.5Y2/1)~にぶい橙(7.5YR7/4)/	焼成良、胎土密。赤色粒ほとんどなし。
219	図III-57	C48- 下層	W43 C区	土師器皿	(16.6) //	口縁部外面はヨコナデにより窪む。それ以下はユビオサエ。	口縁20%	にぶい橙(7.5YR7/4)/にぶい黄橙(10YR7/3)/にぶい橙(10YR7/3)	焼成良、胎土やや密。赤色粒中量含む。
220	図III-57	C64 埋土中	Y44 C区	黒色土器椀	(15.8) //	黒色土器A類。口縁内面に沈線状の段。	口縁15%	オリーブ(5Y3/1)/褐灰(10YR5/1 ~2/4)/黄灰(2.5Y4/1)	焼成良、胎土密。
221	図III-57	C64 埋土中	Y44 C区	土師器椀	//	外へひらく高い高台。	小片	にぶい黄橙(10YR7/4)/灰白(10YR8/1)~褐灰(10YR6/1)/にぶい黄橙(10YR6/4)~褐灰(10YR5/1)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒微量含む。
222	図III-57	C64 埋土中	Y44 C区	土師器椀	(13.8) //	口縁部外面丁寧なナデ。	口縁15%	灰白(10YR8/2)~にぶい黄橙(10YR7/2)/にぶい橙(7.5YR7/4)~ にぶい橙(5YR7/4)/灰黄褐(10YR6/2)~にぶい橙(7.5YR7/4)	焼成良、胎土密。赤色粒少量含む。
223	図III-57	C218 埋土中	Y45 C区	土師器高杯	//	脚部やや太い。	杯と脚接合部	内外断面とも橙(7.5YR6/8)	焼成良、胎土粗。石英、長石多く含む。
224	図III-57	C218 埋土中	Y45 C区	土師器高杯	//	脚部内面の絞り痕目立つ	杯と脚接合部	浅黄橙(7.5YR8/3)/浅黄橙(7.5YR8/3)/灰(N4/0)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒微量含む。
225	図III-57	C218 埋土中	Y45 C区	土師器高杯	//	224と同形態。	杯と脚接合部	内外断面ともににぶい橙(2.5YR6/4)	焼成良、胎土やや密。赤色粒少量含む。
226	図III-57	C218 埋土中	Y45 C区	土師器甕	//	把手。	小片	/橙(7.5YR6/6)~にぶい黄橙(10YR7/3)/	焼成良、胎土粗。石英、長石、チャート多く含む。
227	図III-58 図版28	C220 A層	W46 C区	土師器甕	(29.6) //	口縁端部は面をつくるがヨコナデによる窪みをもつ。頭部は丁寧なヨコナデにより稜をなす。全体に丁寧なつくり。	口縁20%	にぶい橙(7.5Y7/4)/灰黄褐(10YR6/2)~にぶい褐(2.5YR5/4)/にぶい赤褐(2.5YR5/4)	焼成良、胎土密。石英、長石、チャート、片岩、赤色粒含む。
228	図III-58 図版31	C220 A層	X46 C区	土師器皿	(16.2) //	口縁部2段ヨコナデで明瞭な稜線形成する。	口縁25%	にぶい黄橙(10YR7/4)/にぶい黄橙(10YR7/4)/にぶい褐(10YR7/4)	焼成良、胎土密。赤色粒少量含む。
229	図III-58	C220 A層	X46 C区	土師器皿	(15.8) //	口縁部丁寧なヨコナデ。	口縁10%	にぶい褐(7.5YR8/3)/にぶい褐(7.5YR6/3)~ 浅黄橙(7.5YR8/3)/にぶい褐(7.5YR6/3)~ 浅黄橙(7.5YR8/3)/にぶい褐(7.5YR8/3)	焼成良、胎土やや密。赤色粒中量含む。
230	図III-58 図版31	C220 A層	X46 C区	土師器皿	(10.6) //	ての字状口縁。小片のため復元径に誤差含む。	15%	内外断面とも 浅黄橙(10YR8/3)	焼成良、胎土密。赤色粒中量含む。
231	図III-58 図版31	C220 A層	X46 C区	土師器皿	(9.2) //	ての字状口縁。他に比ベ口縁部やや器壁薄めのつくり。	25%	にぶい黄橙(10YR7/3)~灰白(2.5Y8/1)/にぶい黄橙(10YR7/3)~ 灰白(2.5Y8/1)/にぶい黄橙(10YR7/3)	焼成良、胎土密。赤色粒少量含む。232, 242と同一個体の可能性あり。
232	図III-58 図版31	C220 A層	X46 C区	土師器皿	(8.6) //	ての字状口縁。	口縁10%	にぶい黄橙(10YR7/3)/にぶい黄橙(10YR7/3)/灰白(10YR8/2)	焼成良、胎土密。赤色粒少量含む。231, 242と同一個体の可能性あり。
233	図III-58 図版28- 29	C220 A層	X46 C区	土師器皿	(9.6) // (6.8) //1.2	成形最終段階で底部をユビオサエにより平坦にする。底部に同心円状の筋残る。回転ヘラ切りか?	25%	内外断面とも 灰白(2.5Y8/2)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒微量含む。
234	図III-58 図版28	C220 A層	X46 C区	土師器皿	(15.0) //	底部から口縁へなめらかにつながる。外面に一部煤付着する。	40%	内外断面とも 浅黄橙(10YR8/3)	焼成良、胎土密。赤色粒中量含む。
235	図III-58	C220 B層	X45 C区	土師器皿	(12.0) //	口縁部やや強いヨコナデのため内面に稜を形成する。	口縁20%	橙(5YR7/6)~にぶい橙(7.5YR7/4)~ 褐灰(10YR5/1)/外面と同色/橙(5YR7/6)~褐灰(10YR5/1)	焼成やや軟、胎土やや粗。赤色粒中量含む。
236	図III-58 図版31	C220 B層	X45 C区	土師器椀	(13.7) //	風化激しいが、外面2段のヨコナデ仕上げと思われる。口縁内面に沈線上の段形成する。	口縁25%	橙(5YR6/6)~灰白(7.5YR8/2)/橙(5YR6/6)/褐灰(10YR6/1)	焼成良、胎土密。赤色粒中量含む。
237	図III-58 図版29	C220 B層	X45 C区	黒色土器椀	//	黒色土器A類。端部2段ヨコナデ。外面にヨコミガキの痕跡あり(ヨコナデ時のものかもしれない)。	小片	暗灰(N3/0)/にぶい黄橙(10YR7/3)~ 灰白(10YR7/1)/褐灰(10YR6/1)/ 黄灰(2.5Y5/1)~にぶい黄橙(10YR7/2)	焼成良、胎土やや密。赤色粒微量含む。
238	図III-58	C220 B層	X45 C区	土師器椀	//	口縁端部短く外反する。	小片	にぶい橙(7.5YR7/4)/にぶい橙(2.5YR6/6)~灰白(10YR8/2)/浅黄 橙(7.5YR8/3)	焼成良、胎土やや密。赤色粒多く含む。
239	図III-58 図版26	C220 B層	W47 C区	石器 石錐	全長2.4	サヌカイト製	完形	-	

遺物番号	捕囲番号/ 図版番号	遺構名 土層名	地区調査区	種類 器種	口径/底 径/器高	形態・成形等の特徴	残存率	色調(内/外/断面) (釉/露胎/断面)	備考
240	図III-58 図版29	C220 B層	X45 C区	土師器 ?	//	用途不明の遺物。厚さ7mmの板状で内外面ともRを持つ。 1辺は面をもちわざかにナデ窪む。硬質。ハケ又はタタキ痕凹面に残る。	小片	にぶい黄橙(7.5YR7/3) /にぶい黄橙(7.5YR7/3) /灰白(N7/0~8/0)	焼成良、胎土粗。石英、長石含む。
241	図III-58 図版31	C220 B層	X46 C区	土師器 皿	(9.8)//	ての字状口縁。	口縁15%	橙(5YR7/6~6/6) /橙(5YR7/6~6/6) /橙(5YR7/6~6/6)	焼成良、胎土密。赤色粒多く含む。
242	図III-58 図版31	C220 B層	X46 C区	土師器 皿	(10.2)//	ての字状口縁。口縁部はやや器壁薄い。	20%	内外断面とも 浅黄橙(10YR8/3)	焼成良、胎土密。赤色粒少量含む。231,232と同一個体の可能性あり。
243	図III-58 図版28	C220 B層	X46 C区	土師器 皿	10.0/8.4 /1.3	回転ヘラ切り。内外面に煤付着する。	50%	内外断面とも 灰白(10YR8/2) ~黄灰(2.5YR5/1)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒微量含む。
244	図III-58 図版29	C220 C層	W46 C区	土師器 ?	(8.4)//	直立する口縁と体部境界は段差をもつ。	15%	橙(2.5YR6/8) /褐灰(10YR4/1) ~橙(2.5YR6/6) /橙(2.5YR6/8) ~暗灰(N3/0)	焼成やや軟、胎土やや粗。赤色粒ほとんどなし。
245	図III-58 図版28	包含層 第7層	W45 C区	須恵器 蓋	13.2// 3.6	5mm以上の石数個含む。	70%	にぶい黄橙(10YR6/3) /灰黄褐(10YR6/2) /褐灰(10YR6/1) ~にぶい黄橙(10YR6/3)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、チャート含む。
246	図III-58 図版27	C220 C層	X46 C区	石器? 磨石?	全長6.9	全面滑らかに磨かれている。	完形	-	砂岩?
247	図III-58	C1003 6層?	Y44 C区	黒色土器 椀	(16.0)//	黒色土器A類。外面の一部も黒化。	口縁10%	黒(N2/0) /にぶい橙(7.5YR6/4) /灰白(5Y8/1) ~黒N2/0)	焼成良、胎土やや粗。長石多く含む。
248	図III-58 図版28	C1003 6層?	Y44 C区	土師器 小壺?	10.0//	頸部緩やかに曲がり口縁はやや外反しながら上方に立ち上る。	口縁90%	内外断面とも浅黄橙(7.5YR8/4)	焼成やや軟、胎土普通。石英、長石、赤色粒微量含む。
249	図III-58 図版29	C1003 6層?	Y44 C区	土師器 鉢?	//	口縁わずかに外反しながらひらき、端部は尖る。口縁部はヨコナデ、以下内面はヨコケズリ、外面はユビオサエ、ナデにより凹凸あり。外面に煤付着する。	小片	にぶい橙(7.5YR7/3) /にぶい橙(7.5YR7/4) /灰白(7.5YR8/1) ~にぶい橙(7.5YR7/4)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、赤色・黑色粒含む。
250	図III-58 図版29	C1003 6層?	Y44 C区	土師器 壺	//	口縁「く」の字に屈曲するが251ほど明瞭な内面稜なし。口縁端部やや丸みを残すが面を持つ。外面に煤付着。	小片	淡橙(5YR8/2) ~にぶい橙(5YR7/3) / 淡橙(5YR8/2) ~褐灰(5YR4/1) /にぶい褐色(7.5YR5/3)	焼成良、胎土粗。石英、長石多く含む。
251	図III-58 図版29	C1003 6層?	Y44 C区	土師器 壺	//	口縁「く」の字に屈曲し、内面に明瞭な稜線をもつ。口縁端部丸く收める。体部外面タテハケ。外面に煤付着。	小片	にぶい褐(7.5YR5/3) /黒褐(7.5YR1/1) /にぶい褐(7.5YR5/3)	焼成良、胎土粗。石英、長石、片岩?含む。
252	図III-58 図版29	C1013 埋土中	Y44 C区	黒色土器 椀	(16.4)/(7.0)/5.6	黒色土器A類。高台外側に大きくなりらく。	10%	暗灰(N3/0) /黄灰(2.5Y4/1) /黄灰(2.5Y5/1)	焼成良、胎土密。C64出土の220と同一個体の可能性高い。
253	図III-58 図版29	C1013 埋土中	Y44 C区	黒色土器 椀	/7.2/	内黒。外にひらく断面方形の高台。	底部完形	黒(N1.5/0) /灰白(10YR8/2) /にぶい黄橙(10YR7/2)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、片岩含む。
254	図III-58 図版31	C1013 埋土中	Y44 C区	土師器 椀	(14.8)//	わざかに内湾しながら滑らかに立ち上がる。風化激しいが内外面ヨコミガキ? らしき痕跡あり。	口縁20%	にぶい橙(5YR7/4) ~灰白(5YR8/1) /にぶい橙(5YR6/4~7.5YR7/4) ~灰白(10YR8/1) /灰白(7.5YR8/1~10YR7/1) ~黄灰(2.5Y5/1)	焼成良、胎土密。赤色粒多量に含む。
255	図III-58 図版31	C1013 埋土中	Y43 C区	土師器 椀	(6.2)//	断面三角形のやや外側にひらく高台。高台やや上で立ち上がりの傾斜変換点あり。	底部25%	淡赤橙(2.5YR4/7~7/6) /灰白(10YR8/1) /灰白(10YR8/1)	焼成良、胎土密。赤色粒微量含む。
256	図III-58 図版29	C1013 埋土中	Y44 C区	土師器 壺	(34.0)//	口縁端部はナデによりやや窪むが面を持つ。口縁は「く」の字に曲がり屈曲部内面に明瞭な稜をもつ。小片のため復元径に誤差含む。	口縁10%	褐灰(7.5YR4/1~5/1) ~褐灰(7.5YR5/2) /褐灰(10YR5/1~4/1) /にぶい橙(7.5YR6/4) ~灰褐(7.5YR4/2)	焼成良、胎土粗。石英、長石、チャート、小豆色粒含む。
257	図III-58	C1013 埋土中	Y43 C区	土師器 皿	(11.0)//	口縁外面がヨコナデにより窪み外側にひらく。小片のため復元径に誤差含む。丁寧な仕上げ。	口縁10%	灰白(10YR8/2) ~にぶい橙(5YR6/4) /灰白(10YR8/2) ~にぶい橙(5YR6/4) /浅黄橙(7.5YR8/3)	焼成良、胎土やや密。赤色粒少量含む。
258	図III-58 図版29	C1013 埋土中	Y43 C区	土師器 皿	(9.7)/(6.7)/1.4	底部は一部のみの残存ではっきりしないが回転糸切り又はヘラ切り。	20%	内外断面とも 灰白(2.5Y8/1)	焼成良、胎土やや密。赤色粒ほとんどなし。
259	図III-58 図版31	C1013 埋土中	Y43 C区	土師器 皿	//	ての字状口縁だが、屈曲弱い。	小片	にぶい黄橙(10YR7/3) /にぶい黄橙(10YR7/3~7/4) /灰白(10YR8/1)	焼成良、胎土密。赤色粒ほとんどなし。
260	図III-58 図版31	C1013 埋土中	Y43 C区	土師器 土錐	残存長 4.9 外径1.3	一部欠損する。	80%	内外断面とも 浅黄橙(7.5YR8/3)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒ほとんどなし。
261	図III-58 図版31	C1013 埋土中	Y43 C区	土師器 土錐	全長4.4 外径0.9 ~1.0	一部欠損する。	80%	内外断面とも 灰黄(2.5Y7/2)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒ほとんどなし。
262	図III-58 図版31	C1013 埋土中	Y43 C区	土師器 土錐	全長4.0 外径1.4 ~1.6	中央部膨らむ。	完形	内外とも 褐灰(7.5YR4/1)	焼成良、胎土粗。赤色粒少量含む。
263	図III-58 図版31	C1013 埋土中	Y44 C区	土師器 土錐	残存長 3.9 外径0.9 ~1.1	一部欠損する。	80%	内外断面とも にぶい黄橙(10YR7/2)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒ほとんどなし。
264	図III-58 図版31	C1014 埋土中	Y43 C区	土師器 椀	(16.5)//	口縁部付近外面のみヨコナデ。稜は不明瞭。口縁端部内面に沈線(部分的)	口縁15%	橙(7.5YR7/6) ~褐灰(7.5YR4/1) /橙(2.5YR7/6) ~橙(7.5YR7/6)	焼成良、胎土密。赤色粒多量に含む。
265	図III-59	C1014 埋土中	Y43 C区	土師器 皿	(17.9)//	口縁部丁寧なヨコナデで外反する。内面に煤付着。	口縁15%	にぶい黄橙(7.5YR7/3) ~橙(2.5YR6/4~5YR7/4) /にぶい橙(7.5YR7/3~2.5YR6/4)	焼成良、胎土密。赤色粒中量含む。
266	図III-59	C1014 埋土中	Y44 C区	黒色土器 椀	//	黒色土器A類。	小片	黒(N1.5/0) /灰白(2.5Y8/1) ~暗灰(N3/0) /灰白(5Y8/1) ~黒(N1.5/0)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒なし。
267	図III-59	C1014 埋土中	Y44 C区	土師器 椀	//	外側にひらく断面三角形高台。煤? 内外断面に付着。破損後か?	小片	にぶい黄橙(10YR7/3) /淡黄橙(10YR8/3) /淡黄橙(10YR8/3) /にぶい黄橙(10YR6/4)	焼成良、胎土やや密。赤色粒中量含む。
268	図III-59	C1014 埋土中	Y43 C区	黒色土器 椀	//	黒色土器A類。三角形断面の直立する高台。	小片	灰(M4/0) /橙(2.5YR6/6) ~にぶい黄橙(10YR7/3) /にぶい黄橙(7.5YR5/3)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒ほとんど含まない。
269	図III-59	C1014 埋土中	Y43 C区	土師器 皿	(11.8)//	口縁大きくひらきわざかに外反する。	口縁10%	灰白(2.5Y8/2) /にぶい黄橙(10YR7/3) ~にぶい橙(5YR6/4) /灰白(2.5Y8/2)	焼成良、胎土やや粗、赤色粒ほとんどなし。
270	図III-59 図版31	C1014 埋土中	Y43 C区	土師器 皿	(11.7)/ 1.8	ての字状口縁が屈曲弱く、端部の内側への折り返しもほとんどない。	口縁10%	にぶい黄橙(10YR7/4) ~淡橙(5YR8/4) /にぶい黄橙(10YR7/4) ~にぶい黄橙(5YR6/4) /にぶい黄橙(10YR7/4) ~灰白(10YR7/1)	焼成良、胎土密。赤色粒中量含む。
271	図III-59 図版31	C1014 埋土中	Y44 C区	土師器 皿	(10.0)//	ての字状口縁。	口縁10%	にぶい橙(10YR7/3~7.5YR6/4) /にぶい橙(5YR6/4) ~灰白(10YR7/2) /灰白(7.5YR8/1)	焼成良、胎土密。赤色粒ほとんど含まず。

遺物番号	挿図番号 / 図版番号	遺構名 土層名	地区調査区	種類 器種	口径/底径/器高	形態・成形等の特徴	残存率	色調(内/外/断面) (釉/露胎/断面)	備考
272	図III-59 図版31	C1014 埋土中	Y44 C区	土師器 皿	(10.0) //	ての字状口縁。口縁部器壁薄い。	口縁15%	にぶい橙(5YR6/4)/淡赤橙(2.5YR7/4)～にぶい橙(5YR7/4)/にぶい橙(5YR6/4)	焼成良、胎土密。赤色粒多く含む。
273	図III-59 図版31	C1014 埋土中	Y43 C区	土師器 皿	(9.0) //	ての字状口縁。やや深めの皿になるか?	口縁10%	灰白(10YR8/2)/灰白(10YR8/2)/にぶい黄橙(10YR6/4)	焼成良、胎土密。赤色粒少量含む。
274	図III-59 下層	C1014 Y44 C区	土師器 甕	//	外面全面に煤付着。	把手のみ	/灰(N4/0)/浅黄橙(7.5YR8/4)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、赤色粒中量含む。	
275	図III-59 図版31	C1014 埋土中	Y43 C区	土師器 土錐	全長5.4 外径1.0 ~1.2	管状土錐。	完形	内外面ともにぶい黄橙(7.5YR8/3)～灰白(2.5Y7/1)	焼成良、胎土やや粗。片岩あり、赤色粒なし。
276	図III-59 図版31	C1014 埋土中	Y43 C区	土師器 土錐	全長5.9 外径1.0 ~1.2	管状土錐。	完形	内外面とも浅黄橙(7.5YR8/3)～灰白(2.5Y7/1)	焼成良、胎土やや粗。片岩あり、赤色粒なし。
277	図III-59 図版31	C1014 埋土中	Y43 C区	土師器 土錐	全長4.9 外径1.0 ~1.1	管状土錐。	80%	内外面ともにぶい黄橙(10YR7/3)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒なし。
278	図III-59 図版31	C1014 埋土中	Y43 C区	土師器 土錐	全長5.0 外径1.0 ~1.1	管状土錐。	=完形	内外面ともにぶい橙(5YR6/4)～にぶい黄橙(10YR7/2)	焼成良、胎土やや粗。片岩あり、赤色粒なし。
279	図III-59 図版31	C1014 埋土中	Y44 C区	土師器 土錐	全長4.3 外径1.1	管状土錐。	完形	内外面ともにぶい黄橙(10YR7/2)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒なし。
280	図III-59 図版31	C1014 埋土中	側溝 C区	土師器 土錐	全長4.5 外径1.0 ~1.1	管状土錐。	完形	内外面ともにぶい黄橙(10YR7/3)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒なし、片岩含む。
281	図III-59 図版31	C1014 埋土中	Y43 C区	土師器 土錐	残存長 4.6 外径1.0 ~1.1	管状土錐。	90%?	内外面とも黄灰(2.5Y6/1)	焼成やや悪。胎土やや粗。赤色粒なし、片岩含む。
282	図III-59 図版31	C1014 埋土中	Y43 C区	土師器 土錐	全長4.0 外径1.3 ~1.4	管状土錐。	完形	内外面とも淡橙(5YR8/3)～灰白(5YR8/1)	焼成良、胎土密。赤色粒微量含む。
283	図III-59 図版31	C1014 埋土中	Y43 C区	土師器 土錐	全長3.6 外径1.1 ~1.2	管状土錐。	=完形	内外面断面とも 灰白(10YR8/1)	焼成良、胎土密。赤色粒なし。
284	図III-59 図版31	C1014 埋土中	Y43 C区	土師器 土錐	全長4.1 外径1.2	管状土錐。	完形	内外面とも 灰白(2.5Y8/1)	焼成良、胎土密。赤色粒なし。
285	図III-59 図版31	C1014 埋土中	Y43 C区	土師器 土錐	残存長 4.2 外径1.1	管状土錐。一部欠損	90%?	内外面とも 灰白(10YR8/2)～灰(N4/0)	焼成やや悪。胎土やや粗。赤色粒なし、片岩含む。
286	図III-59 図版31	C1014 埋土中	Y43 C区	土師器 土錐	全長3.7 外径1.0 ~1.2	管状土錐。一部欠損	80%	内外面とも 灰白(2.5Y7/1)～黄灰(2.5Y5/1)	焼成やや悪。胎土やや粗。赤色粒なし。
287	図III-59 図版31	C1014 埋土中	Y43 C区	土師器 土錐	全長3.3 外径0.9 ~1.0	管状土錐。一部欠損	50%	内外面とも にぶい橙(7.5YR7/3)～灰白(2.5Y8/2)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒なし。
288	図III-59 I層	C247 X47 C区	土師器 皿	(16.0) (10.0)/ 2.1	底部からの立ち上がり滑らか。丁寧なヨコナデ調整。底部付近灰色。	20%	橙(5YR7/6)～褐灰(10YR5/1)/橙(5YR6/6)～にぶい橙(7.5YR7/4)/橙(5YR6/6)～褐灰(10YR5/1)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒微量含む。	
289	図III-59 I層	C247 X47 C区	土師器 皿	//	口縁外反するやや深めの皿。丁寧なヨコナデ調整。底部付近灰色。	小片	内外面とも 橙(5YR6/6)～褐灰(10YR4/1)	焼成良、胎土密。赤色粒少量含む。	
290	図III-59 I層	C247 X47 C区	土師器 皿	//	ての字状口縁のように内側に窪ませるが口縁端部の内側への折り返しはない。体部外面ユビオサエ以外はヨコナデ調整。	小片	褐灰(10YR5/1)～褐灰(10YR5/1)/褐灰(10YR5/1)	焼成良、胎土密。赤色粒ほとんどなし。	
291	図III-59 I層?	C247 X47 C区	土師器 皿	//	ての字状口縁のように内側に窪ませるが口縁端部の内側への折り返しはない。調整不明。内面に煤付着。	小片	灰黄褐(10YR5/2～4/2)/にぶい黄橙(10YR7/3)～にぶい橙(7.5YR6/4)	焼成良、胎土やや密。赤色粒少量含む。	
292	図III-59 I層?	C247 X47 C区	土師器 皿	//	口縁外反するやや深めの皿。丁寧なヨコナデ調整で滑らかな器形。	小片	明赤褐(2.5YR5/6)～橙(5YR6/6)/内面と同色/橙(2.5YR6/8)	焼成良、胎土密。赤色粒微量含む。	
293	図III-59 図版29	C247 I層?	X47 C区	土師器 甕	(25.5) //	口縁はなめらかに曲がり外にひらく。口縁端部下方にやや肥厚し面を作る。口縁部ヨコナデ、体部外面細かいタテハケ後ナデる。全体に丁寧なつくり。	口縁15%	にぶい橙(7.5YR7/4)～橙(5YR7/6)/にぶい橙(7.5YR6/4)～7.5YR7/4)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、チャート、片岩、赤色粒含む。
294	図III-59 図版31	C247 II～IV 層	X47 C区	土師器 椀	(17.0) //	口縁端部内部部分的に沈線状に窪む。外面は2段ヨコナデ、外外面ともかすかにヨコミガキの痕跡があるが、ヨコナデとしたほうが適切かもしれない。	口縁20%	内外面とも灰黄(7.5YR7/6～2.5Y7/2)	焼成良、胎土密。赤色粒中量含む。
295	図III-59 図版29	C247 II～IV 層	X47 C区	土師器 椀	/7.2/	非常に高いしっかりした高台。底部外面ナデ、内面ミガキ? 調整。	底部60%	にぶい橙(7.5YR7/4)～にぶい黄橙(10YR7/2)/灰(N4/0)	焼成良(断面まで酸化されていないが)、胎土やや粗。赤色粒少量含む。
296	図III-59 II～IV 層	C247 X47 C区	土師器 椀	(16.0) //	口縁端部内面部分的に窪む。外面は2段ヨコナデ、内面にはかすかにヨコミガキの痕跡があるが外面は摩滅のため不明。	口縁10%	にぶい橙(5YR6/4)/にぶい橙(7.5YR7/3)～橙(5YR7/6)/浅黄橙(7.5YR8/3)～にぶい橙(7.5YR6/4)	焼成良、胎土密。赤色粒ほとんどなし。	
297	図III-59 II～IV 層	C247 X47 C区	土師器 皿	(16.0) //	口縁わずかに内湾気味に大きひらく。丁寧なヨコナデ調整で非常に滑らかな器形。	口縁15%	にぶい橙(7.5YR7/4)～淡赤橙(2.5YR7/4)/にぶい橙(2.5YR6/4)	焼成良、胎土密。赤色粒少量含む。	
298	図III-59 図版31	C247 II～IV 層	X47 C区	土師器 椀	(14.4) //	尖り気味の口縁端部で内面はヨコナデにより部分的に窪む。外面は2段以上のヨコナデでミガキなどは摩滅のため不明、内面は摩滅のため不明。内面に部分的に煤付着する。	口縁20%	内外面とも橙(5YR6/6)～にぶい黄橙(10YR7/2)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒少量含む。
299	図III-59 図版31	C247 II～IV 層	X47 C区	土師器 土錐	全長5.3 外径1.3 ~1.4	一部酸化不足のため灰色。	完形	内外面とも橙(7.5YR7/6)～灰(N5/0)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒なし。
300	図III-59 図版29	C247 II～IV 層	X47 C区	瓦 平瓦	-	凹面には布目痕が、凸面には格子タタキ痕が明瞭に残る。凹面には布目痕のあとについた格子タタキ痕が部分的に観察できる。凹面には離れ砂付着する。	30%?	全面にぶい黄橙(10YR7/4)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、片岩、赤色粒含む。
301	図III-60 図版30	C258 0～10cm	Y46 C区	土師器 甕	(31.4) //	「く」の字状口縁で頸部内面に稜を形成する。口縁端部は面を作るがナデ窪む。外面は粗いタテハケ、内面はナデ? 外面および内面の一部に煤付着。	口縁40%	内外面とも黒褐色(10YR3/1)～にぶい橙(7.5YR6/4)	焼成良、胎土粗。石英、長石、チャート多く含む。
302	図III-60	C258 埋土中	Y46 C区	土師器 皿	(11.2) //	ての字状口縁。端部の上方への折り返し下さい。	10%	内外面ともにぶい黄橙(10YR7/2)	焼成良、胎土密。赤色粒ほとんどなし。
303	図III-60	C53	X43 C区	土師器 椀	//	口縁端部内面に沈線。	小片	にぶい黄褐(10YR5/3)/灰黄(2.5Y7/2)/黄灰(2.5Y6/1～5/1)	焼成良、胎土やや密。赤色粒少量含む。

遺物番号	挿図番号 / 図版番号	遺構名 / 土層名	地区調査区	種類器種	口径/底径/器高	形態・成形等の特徴	残存率	色調(内/外/断面) (釉/露胎/断面)	備考
304	図III-60 図版29	C53	X43 C区	黒色土器 椀	/ (5.8) /	黒色土器B類。	底部20%	灰(N4/0) / 暗灰(N3/0) / 橙(YR6/6)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、赤色粒微量含む。
305	図III-60 図版29	C251 埋土中	X46 C区	土師器 壺	(25.4) //	屈曲部にやや丸みを持つ「く」の字状口縁で端部に面を持つ。口縁内面板状工具によるヨコナデ、外面タテハケのちユビオサエ。口縁外面に黒斑。	口縁10%	にぶい黄橙(7.5YR7/4) ~ にぶい黄橙(10YR7/4) / 淡黄(2.5Y7/3) ~ にぶい黄橙(10YR7/4) / にぶい褐(7.5YR5/4)	焼成良、胎土粗。石英、長石、チャート含む。
306	図III-60	C251 埋土中	X46 C区	土師器 皿	(14.0) //	口縁は大きく外へ直線的にひろがる。口縁部は丁寧なナデ調整。それ以下の外縁はユビオサエにより凹凸あり。口縁内面端に椀に見られるような沈線状の窪みかすかに見られる。	口縁10%	灰白(10YR8/1 ~ 7.5YR8/2) / にぶい黄橙(10YR7/3) / 灰白(7.5YR8/1)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒微量含む。
307	図III-60	C251 BorA 層?	X46 C区	土師器 椀	//	口縁外面に2段ヨコナデ、それ以下はユビオサエで凹凸あり。内面はナデ?により丁寧に仕上げる。	小片	にぶい黄橙(10YR7/3) / にぶい黄橙(10YR7/3) ~ にぶい橙(7.5YR7/4) / にぶい橙(5YR6/4)	焼成良、胎土密。赤色粒少量含む。
308	図III-60	C12 埋土中	W44 C区	土師器 椀	(15.8) //	口縁端部内面ヨコナデにより窪む。外面はヨコナデにより凹む。その他調整不明。	口縁10%	にぶい黄橙(10YR7/3) / にぶい黄橙(10YR7/3) / にぶい黄橙(10YR7/3)	焼成良、胎土密。赤色粒ほとんどなし。
309	図III-60	C12 埋土中	W44 C区	土師器 壺?	(14.2) //	小さく外反する口縁。頸部外面はヨコナデのため下側に疊を形成。内面に煤付着、外面は2次的な熱を受け赤色化。	口縁15%	にぶい褐(7.5YR5/3) / にぶい赤褐(5YR5/3 ~ 10YR6/4) / 灰白(N7/0)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒少量含む。
310	図III-60	C12 埋土中	W44 C区	土師器 皿	(13.7) // 3.1	口縁部丁寧なヨコナデで外反する。内面ナデ、外面摩滅のため不明。	口縁15%	にぶい橙(7.5YR7/4) / 橙(YR7/6) ~ 淡黄橙(7.5YR8/3) / 橙(YR7/6)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒少量含む。
311	図III-60	C12 埋土中	W44 C区	土師器 皿	(10.8) // 1.9	ての字状口縁。内外面に煤付着する。	15%	内外断面ともにぶい橙(YR6/4)	焼成良、胎土密。赤色粒少量含む。
312	図III-60 図版30	C237 A層	X46 C区	土師器 皿	16.0/9.3 /2.7	口縁はほぼ直線的にひらき端部を丸く収める。口縁外面はヨコナデにより窪むが部分的にナデが2段観察できる。底部外面はユビオサエにより凹凸あり、内面はナデ?	80%	内外面とも橙(7.5YR7/6) ~ にぶい黄橙(10YR7/4)	焼成良、胎土密。小豆色粒少量含む。
313	図III-60	C237 A層	X46 C区	土師器 皿	//	口縁部強いヨコナデにより急激に器壁薄くなる。	小片	にぶい橙(7.5YR7/4) / にぶい橙(7.5YR7/4) / 灰白(10YR8/1)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒少量含む。
314	図III-60 図版30	C1002 埋土中	X40 C区	土師器 高杯	//	円盤充填。杯部底にユビオサエ痕が列状に残る。杯部と脚柱部の接合は観察できなかったため、図示していない。	杯底部100%	にぶい黄橙(10YR5/4 ~ 5/3) / にぶい赤褐(5YR4/3) ~ 赤褐(10YR5/3) / にぶい黄橙(10YR5/3), 黒(N1.5/0)	焼成やや歟、胎土やや粗。石英、長石多く含む。
315	図III-60 図版30	C1002 中層	X39 C区	土師器 高杯	//	屈曲部なく滑らかな握部。	脚50%	橙(YR7/6) / 橙(YR7/6) / 灰(N5/0)	焼成やや歟、胎土やや粗。石英、長石、赤色粒少量含む。
316	図III-60 図版30	C1002 中層	X40 C区	土師器 高杯	/4.8/	脚部に対し杯部小さい。	60%	内外断面ともにぶい橙(YR7/4) ~ 灰白(7.5YR8/2)	焼成やや歟、胎土やや粗。石英、長石、小豆色粒多く含む。
317	図III-60 図版30	C1002 中層	X40 C区	須恵器 高杯	/9.8/	短脚で円柱部と据部の境界屈曲し明瞭な稜線がある。一部突尖状に段が付く部分あり。据部・杯外底面は回転ヨコナデ、内面はユビオサエ、円柱部は純方向のヘラミ方キ?のあとヨコナデ。	脚80%	内外断面とも灰白(N7/0)	焼成やや歟、胎土やや密。石英、長石、多量の黒色粒含む。
318	図III-60 図版30	C1002 下層	X39 C区	須恵器 杯	12.6/7.6 /4.7	口縁部短く「く」の字に曲げ、端部に面を形成する。底面は平底である。内面は回転ヨコナデ、外面は上半がユビオサエ、下半がグレズリ。シャープなつくりで体部外面には火燐?が多数見られる。	60%	内外断面褐灰(10YR5/1)	焼成やや歟、胎土密。黒色粒なし。
319	図III-60	C1002 最下層	X40 C区	土師器 壺	//	短部丸く収める口縁。	小片	橙(YR6/6) ~ にぶい橙(7.5YR7/3) / 内面と同色/褐灰(7.5YR5/1 ~ 4/1)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、赤色粒中量含む。
320	図III-60 図版30	C238 埋土中	W47 C区	須恵器 杯身	12.0// 4.3	受け部鋭く、立ち上がり上方に長く伸びる。	90%	灰(N5/1) ~ 灰白(N7/1) / 内面と同色/赤灰(5YR5/1)	焼成良、胎土密。
321	図III-60 図版30	C238 埋土中	W47 C区	須恵器 ハソウ	(8.0) //	口縁内面に沈線を持つ。内外面とも回転ヨコナデ。	口縁15%	褐灰(YR6/1) / にぶい橙(YR6/4) ~ 褐灰(YR6/2) / 褐灰(YR6/3)	焼成良、胎土密。黒色粒多く含む。B369出土須恵器と接合。
322	図III-60 図版30	C238 埋土中	W47 C区	土師器 壺	(16.9) //	口縁は「く」の字に屈曲し、やや内湾気味にひらく。調整摩滅のため不明。	口縁10%	褐灰(10YR5.1/1) / にぶい橙(YR6/4) ~ 褐灰(YR6/4) / オーリーブ(5Y3/1)	焼成やや歟、胎土粗。石英、長石含む。
323	図III-60 図版30	C238 埋土中	W47 C区	土師器 壺	(13.8) //	やや内湾気味に立ち上がる「く」の字状口縁。調整摩滅のため不明。	口縁20%	にぶい橙(7.5YR7/4) / 橙(7.5YR6/6) ~ にぶい橙(7.5YR7/4) / 黒褐(2.5Y3/1)	焼成やや歟、胎土やや粗。石英、長石、黒色、赤色粒少量含む。
324	図III-60 図版30	C238 埋土中	W47 C区	土師器 壺	(13.8) //	口縁端部を内側に肥厚する布留系の壺。調整摩滅のため不明。	口縁50%	にぶい黄橙(10YR7/3) ~ 褐灰(10YR6/1) / 褐灰(10YR5/1) ~ にぶい橙(YR6/4) / 明赤褐(5YR5/6)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石、黒色粒含む。
325	図III-60 図版30	C238 埋土中	W47 C区	土師器 壺	(13.1) //	口縁端部直線的に立ち上がる。頸部は緩やかな「く」の字を呈する。調整摩滅のため不明。	口縁10%	にぶい橙(7.5YR6/4) / にぶい橙(5YR7/4) / 橙(YR6/6)	焼成やや歟。胎土やや粗。石英、長石、チャート、赤色粒含む。
326	図III-60 図版30	C278 埋土中	W46 C区	土師器 杯	(7.2) //	断面逆台形の低い高台。	底部30%	灰白(2.5Y7/1) / 淡黄橙(10YR8/3) / 浅黄橙(10YR8/3), 灰(N6/0)	焼成良、胎土密。小豆色粒多く含む。
327	図III-60 図版31	D3 埋土中	X34 D区	須恵器 杯身	受部径 (13.1)	土師質の須恵器。立ち上がりは欠損する。底部も一部のみの残存だが平底に近い形態。調整不明。	15%	内外断面とも灰白(N8/0)	焼成歟、胎土密。
328	図III-68 図版31	F72 埋土中	32S F区	瓦器 椀	/5.2/	見込みには格子ミガキ。外面にヨコミガキ。	底部50%	灰(N4/0) / 灰(N4/0) / 灰白(5Y7/1)	焼成良(硬質)、胎土密。II-1期
329	図III-72 図版32	包含層 第G7b層	U19 G区	土師器 土錐	残存長 4.0 外径1.2 ~1.3	管状土錐。一部欠損する。	80%	内外断面とも赤橙(10R6/6)	焼成良、胎土密。赤色粒多く含む。
330	図III-72 図版31	包含層 第G8層	U18, T18 G区	土師器 ?	//	口縁端部肥厚する。	小片	内外断面とも灰白(N8/0)	焼成良、胎土やや密。
331	図III-72 図版31	包含層 第G8層 西	?	瓦器 椀	//	高台退化しどんどなし。	小片	灰白(N7/0 ~ 6/0) / 灰白(N7/0) / 灰白(N7/0)	焼成歟、胎土密。III ~ IV期
332	図III-72 図版31	包含層 第G8a層	青磁 G区	碗	(14.0) //	外反気味に立ち上がる口縁。蓮弁文観察できない。	口縁10%	灰オリーブ(7.5Y5/2) // 灰白(N8/0)	焼成良、胎土やや密。13世紀代
333	図III-72 図版31	包含層 第G8層	U19 G区	土師器 皿	(6.9) // (5.4)/0.8	丁寧なつくり。底面平坦に仕上げ見込みには強いナデのため複数見られる。	10%	灰白(2.5Y8/1) / 灰白(10YR8/1) / 灰黄(2.5Y7/2)	焼成良、胎土密。赤色粒なし。
334	図III-72 図版31	包含層 第G8c層	U19 G区	土師器 皿	8.4//1.4	底面ほぼ平坦面をなし短くひろがる口縁を持つ。底部外面ユビオサエ以外はナデ。	50%	内外断面とも橙(YR6/8)	焼成良、胎土密。赤色粒中量含む。
335	図III-72 図版31	包含層 第8,9層 間	?	土師器 釜?	//	口縁端部わずかに内側に肥厚する。	小片	赤褐(2.5YR4/6) / にぶい赤褐(5YR4/3) / 明赤褐(2.5YR5/8)	焼成やや歟、胎土粗。石英、長石、黒色粒含む。
336	図III-72 図版31	包含層 第8,9層 間	?	瓦器 椀?	//	高台ほとんどないに等しい。	小片	内外断面とも灰白(N7/0)	焼成やや歟、胎土密。IV期
337	図III-72 図版31	G24 埋土中	U19 G区	瓦器 椀	//	高台退化し紐状。	底部25%	暗灰(N3/0) / 暗灰(N3/0) ~ 灰(N6/0) / 灰白(N7/0)	焼成やや歟、胎土密。第10層上面遺構 III期

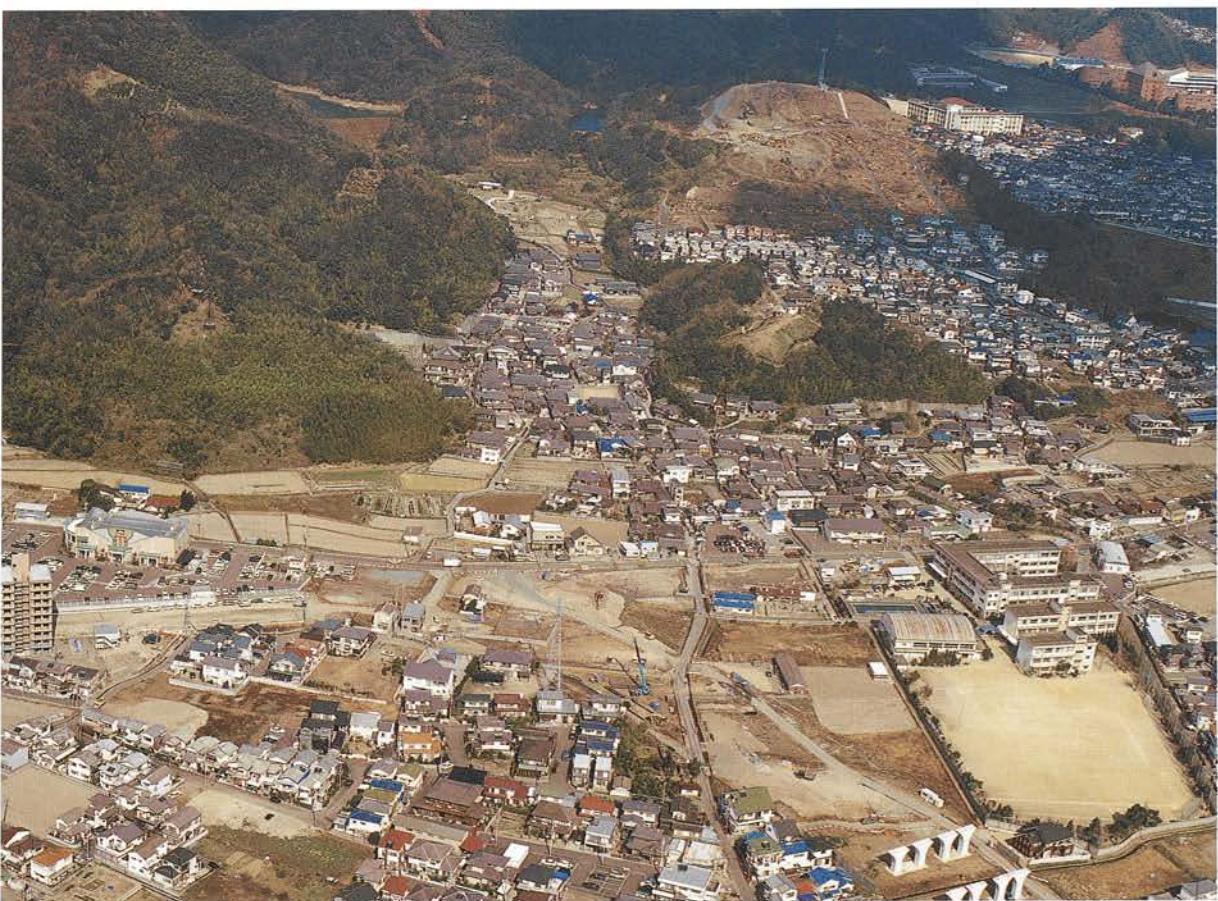
遺物番号	挿図番号/ 図版番号	遺構名 土層名	地区調査区	種類 器種	口径/底 径/器高	形態・成形等の特徴	残存率	色調(内/外/断面) (釉/露胎/断面)	備考
338	図III-72	G6 埋土中	U20 G区	瓦器 椀	/5.9/	しっかりした高台。見込みは密なミガキ。	底部単 壳形	灰白(N7/0)～灰(N5/0)/灰白 (5Y8/1)/灰白(5Y8/1)～浅黄 (2.5Y7/3)	焼成やや軟、胎土密。第9層埋土。 I～II-1期
339	図III-72	包含層 第G10層 西	U20 G区	瓦器 椀	(14.8) //	外ミガキわずかに残る。340と同一個体の可能性あり。	口縁10%	暗灰(N3/0)～暗灰(N3/0)/灰白 (N8/0)	焼成良、胎土やや粗。II期
340	図III-72	包含層 第G10層 西	U20 G区	瓦器 椀	(16.0) //	外ミガキわずかに残る。339と同一個体の可能性あり。	口縁20%	暗灰(N3/0)～暗灰(N3/0)/灰白 (N8/0)	焼成良、胎土やや粗。I～II-1期
341	図III-72 図版32	包含層 第G10層 西	T20 G区	土師器 椀	15.2/6.4 /5.7	口縁内面に部分的に沈線状に窪む。摩滅のためはっきりしないが見込みはらせん状のミガキか?部分的に焼付着する。	80%	橙(2.5YR6/8)～にぶい橙 (7.5YR7/4)/内面と同色/灰 (10Y4/1)	焼成良、胎土やや粗。石英、長 石、少量の赤色粒含む。
342	図III-72 図版31	包含層 第G10層 西	T21 G区	埴輪	//	動物埴輪の鼻部分。	小片	灰白(2.5Y7/1)～にぶい橙 (2.5YR7/4)/灰(N4/0)	焼成良、胎土やや粗。石英、長 石、赤色粒少量含む。
343	図III-72 図版32	包含層 第G10層 西	U19 G区	黑色土器 椀	//	黒色土器A類。	小片	暗灰(N3/0)～淡橙(5YR8/4)～にぶい 橙(5YR6/4)/灰白(7.5YR8/2)	焼成良、胎土やや密。
344	図III-72	包含層 第G10層 西	U20 G区	瓦器 椀	/6.3/	しっかりした高台。見込みのミガキは摩滅のためはっきりしない。	底部50%	灰(N5/0)～暗灰(N3/0)/内面と同色 /灰白(N8/0)	焼成良、胎土やや粗。I～II-1期
345	図III-72	包含層 第G10層 西	U19 G区	瓦器 椀	/5.6/	しっかりした高台。見込みにはジグザグ文様のミガキ。	底部80%	灰(N4/0)～灰白(N8/0)～灰(N4/0) /灰白(N8/0)	焼成やや軟、胎土密。I～II-1期
346	図III-72 図版32	G5 埋土中	U20 G区	土師器 椀	(13.0) //	口縁丁寧にナデ、外反する。内外面に焼付着。小片のため傾きに誤差あり、皿になるかもしれない。	口縁10%	赤褐(7.5YR4/2)/黄灰(2.5Y5/1)/明 赤褐(2.5YR5/6)	焼成良、胎土やや粗。金雲母細片 含む。第10層土
347	図III-72 図版31	包含層 第G11層 西	T20 G区	白磁 碗	(15.0) //	玉縁状口縁。口縁やや内湾気味。	口縁10%	灰白(5Y7/1)～灰白(N8/0)	焼成良、胎土密。白磁碗IV類
348	図III-72	包含層 第G11層 西	S20 G区	瓦器 椀	(14.8) //	やや外反する口縁。外面調整摩滅のため不明。	口縁30%	灰(10YR4/1)～暗灰(N3/0)～灰白 (7.5Y7/1)/灰白(7.5Y7/1)	焼成良、胎土やや粗。I～II-1 期?
349	図III-72	包含層 第G11層 西	S20 G区	瓦器 椀	(15.8) //	やや外反する口縁。外面も密に磨く。4と同一個体の可 能性あり。	口縁40%	灰(N4/0)～6/0)/内面と同色/灰白 (N8/0)	焼成良、胎土やや粗。I期
350	図III-72	包含層 第G11層 西	T20 G区	土師器 皿	//	ての字状口縁。	小片	にぶい橙(5YR6/4)～にぶい黄橙 (10YR7/2)/内面と同色/橙(5YR6/6)	焼成良、胎土密。赤色粒少量含 む。
351	図III-72 図版32	包含層 第G11層 西	S20 G区	土師器 皿	(8.6) // 2.1	ての字状口縁。全体的にやや厚いつくりで屈曲弱い。	40%	内外断面ともにぶい橙(5YR7/4)～ にぶい黄橙(10YR7/3)	焼成良、胎土密。赤色粒微量含 む。
352	図III-72	包含層 第G11層 西	S20 G区	瓦器 椀	/6.3/	しっかりした高台。見込みははっきりしないが密に磨 く。	底部60%	灰(N4/0)～灰(N4/0)～灰(N6/0)/灰 白(N8/0)	焼成良、胎土やや粗。I～II-1期
353	図III-72 図版32	G31 埋土中	U19 G区	土師器 皿	//	ての字状口縁。	小片	内外断面とも橙(5YR6/6)	焼成良、胎土やや粗。赤色粒微量 含む。第12層上面遺構
354	図III-72 図版32	包含層 第G12層 西	S20 G区	土師器 甕	(34.6) //	口縁は「く」の字に緩く折れ曲がり、端部は内外面とも 丸みをもつ面を作り尖り気味となる。口縁外面に焼付 着。	40%	にぶい黄橙(10YR6/4)～黑褐 (10YR3/1)～にぶい黄橙(10YR6/4)	焼成良、胎土粗。石英、長石、金 雲母多く含む。
355	図III-72 図版31	包含層 第G12層 西	U21 G区	黑色土器 椀	/7.3/	内黒。見込みに板状工具によるナデ～ハケ。	底部完 形	黒(N1.5/0)～にぶい黄橙(10YR7/3) ～暗灰(N3/0)～にぶい黄橙 (10YR7/3)	焼成良、胎土密。赤色粒少量含 む。
356	図III-72 図版32	包含層 第G12層 西	U20 G区	土師器 皿	(8.6) // 1.5	ての字状口縁。	口縁20%	内外断面ともにぶい橙(7.5YR7/4) ～橙(5YR7/6)	焼成良、胎土密。黑色粒少量含 む。
357	図III-72 図版32	包含層 第G14層	U20 G区	灰釉陶 器?壺	//	壺の頸部と思われる。外面に緑色釉かかる。	頸部片	灰白(7.5Y7/1)～灰白(N7/0)～灰 (5Y6/1)/灰白(5Y7/1)	焼成良、胎土やや密。長石、黒色 粒多く含む。
358	図III-72 図版32	包含層 第G14層	T18 G区	土師器 皿	//	ての字状口縁。薄作り。	口縁10%	にぶい橙(5YR6/4)～橙(2.5YR8/6)/ 内面と同色/にぶい赤褐(5YR5/4)	焼成良、胎土密。黑色粒中量含 む。
359	図III-72 図版32	包含層 第G14～ 15層	?	灰釉陶 器?壺	//	口縁端部は面を作り上下に少し拡張する。口縁内面に釉 付着する。	小片	灰(7.5Y6/1)～灰白(N7/0)/灰白 (5Y7/1)	焼成良、胎土やや密。長石中量含 む。
360	図III-72	包含層 第G16層	U18 G区	黑色土器 椀	(17.0) //	黒色土器A類。体部中程に屈曲部あり。	口縁15%	暗灰(N3/0)～褐灰(10YR4/1)/灰黃 褐(10YR6/2)～灰褐(7.5YR5/2)	焼成良、胎土密。
361	図V-1 図版32	包含層 第6層	A269 A区	須恵器 器台	(35.0) //	口縁は内湾気味に立ち上がったあと急激に外反し端部は シャープな面をつくる。体部は丸みを帯びやや浅めの杯 部である。表面黒色を呈す。	杯部20%	暗灰(N3/0)	焼成良、胎土密。
362	図V-1 図版34	包含層 第5層	X54 B区	須恵器 器台	//	杯部下半にやや丸みを持つが直線的にひらく。波状文は 一部低い突実もあるが凹線で区画する。杯部下半にはカ キ目を施す。小片のため復元径、傾きに誤差含む。	10%	内外断面とも灰白(N7/0)	焼成やや軟、胎土粗。石英、長石 含む。
363	図V-1 図版34	C220 B層	W47 C区	須恵器 器台	/(17.5) /	器台の脚部。直線的な据部で端部もそのまま面を作る。 三角形透かしはほぼ同角度に穿たれている。濃緑色の釉 外面に付着する。表面黒色を呈す。	脚部10%	オリーブ黒(10Y3/1)～オリーブ黒 (10Y3/1)～赤灰(5R5/1)	焼成良、胎土密。石英、長石、 チャート少含む。361に似るが小 豆色粒含む点異なる。
364	図V-1 図版34	C273 埋土中	X46, 47 C区	須恵器 瓶	//	取り付き部内面強くナデる。	把手のみ	内外断面とも灰白(N7/0)	焼成やや軟、胎土やや密、石英、 長石、多量の黒色粒含む。
365	図V-1 図版33	C220 B層	X46 C区	須恵器 甕	(57.0) //	口縁端部はやや尖り気味であるが丸く収め外や下がっ たところにシャープな断面三角形突実がつく。	口縁10%	灰(N7/0)～灰灰(2.5Y5/1)～灰白 (N7/0)～灰白(N7/0)	焼やや軟、胎土やや粗。石英、長 石含む。
366	図V-1 図版33	C48 上層	X44 C区	須恵器 甕	(35.6) //	365と類似するが口縁からやや下がった位置に突実がつ く。	口縁10%	内外断面とも灰白(N8/0～7/0)	焼やや軟、胎土やや粗。石英、長 石含む。
367	図V-1 図版33	C1031? 埋土中	X47 G区	須恵器 壺?	(22.2) //	365, 366のように外反せず直線的にひろがる。緑色釉付 着する。	口縁20%	内外断面とも灰白(N8/0～7/0)	焼成やや軟、胎土粗。石英、長石 含む。
368	図V-1 図版33	C220 B層	W45 C区	須恵器 甕	(23.0) //	口縁端部は面を作り内外面とも丁寧なナデ調整。	口縁10%	灰(N6/0)～灰(N6/0)～にぶい赤褐 (5YR5/4)～褐灰(7.5YR5/1)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石 含む。古代か?
369	図V-1 図版33	B15 第5+ $\alpha$ 層	W55 B区	須恵器 甕	//	明瞭な突実。硬質な焼き。	頸部20%	灰色(N6/0)～灰色(N4/0)～灰赤 (10R4/2)	焼成良、胎土密。
370	図V-1 図版33	包含層 第5b, c 層	Y47 C区	須恵器 甕	(17.4) //	頸部は直立し、緩やかに屈曲して直線的な外にひらく口 縁部を形成する。文様なし。	口縁15%	灰(N4/0)～灰(N4/0)～灰白(N7/0)	焼成やや軟、胎土密。

遺物番号	挿図番号 /図版番号	遺構名 土層名	地区調査区	種類 器種	口径/底径/ 器高	形態・成形等の特徴	残存率	色調(内/外/断面) (釉/露胎/断面)	備考
371	図V-1 図版33	A7 埋土中	Y64 A区	須恵器 壺?	//	口縁端部はやや内溝し、外やや下にはしっかりした突帯がつく。硬質な焼き。	小片	灰(N6/0)/灰(N5/0)/赤灰(5R5/1)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石含む。
372	図V-1 図版33	包含層 第5層	X55 B区	須恵器 壺?	//	口縁端部丸く収め、すぐ下に突帯がつく。一部胎土異なり赤灰(2.5R6/1)となる。	小片	灰白(N7/0)/灰(N4/0)/灰白(N7/0)	焼成良、胎土密。石英、長石微量含む。赤色部は363と同じ。
373	図V-1 図版33	包含層 第6層	Y48 C区	須恵器 壺	//	口縁下に突帯、その下に波状文。風化激しい。	小片	灰白(N7/0)/灰(N4/0)/灰(N6/0)	焼成良、胎土やや粗。石英、長石含む。
374	図V-1 図版33	包含層 第6層	W54 B区	須恵器 壺	//	口縁端部内面沈線状に窪み持つ。火ぶくれあり。断面外周のみ一部小豆色に近い。	小片	灰(N5/0~4/0)/灰(N5/0~4/0)/灰白(N7/0~8/0)	焼成良、胎土やや密。石英、長石少量、黒色粒含む。
375	図V-1 図版33	包含層 第5層	X53 B層	須恵器 壺	//	突帯の上下に波状文施されるが摩滅のため図化不能。断面一部赤灰色。	小片	灰(N5/0)	焼成良、胎土密。微量の石英、長石含む。
376	図V-1 図版33	C220 A層	X46 C区	須恵器 壺?	//	口縁端部上下に拡張。	小片	灰白(N7/0)/灰白(N7/0)/にぶい黄 橙(10YR7/2)	焼成良、胎土密。
377	図V-1 図版33	C183, 19 2, 196埋 土中	X45 C区	須恵器 壺?	//	口縁端部上下に拡張。波状文	小片	黄灰(2.5Y5/1)/灰(N6/0)/灰白 (N7/0)	焼成良、胎土密。
378	図V-1 図版33	A21 埋土中	2A67 A区	須恵器 壺	//	格子タタキ。須恵器融着。歪あり。	小片	灰(N6/0)/灰(N5/0~4/0)/灰赤 (10R4/2)	焼成良、胎土密。赤色粒微量含む。
379	図V-2 図版34	C219他 埋土中	2A47他 C区	須恵器 壺	(13.8)//	口縁は短く外反し端部は面を作る。体部上半細かい繩席文、下半格子タタキ。上半は螺旋状?に磨り消す。内面ヨコナデ仕上げで当て真痕はっきりしない。	口縁30%	内外断面とも灰白(N7/0)	焼成やや軟、胎土やや密。石英、長石、多量の黒色粒含む。
380	図V-2 図版34	C44 埋土中	Y43 C区	須恵器 壺	(18.2)//	口縁端部面を作り、上方につまみあげる。体部は粗い繩席タタキ。内面は板状工具によるヨコナデ。	口縁20%	内外断面とも灰白(N7/0)	焼成良、胎土粗。石英、長石、黒色粒含む。
381	図V-2 図版34	包含層 第4, 6, 8 層	X71 A区	須恵器 長頸壺	(9.3)//	直線的にひらく口縁。	口縁10%	黄灰(2.5Y6/1)/黄灰(2.5Y6/1)/黄 灰(2.5Y5/1)	焼成やや軟、胎土密。石英、長石、黒色粒含む。
382	図V-2 図版35	包含層 第6層	X35 D区	須恵器 高杯	//	短脚の高杯と思われる。円形と思われる透かし穴は2箇所確認できるが配置から計4箇所か?内外とも丁寧な回転ヨコナデ	脚20%	灰(N6/0)/灰(N6/0)/灰白(N8/0)~ 褐灰(5R6/1)	焼成良、胎土密。断面中央のみ赤灰色。
383	図V-2 図版34	C272 埋土中	X46 C区	須恵器 高杯	(11.4)/(10.2)/ 8.6	短く太い脚部があるが裾部途中に短い突帯をもつ。杯外底面は回転ヘラケズリ、内面はナデ、それ以外は回転ヨコナデ調整で仕上げる。	30%	内外断面とも灰(N6/1)~灰白 (5Y8/1)	焼成やや軟、胎土密。石英、長石、チャート、黒色粒少量含む。実C199と接合
384	図V-2 図版35	包含層 第6層	X56 B区	須恵器 高杯	(14.1)//	無蓋の高杯か、杯蓋の可能性もある。外面突帯部すぐ下まで回転ヘラケズリ、それ以外は回転ヨコナデ調整。	口縁10%	灰(N5/0)/灰(N5/0~6/0)/灰(N5/0)	焼成良、胎土やや密。石英、長石、黒色粒含む。
385	図V-2 図版34	包含層 第6層	X52 B区	須恵器 高杯	//	高杯脚部、円形?の透かし穴。内外とも回転ナデ調整。	小片	内外断面とも灰(N6/0)	焼成良、胎土やや密。長石、黒色粒含む。
386	図V-2 図版35	C220 B, C層	W46 C区	須恵器 ハソウ	//	内外面に一部緑色釉付着。外面下半は砂粒の動きありケズリか?	体部20%	灰白(N7/0)/灰(5Y6/1)~灰白 (N7/0)/灰白(N7/0)	焼成良、胎土やや粗。長石、黒色粒少量含む。
387	図V-2 図版35	包含層 第5層	Y53 B区	須恵器 ハソウ?	//	体部中央付近に段差で窪みをつくり、そこに波状文を施す。上下2段の凹線による区画と見ることもできる。円孔は小片のため不明。	体部15%	灰(N6/0~5/0)/灰(N6/0~5/0)/灰 赤(10R5/2)	焼成良、胎土密。長石、黒色粒微量含む。
388	図V-2 図版35	包含層 第6層	X35 D区	須恵器 ハソウ	//	体部中央やや上に最大径を持つと思われる。体部中央付近を上下2本のへラ描沈線で区画し内部に波状文を施す。下の沈線は一部2本になっている。沈線下にもかすかに波状文の痕跡残る。外面に緑色釉かかる。体部外面下半は砂粒の動きありケズリ?の可能性。内面はユビオサ工、それ以外は回転ヨコナデ。	体部40%	灰(N5/0)/灰(N4/0)/赤灰(10R6/1)	焼成良、胎土密。長石、赤色粒、黒色粒少量含む。断面中央のみ赤灰色。
389	図V-2 図版35	C220 B, C層	W47 C区	須恵器 ハソウ	//	生焼け状態。内外面中央付近はヘラナデ、外面下半にタタキ痕わざかに残る。下半に砂粒の動きあり。	底部完形	褐灰(5YR5/1)/褐灰(5YR5/1)/橙 (2.5YR7/6) 底部: 清黄橙 (10YR6/3)	焼成軟、胎土やや密。石英、長石、微量の赤色粒含む。
390	図V-2 図版35	包含層 第6層	V65 B区	須恵器 ?	//	段で区切られた約2cmの幅に刺突文を施す。径は歪があるため復元できない。形状的にはハソウ体部や櫛型ハソウの可能性がある。	小片	灰白(7/0)/灰白(7/0)/灰黃 (2.5Y6/2)	焼成良、胎土密。黒色粒微量含む。断面中央のみ灰黄色。
391	図V-2 図版35	B538 埋土中	W52 B区	須恵器 コップ	(8.6)/ 3.4/5.6	口縁部長く立ち上がり、体部はやや丸味をもつ。口径に対し底径小さい。底部外面は静止ヘラケズリ、それ以外は回転ヨコナデ又はナデ。	50%	灰(N6/0)/灰(N6/0)/赤灰(2.5Y6/1)	焼成良、胎土密。外面に石英、長石、黒色粒少量含む。
392	図V-2 図版35	C183 埋土中	X45, Y45 C区	須恵器 コップ	//	391に比べ底部から直線的に立ち上がる。底部外面は静止ヘラケズリ。	底部10%	灰(N5/0)~灰白(N7/0)/内面と同色/ 灰白(N7/0)	焼成良、胎土粗。石英、長石、少量の黒色粒含む。
393	図V-2 図版35	包含層 第5b, 6 層	W39 C区	須恵器 蓋	(14.8)//	鋭い稜を持つ突帯。内面に緑灰色の釉付着する。	口縁10%	灰白(N7/0)/灰白(N7/0)/灰白 (N8/0)	焼成やや軟、胎土粗。石英、長石、黒色粒含む。
394	図V-2 図版35	包含層 第6層	2B68 A区	須恵器 蓋?	(12.0)//	大きな突帯がつくが鋭くはない。	口縁10%	灰(N5/0)/灰(N5/0)/灰(N6/0)	焼成良、胎土密。石英、長石、黒色粒少量含む。
395	図V-2 図版35	包含層 第6層	W50 B区	須恵器 蓋	//	鋭い稜を持つ突帯。突帯上は静止ヘラケズリ。	口縁15%	灰(N6/0)/灰(N5/0)/灰白(N7/0)	焼成良、胎土密。黒色粒ほとんどなし。
396	図V-2 図版35	包含層 側溝	W46 C区	須恵器 蓋	(9.4)//	小さく滑らかな突帯。その上方には刺突文あり。回転ヨコナデ調整。	口縁15%	灰白~灰(N7/1~5/1)/内面と同色/ 赤灰(2.5YR6/1)	焼成良、胎土密。黒色粒少量含む。
397	図V-2 図版35	C220 B層	W45 C区	須恵器 蓋	//	突帯途中で欠損。天井部付近に波状文施す。外面幅の狭い回転ナデ	小片	灰白(N7/0)/灰(N6/0)/赤灰 (7.5R6/1)	焼成良、胎土粗。石英、長石、少量の黒色粒含む。
398	図V-2 図版35	C47 埋土中	W41 C区	須恵器 杯	//	立ち上がりは長くやや内側へ傾く。杯部は深くなると思われる。残存部下端からヘラケズリ始まる。	小片	灰(N5/0)/灰(N5/0)/灰(N6/0)	焼成良、胎土密。黒色粒含む。
399	図V-2 図版35	包含層 第6層	2A69, V6 A区	須恵器 器台	//	ほぼ水平に近い傾きで鋭い突帯2条と廉状文がつくことから筒型器台の一部か?部分的に緑灰色の釉が付着する。	肩部? 10%	灰白(N7/0)/灰白(5Y7/1)/灰白 (N8/0)	焼成やや軟、胎土やや粗、石英、長石、黒色粒少量含む。
400	図V-2 図版34	包含層 黒褐色 シルト	S34 F区	須恵器 壺	//	縱方向の平行タタキの上を螺旋状?に磨り消す。内面ヨコナデにより当て具痕消すがわずかに残る。	小片	にぶい黄橙(10YR6/3)/灰黄 褐(10YR6/2)/褐灰(10YR6/1)~にぶい 黄橙(10YR6/3)	焼成良、胎土密。
401	図V-2 図版35	C183 埋土中	X46, Y46 C区	須恵器 杯	(10.6)//	外面に緑色の釉付着。	10%	灰(N5/0)/灰白(N7/0)/明赤灰 (GRT7/1)~灰(N6/0)	焼成良、胎土粗。石英、長石含む。

\* 備考欄記載の分類および時期については、瓦器：参考文献7、輸入陶磁器：参考文献4、肥前陶磁器：参考文献12、備前焼拂鉢：参考文献3、瓦質土器：参考文献5による。



調査地遠景（東から）



調査地遠景（南から）



調査地遠景（西から）



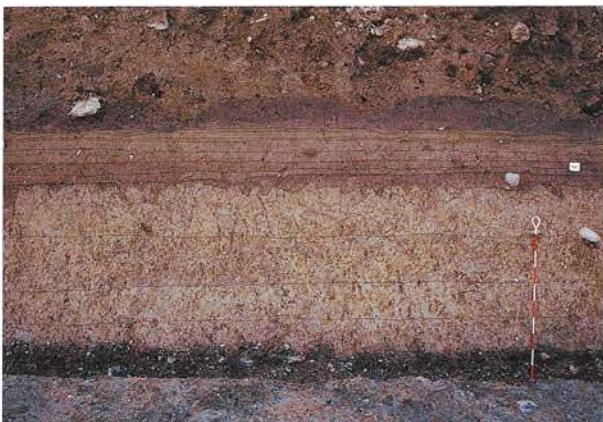
調査地遠景（北から）



A区南壁土層 (2B68)



B区東壁土層 (Y50)



C1区南壁土層 (Y47)



C2区南壁土層 (X43)



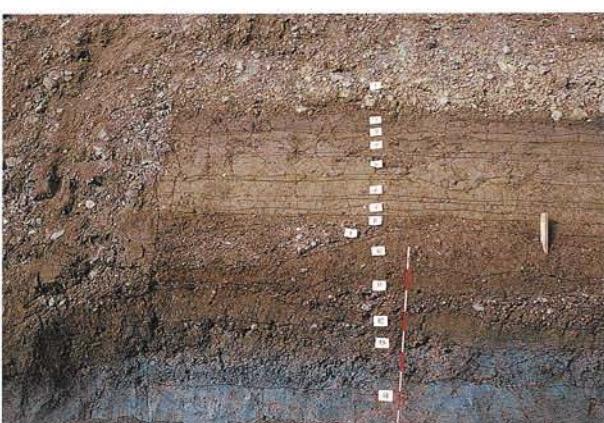
C2区東壁土層 (X38)



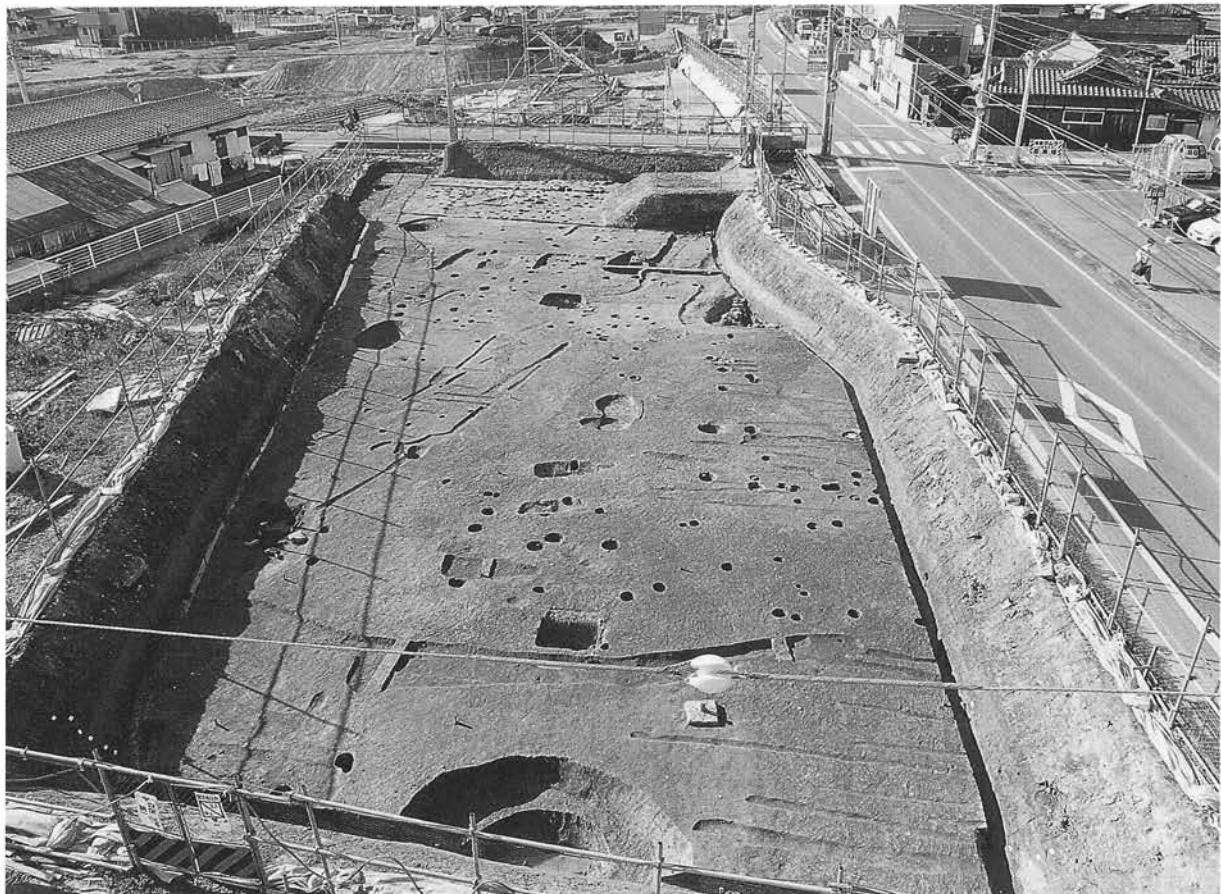
D区南壁土層 (W34)



F区南壁土層 (T33)



G区西壁土層 (R20)



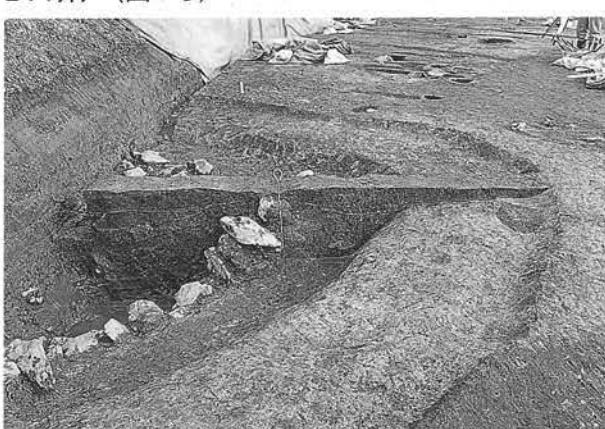
B区第2遺構面全景（東から）



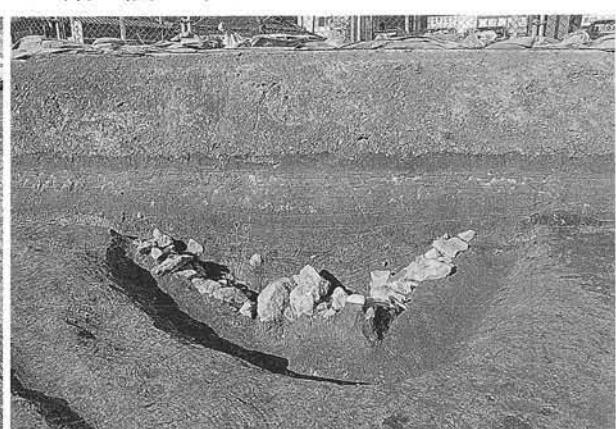
B14井戸（西から）



B14井戸（南から）



B334溜柵（西から）



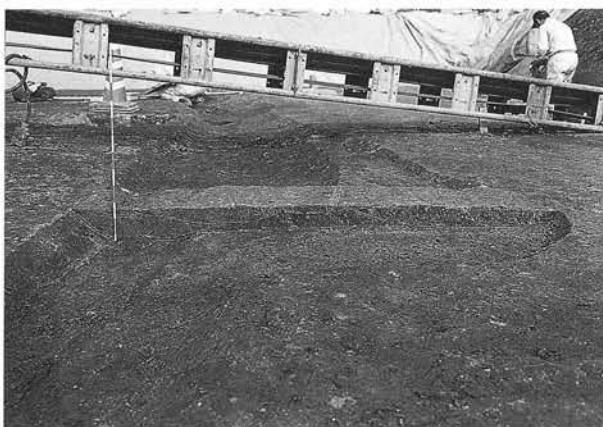
B334溜柵（南から）



B19土坑 (北から)



B25焼土坑 (北から)



B21区画溝 (南から)



B368土坑 (北から)



A28落ちこみ (西から)



A66土坑 (南東から)



A26溝 (東から)



A1,A7流路 (北から)



A区第3遺構面全景（西から）



B区第3遺構面全景（東から）



A39土壙墓（南東から）



A218土壙墓（南東から）



A39, A218土壤墓（北西から）



A39土壤墓（北東から）



A218土壤墓（北東から）



B687ピット（東から）



B687ピット（東から）



B348土壙墓（西から）



B348土坑墓（北から）



B348土坑墓（東から）



B201柱穴（西から）



B427柱穴（北から）



B744柱穴（西から）



B380落ちこみ遺物出土状況（北東から）



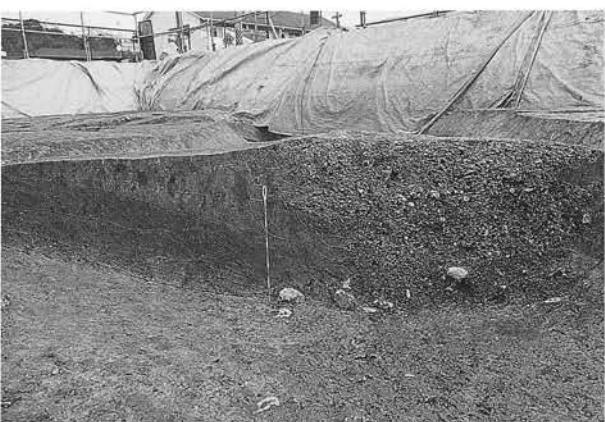
A67, 68土坑（北東から）



B346, 355溝（東から）



A195土坑（西から）



B346, 355溝土層断面（西から）



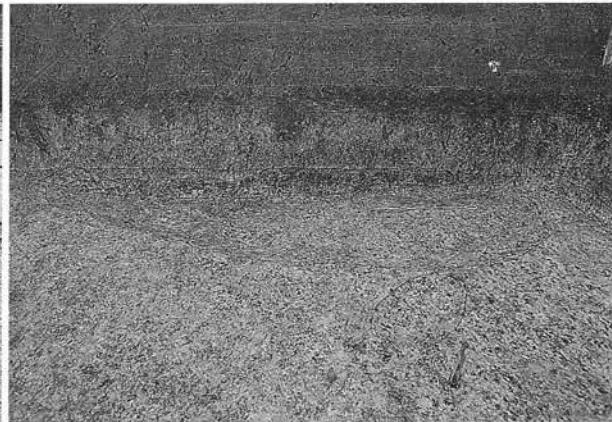
A195土坑（東から）



B355溝土層断面（南東から）



B346, 355溝（北から）



B751土坑（西から）



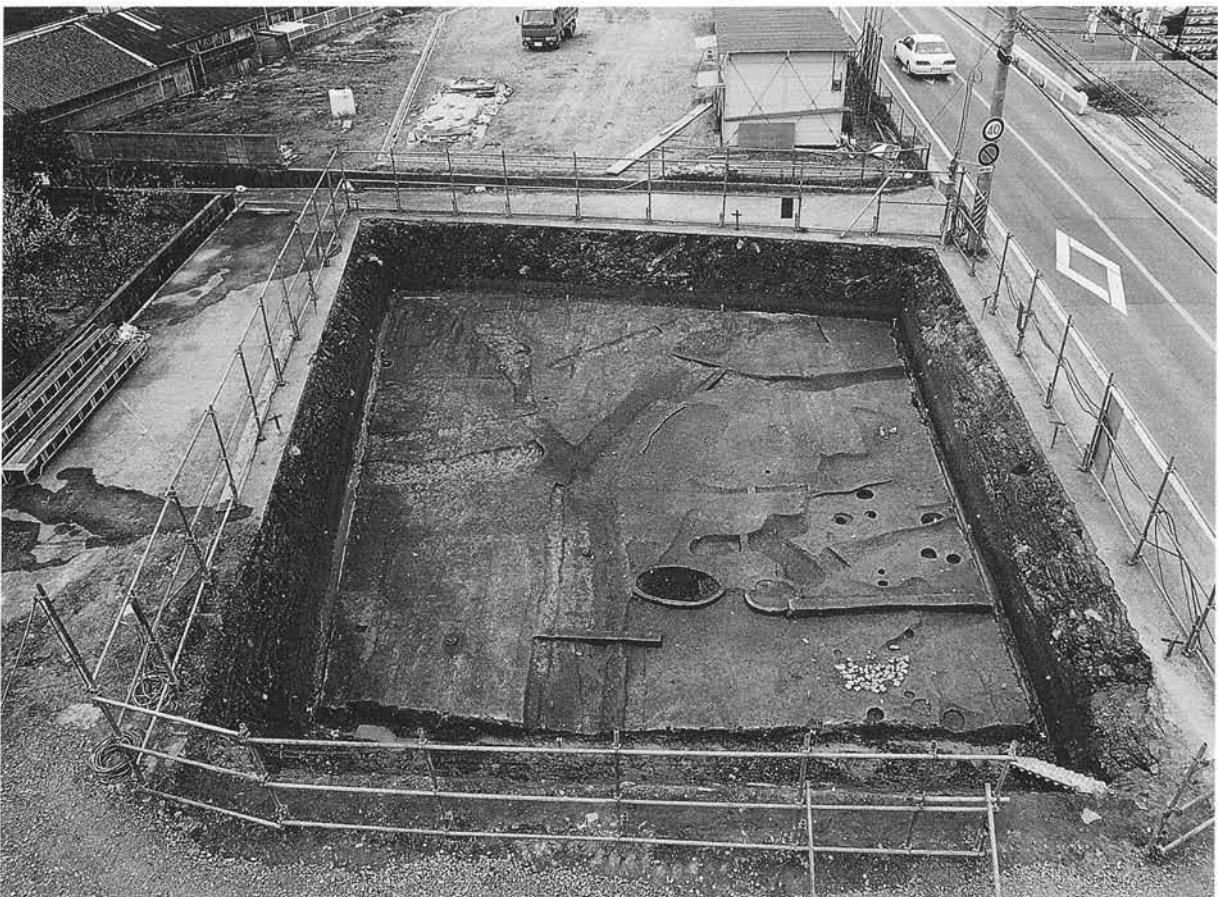
B区第6遺構面（西から）



B区第10層下礫群（東から）



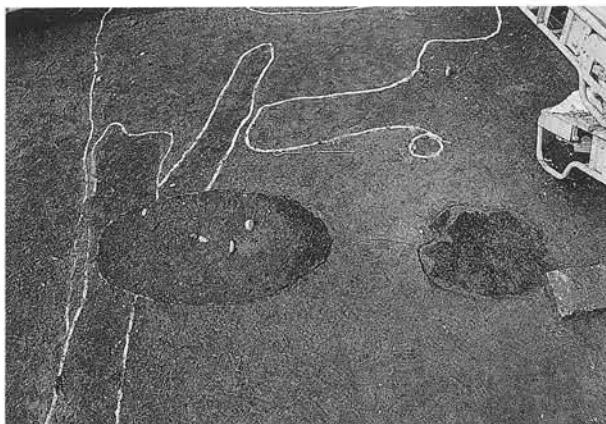
C1区第1遺構面全景（東から）



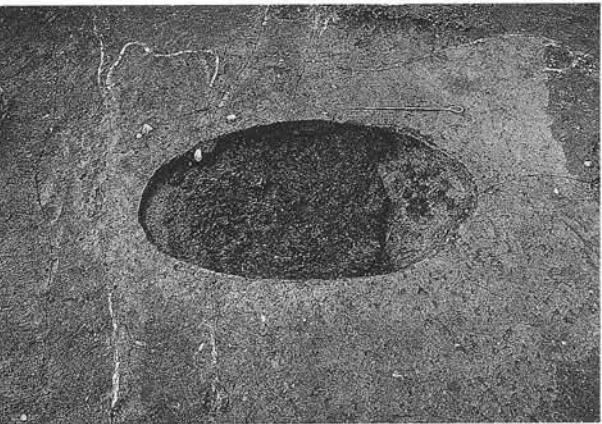
C1区第3-1遺構面全景（東から）



C2区第3-1遺構面全景（西から）



C134, 135土坑 (東から)



C135土坑 (東から)



C215集石 (東から)



C190土坑 (北から)



C192溝 (東から)



C181ピット (西から)



C182柱穴 (北から)



C260柱穴 (北から)



C1区第3-3遺構面全景（東から）



C2区第3-3遺構面全景（西から）



C220落ちこみ (東から)



C251土坑 (西から)



C237ピット (北から)



C64, 1014溝 (西から)



C53水溜 (北から)



C1004水溜 (北から)



C247井戸 (西から)



C247井戸 (西から)



C279溝（東から）



C238土坑（北から）



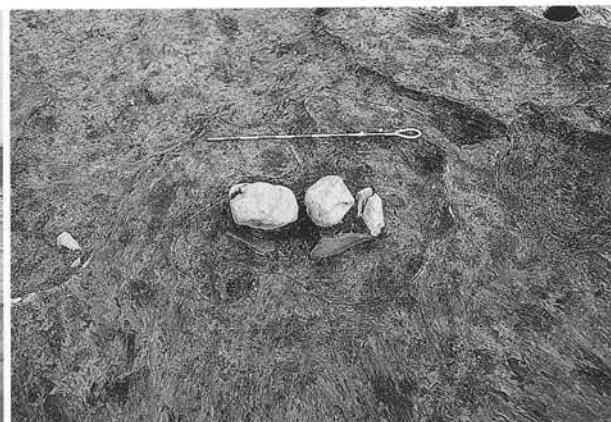
C1002自然流路（東から）



C1002遺物出土状況（北から）



C1002土壤サンプル採取状況



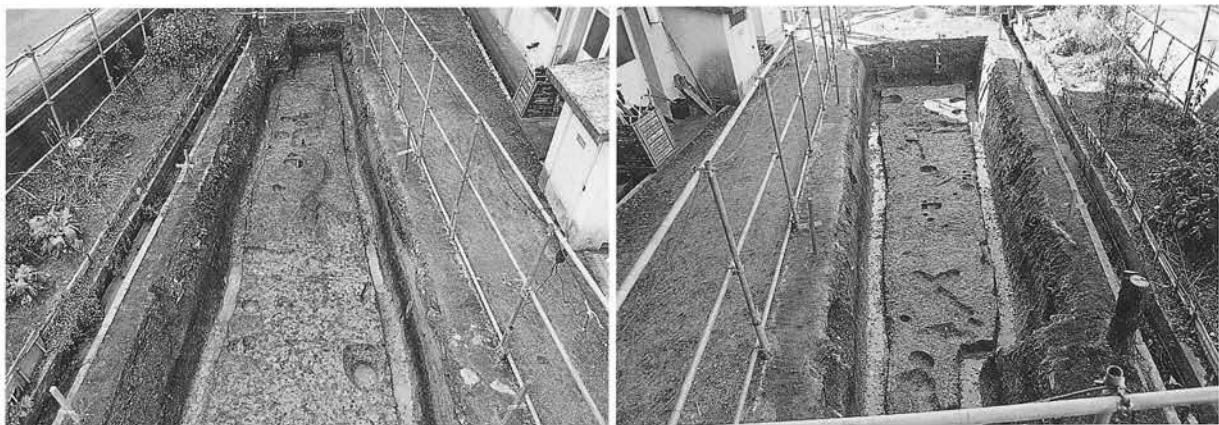
C1010土坑（西から）



C1021自然流路（西から）



C2区南半第8b層面全景（西から）



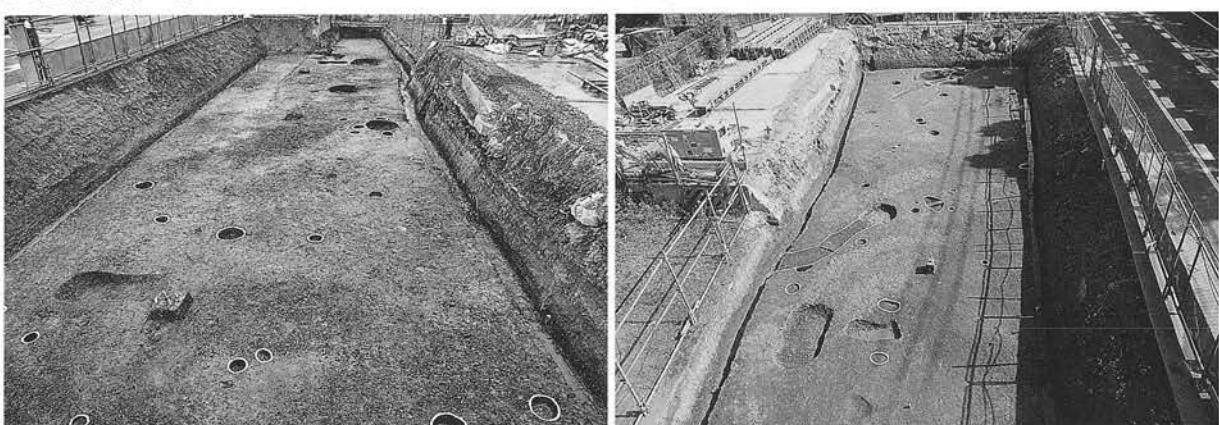
D区第3-3遺構面全景 (西から)

D区第4遺構面全景 (東から)



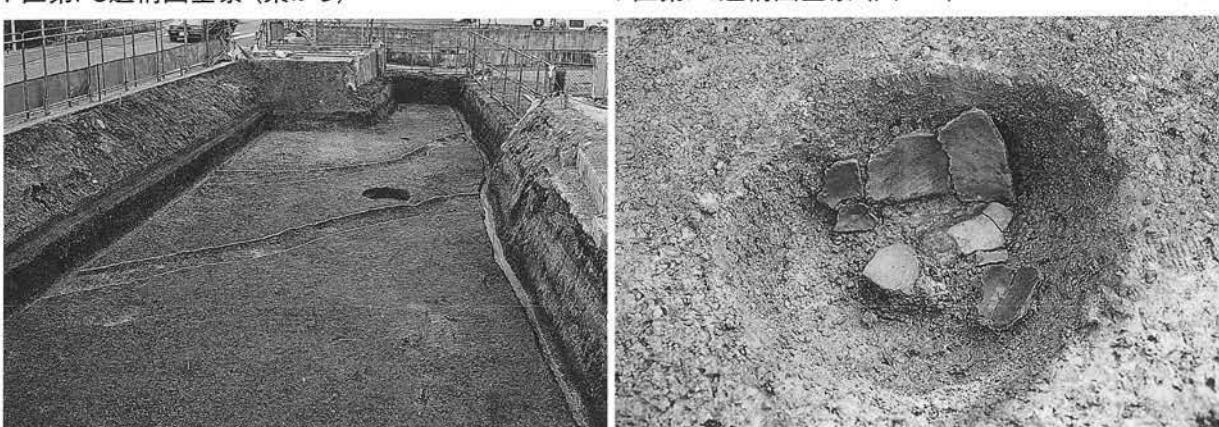
D5土坑 (西から)

F区第F2遺構面全景 (東から)



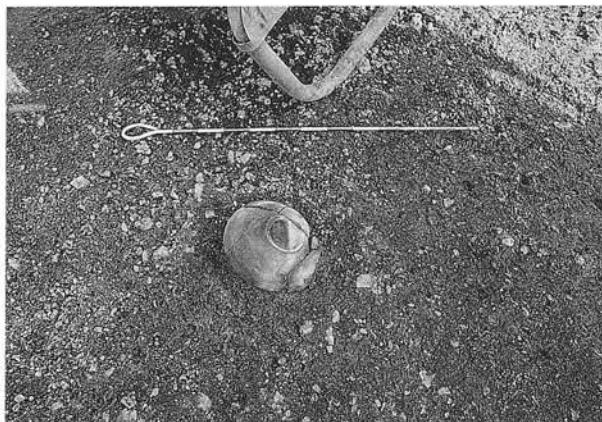
F区第F3遺構面全景 (東から)

F区第F4遺構面全景 (西から)



F93, 94溝 (東から)

F59ピット弥生土器出土状況 (北から)



G区西半第G10層土師器碗出土状況



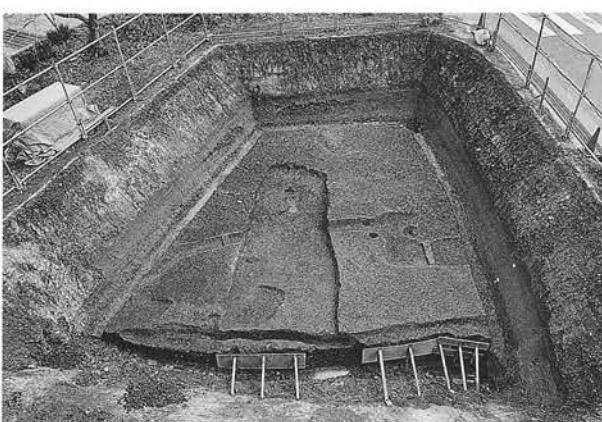
G区西半第G2遺構面全景（東から）



G区西半G11水溜土層断面（東から）



G区西半G11水溜（東から）



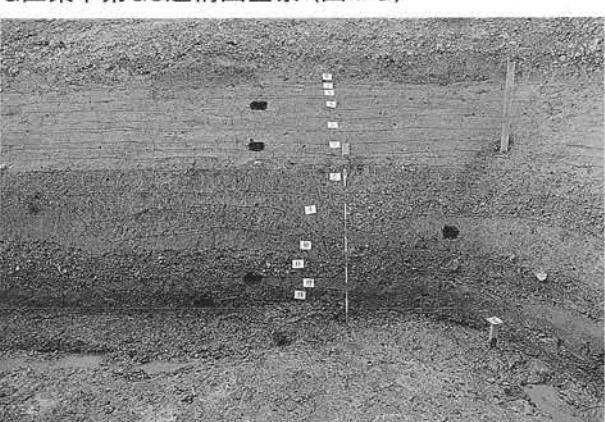
G区東半第G2遺構面全景（西から）



G区東半第G3遺構面全景（西から）

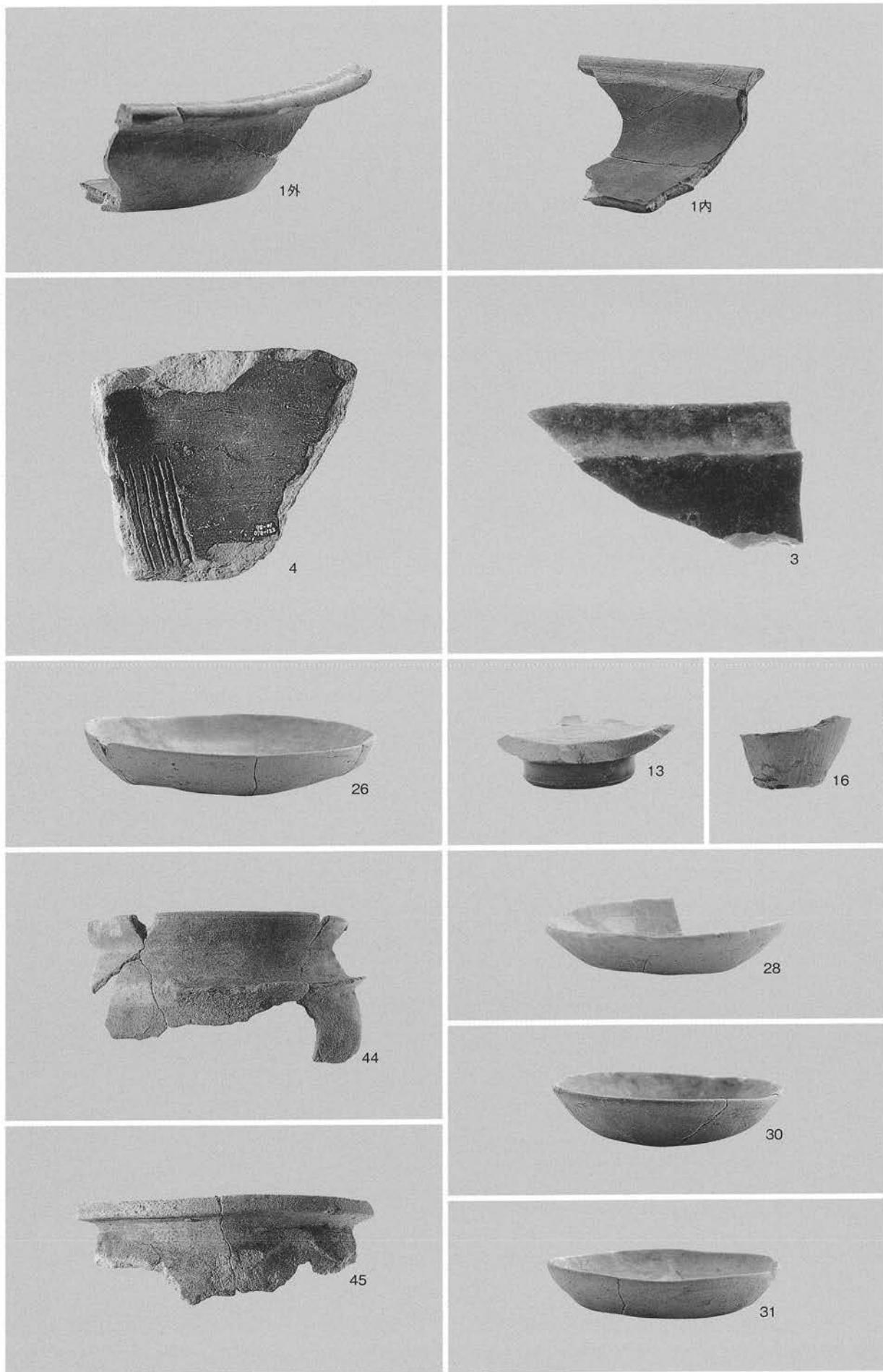


G区東半第G5遺構面全景（西から）

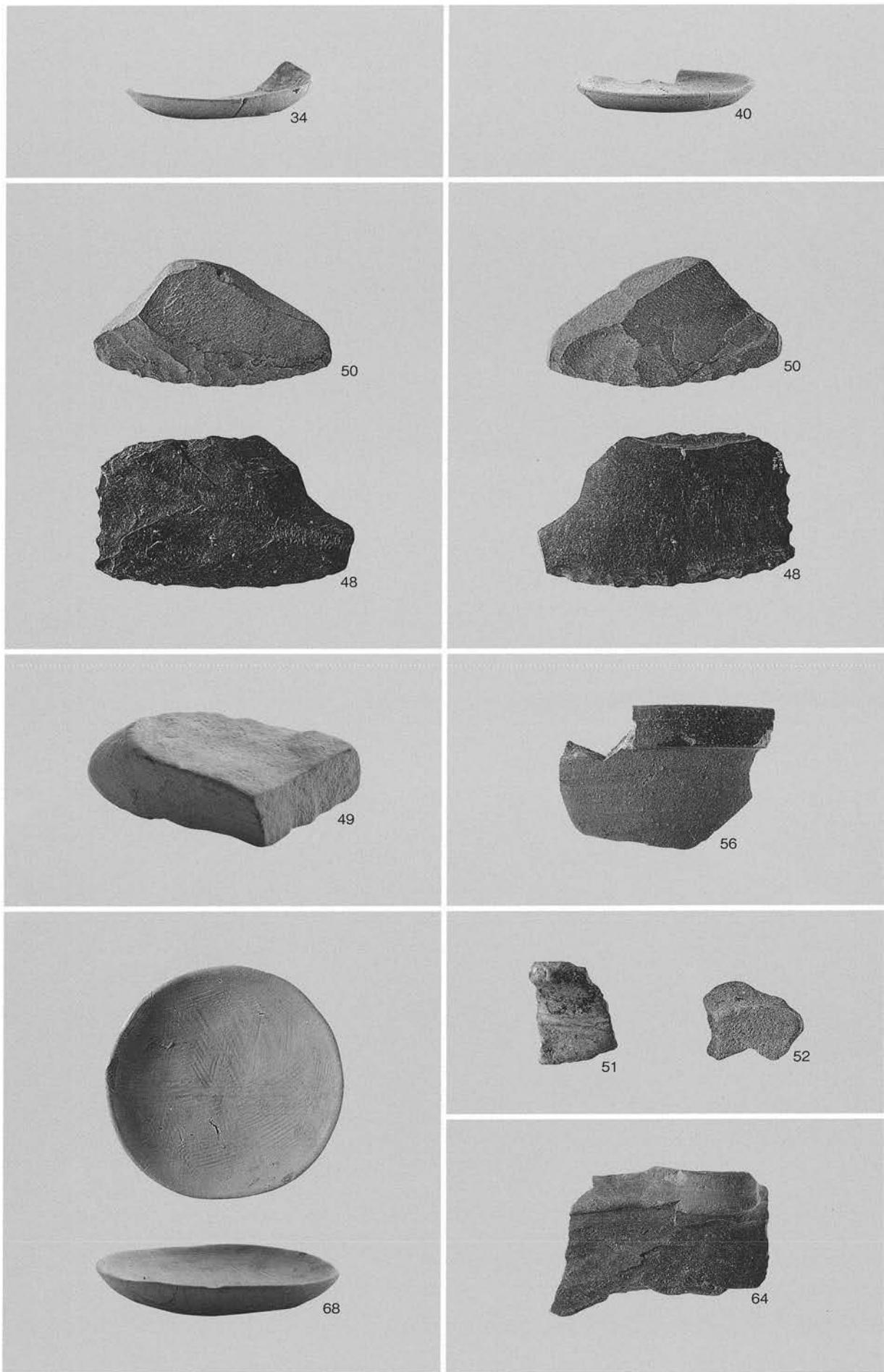


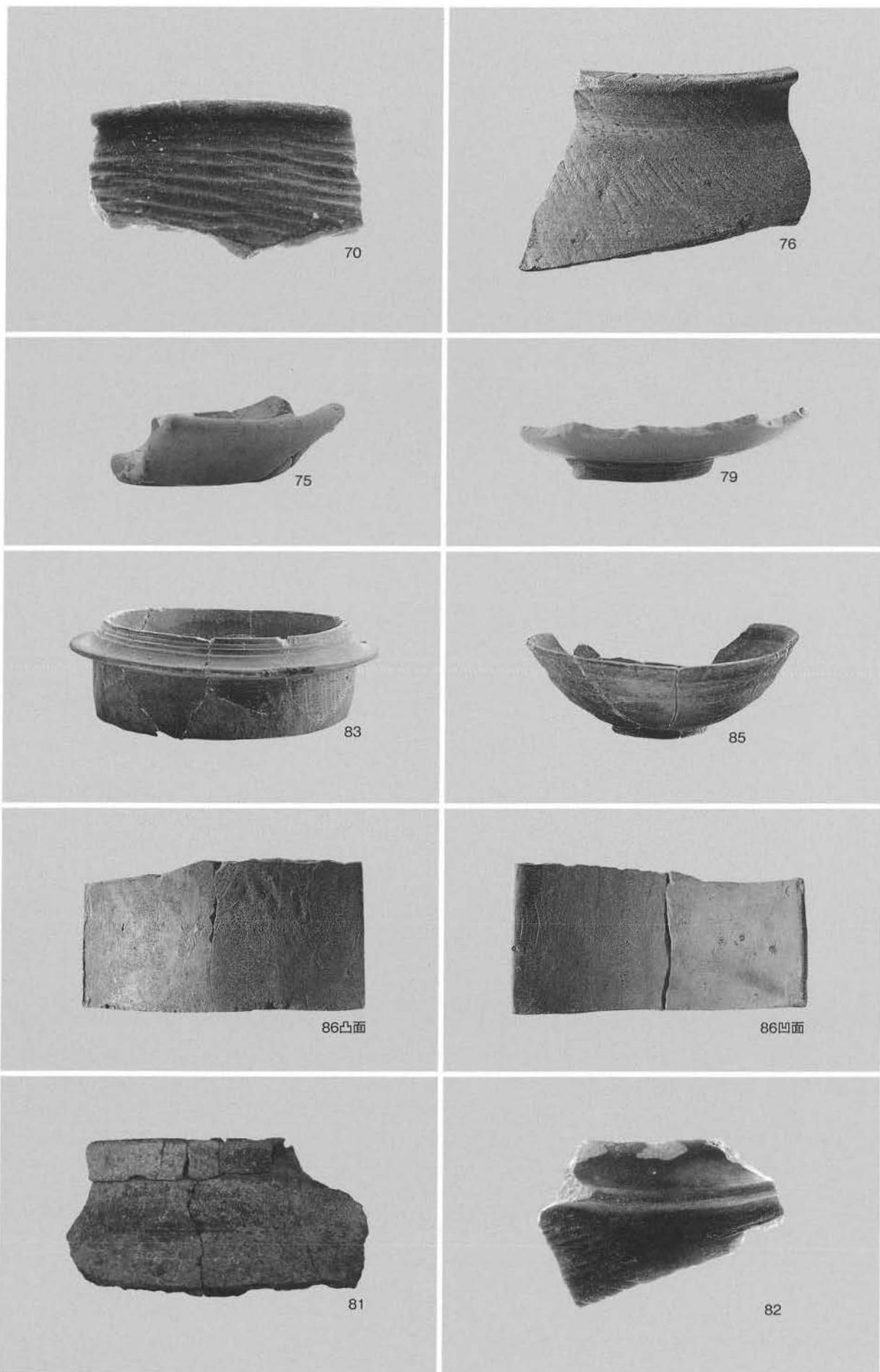
G区南壁土壤サンプル採取状況

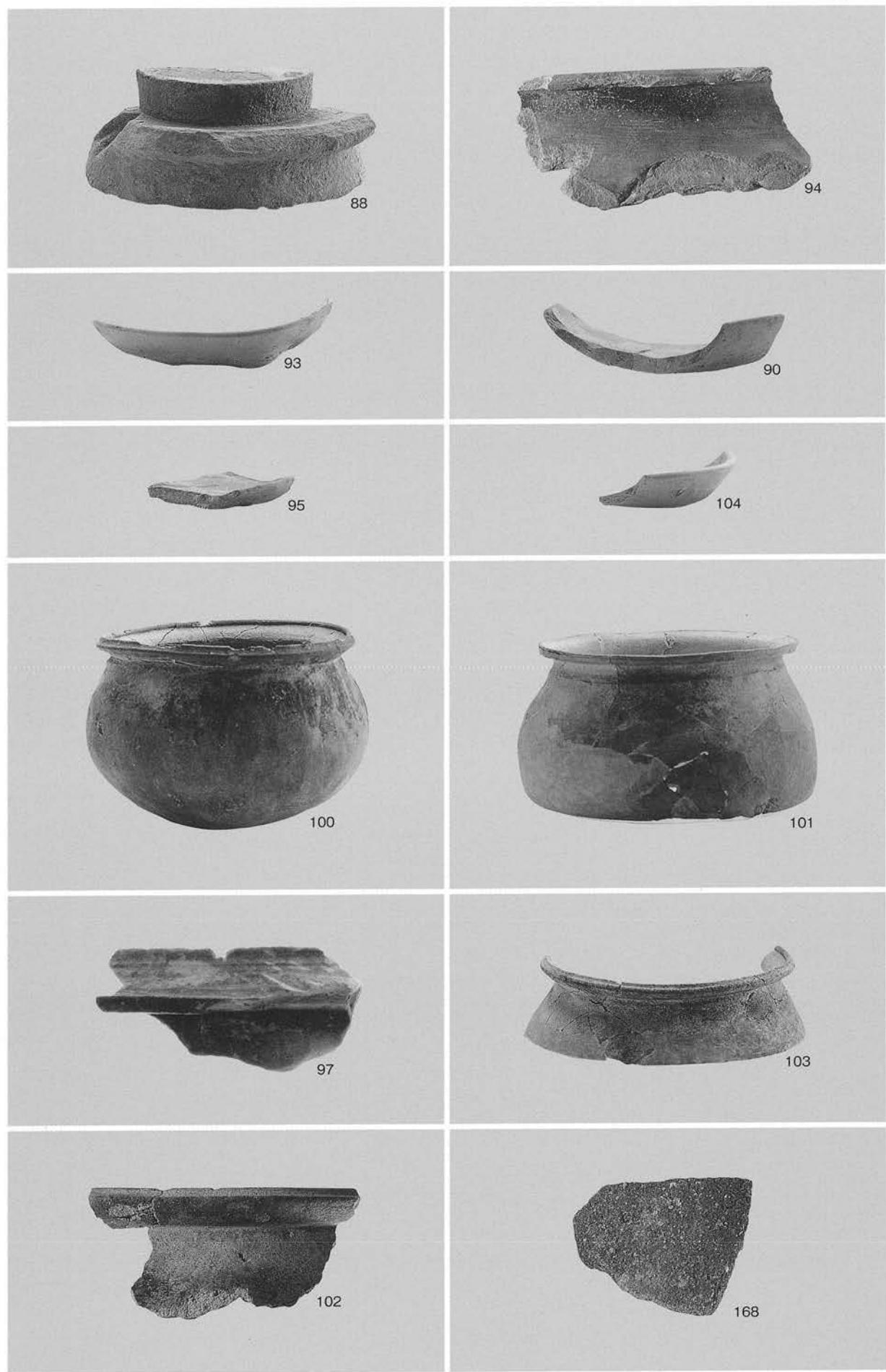
図版19

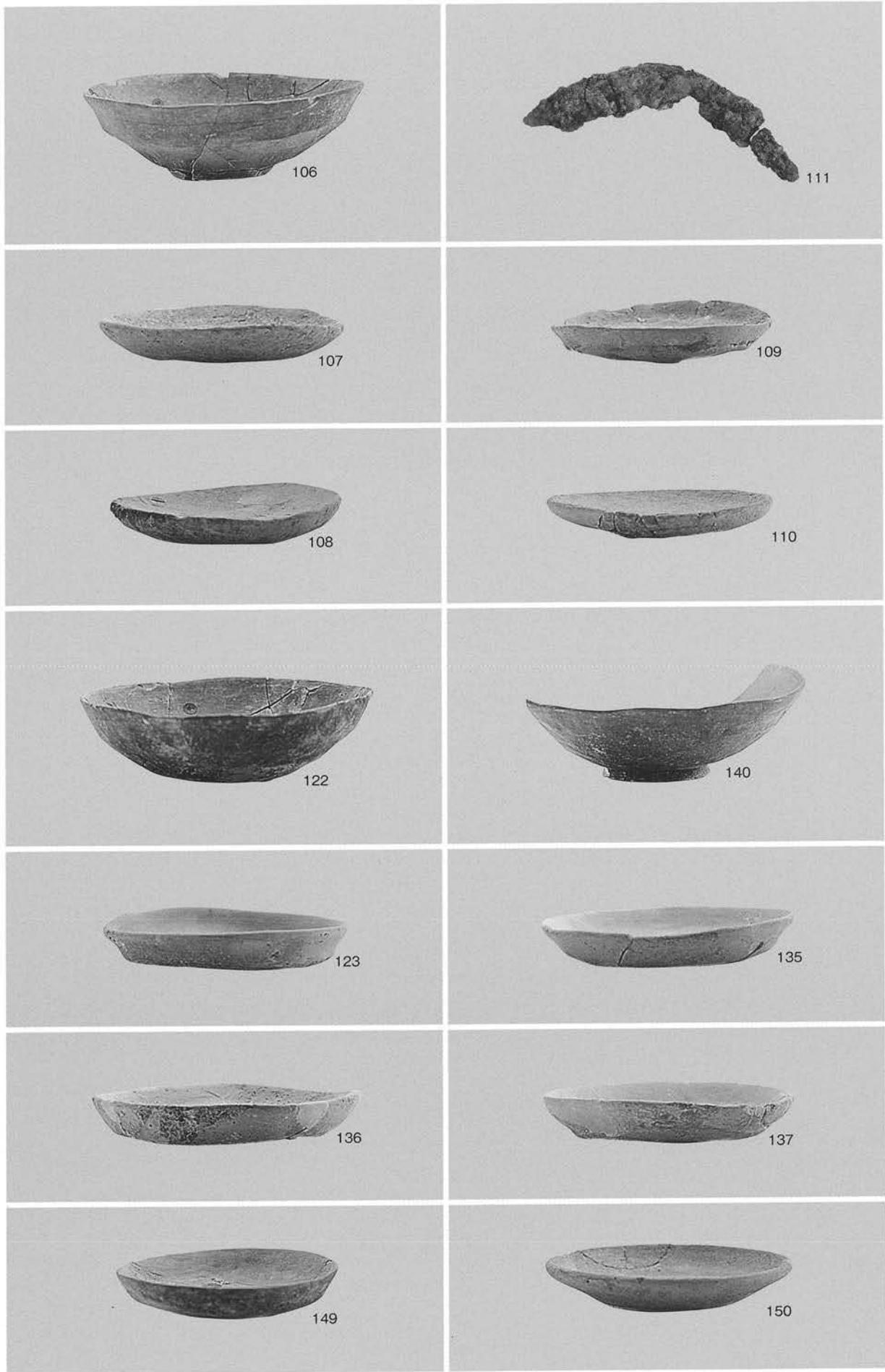


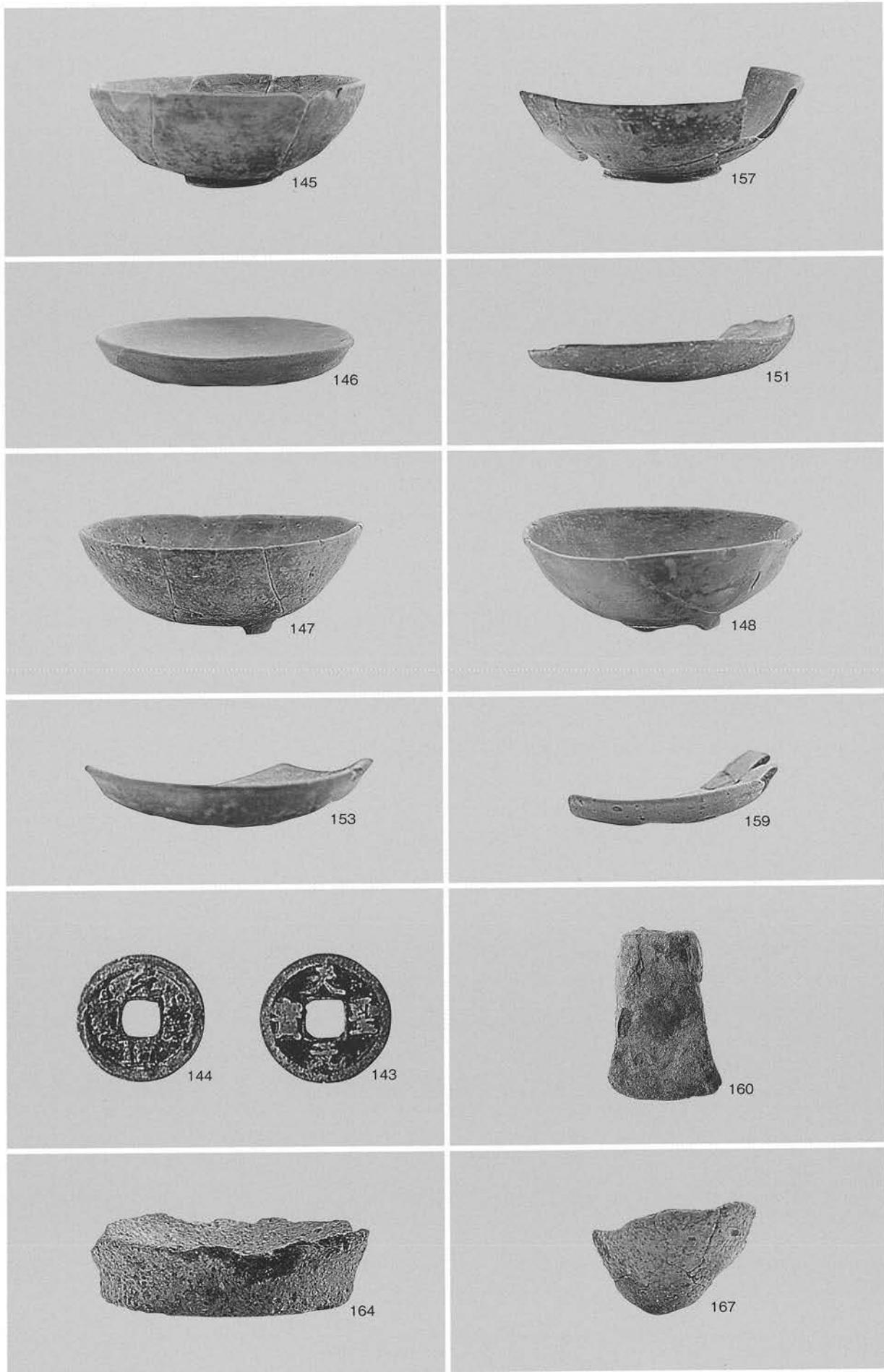
図版20

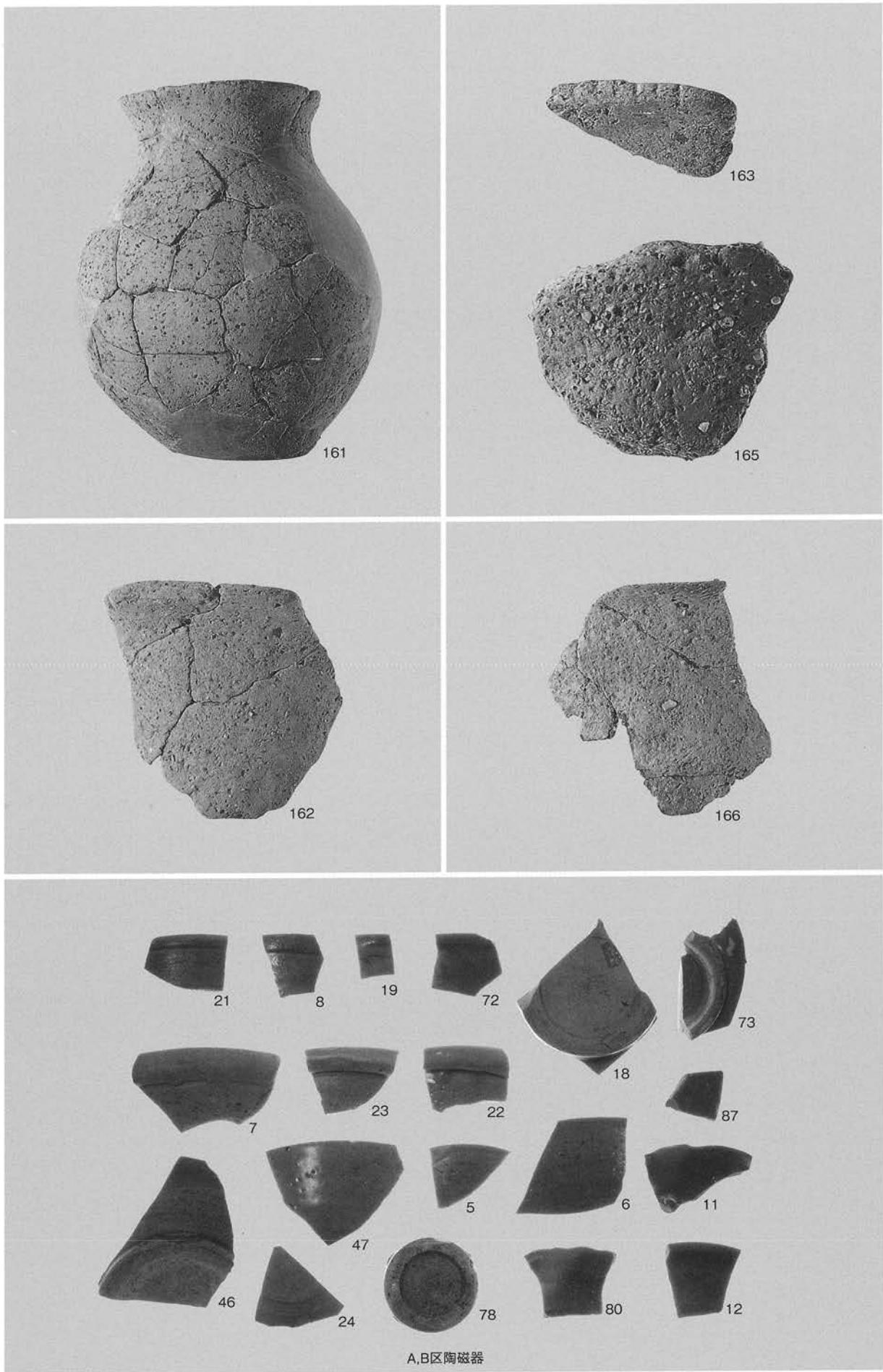




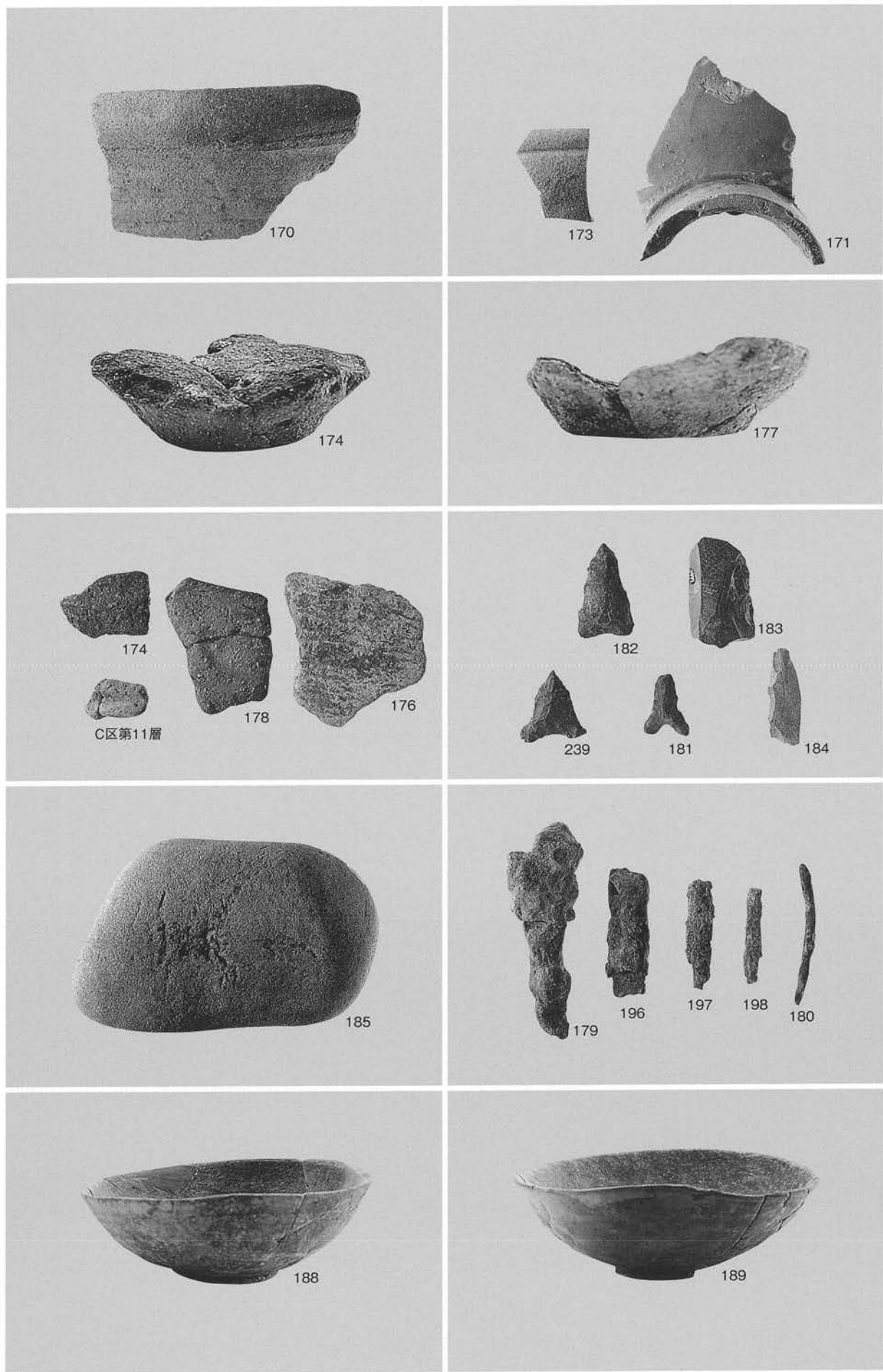


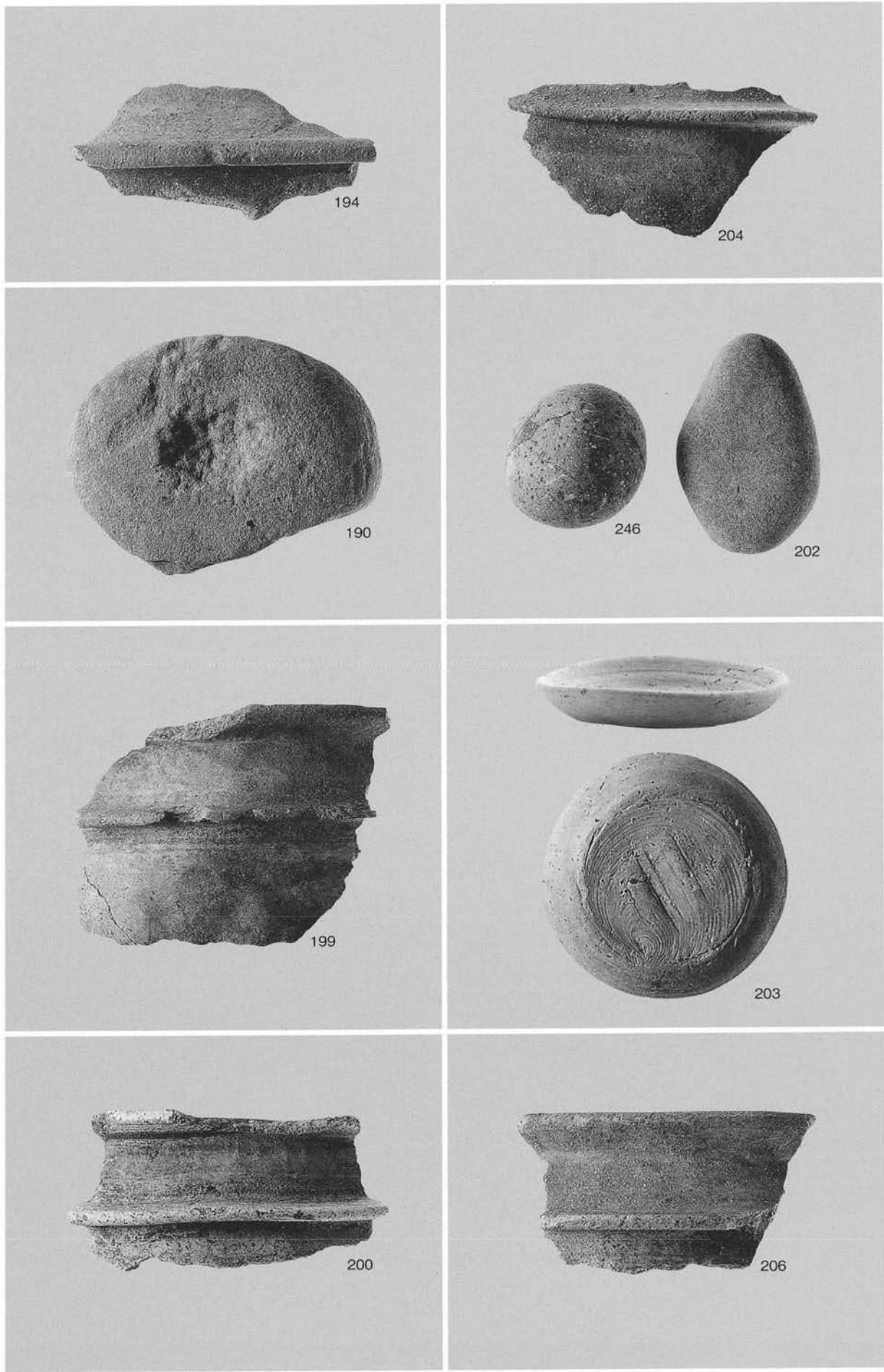


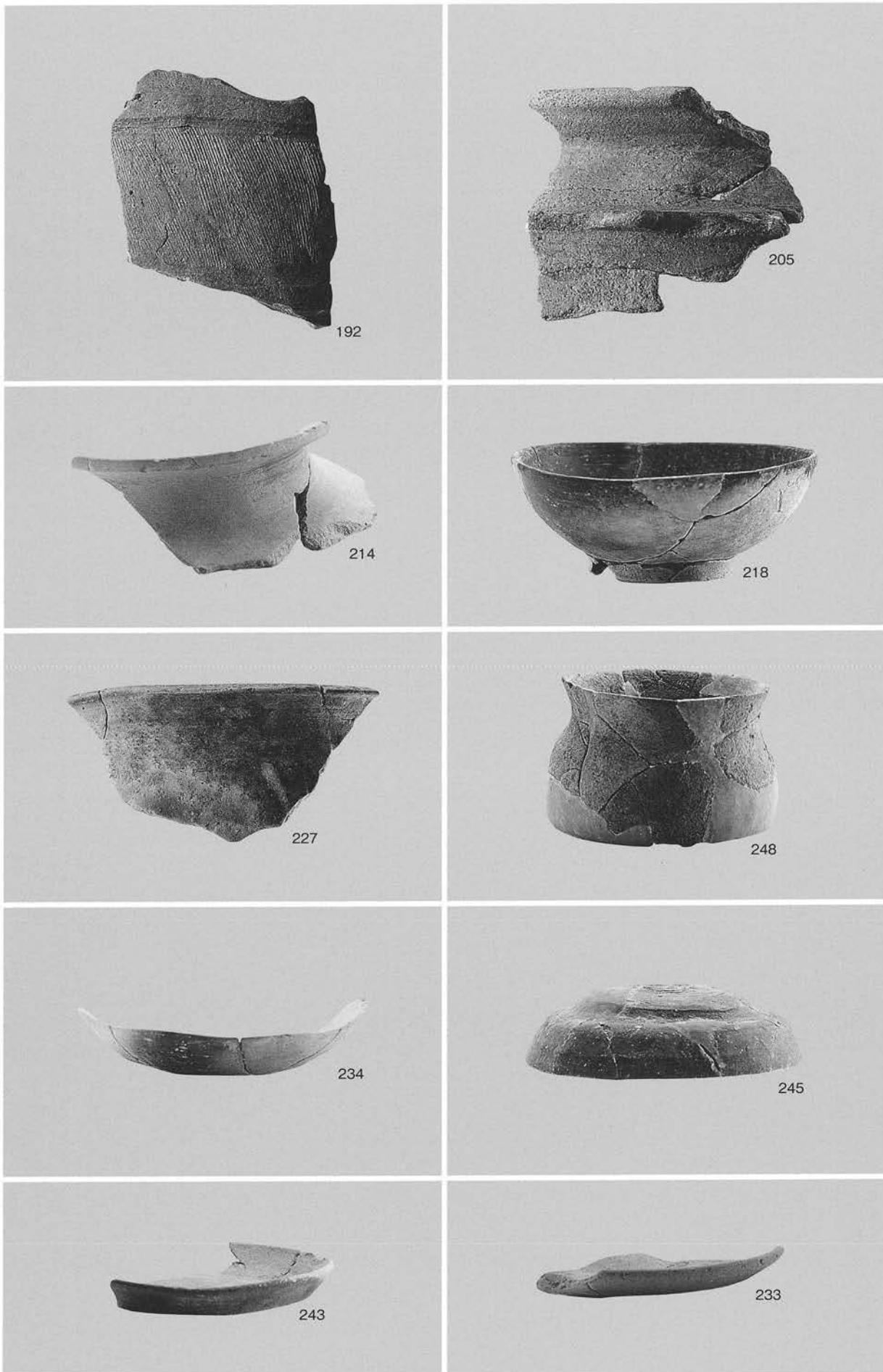


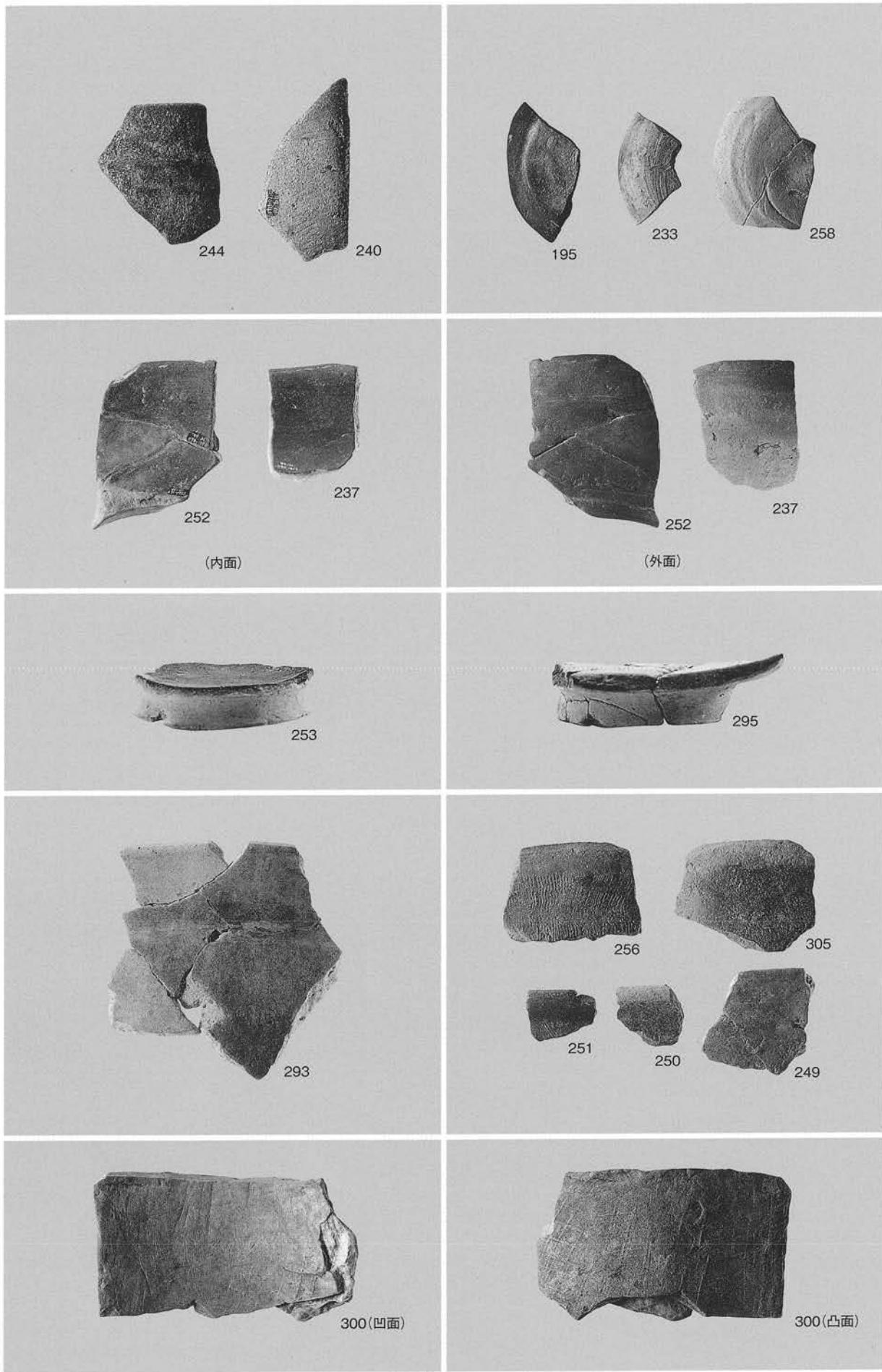


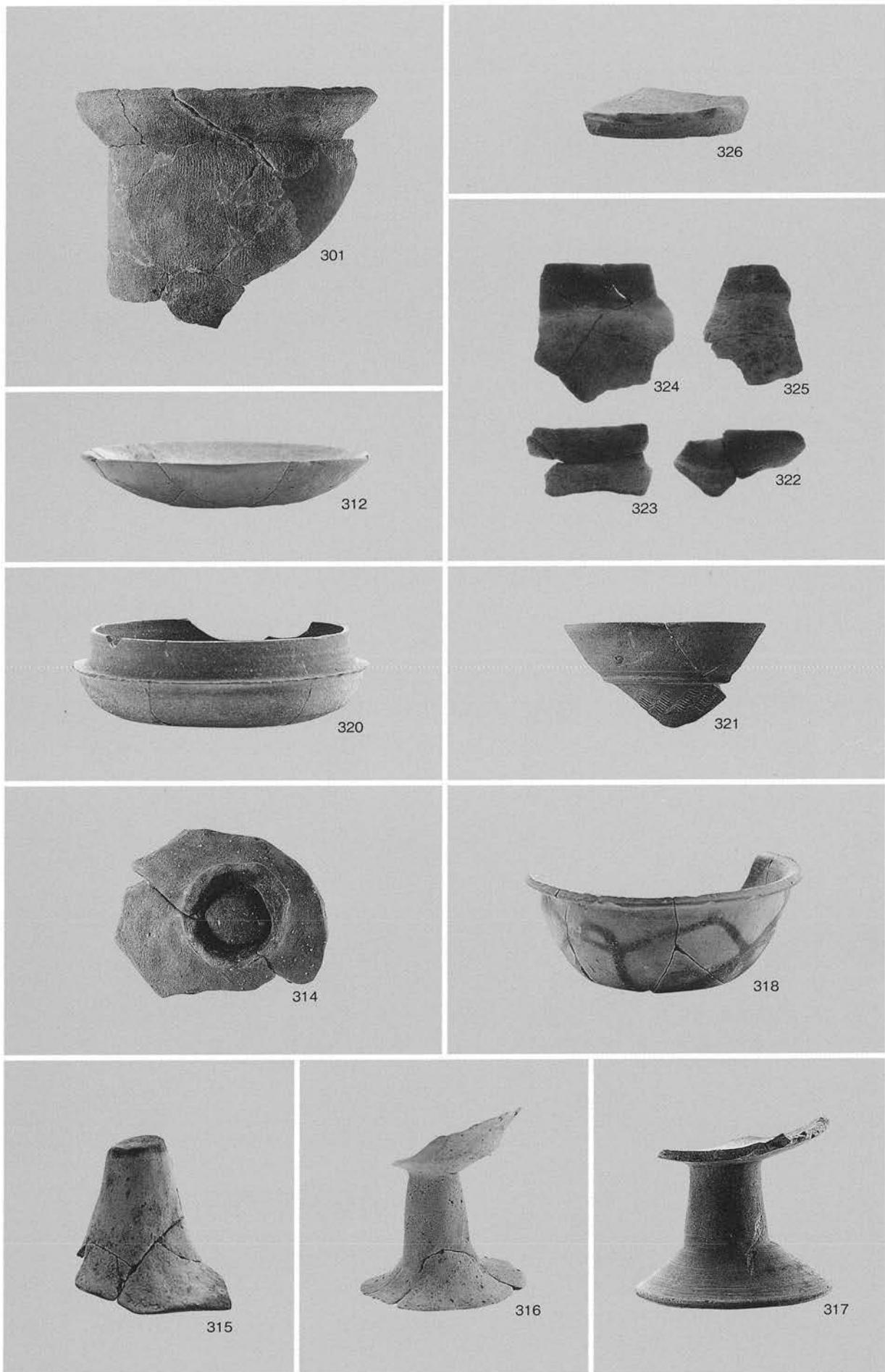
A,B区陶磁器

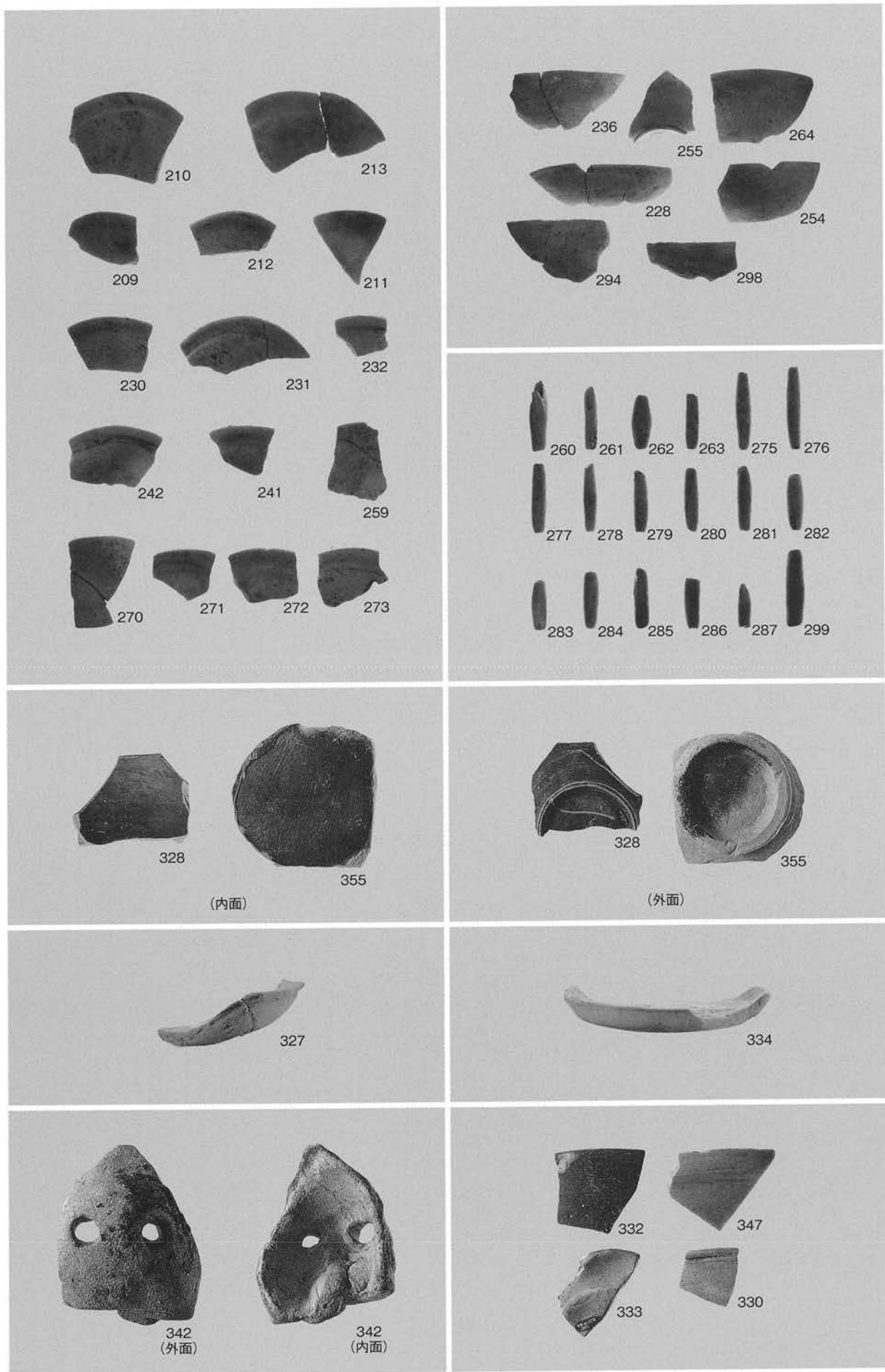




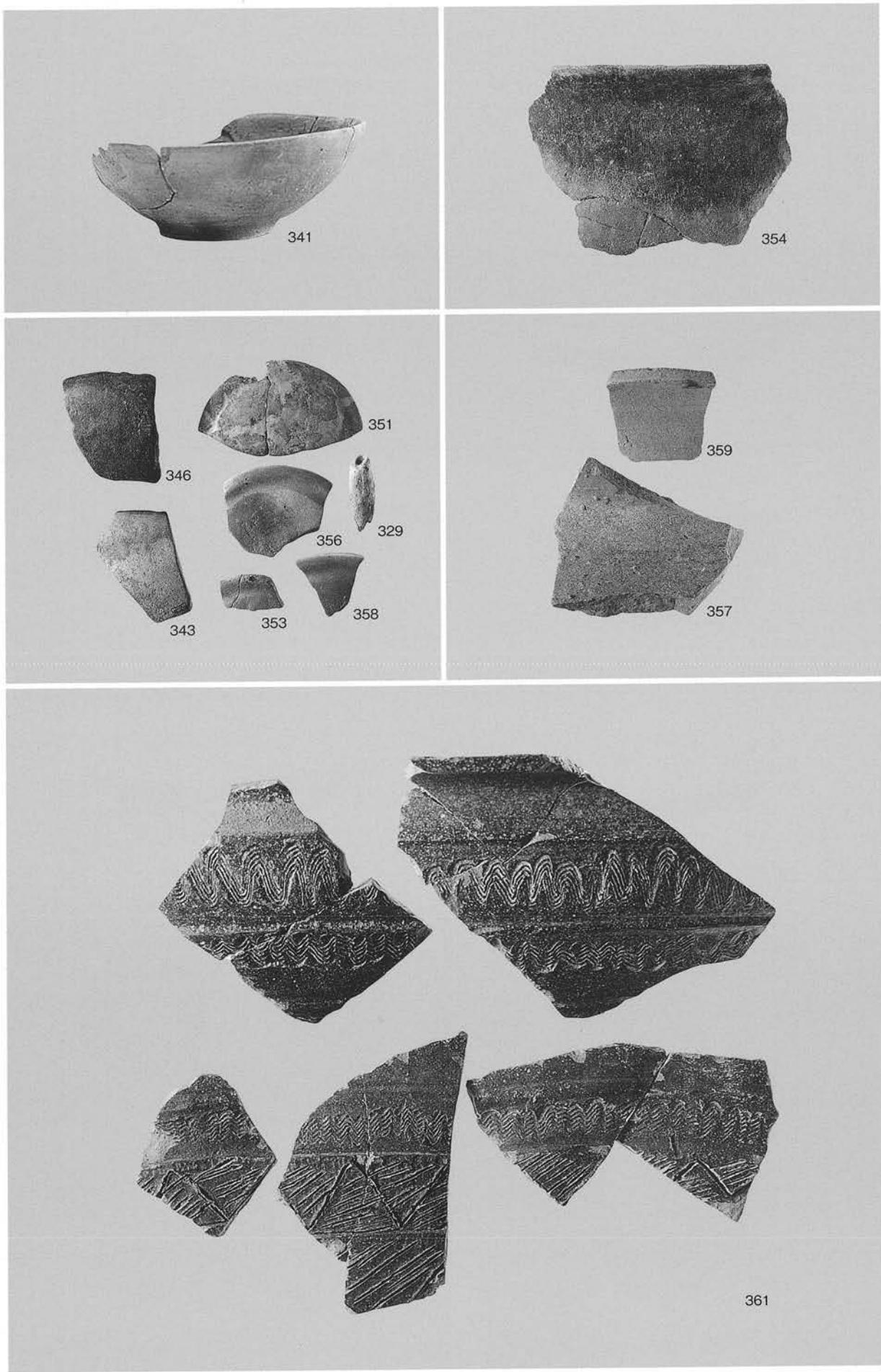


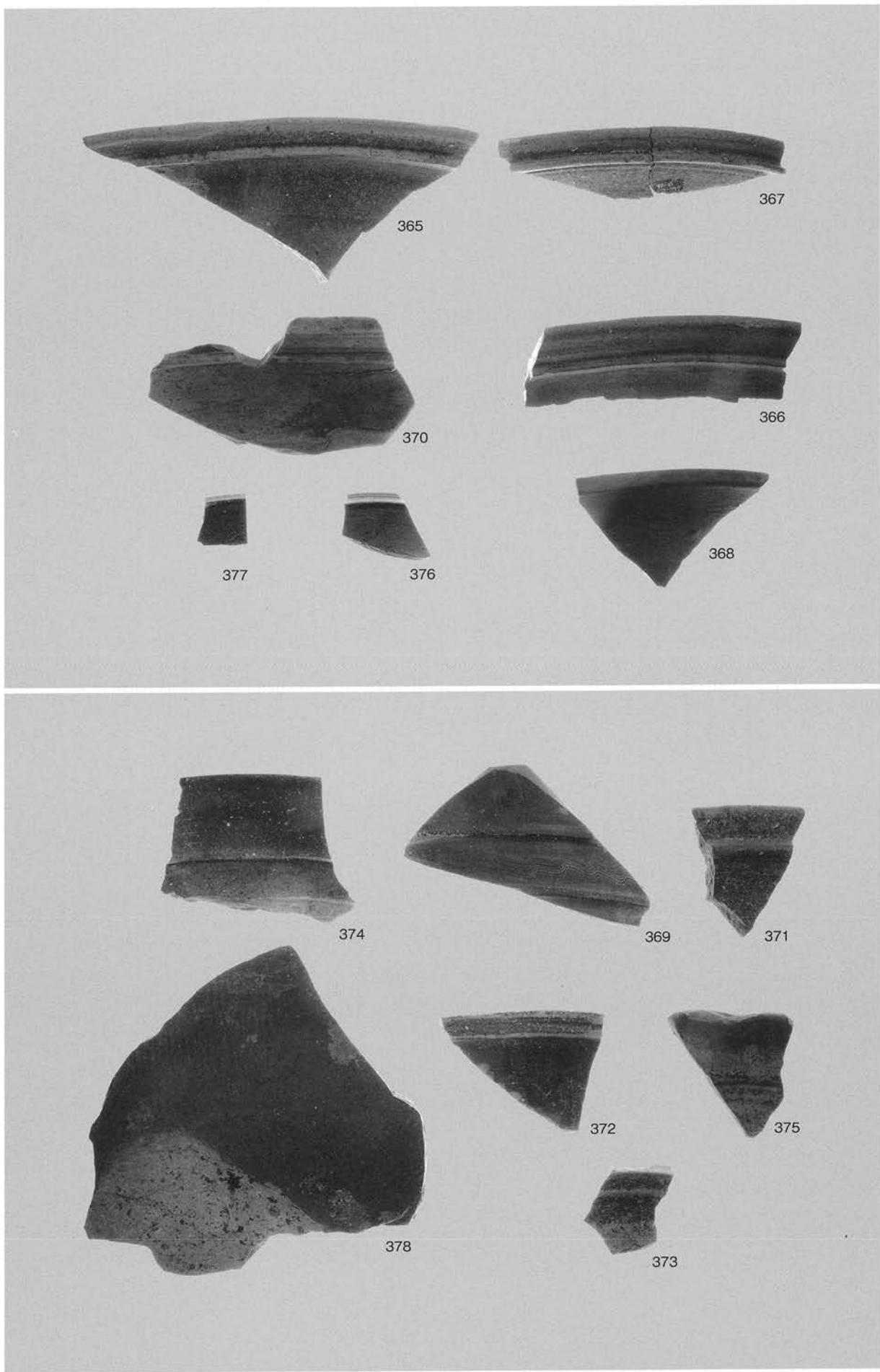


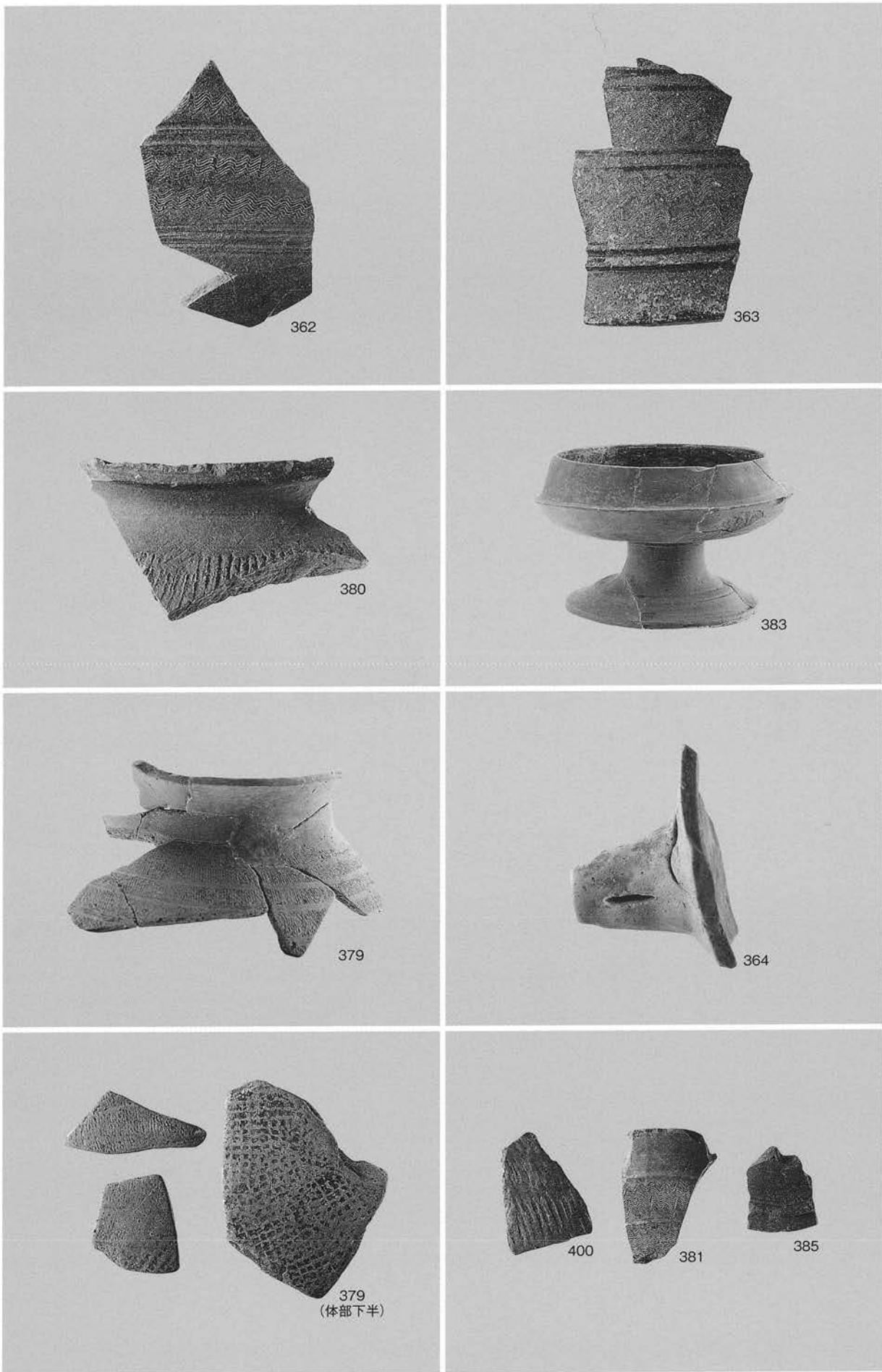


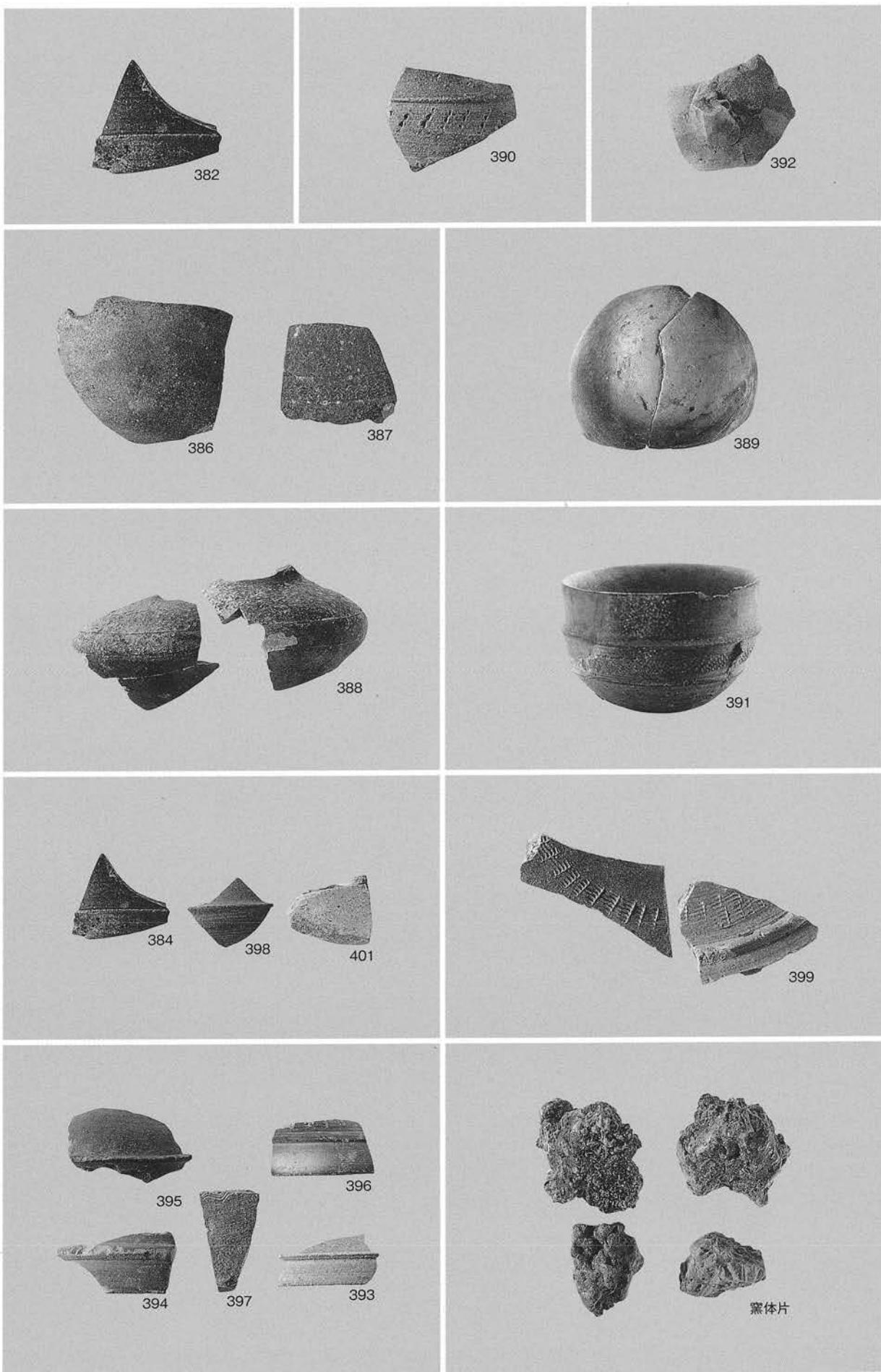


図版32









## 報告書抄録

## 楠見遺跡

—都市計画道路西脇山口線改良工事に伴う発掘調査報告書—

2006年3月31日

編集・発行 財団法人 和歌山県文化財センター

印刷・製本 中和印刷紙器株式会社